

**港区における**

**ひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査報告書**

**平成24年(2012年) 1月**

**港区政策創造研究所**

**(企画経営部)**

# 港区平和都市宣言

かけがえのない美しい地球を守り、世界の恒久平和を願う人びとの心は一つであり、いつまでも変わることはありません。

私たちも真の平和を望みながら、文化や伝統を守り、生きがいに満ちたまちづくりに努めています。

このふれあいのある郷土、美しい大地をこれから生まれ育つ子どもたちに伝えることは私たちの務めです。

私たちは、我が国が『非核三原則』を堅持することを求めるとともに、ここに広く核兵器の廃絶を訴え、心から平和の願いをこめて港区が平和都市であることを宣言します。

昭和60年8月15日

港 区

## ご 挨拶

このたび平成22年度に設置した港区政策創造研究所における初めての調査研究として行った、港区におけるひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査の報告書がまとまりました。

ひとり暮らし高齢者の生活は不安定で、ネットワークが弱い状態にある人がいるなど、都心港区で生活していく上で、安全・安心のネットワークづくりが重要な課題となっていることから、本研究では、買い物困難や東日本大震災など、今日的なテーマも盛り込みました。

この報告書には、今回の調査研究で明らかとなった、ひとり暮らし高齢者の住まいや買い物の困りごとなどの日常生活、親族や友人との連絡などのネットワーク、また昨年3月に発生した東日本大震災での対処など、生活全般についての課題が記載されています。

これからも、ひとり暮らし高齢者の方々がより豊かな生活を送ることができるよう、「人にやさしい創造的な地域社会」の実現のため、本調査でうかびあがってきた区民の皆様の姿を思い描きながら、本報告書を区の政策に役立ててまいります。

調査研究にあたり、設問の多いアンケートにも関わらず、多くのひとり暮らし高齢者の方々から快くご協力いただいたことを、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

平成24年1月

港区長 **武井雅昭**



## 地域と生活の実態に根ざした政策の創造

港区では、平成23年2月1日、企画経営部内に港区政策創造研究所を設置しました。研究所は、「各部門の個別情報の収集・分析等を踏まえて、横断的に課題を据え総合的な政策研究を行い、各支援部・総合支所を支援することを目的」としています。

政策研究の出発点は、地域の現実、住民生活の実態を的確に把握することです。そうした実態から遊離した政策は、有効性を持たないと言ってよいでしょう。新たに出発した研究所として、まずは区民の生活と意識の実態を把握することから始めました。明らかにする課題は多く、すべてを一度に研究することは出来ません。我々は、初年度の課題として高齢者の中でも孤立しやすく、課題も多いひとり暮らし高齢者を対象にした調査研究を行うことにしました。

ひとり暮らし高齢者の課題に関係する庁内の職員が集まり、「港区ひとり暮らし高齢者社会調査関係者会議」を組織しました。いろいろな担当の方々がそれぞれ問題関心、課題を述べ、調査の仮説を議論しました。こうした横断的議論が今回の調査を作り上げたと言えます。同時に、調査研究メンバーには外部の専門家お二人、長谷川博康氏（株式会社スタテックス代表取締役社長）と菅野道生氏（東日本国際大学准教授）に「特任研究員」として参加していただきました。調査の設計、実施、分析に関わって下さった皆様に心より感謝したいと思います。関係者会議参加者の名前は、本報告書の最後に掲載しています。

さて、今回の調査は事実を把握して終わりとなるものではありません。明らかになった事実をもとに、今後、高齢期の生活を豊かにする先見性のある政策をさらに探求していきたいと思います。最後に、調査にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

港区政策創造研究所所長 河合 克義



# 目 次

## I 調査の目的と概要

### 1 調査の視点と方法

(1) 高齢者の孤立問題 .....	1
(2) ひとり暮らし高齢者の出現率の地域差と港区の位置 .....	2
(3) 港区におけるこれまでのひとり暮らし高齢者調査 .....	4
(4) ひとり暮らし高齢者の生活を分析する視点と方法 .....	4

### 2 調査の概要

(1) 調査の名称 .....	5
(2) 調査主体 .....	5
(3) 調査の目的 .....	5
(4) 調査対象 .....	5
(5) 調査の方法と種類 .....	6
(6) 調査時点及び期間 .....	6
(7) 回収数、回収率 .....	6
(8) 本報告書の執筆 .....	6

## II 港区の地域概況

### 1 港区の概況

(1) 誕生 .....	7
(2) 位置 .....	7
(3) 地形 .....	8
(4) 面積 .....	8
(5) 人口 .....	8
(6) 産業 .....	9
(7) 住宅 .....	10

### 2 港区の高齢者の状況

(1) 高齢者数等の推移 .....	10
(2) 単身世帯（65歳以上）実態調査におけるひとり暮らし高齢者数等の推移 .....	11

### 3 港区の地区ごとの特徴について

(1) 芝地区 .....	11
(2) 麻布地区 .....	12
(3) 赤坂地区 .....	12
(4) 高輪地区 .....	12
(5) 芝浦港南地区 .....	12

### Ⅲ 1次調査の結果

#### 1 基本集計

(1) 性別・年齢	13
(2) 住まいについて	14
(3) 健康状態	17
(4) 職業について	19
(5) 買い物について	21
(6) 地域・生活での困りごと	22
(7) 港区の保健福祉サービスについて	24
(8) 家族・親族関係について	24
(9) 友人および近隣関係	26
(10) 緊急時の支援者と正月を過ごした相手	27
(11) 東日本大震災について	28
(12) 外出状況について	29
(13) 社会参加活動について	31
(14) 行政サービスの情報源	32
(15) 生活意識について	33
(16) 経済状況	36

#### 2 クロス集計

(1) 基本的情報－性別・年齢別の集計	38
(2) 日常の困りごとについて	43
(3) 買い物に関する困りごとについて	45
(4) 家族・親族ネットワークの状況	46
(5) 近隣ネットワークの状況	49
(6) 緊急時の支援の状況	51
(7) 外出・社会参加について	53
(8) 東日本大震災時の状況について	56
(9) 地区別の状況について	58

#### 3 生活意識に関する分析

(1) 生活上の諸条件と意識	66
(2) 住宅の種類と意識の関連性	76

#### 4 自由回答

(1) 買い物について普段感じていることの内容	78
(2) 東日本大震災に際して、困ったことや考えたことなどの内容	82
(3) 区への要望や生活についての自由意見	90



## IV 2次調査の結果

- 1 2次調査の概要
  - (1) 2次調査の目的と方法 ..... 97
  - (2) 類型化について ..... 97
  - (3) 類型ごとの対象ケースと調査の実施状況 ..... 97
- 2 2次調査の結果（事例）
  - (1) 質問項目 ..... 98
  - (2) 事例の内容 ..... 98

## V 調査から言えること

- 1 意識と生活の諸条件
  - (1) 生活意識を表すもの一因子分析から ..... 110
  - (2) 将来への不安と生活基盤 ..... 112
- 2 結果の分析
  - (1) 買い物困難と生活課題 ..... 114
  - (2) 緊急時支援と社会的ネットワーク ..... 122
  - (3) 外出行動と社会参加 ..... 128
  - (4) 地区別の考察 ..... 133
- 3 まとめー調査から言えること
  - (1) 買い物困難から考える生活支援 ..... 137
  - (2) 緊急時の支援者がいない人へのアプローチ ..... 138
  - (3) 社会との接点を開くー社会参加の促進 ..... 139
  - (4) 地域性を視野に入れた支援策の検討 ..... 140

## VI 資料

- 1 調査依頼文 ..... 142
- 2 1次調査調査票 ..... 143
- 3 2次調査調査票 ..... 158
- 4 港区政策創造研究所の概要 ..... 165
- 5 港区ひとり暮らし高齢者社会調査関係者会議名簿 ..... 166



## I 調査の目的と概要

### 1 調査の視点と方法

#### (1) 高齢者の孤立問題

昨今、高齢者の孤立問題が深刻化している。NHKは、2010年1月から2011年2月まで「無縁社会」をテーマにテレビ、ラジオで多くの番組を放送し、話題となった。一連の番組の最初は、2010年1月に放映された「無縁社会―“無縁死”3万2千人の衝撃―」である。この番組のために、NHKは独自調査を実施し、全国の自治体で「行旅死亡人」として「自治体が葬祭執行の費用を支出した人」の数を把握した。その合計数が3万2,000人になったというのである。この番組を制作したスタッフから聞いたところによれば、この調査の回収率は約70%であること、また「行旅死亡人」の中にも親族が引き取った者もあるとのことなので、実際の「無縁死」はこの数より多いと推測される。

他方、2010年の夏は100歳以上の所在不明高齢者問題が出現した。7月、東京都足立区の111歳の男性が自宅で白骨化した状態で発見された。約30年前からこの状態だったとのことである。その後、他の地域でも同じようなケースがあることが明らかになった。厚生労働省は、2010年8月27日に100歳以上での所在不明者は271人、80歳以上で800人に上るということを発表している。65歳以上で集計した場合、何人になったのであろうか。

他方、UR都市機構は、全国と同機構の賃貸住宅の中で孤独死した人の数を公表している。1999年には全体で207人、そのうち65歳以上が94人であったものが、2008年には全体で613人、うち65歳以上の者が426人となっている（『平成21年度高齢者の状況と高齢社会対策の実施状況』第174国会（常会）提出資料参照）。

また、東京都監察医務院の「事業報告」によれば、東京23区での65歳以上の者の孤独死の数は2002年で1,364人、2005年で1,860人、2007年で2,361人、2009年で2,194人と、最近では2,000人を超えている。

無縁死、孤独死の背後には高齢者の孤立問題が

ある。所在不明高齢者問題に示されているように高齢者の孤立問題は、ひとり暮らし高齢者世帯に限らず、同居世帯にまで広がっているのである。このように高齢者の孤立問題が深刻化しており、その問題を解決するための社会的方策を探ることが求められている。

ただし、こうした高齢者の孤立問題の特徴は、ひとり暮らし高齢者世帯、高齢者夫婦のみ世帯、高齢者を含む同居世帯など世帯の種類によって異なるであろう。我々として、まずは孤立問題が最も現れやすいひとり暮らし高齢者を研究の対象としたいと考えた。それは次のような理由による。

まず、これまでの調査でも明らかなように、ひとり暮らし高齢者の一定数は所得が低い。また親族ネットワークはひとり暮らし高齢者にとって大きな意味を持つものの、親族とのつながりが切れているひとり暮らし高齢者が一定割合で存在しており、これらのひとり暮らし高齢者は何らかのサポートが必要な時に親族ネットワークが機能しない。また地域ネットワークの形成ができず、社会参加活動への参加の程度が低く、諸制度を始めとする各種情報から取り残されているひとり暮らし高齢者もいるのである。

このように、ひとり暮らし高齢者の生活は不安定でネットワークが脆弱な状態にある人が確かにおり、また餓死・孤独死が多いことにも注目したのである。

ところが、こうしたひとり暮らし高齢者の実態の把握は、十分なされていないとは言い難い。港区においては、後に触れるように過去2回のひとり暮らし高齢者に対する調査があるが、現在の問題状況は更に進行していると考えられ、現状がどのようなになっているのかの把握が求められていると言えよう。

さて、港区政策創造研究所は2011年2月に新設されたが、以上のことを踏まえて、研究所としての最初の調査研究プロジェクトとして区内のひとり暮らし高齢者の調査が実施されることとなったのである。

## (2) ひとり暮らし高齢者の出現率の地域差と港区の位置

ひとり暮らし高齢者の出現率を「高齢者のいる世帯中のひとり暮らし高齢者世帯の割合」とし、その数値を国勢調査に基づいて自治体別に算出してみると、ひとり暮らし高齢者の出現率の高い地域が、①島しょ部、②過疎地、③大都市の3つに分類されることが分かる。

2005年の国勢調査のデータによって、ひとり暮らし高齢者の出現率の上位30位までの自治体を選び、上記の3地域に分類すると、表1-1のようになる。

島しょ部での第1位は東京都青ヶ島村で、70.8%となっている。伊豆七島は全体としてひとり暮らし高齢者が多く、この島しょ地域の11自治体中、青ヶ島村、御蔵島村、小笠原村、利島村、大島町の5つ、つまりほぼ半数が伊豆の島々である。次いで鹿児島県の島々となっている。

過疎地は三重県の紀和町の46.6%から北海道の泊村39.8%まで全部で6自治体となっている。

さて、大都市では大阪市西成区の出現率が60.7%と最も高く、次いで同じく大阪市の浪速区、中央区と続いている。東京都では港区の42.6%が最も高く、次いで豊島区42.0%、新宿区41.1%、渋谷区40.4%と4自治体が含まれている。大都市部は全部で13自治体となっている。

表1-1のとおり、我々の調査対象地域である港区のひとり暮らし高齢者の出現率は、大都市部の第6位に位置しているが、全国レベルで見るとどのような位置にあるのか。2005年の国勢調査によれば、港区のひとり暮らし高齢者の出現率は、全国で13位である。年次推移を見ると、1995年の国勢調査では123位、2000年の国勢調査で37位となっていたものが、13位にまで上昇した。2005年においては、港区のひとり暮らし高齢者の出現率は東京都で島しょ部を除いて第1位となっている。

ところが2010年の国勢調査結果では、表1-2のとおり、港区のひとり暮らし高齢者の出現率は40.2%となり、2000年の数値より2.4ポイント低下している。今回の国勢調査で港区は東京都で島しょ部を除いて第6位になっている。東京都

表1-1 地域類型別自治体別ひとり暮らし高齢者の出現率

### (1) 島しょ

	自治体名	ひとり暮らし高齢者出現率
1	東京都 青ヶ島村	70.8%
2	東京都 御蔵島村	67.6%
3	東京都 小笠原村	46.1%
4	長崎県 宇久町	44.7%
5	鹿児島県 三島村	44.0%
6	島根県 知夫村	43.5%
7	東京都 利島村	42.0%
8	鹿児島県 瀬戸内町	41.9%
9	鹿児島県 大和村	41.2%
10	鹿児島県 十島村	40.3%
11	東京都 大島町	39.9%

### (2) 過疎地

1	三重県 紀和町	46.6%
2	鹿児島県 大浦町	41.5%
3	奈良県 上北山村	40.8%
4	徳島県 東祖谷山村	40.4%
5	山梨県 早川町	39.8%
6	北海道 泊村	39.8%

### (3) 大都市

1	大阪府 大阪市西成区	60.7%
2	大阪府 大阪市浪速区	52.2%
3	大阪府 大阪市中央区	46.5%
4	兵庫県 神戸市中央区	46.2%
5	広島県 広島市中区	43.2%
6	東京都 港区	42.6%
7	兵庫県 神戸市兵庫区	42.4%
8	東京都 豊島区	42.0%
9	東京都 新宿区	41.1%
10	東京都 渋谷区	40.4%
11	福岡県 福岡市博多区	40.4%
12	福岡県 福岡市中央区	40.3%
13	愛知県 名古屋市中区	39.9%

資料) 2005年国勢調査

出所) 河合克義『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社、2009年、5ページ。

で島しょ部を除き、出現率が高い自治体を上から挙げると、(1) 新宿区が45.2%、(2) 杉並区が44.6%、(3) 渋谷区が44.4%、(4) 豊島区が43.6%、(5) 中野区が40.7%、そして港区が続いている。

表1-2 2010年における東京都ひとり暮らし高齢者出現率

出現率 A = (単身高齢者数 ÷ 65歳以上人口) × 100

出現率 B = (単身高齢者数 ÷ 高齢者のいる世帯数) × 100

	人 口	65歳以上 人口割合	単 身 高齢者数	65歳以上 人口	高齢者のいる 世帯数	出現率 A	出現率 B
東京都	13,159,388	20.1%	622,326	2,642,231	1,837,074	23.6%	33.9%
特別区	8,945,695	19.8%	459,968	1,771,978	1,261,281	26.0%	36.5%
青ヶ島村	201	10.4%	12	21	20	57.1%	60.0%
御蔵島村	348	13.8%	22	48	40	45.8%	55.0%
小笠原村	2,785	9.2%	97	256	197	37.9%	49.2%
三宅村	2,676	35.1%	318	940	671	33.8%	47.4%
新宿区	326,309	18.7%	20,489	60,872	45,281	33.7%	45.2%
杉並区	549,569	19.9%	35,346	109,199	79,195	32.4%	44.6%
渋谷区	204,492	18.9%	12,704	38,660	28,594	32.9%	44.4%
豊島区	284,678	19.0%	17,504	54,048	40,181	32.4%	43.6%
大島町	8,461	31.7%	799	2,680	1,884	29.8%	42.4%
利島村	341	20.2%	20	69	49	29.0%	40.8%
中野区	314,750	19.6%	18,163	61,567	44,664	29.5%	40.7%
<b>港区</b>	<b>205,131</b>	<b>17.0%</b>	<b>10,116</b>	<b>34,823</b>	<b>25,161</b>	<b>29.0%</b>	<b>40.2%</b>
台東区	175,928	23.1%	11,143	40,720	28,235	27.4%	39.5%
文京区	206,626	18.5%	10,939	38,280	27,719	28.6%	39.5%
八丈町	8,231	32.1%	727	2,643	1,850	27.5%	39.3%
北区	335,544	23.7%	22,524	79,520	57,693	28.3%	39.0%
中央区	122,762	15.9%	5,501	19,503	14,216	28.2%	38.7%
品川区	365,302	19.1%	19,390	69,850	50,924	27.8%	38.1%
千代田区	47,115	19.2%	2,468	9,028	6,508	27.3%	37.9%
板橋区	535,824	20.9%	29,665	111,800	78,674	26.5%	37.7%
武蔵野市	138,734	19.5%	6,895	27,082	18,825	25.5%	36.6%
世田谷区	877,138	18.2%	40,210	159,857	112,221	25.2%	35.8%
目黒区	268,330	19.2%	12,777	51,608	36,443	24.8%	35.1%
荒川区	203,296	21.5%	10,870	43,680	31,200	24.9%	34.8%
大田区	693,373	20.2%	34,690	140,120	100,043	24.8%	34.7%
足立区	683,426	22.1%	36,175	151,167	106,117	23.9%	34.1%
墨田区	247,606	21.3%	12,590	52,777	37,565	23.9%	33.5%
狛江市	78,751	21.6%	3,941	16,996	11,764	23.2%	33.5%
国立市	75,510	19.0%	3,287	14,336	9,912	22.9%	33.2%
小金井市	118,852	18.5%	4,937	21,955	15,004	22.5%	32.9%
三鷹市	186,083	18.7%	7,591	34,741	23,235	21.9%	32.7%
江東区	460,819	19.1%	20,581	88,073	63,243	23.4%	32.5%
調布市	223,593	18.8%	9,355	41,996	29,019	22.3%	32.2%
福生市	59,796	20.4%	2,680	12,207	8,344	22.0%	32.1%
練馬区	716,124	19.2%	29,693	137,625	94,201	21.6%	31.5%
葛飾区	442,586	22.0%	21,222	97,391	67,754	21.8%	31.3%
清瀬市	74,104	24.8%	3,520	18,375	11,676	19.2%	30.1%
江戸川区	678,967	17.9%	25,208	121,810	85,449	20.7%	29.5%
立川市	179,668	21.2%	7,545	38,153	25,711	19.8%	29.3%
国分寺市	120,650	18.8%	4,491	22,661	15,387	19.8%	29.2%
東久留米市	116,546	23.4%	5,400	27,289	18,535	19.8%	29.1%
府中市	255,506	18.1%	9,053	46,351	31,098	19.5%	29.1%
小平市	187,035	20.0%	7,259	37,384	24,982	19.4%	29.1%

新島村	2,883	34.5%	191	994	662	19.2%	28.9%
西東京市	196,511	20.3%	7,673	39,972	26,776	19.2%	28.7%
東村山市	153,557	22.4%	6,233	34,325	22,089	18.2%	28.2%
昭島市	112,297	20.7%	4,375	23,213	15,505	18.8%	28.2%
日野市	180,052	20.7%	6,767	37,270	24,850	18.2%	27.2%
町田市	426,987	21.5%	16,104	91,999	60,722	17.5%	26.5%
多摩市	147,648	20.9%	5,352	30,907	20,421	17.3%	26.2%
八王子市	580,053	20.6%	20,123	119,429	77,983	16.8%	25.8%
稲城市	84,835	17.3%	2,429	14,660	9,478	16.6%	25.6%
東大和市	83,068	21.7%	3,123	18,058	12,188	17.3%	25.6%
奥多摩町	6,045	41.3%	353	2,498	1,393	14.1%	25.3%
羽村市	57,032	19.5%	1,742	11,133	7,261	15.6%	24.0%
武蔵村山市	70,053	20.8%	2,273	14,593	9,777	15.6%	23.2%
檜原村	2,558	43.4%	142	1,110	621	12.8%	22.9%
神津島村	1,889	27.4%	75	518	342	14.5%	21.9%
青梅市	139,339	23.1%	3,996	32,250	18,685	12.4%	21.4%
瑞穂町	33,497	21.1%	873	7,067	4,473	12.4%	19.5%
あきる野市	80,868	23.7%	2,216	19,199	11,868	11.5%	18.7%
日の出町	16,650	29.3%	369	4,875	2,496	7.6%	14.8%

(資料)「平成22年国勢調査」より作成

### (3) 港区におけるこれまでのひとり暮らし高齢者調査

港区において、ひとり暮らし高齢者を対象とする調査は、過去に2回実施されている。調査主体は2回とも港区社会福祉協議会であるが、調査の設計から集計、報告書の執筆まで明治学院大学の河合克義研究室が中心的に担っている。

#### <第1回目調査>

この調査は1995年1月(調査時点:1995年1月15日現在)に実施された悉皆調査であった(この調査を以下「1995年調査」とする)。郵送で送り、回収を地域の民生・児童委員に担っていただいた。回収率は72.6%、回収数は1,963ケースであった。

#### <第2回目調査>

2回目の調査は2004年から2005年にかけて実施された。調査は第1次と第2次の2段階からなっている。第1次調査としてのアンケート調査が2004年12月(調査時点:2004年12月1日現在)に実施された。ひとり暮らし高齢者の40%抽出による調査で、その回収率は57.9%、回収数は964ケースであった。2次調査は訪問面接によるもので、2005年3月から4月までの期間に実施された。この調査を以下では「2004年調査」とする。

以上2つの調査報告書はともに港区社会福祉協

議会から発刊されている。

①『東京都港区におけるひとり暮らし高齢者の生活と社会的孤立に関する調査報告書—地域ネットワークの新たな展開を求めて—』港区社会福祉協議会、1995年8月

②『港区におけるひとり暮らし高齢者の生活実態と社会的孤立に関する調査報告書』東京都港区社会福祉協議会、2006年8月

両報告書とも港区社会福祉協議会のホームページからPDFファイルでダウンロードできる。なお、調査結果を更に分析したものとして河合克義『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』(法律文化社、2009年)がある。

### (4) ひとり暮らし高齢者の生活を分析する視点と方法

本調査で、ひとり暮らし高齢者の生活実態と意識を分析するわけであるが、ここで、その前提となるいくつかの基本的考え方を述べておきたい。

一般に高齢者の生活を評価する場合、高齢者の生活全体を平均値で見る手法がよく使われてきた。収入を高齢者世帯全体の平均値で見る時、平均以下の生活の現実は見えなくなる。平均より下の現実が存在しないかのように扱われることもよくあ

る。我々は、そうした分析の方法はとらない。グループ（階層）ごとの違いを我々は重視したい。例えば年間収入が400万円以上の層と、150万円未満の層では、生活の中身は明らかに異なってくる。仮に全体を上層、中間層、不安定層の3つに分けた場合、階層ごとの生活実態は異なり、問題も様相を異にするのであり、当然、問題解決の方法も異なる。それぞれの属性によってグループ（階層）に分けて考えることは基本的分析視点である。それは問題の解決策を考える場合にも言えることである。

次に性別についてである。一般に高齢者の男女比は女性の割合が高いが、ひとり暮らし高齢者となると更に女性の占める割合が高くなる。それも地域によって差がある。こうした傾向を持つひとり暮らし高齢者の生活状況は、男性と女性でかなりの違いが認められる。生活水準の差、親族ネットワークや地域ネットワークの差、これらは性別によって異なり、その点を正しく分析しなければならない。本報告書においても性別を基軸にした分析を重視したい。

さて、本調査は東京の中心部に位置する港区という地域に住むひとり暮らし高齢者を対象にしている。高齢者の生活も港区という地域の特性に大きな影響を受けていることは当然であろう。その意味で、港区の特徴を踏まえて分析されなければならない。さらに、我々は港区をより細かく区分した地域を意識している。港区は芝、麻布、赤坂、高輪、芝浦という5つの地区を設定し、そこに「総合支所」を置いている。この5つの地区によってひとり暮らし高齢者の生活と意識がどのような状況にあるのか、この分析も重要であろう。ただし、住民活動の単位ということでは、総合支所の区域は大きいことは明らかであり、更に小さな地域の単位を考えなければならない。本報告では、そこまでの地域分析はできないが、小地域を基礎にした地域性は重視されなければならない視点である。

本調査は、社会的孤立問題を重要な研究テーマとして設定している。孤立問題を抱えているひとり暮らし高齢者の実態を我々はいろいろな側面から分析したい。その際、我々は主観的なく孤独

感>と<客観的な孤立状態>を区別して考えたいと思う。同じ状況にある人でも、ある人は孤独と感じ、また別の人にはそう感じないことがある。問題にしたいことは、本人が意識するしないにかかわらず、その人が客観的に問題を抱えているかどうかということである。生活が困難な状況にある人ほど、問題解決には何が必要か、どうすればいいのかなど分からず、当惑しているのである。とはいえ、本調査ではひとり暮らし高齢者の意識をいくつかの側面から測定しようと考えた。生活の安心感や不安感といった意識の程度を測定し、因子分析等を試みたい。

最後に、分析と対応の総合性について触れておきたい。ひとり暮らし高齢者の実態、問題を調査の中から明らかにすることが本調査の重要な任務であるが、その際の重要な視点は、生活そして問題の全体を見ることの大切さである。生活の課題を細切れに切り取ることは真の問題解決にはつながらない。同時に、課題、問題への対応も全体的であるべきで、部分的方策では不十分である。諸方策全体が見えているかどうかが重要だと考える。

## 2 調査の概要

### (1) 調査の名称

港区におけるひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査

### (2) 調査主体

調査の主体は、港区政策創造研究所である。なお、調査の設計は、「港区ひとり暮らし高齢者社会調査関係者会議」(VI資料5を参照)において行った。

### (3) 調査の目的

本調査の目的は、港区におけるひとり暮らし高齢者の生活実態と意識の把握を通じて、今後の保健福祉施策のあり方を検討するための基礎資料を得ることにある。

### (4) 調査対象

調査対象は、平成23年5月9日現在で、区内に居住している65歳以上のひとり暮らし高齢者

5,656人全員である。この数は、港区保健福祉支援部高齢者支援課で実施した平成22年度の「単身世帯（65歳以上）実態調査」によって把握されたものである。

これは、住民票上の「単身世帯」の中から、「近隣（同一建物等）に、3親等以内（親、子、兄弟姉妹、孫、おじ、おば、甥、姪、ひ孫）の親族のいない人」、すなわち実質のひとり暮らし高齢者の数をとらえている。この膨大な調査は民生委員が担っていることを記しておきたい。

#### （５）調査の方法と種類

本調査は1次調査と2次調査からなる。

- ① 1次調査は、郵送によるアンケート調査である。
- ② 2次調査は、1次調査を類型化し、典型例を選んで直接訪問面接調査を実施した。

#### （６）調査時点及び期間

1次調査の調査時点は平成23年6月1日現在である。調査期間は平成23年6月1日から6月14日

までの2週間である。

2次調査の調査実施期間は平成23年9月1日から9月30日までの30日間である。

#### （７）回収数、回収率

##### ① 1次調査

1次調査は、回収数3,947ケースで、回収率は69.8%であった。

##### ② 2次調査

1次調査回答者のうち、2次調査の受け入れを受諾してくれた方は643名で、これは全体の16.3%を占める。この643ケースについて一定の指標に基づいて類型化し、その内の70ケースを実際に訪問した。

#### （８）本報告書の執筆

本報告は、以上の1次調査と2次調査の2つの調査結果を記述するものである。

報告書の執筆については、港区政策創造研究所（所長：河合克義）が行った。

### 報告書における表及び図表の見方

- ① グラフや数表では、各質問の回答者数を母数とした百分率（%）で回答比率を示している。百分率（%）は、原則として小数第2位を四捨五入し、小数第1位までを表示しているため、比率の合計が100%を前後する場合がある。
- ② 複数回答を求めた質問では、回答比率の合計が100%を超える。
- ③ 図表内のnは、回答の合計数である。例えば、n=3,947の場合、回答数は3,947となる。
- ④ カイ二乗検定：統計学上、クロス表における割合に差が見える場合、その確からしさを調べるためにカイ二乗検定を用いる。例えば、住宅の種類×性別のクロス表において、民間の賃貸住宅居住の男性が27.9%、女性が12.9%である場合、その15ポイントの差が偶然であるかどうかを調べるためにカイ二乗検定を用いる。クロス表のp値（有意確率）が0.05（一般的な有意水準）より小さければ、住宅の種類と性別には関連性があり、上記15ポイントの差が出ているのは偶然ではないと言える。



## II 港区の地域概況

### 1 港区の概況

#### (1) 誕生

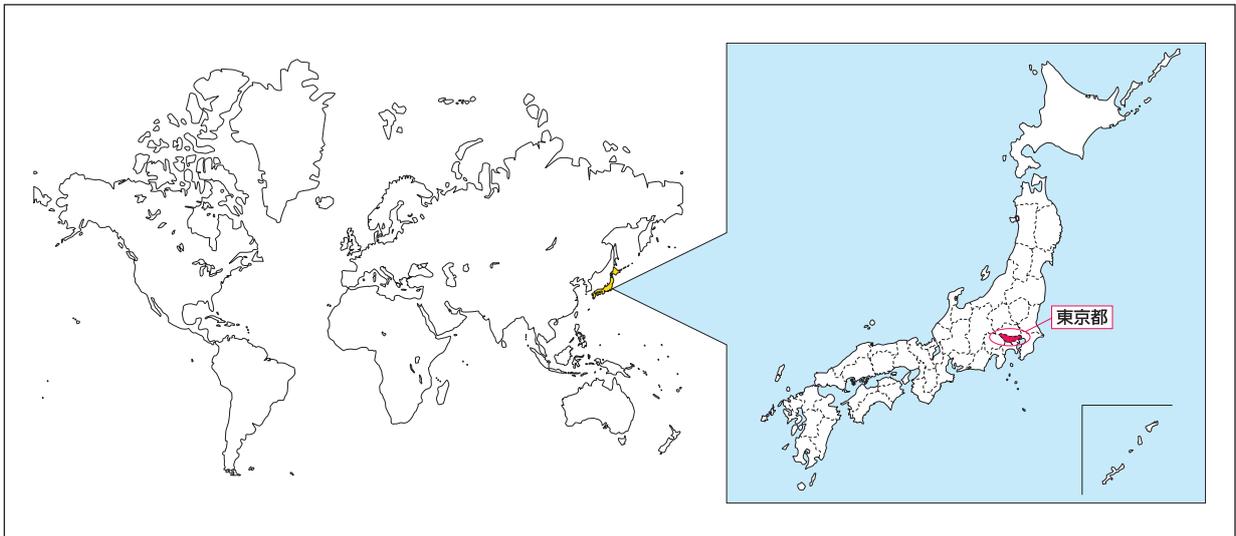
昭和22年（1947年）3月15日、旧赤坂区、旧麻布区、旧芝区の3区が合併され、今の「港区」が誕生した。なお、「港区」という名称は、3区合併を期に、各区の関係者から提案されたもののうち、「今後の我が国の発展は貿易の振興にあるが、その素材とも言える東京港を包含している」として「東港区」が候補となり、そこから「東」の一

字を除いて、「港区」となったことに由来する。

#### (2) 位置

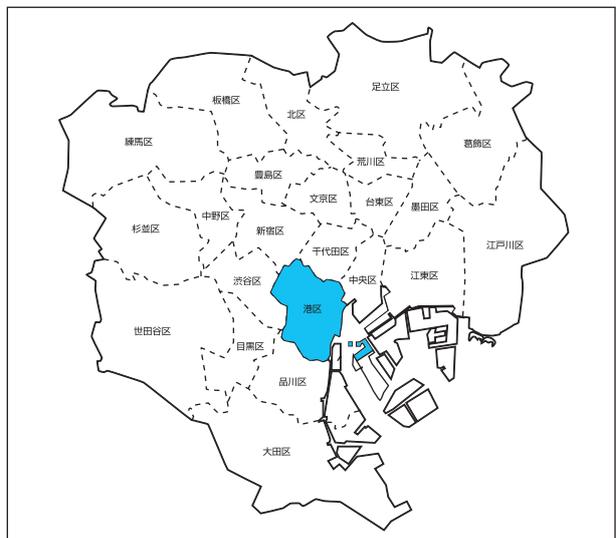
日本は、アジアの東方にある4つの弧状列島から成り立っていて、太平洋の西部にある島国である（図2-1）。その最南端でもあり最東端でもある東京都は、区部及び多摩地域の内陸部と伊豆諸島及び小笠原諸島などの島しょ部からなっている。

図2-1 日本、東京都の位置



港区は、東京都のほぼ東南部に位置して、東は東京港に面し、その北端でわずかに中央区に接し、北は千代田区と新宿区に、西は渋谷区、南は品川区、東は江東区にそれぞれ隣接している（図2-2）。港区の東端は台場2丁目（東経139度47分）、西端は北青山3丁目（東経139度43分）で、南端は高輪4丁目（北緯35度37分）、北端は元赤坂2丁目（北緯35度41分）である。南北の距離は約6.5km、東西は約6.6kmである。

図2-2 港区の位置



### (3) 地形

地形は、西北一帯が高台地となっている一方、東南の東京湾に面した部分は、低地及び芝浦海浜の埋立地から成っている。高台地は秩父山麓に端を發している武蔵野台地の末端で、これらの台地は小さな突起状の丘陵となっており、そのため、東京23区の中では最も起伏に富んだ地形をもっている。土地の高低差が大きく、名前がついているものだけでも80余りの坂がある。そして区の中央部を西から東に流れる古川（金杉川）流域には、平地部が横たわっている。最高地は赤坂台地の北青山3丁目の海拔34mで、最低地はJR浜松町駅前ガード下付近の0.08mである。

### (4) 面積

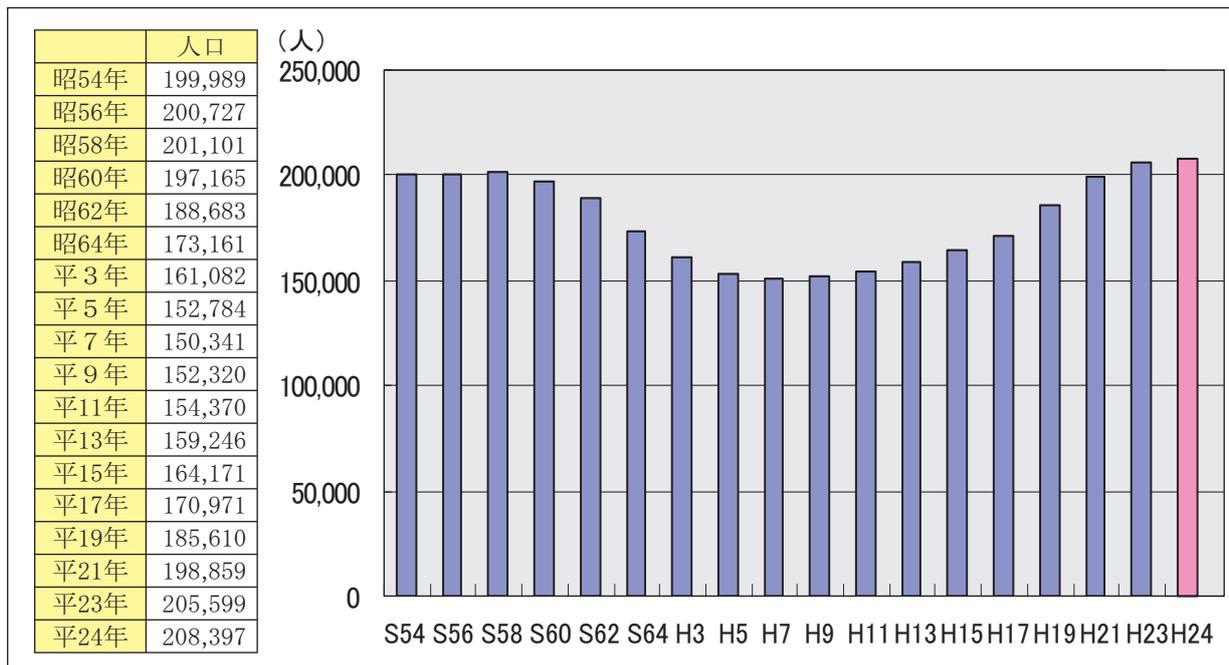
港区の総面積は、20.34平方km（平成22年10月1日現在）である。この面積は、東京23区総面積

621.98平方kmの約3.27%にあたり、23区中12番目の広さである。また最大区の大田区の3分の1強、最小区の台東区の約2倍に相当する。支所管内ごとにみると、芝地区総合支所管内は4.419平方km、麻布地区総合支所管内は3.787平方km、赤坂地区総合支所管内は4.006平方km、高輪地区総合支所管内は3.367平方km、芝浦港南地区総合支所管内は4.760平方kmとなっている。

### (5) 人口

平成24年1月1日現在の住民基本台帳によると、港区の人口は、208,397人、世帯数119,042世帯であった（図2-3）。人口数は、昭和59年から長期的な減少傾向に転じ、平成7年4月には、15万人を割り込んだが、近年の芝浦港南地域での人口増加に伴い、平成21年5月には20万人を突破し、四半世紀ぶりに20万人台を回復した。

図2-3 港区の人口動向

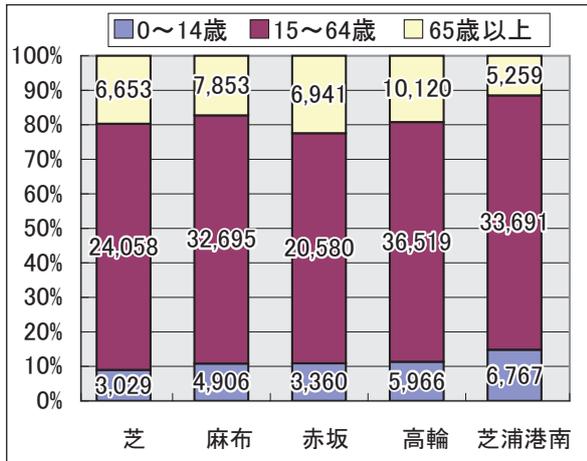


※各年1月1日現在の数字  
（資料）住民基本台帳より作成

総合支所管内ごとの人口を見ると、芝地区総合支所管内は33,740人、麻布地区総合支所管内は45,454人、赤坂地区総合支所管内は30,881人、高輪地区総合支所管内は52,605人、芝浦港南地区総合支所管内は45,717人となっている。

総合支所管内別の人口構成で特徴的な部分として、赤坂地区の65歳以上の割合がやや高いこと（22.5%）、芝浦港南地区の65歳以上の割合が少なく（11.5%）、0～14歳の割合が高い（14.8%）ことが挙げられる（図2-4）。

図2-4 総合支所管内別の人口構成比較（単位：人）



(資料) 住民基本台帳より作成

外国人登録者数は、平成24年1月1日現在、20,620人（男10,986人、女9,634人）である。

## (6) 産業

総務省統計局が実施した平成21年経済センサスによると、港区の事業所数は42,664か所（事業内容等不詳を除く）、従業者数は1,028,331人であり、どちらも特別区の中で最も多い（表2-1）。特に従業者数については、特別区全体の従業者数の13.0%を占めている。港区の産業分類の事業所数の構成比率を見てみると、「卸売業、小売業」が19.87%、「宿泊業、飲食サービス業」が16.53%、「学術研究、専門・技術サービス業」が13.71%と高い。特別区の構成比率と比較すると、港区は、「情報通信業」が9.10%（特別区4.16%）、「学術研究、専門・技術サービス業」が13.71%（特別区7.22%）と高く、一方「建設業」「製造業」はそれぞれ2.64%（特別区5.99%）、3.90%（特別区9.25%）と低い。

表2-1 港区の産業

産業分類（実数、%）	事業所数				従業者数			
	港区		特別区		港区		特別区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
総数	42,664	100.0%	553,684	100.0%	1,028,331	100.0%	7,902,039	100.0%
農林漁業（合計）	19	0.04%	241	0.04%	124	0.01%	2,081	0.03%
農業、林業	16	0.04%	226	0.04%	90	0.01%	1,990	0.03%
漁業	3	0.01%	15	0.00%	34	0.00%	91	0.00%
非農林漁業（合計）	42,645	99.96%	553,443	99.96%	1,028,207	99.99%	7,899,958	99.97%
鉱業、採石業、砂利採取業	16	0.04%	56	0.01%	952	0.09%	2,087	0.03%
建設業	1,126	2.64%	33,148	5.99%	54,350	5.29%	408,092	5.16%
製造業	1,664	3.90%	51,241	9.25%	102,466	9.96%	731,225	9.25%
電気・ガス・熱供給・水道業	58	0.14%	399	0.07%	4,834	0.47%	31,165	0.39%
情報通信業	3,883	9.10%	23,051	4.16%	183,639	17.86%	804,389	10.18%
運輸業、郵便業	1,102	2.58%	16,931	3.06%	37,900	3.69%	426,053	5.39%
卸売業、小売業	8,478	19.87%	134,773	24.34%	198,702	19.32%	1,608,469	20.36%
金融業、保険業	1,025	2.40%	9,383	1.69%	41,547	4.04%	371,689	4.70%
不動産業、物品賃貸業	3,429	8.04%	49,474	8.94%	39,877	3.88%	301,662	3.82%
学術研究、専門・技術サービス業	5,848	13.71%	39,960	7.22%	75,688	7.36%	396,768	5.02%
宿泊業、飲食サービス業	7,054	16.53%	78,312	14.14%	89,690	8.72%	722,723	9.15%
生活関連サービス業、娯楽業	2,383	5.59%	37,462	6.77%	31,159	3.03%	288,799	3.65%
教育、学習支援業	651	1.53%	13,609	2.46%	17,753	1.73%	322,209	4.08%
医療、福祉	1,604	3.76%	30,073	5.43%	22,604	2.20%	444,246	5.62%
複合サービス事業	81	0.19%	1,392	0.25%	1,305	0.13%	15,230	0.19%
サービス業（他に分類されないもの）	4,174	9.78%	32,844	5.93%	117,936	11.47%	818,512	10.36%
公務（他に分類されるものを除く）	69	0.16%	1,335	0.24%	7,805	0.76%	206,640	2.62%

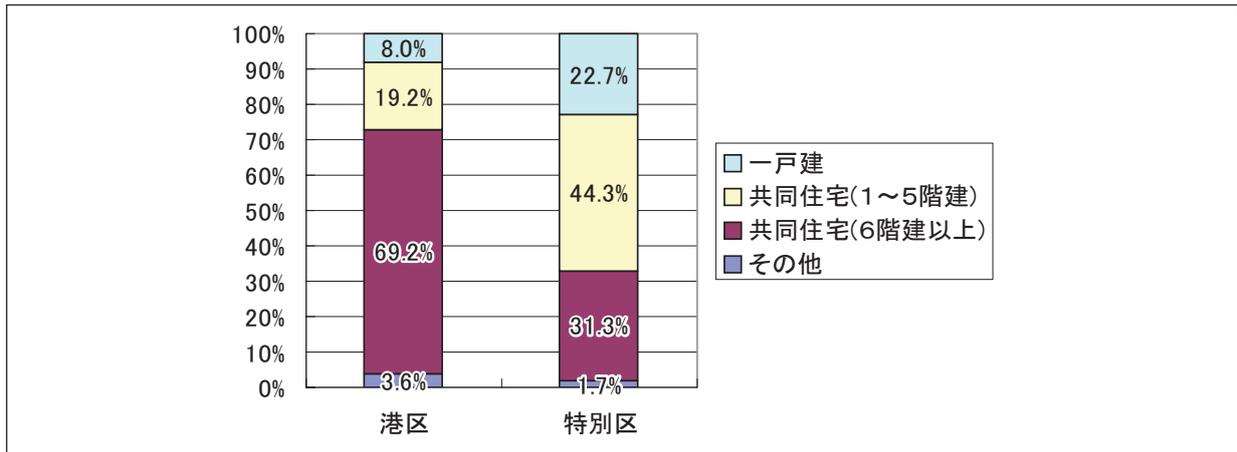
(資料) 総務省統計局「平成21年経済センサス基礎調査」より作成

## (7) 住宅

「平成20年住宅・土地統計調査」によると、住宅総数は140,440戸、世帯総数は120,590世帯である。「専用住宅（居住のみを目的として建てられた住宅）」の建て方別に見ると、港区は、「一戸建」が8.0%、「共同住宅」が88.4%で、「共同住宅」が

「一戸建」の11倍を上回っている（図2-5）。特別区全体で見ると、「一戸建」が22.7%、「共同住宅」が75.6%であり、また港区は「6階建以上」の比率が69.2%（特別区31.3%）と非常に高いことから、特別区の中でも、高層の「共同住宅」の比率が高いことが分かる。

図2-5 港区と特別区全体の住宅の建て方の比較



(資料) 総務省統計局「平成20年住宅・土地統計調査」より作成

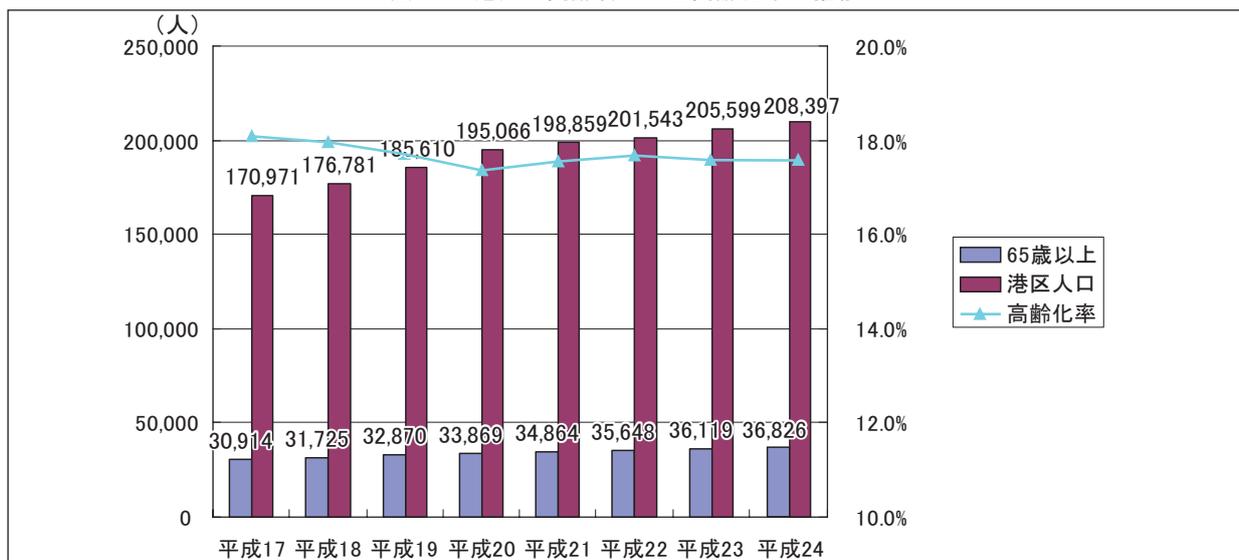
## 2 港区の高齢者の状況

### (1) 高齢者数等の推移

港区の65歳以上の高齢者の人口は、「住民基本台帳（平成24年1月1日現在）」で36,826人、高齢化率は17.7%であり、この数字は、今後も増加

していくと見込まれている（図2-6）。なお、平成23年1月1日現在の住民基本台帳によれば、特別区全体の高齢化率は20.3%、東京都全体の高齢化率は20.5%であった。

図2-6 港区の高齢者人口と高齢化率の推移



※各年1月1日現在の数字

次に、平成22年の国勢調査結果に基づき、実質ひとり暮らし高齢者の出現率を見ていく。3ページ表1-2ですで見たとおり、(単身高齢者数) ÷ (高齢者のいる世帯数) で算出した港区のひとり暮らし高齢者の出現率は40.2%であった。これは特別区の中で6番目に高く、特別区全体の36.5%、東京都全体の33.9%を大きく上回る数字である。

また、高齢化率とひとり暮らし高齢者の出現率を経年で比較すると(表2-2)、高齢化率には大きな変化は見られないが、ひとり暮らし高齢者の出現率は平成17年までは増加し、平成22年ではやや低下した。港区全体の人口構成は、ここ数年で大きな変化は見られないのに対し、ひとり暮らし高齢者については、変化が見られる。

表2-2 ひとり暮らし高齢者の出現率

国勢調査実施年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年
単身高齢者数(人)	5,599	8,233	10,559	10,116
高齢者のいる世帯数(世帯)	17,775	21,420	24,789	25,161
ひとり暮らし高齢者の出現率	31.5%	38.4%	42.6%	40.2%
高齢化率	16.3%	17.8%	17.7%	17.0%

(資料)「各年国勢調査」より作成

さらに、65歳以上の単身世帯の性別割合を見ると、港区は、男性25.1%(2,538人)、女性74.9%(7,578人)で女性の比率が非常に高い(表2-3)。女性の割合は、特別区が67.5%、東京都が68.1%、全国では71.1%であり、港区の65歳以上単身世帯の女性比率がとりわけ高いことを示している。

表2-3 65歳以上の単身世帯の性別割合

性別	65歳以上の単身世帯				
	港区	特別区	東京都	全国	
総世帯数	10,116	459,968	622,326	4,790,768	
男	世帯数	2,538	149,323	198,645	1,385,742
	割合	25.1%	32.5%	31.9%	28.9%
女	世帯数	7,578	310,645	423,681	3,405,026
	割合	74.9%	67.5%	68.1%	71.1%

(資料)「平成22年国勢調査」より作成

## (2) 単身世帯(65歳以上)実態調査におけるひとり暮らし高齢者数の推移

港区では、ひとり暮らしの高齢者の連絡先等を把握し、緊急時などに備えるとともに、区の今後の施策に活かして行くことを目的とし、毎年、地区の民生・児童委員に依頼して、65歳以上の単身世帯の実態調査を行っている。

調査方法は、民生・児童委員による訪問調査である。調査対象は、前年の調査でひとり暮らしと把握された人に加え、新たに65歳以上の単身者になった人(新たに65歳になった人、転入した人など)としているが、3年に一度、住民基本台帳上で65歳以上の単身者全員を調査する全数調査を行っている。

過去5年の単身世帯(65歳以上)実態調査におけるひとり暮らし高齢者数の推移を見てみると、平成18年度と平成19年度はそれぞれ5,279人、5,283人とほぼ同数であるが、全数調査を実施した平成20年度は5,979人と1割以上増加している(図2-7)。その後の平成21年度、平成22年度は5,959人、5,767人と緩やかに減少している。

図2-7 単身世帯(65歳以上)実態調査におけるひとり暮らし高齢者数の推移(人)



※各年度1月1日現在の数字

※平成20年度は「全数調査」の実施年

(資料) 高齢者支援課「単身世帯(65歳以上)実態調査」より作成

## 3 港区の地区ごとの特徴について

### (1) 芝地区

芝地区には、芝公園のように大規模な緑地がある一方で、新橋、汐留といった繁華街も存在する。新橋や虎ノ門、浜松町は多くの事業所が集まって

いる地域である。平成17年の国勢調査によると、芝地区は、夜間人口が29,799人であるのに対して、昼間人口は392,924人となっており、昼夜間人口比率は13倍強である。港区全体の昼夜間人口比率が5倍弱であることから、芝地区に事業所が多いことがうかがえる。JRや地下鉄など交通網の整備も進んでいる。また大規模な開発等により、高層の事業所ビルやマンション等の建設が進められており、高層建築物も多い。

## （２）麻布地区

麻布地区は、地勢で見ると、高台や低地など起伏に富み、坂の多い地域である。区内にある大使館の半数以上が集中し、外資系企業も多く立地するなど、国際的な都市活動が展開されており、外国人居住者が区内で最も多い地域でもある。住宅地や地域に密着した工場や商業などの町並みが広がっていると同時に、六本木ヒルズ等に代表されるように新しく近代的なオフィス街や繁華街も数多く存在する。

## （３）赤坂地区

赤坂地区は、青山通りが赤坂と青山を結ぶように東西に走り、多くの商業ビル、宿泊施設が立ち並び、国内有数の繁華街を形成している。地区内には、麻布地区同様、多くの大使館が存在するとともに、外国籍の人々が多数居住している。また、地価の高騰時に大きく人口の減少した赤坂・青山地区では、子ども世代が地区から転出し、親世代が地区に留まったことと、家族層が転入するには住居費の負担が高いことから、年少人口比率は低い。一方で65歳以上の人々が占める割合は高く、今後も増えることが予想されている。

## （４）高輪地区

高輪地区は、5つの地区の中では最も面積が狭く、また、土地の高低差が大きな港区の中でも起伏の多い地区である。また居住人口は、5つの地区の中では最大だが、昼夜間人口の差は少なく

なっている。これは、住宅が多く、大きな事業所が少ないことを示しており、居住人口は今後も増加すると想定されている。また高輪地区には、歴史的建造物が数多く立地している一方、近年、再開発やマンション建設も進んでいる。

## （５）芝浦港南地区

芝浦港南地区は、近年の相次ぐ大規模マンションの建設等により、人口が急増している。平成23年1月1日現在の人口は45,268人で、平成17年と比較すると約2倍に増加しており、今後も人口の増加傾向が続くことが予想される。年齢別人口を見ると、年少人口と生産年齢人口の割合が高く、ファミリー層の多い地域であると言える。また芝浦港南地区は、埋め立てによりできたことから、地区の大部分が標高10m未満の低地で、区内の他地区が高低差のある地形であることと比べると、起伏の少ない平らな地形となっている。

図2-8 港区の地区



## III 1次調査の結果

### 1 基本集計

ここでは、まず1次調査で回収された3,947ケースの基本的特徴について概観する。それは後に見るクロス集計、多変量解析といった詳細な分析の前提的なもので、本調査対象の特徴を大まかに把握することを目的としている。

#### (1) 性別・年齢

##### ア 性別

本調査の性別は図3-1のとおりである。男性が19.2%、女性が78.9%で、およそ8割を女性が占めている。

1995年調査、2004年調査との比較で見ると(表3-1)、1995年調査時点では、男性が14.0%、女性が85.7%、2004年調査時点では、男性が16.6%、女性が83.4%となっていた。1995年と今回の調査

時点2011年を比較すると、男性は5.2ポイント増加しているのに対し、女性は6.8ポイント減少している。このように、全体としては女性が大半を占めているものの、男性の増加傾向が認められる。

図3-1 性別

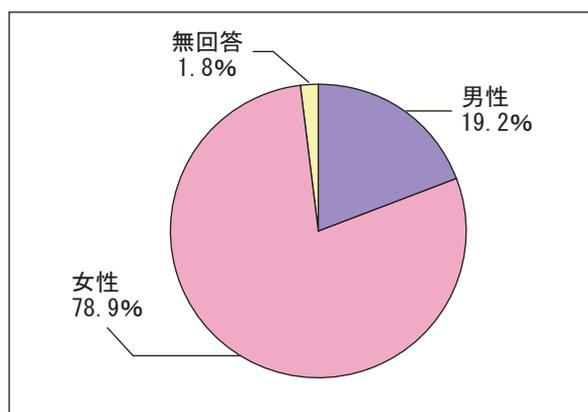


表3-1 性別の構成割合の推移

	1995年調査		2004年調査		2011年調査	
	実数	%	実数	%	実数	%
男性	274	14.0%	160	16.6%	758	19.2%
女性	1,683	85.7%	804	83.4%	3,116	78.9%
無回答	6	0.3%	0	0.0%	73	1.8%
合計	1,963	100.0%	964	100.0%	3,947	100.0%

##### イ 年齢

次に、年齢階層を5歳ごとにまとめて見てみよう。図3-2のとおり、最も割合の高い年齢層は「75歳以上80歳未満」で25.9%、次いで「70歳以上75歳未満」が21.7%、「80歳以上85歳未満」が20.2%となっている。なお、「90歳以上」のひとり暮らし高齢者は全体の4%を占めている。平均年齢は77.2歳である。

年齢階層別の構成割合について、過去の調査と比較すると(表3-2)、最も高い年齢階層は1995年調査では「65歳以上70歳未満」で36.2%、2004年調査では「70歳以上75歳未満」で29.0%、今回の2011年調査では「75歳以上80歳未満」で25.9%と

なっている。このように最も割合の高い年齢階層が、徐々に高年齢階層に移動していることが見て取れる。

65歳以上75歳未満の前期高齢者は36.8%、75歳以上の後期高齢者は61.4%である。これを過去の調査結果と比較すると、1995年調査では、前期高齢者が61.7%、後期高齢者が37.8%、2004年調査では前期高齢者が49.4%、後期高齢者が49.2%であり、高齢化が進み、後期高齢者の割合が高くなってきている。

図3-2 年齢

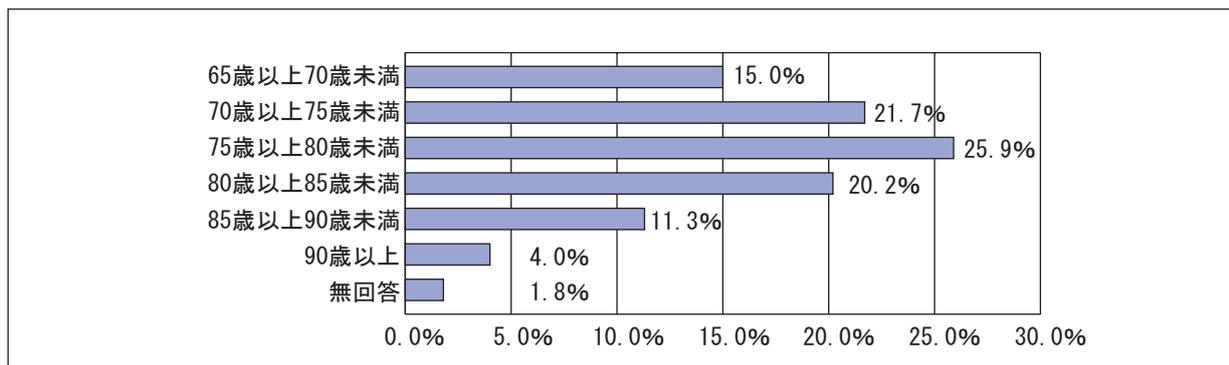


表3-2 年齢別構成割合の年次推移

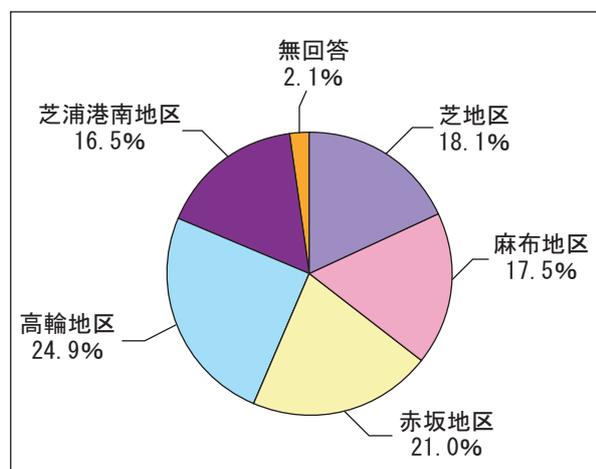
	1995年調査		2004年調査		2011年調査	
	実数	%	実数	%	実数	%
65歳以上70歳未満	710	36.2%	197	20.4%	594	15.0%
70歳以上75歳未満	501	25.5%	280	29.0%	857	21.7%
75歳以上80歳未満	365	18.6%	229	23.8%	1,023	25.9%
80歳以上85歳未満	240	12.2%	154	16.0%	799	20.2%
85歳以上90歳未満	112	5.7%	65	6.7%	446	11.3%
90歳以上	25	1.3%	26	2.7%	156	4.0%
無回答	10	0.5%	13	1.3%	72	1.8%
合計	1,963	100.0%	964	100.0%	3,947	100.0%

## (2) 住まいについて

### ア 居住している地区

港区はすでに見たように5地区に分かれているが、本調査の回答者が住んでいる地区別にその割合を示したものが図3-3である。全体として2割

図3-3 居住している地区



前後で分布しているが、最も高い地区が「高輪地区」の24.9%、次いで「赤坂地区」が21.0%、「芝地区」が18.1%、「麻布地区」が17.5%、そして「芝浦港南地区」が16.5%となっている。

なお、後に触れるように調査の母集団であるひとり暮らし高齢者の地区別割合との差はほとんどない。

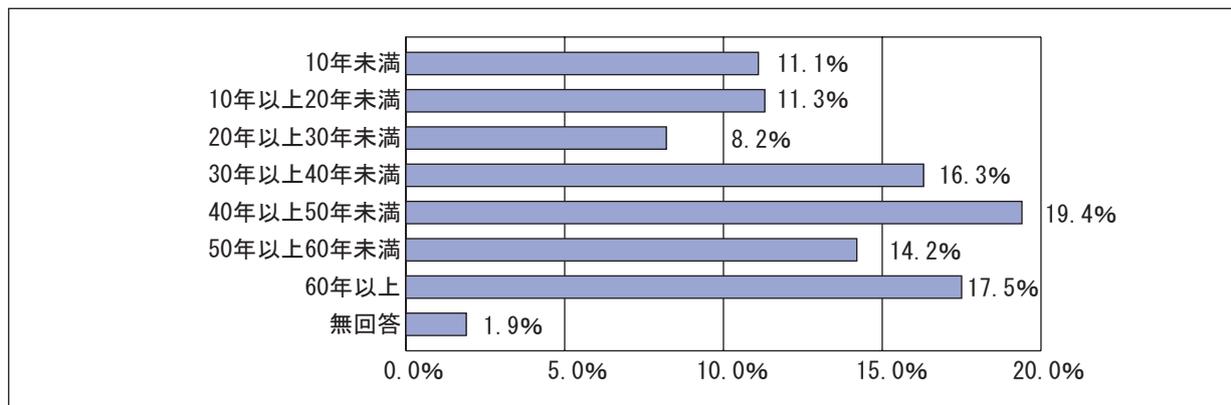
### イ 区内在住年数

港区内に住んでいる年数は、「40年以上50年未満」が19.4%と最も高く、次いで、「60年以上」が17.5%、「30年以上40年未満」が16.3%となっている（図3-4）。

全体として、20年未満の人が22.4%を占める。また20年以上の人の合計は75.6%となる。なお、10年未満という比較的最近港区に住み始めた人が11.1%と約1割を占めている。



図3-4 区内在住年数

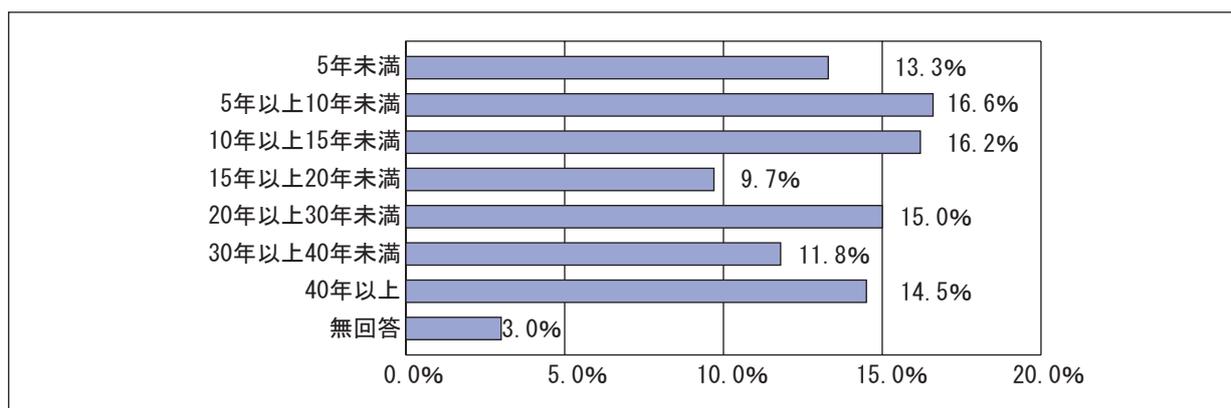


### ウ ひとり暮らしの期間

図3-5はひとり暮らしの期間について見たものである。「5年未満」で13.3%、10年未満の合計が29.9%となっている。他方、10年以上の合計は

67.2%と全体の7割近くを占めている。このように、ひとり暮らしの期間が長い高齢者が大半を占めている。

図3-5 ひとり暮らしの期間



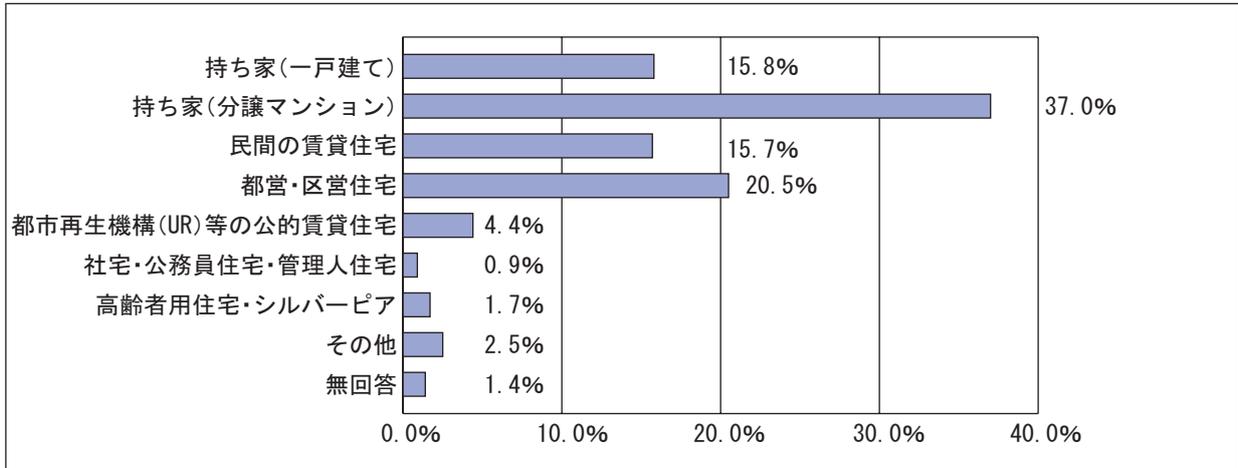
### エ 住宅の種類

住宅の種類についてはどうか。図3-6によってそれを見ると、「持ち家（分譲マンション）」が、37.0%と最も高く、次いで、「都営・区営住宅」20.5%、「持ち家（一戸建て）」15.8%、「民間の

賃貸住宅」15.7%となっている。

このように、「持ち家」に住んでいる人は半数強、「民間の賃貸住宅」に住んでいる人は1割半となっている。なお、公営住宅に住む人は全体の4分の1強となる。

図3-6 住宅の種類



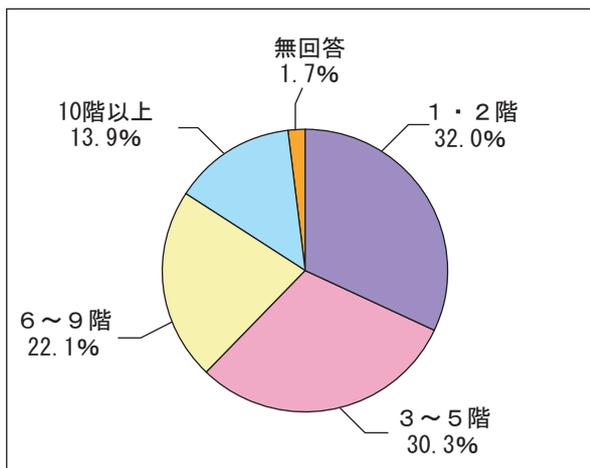
### オ 居住階

居住する階（主に生活する部屋）は、「1・2階」が32.0%と最も高く、次いで、「3～5階」が30.3%、「6～9階」が22.1%、「10階以上」は13.9%となっている（図3-7）。これを低層（1～3階）、中層（4～10階）、高層（11階以上）の3つに区分すると（表3-3）、「低層階」に住んでいる人が全体の4割、「中層階」が4割半、「高層階」が1割となっている。

表3-3 居住階（3階層）

居住階	実数	%
低層階（1～3階）	1,682	42.6%
中層階（4～10階）	1,782	45.1%
高層階（11階以上）	417	10.6%
無回答	66	1.7%
合計	3,947	100.0%

図3-7 居住階

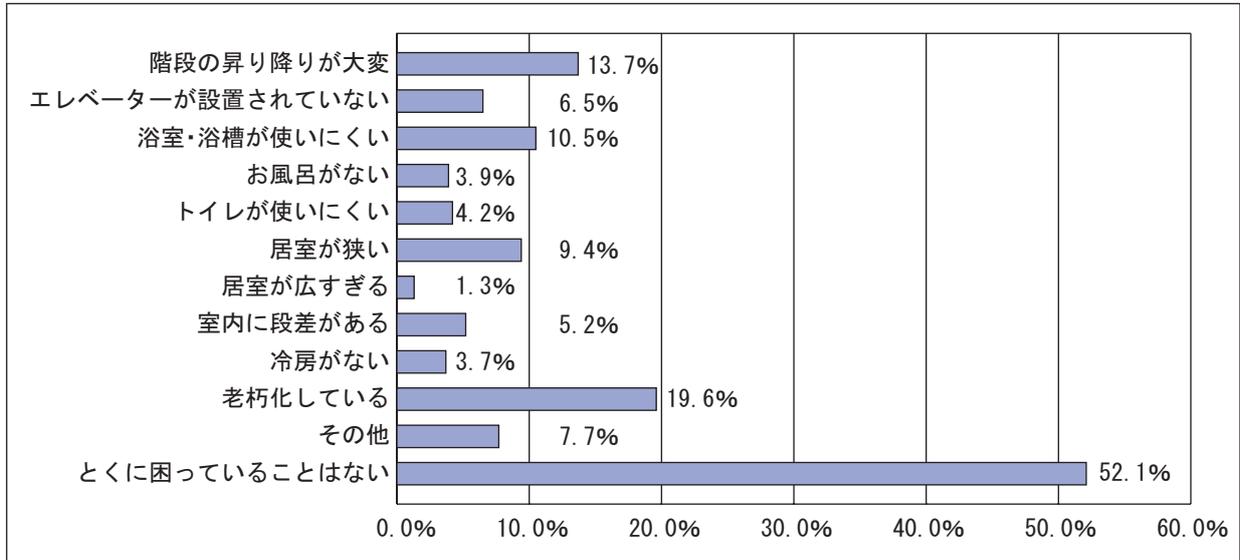


### カ 住宅の困りごと

図3-8は住宅の困りごとについて見たものである。まず、「老朽化している」が19.6%と最も高く、次いで、「階段の昇り降りが大変」が13.7%、「浴室・浴槽が使いにくい」が10.5%となっている。「お風呂がない」人は全体の3.9%、また「冷房がない」人は3.7%である。

他方、全体の52.1%の人が「とくに困っていることはない」と答えている。

図3-8 住宅の困りごと（複数回答）



### （3）健康状態

#### ア 本人の健康状態についての意識

本人が健康状態についてどのように意識しているかを図3-9によって見てみよう。「普通」が40.4%と最も高く、次いで、「あまり良くない」が20.4%、「まあ良い」が18.3%となっている。このように、普通の4割を中心に、両方に「健康な人」（「良い」＋「まあ良い」）が3割（31.8%）、健康状態が良くない人（「あまり良くない」＋「良くない」）が2割半（26.6%）いる。

#### イ 日常生活での介助の必要性

日常生活での介助の必要性は、「ほとんど自分でできる」が79.8%と最も高く、次いで、「一部介助を必要とする」が16.3%、「ほとんどすべてに介助を必要とする」が2.0%となっている（図3-10）。

一部あるいはほとんどすべてに介助を必要とする人が、全体の2割弱（18.3%）を占めている。

図3-9 本人の健康状態意識

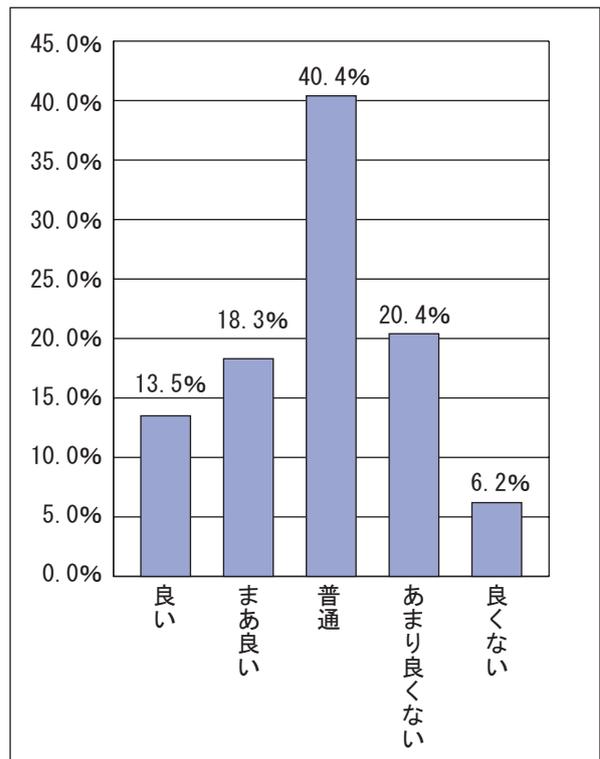
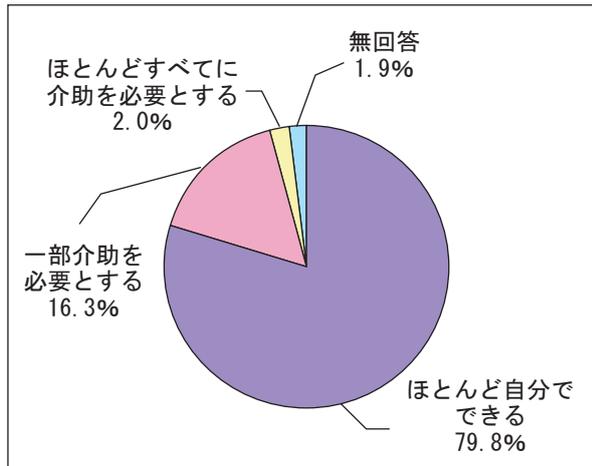


図3-10 日常生活での介助の必要性



### ウ 介護保険の要介護度

介護保険の要介護度については（図3-11）、「要支援1」が6.7%、「要支援2」が4.1%で、両者を合わせて要支援の人が1割程度である。

要介護段階にある人で最も多いのは「要介護1」で3.3%、次いで「要介護2」が1.9%、「要

介護3」が1.2%となっている。最も介護度が高い「要介護5」の人が0.4%いる。

全体として要介護認定を受けている人は18.3%となる。他方、「要介護認定の申請をしていない」人は全体の54.2%であった。

表3-4は、ひとり暮らし高齢者の介護保険認定者と第1号被保険者（65歳以上高齢者）の介護保険認定者について要介護（要支援）度別の構成割合を見たものである。まず、「要支援」の人が高齢者全体の中では25.9%であるのに対し、ひとり暮らし高齢者の中では59.2%となっている。また「要介護1」では、ひとり暮らし高齢者が18.1%、高齢者全体が17.0%となっており、ほぼ同じ割合である。しかし「要介護度」が上がるにしたがって、ひとり暮らし高齢者での割合が減少していく。「要介護5」では、ひとり暮らし高齢者が2.1%であるのに、高齢者全体では13.0%と大きな差がある。

図3-11 介護保険の要介護度

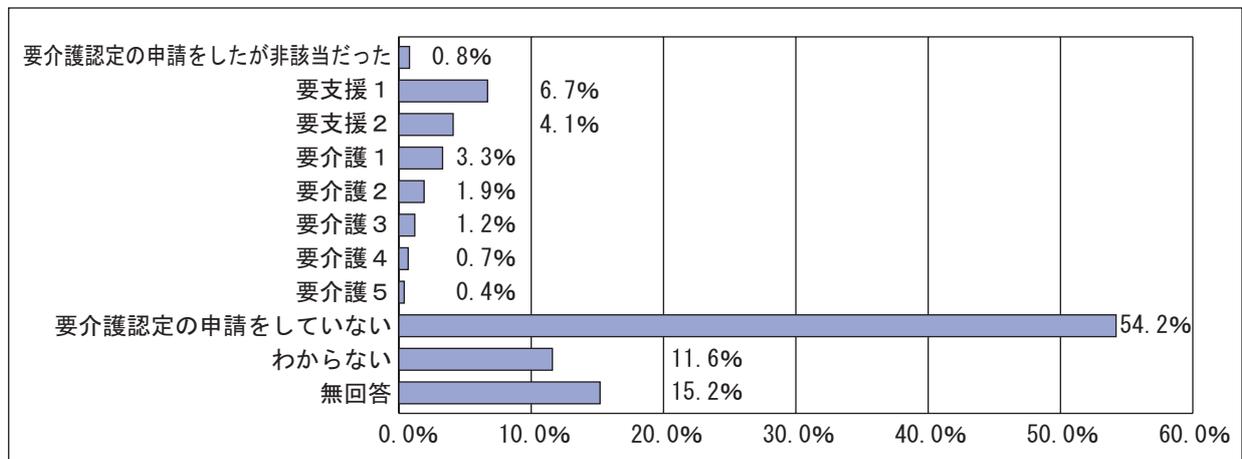


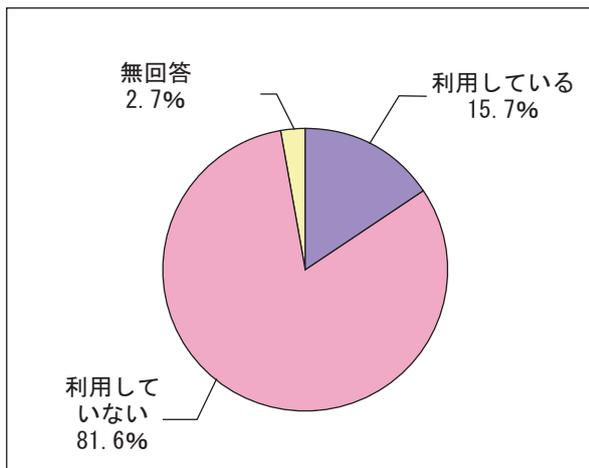
表3-4 ひとり暮らし高齢者と第1号被保険者の要介護（要支援）度別認定者の構成割合

要介護度	本調査回答者 [H23.6.1現在]		第1号被保険者全体 [H23.5.31現在]	
	実数	%	実数	%
要支援1	265	36.9%	1,031	15.1%
要支援2	160	22.3%	743	10.8%
要介護1	130	18.1%	1,165	17.0%
要介護2	75	10.4%	1,163	17.0%
要介護3	47	6.5%	944	13.8%
要介護4	27	3.8%	909	13.3%
要介護5	15	2.1%	893	13.0%
合計	719	100.0%	6,848	100.0%

## エ 介護保険サービスの利用状況

介護保険サービスを利用しているかどうかについては、図3-12のとおり、「利用していない」が81.6%で8割を超えており、「利用している」は15.7%となっている。このように、ひとり暮らし高齢者で介護保険サービスを利用している人は1割半程度である。

図3-12 介護保険サービスの利用状況

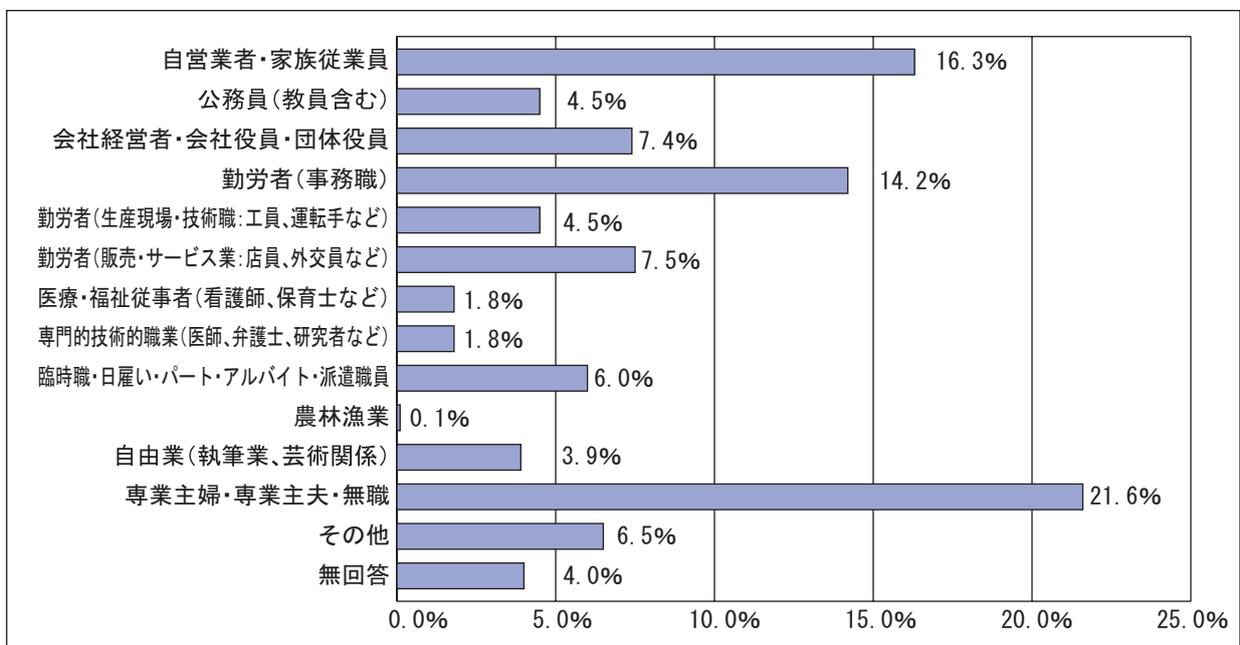


## (4) 職業について

### ア 本人の最長職

次に、調査対象者本人の生涯の中で最も長かった職業、すなわち最長職について見てみよう（図3-13）。

図3-13 本人の最長職



最長職として、まず「専業主婦・専業主夫・無職」が21.6%と最も高くなっている。これは、明らかにひとり暮らし高齢者の内の女性の割合が高いことが影響していると言えよう。次いで、「自営業者・家族従業員」が16.3%、「勤労者（事務職）」が14.2%、「勤労者（販売・サービス業）」が7.5%となっている。なお「会社経営者・会社役員・団体役員」が7.4%いる。

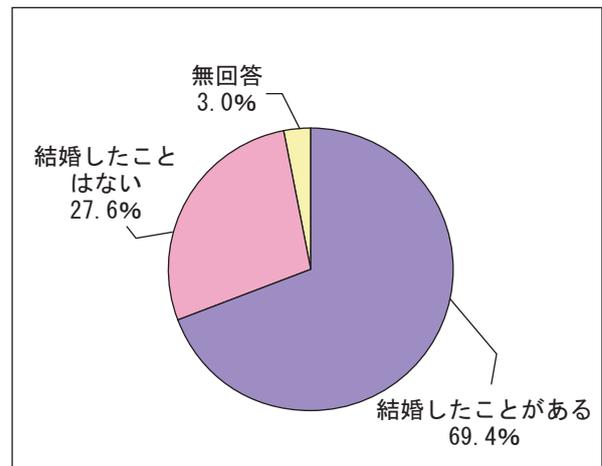
### イ 結婚歴の有無

結婚したことがあるかどうかについては、図3-14の通り、「結婚したことがある」が69.4%で、7割近くとなっている。他方、「結婚したことはない」は27.6%である。このように、港区のひとり暮らし高齢者の3割近くが未婚である。

### ウ 配偶者の最長職

ひとり暮らし高齢者が結婚している場合、本人の職業だけでは世帯の階層的位置を確定することはできない。特に「専業主婦・主夫」の場合は、配偶者の職業を知ることが大切となる。そこで、

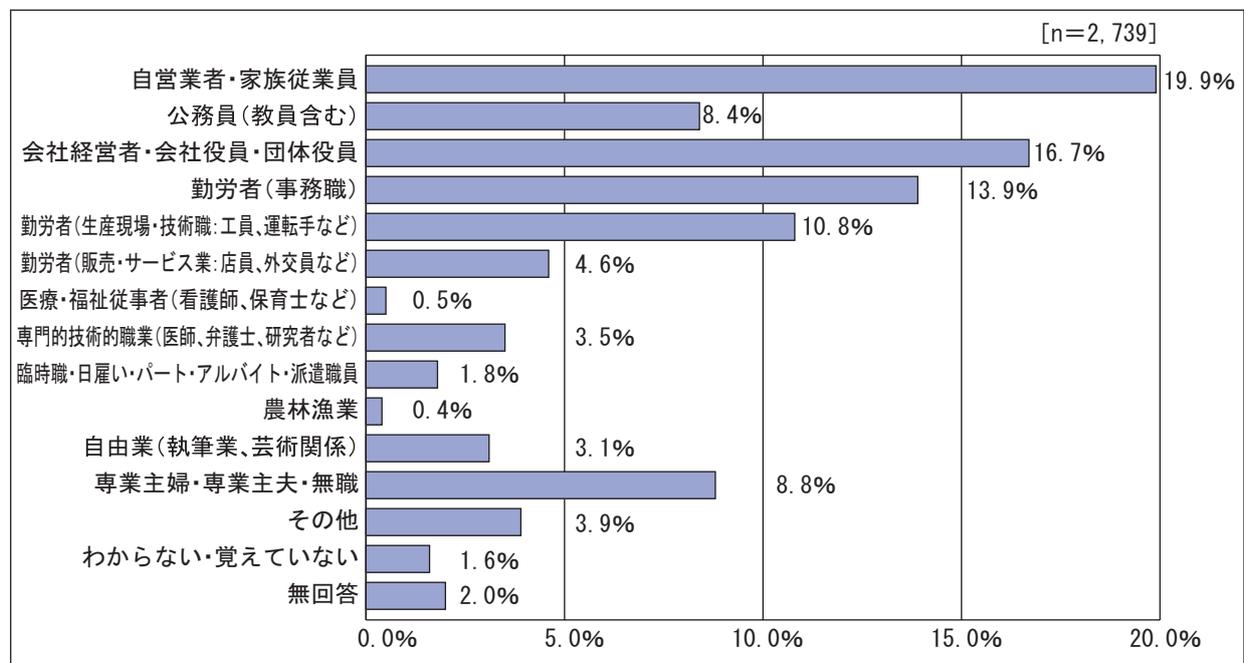
図3-14 結婚歴の有無



結婚したことがある人について、配偶者の最長職を見てみよう。

配偶者の最長職については（図3-15）、「自営業者・家族従業員」が19.9%と最も高く、次いで「会社経営者・会社役員・団体役員」が16.7%、「勤労者（事務職）」が13.9%、「勤労者（生産現場・技術職）」が10.8%となっている。

図3-15 配偶者の最長職



## エ 現在の仕事の有無

現在、仕事をしているか否かについては（図3-16）、「仕事をしていない」が72.9%と7割を超えており、他方、「仕事をしている」が22.7%と2割程度であった。

### （5）買い物について

#### ア 買い物の頻度

買い物の頻度については（図3-17）、「2～3日に1度くらい」が55.3%と最も高く、次いで、「1週間に1度くらい」が19.6%、「毎日」が17.9%となっている。

図3-16 現在の仕事の有無

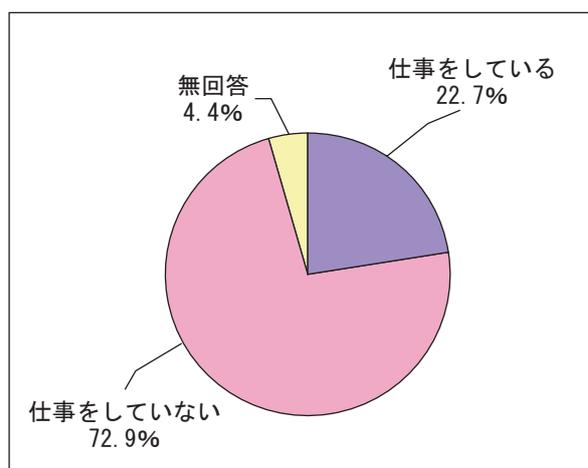
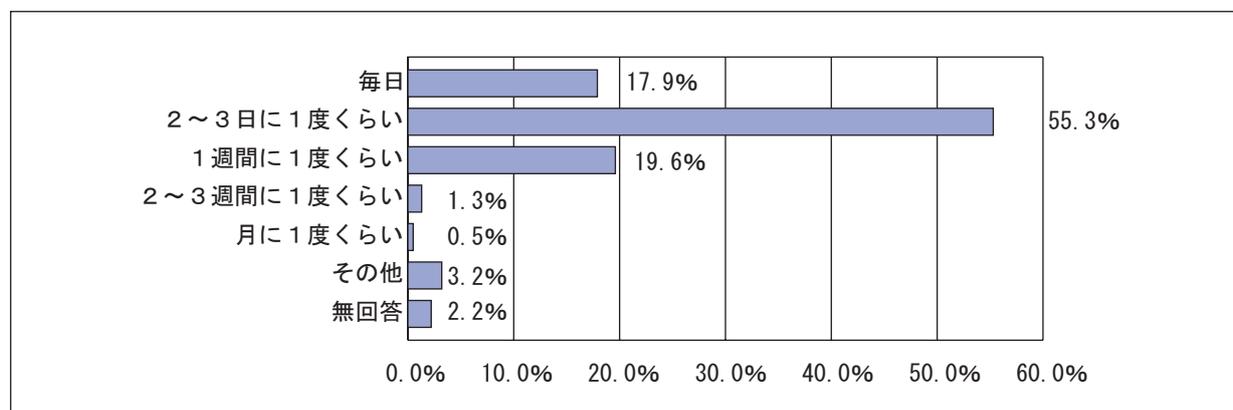


図3-17 買い物の頻度



#### イ 買い物の場所と手段

食品や日用品の買い物は主にどこでどのようにしているかについては（図3-18、複数回答）、「スーパーマーケットに買いに行く」が80.8%と最も高く、次いで、「コンビニに買いに行く」が38.8%、「デパートに買いに行く」が31.2%となっている。

その他、「生協等の宅配を利用する」が11.5%、「商店に配達を依頼する」が4.3%、「車で売りに来るのを利用する」が6.3%である。

#### ウ 買い物での困りごと

普段の買い物で困っていることについては（図3-19、複数回答）、「近所にお店がない」が20.1%と最も高く、次いで、「お米など重いものを運ぶのが大変」が18.9%、「ひとりで買い物に行くのが困難」が8.4%。「買い物を頼める人がいない」が4.8%となっている。

他方、全体の56.1%の人が、「とくに困っていることはない」と答えている。

図3-18 買い物の場所と手段（複数回答）

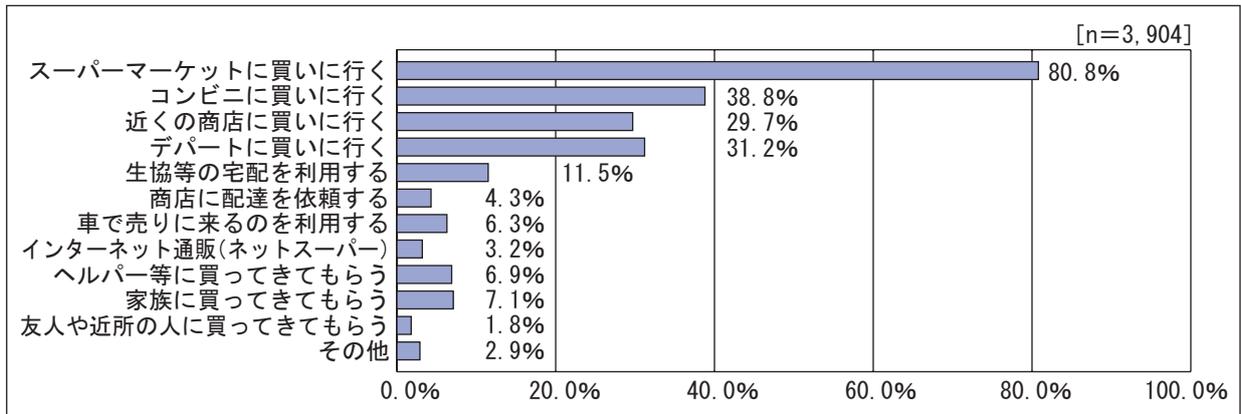
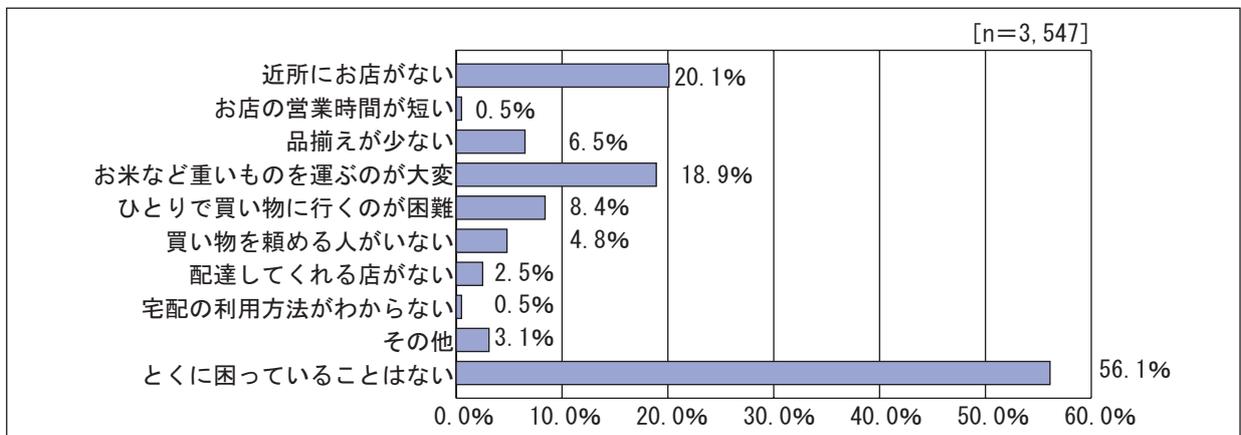


図3-19 買い物での困りごと（複数回答）



(6) 地域・生活での困りごと

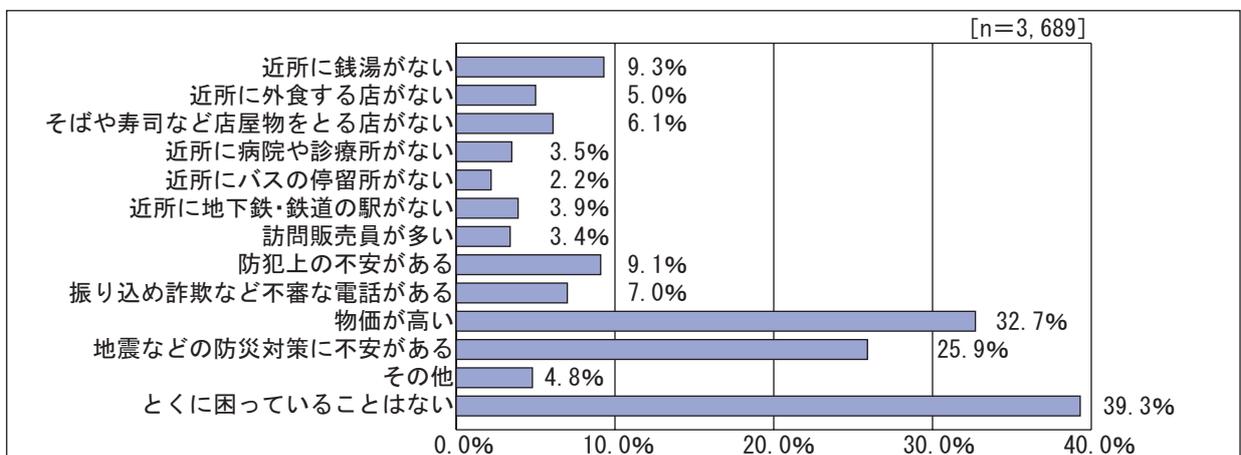
ア 地域での困りごと

現在住んでいる地域についての困りごとは（図3-20、複数回答）、「物価が高い」が32.7%と最も高く、次いで、「地震などの防災対策に不安があ

る」が25.9%となっている。その他、「近所に銭湯がない」が9.3%、「防犯上の不安がある」が9.1%となっている。

他方、全体の39.3%の人が「とくに困っていることはない」と答えている。

図3-20 地域での困りごと（複数回答）





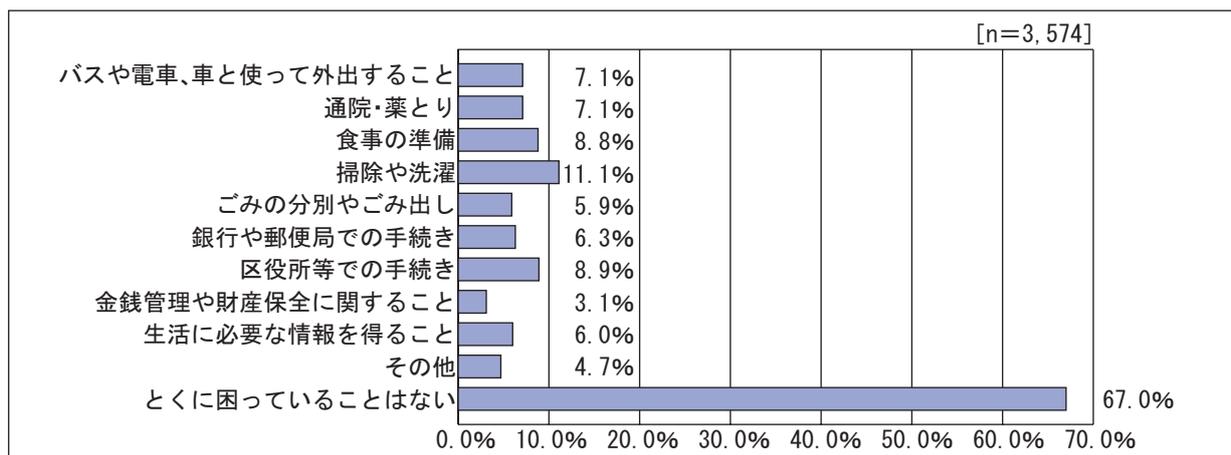
## イ 日常生活での困りごと

日常生活での困りごとについては（図3-21、複数回答）、各項目が全体として1割前後で並んでおり、特定の項目の割合が特に高いということはない。具体的には「掃除や洗濯」が11.1%と最も高く、次いで、「区役所等での手続き」が8.9%、

「食事の準備」が8.8%、「バスや電車、車を使って外出すること」と「通院・薬とり」がともに7.1%となっている。

他方、全体の、67.0%の人が「とくに困っていることはない」と答えている。

図3-21 日常生活での困りごと（複数回答）



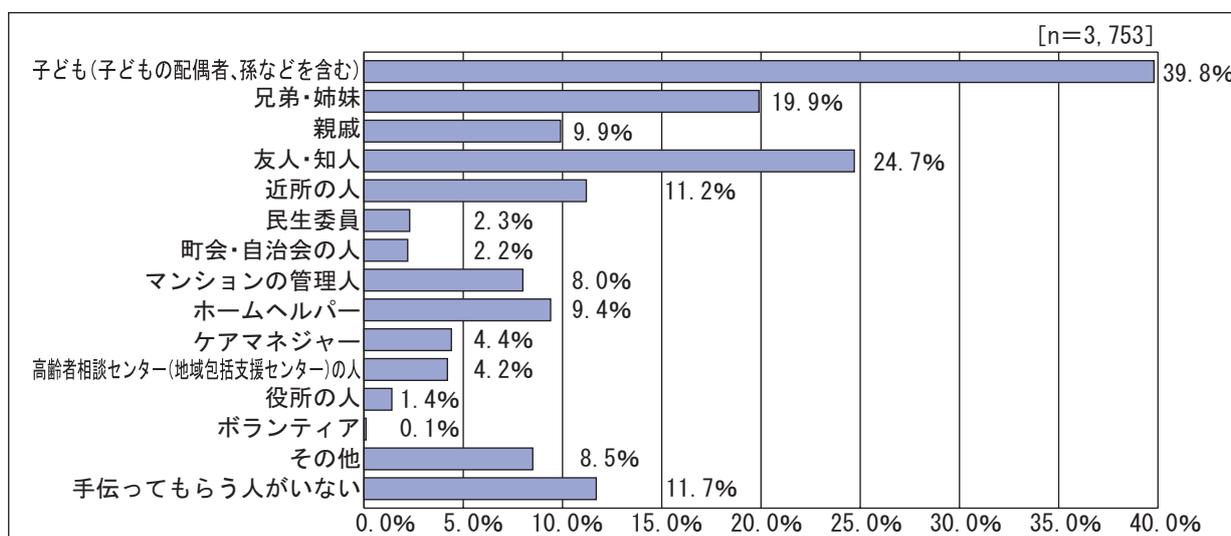
## ウ 困りごとを手伝ってもらう人

日常生活で困ったことがあった時に、誰に手伝ってもらうかについては（図3-22、複数回答）、「子ども（子どもの配偶者、孫など含む）」が39.8%と最も高く、次いで、「友人・知人」が24.7%、「兄弟・姉妹」が19.9%、「近所の人」が11.2%、「親戚」が9.9%となっている。

このように、困ったときに手伝ってもらう人は全体の4割が子ども、2割が兄弟姉妹、1割が親戚、友人知人が2割半、近所の人1割程度であった。ただし、これらは複数回答であるので重なりがあることに注意したい。

他方、「手伝ってもらう人がいない」人は全体の11.7%を占めている。

図3-22 困りごとを手伝ってもらう人（複数回答）



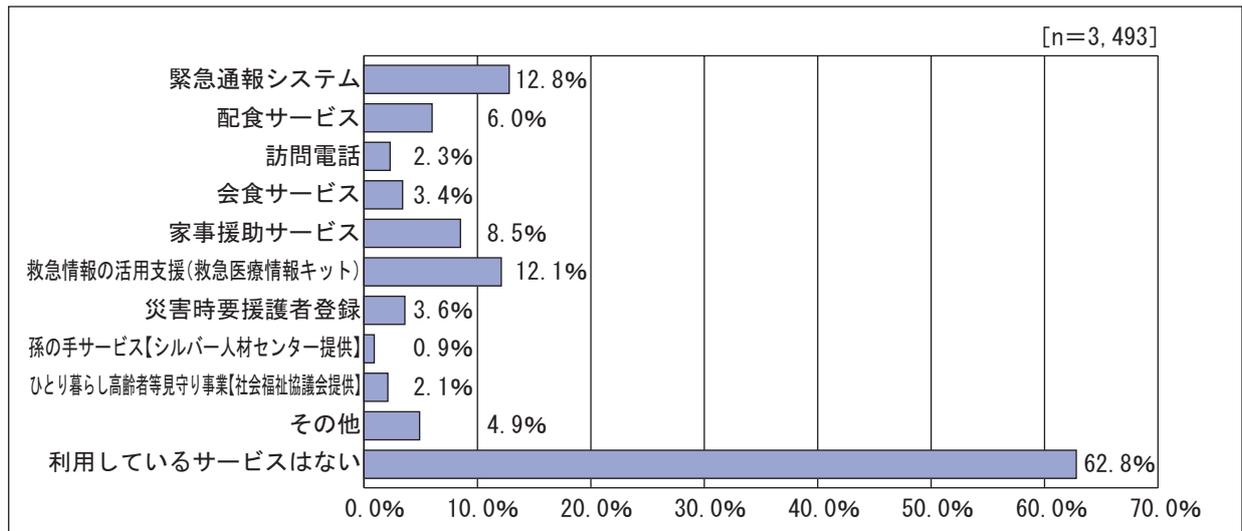
### (7) 港区の保健福祉サービスについて

利用している港区の保健福祉サービスの種類は(図3-23、複数回答)、「緊急通報システム」が12.8%と最も高く、次いで、「救急情報の活用支援(救急医療情報キット)」が12.1%、「家事援助サービス」が8.5%、「配食サービス」が6.0%と

なっている。なお、「訪問電話」と「ひとり暮らし高齢者等見守り事業」はともに2%程度であった。

他方、「利用しているサービスはない」が、全体の62.8%を占めている。

図3-23 利用している保健福祉サービス(複数回答)



### (8) 家族・親族関係について

#### ア 生存子の有無

現在、子どもがいるかどうかについて見たものが図3-24である。「生存子がいる」が52.1%で、「生存子はいない」は42.8%であった。子どもがいる人は5割強であった。

#### イ 生存子の人数

生存子の人数を見てみると(図3-25)、「2人」が46.7%と最も高く、次いで、「1人」が32.9%、「3人」が14.4%となっている。

図3-24 生存子の有無

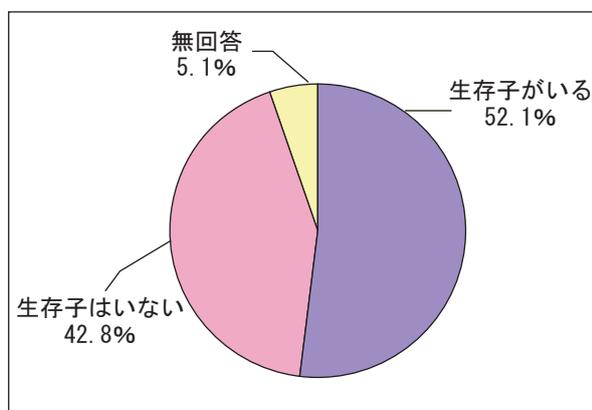
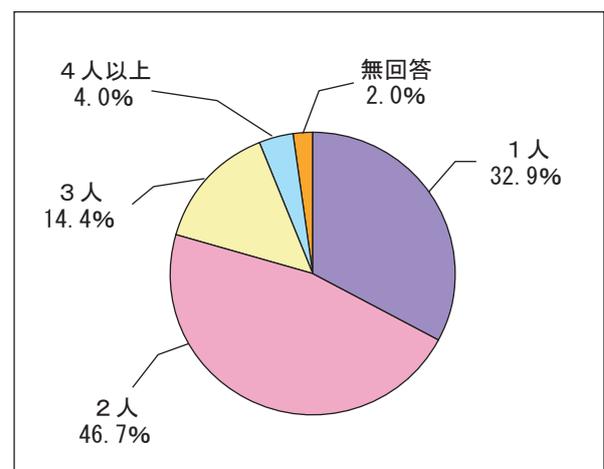


図3-25 生存子の人数



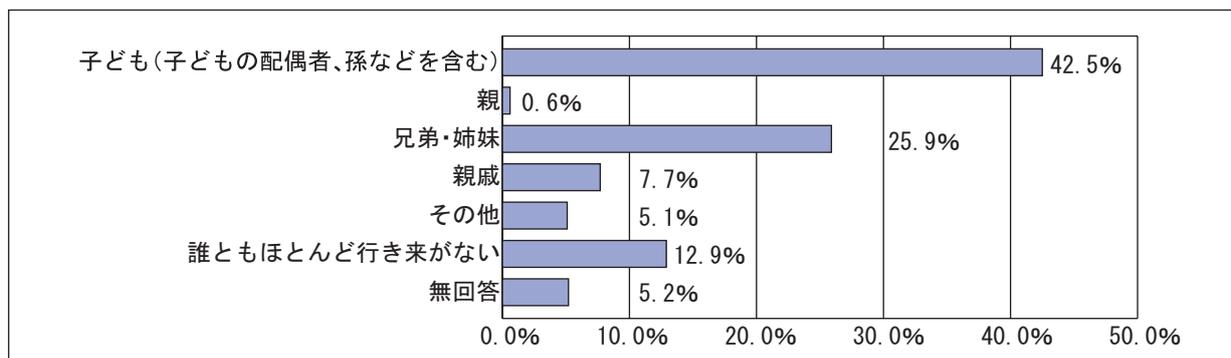
### ウ 行き来する親族

日頃最も行き来する親族については（図3-26）、「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」が42.5%と最も高く、次いで、「兄弟・姉妹」が25.9%、「親戚」が7.7%となっている。他方、「誰

ともほとんど行き来がない」人は12.9%となっている。

このように、子どもと兄弟・姉妹で68.4%と約7割を占めるが、行き来がない人が1割半いる。

図3-26 行き来する親族

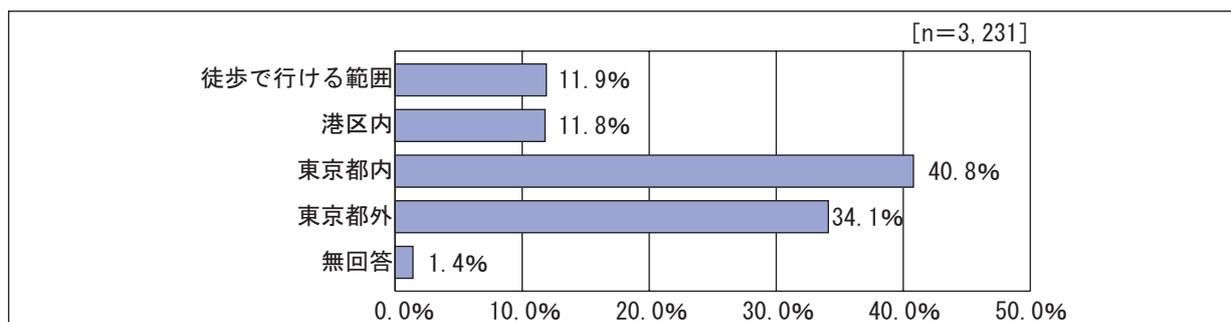


### エ 行き来する親族の居住地

次に、日頃最も行き来する親族がどこに住んでいるかを見てみよう（図3-27）。その居住地は、「東京都内」、「港区内」と「徒歩で行ける範囲」の3つを合わせると64.5%となる。つまり6割半は東京都内となる。

また、「港区内」と「徒歩で行ける範囲」を合わせると、全体の23.7%となり、親族が港区内に居住している人は全体の約2割半となる。そのうち「徒歩で行ける範囲」が全体の11.9%と、1割強を占めている。

図3-27 行き来する親族の居住地



### オ 行き来する親族との連絡頻度

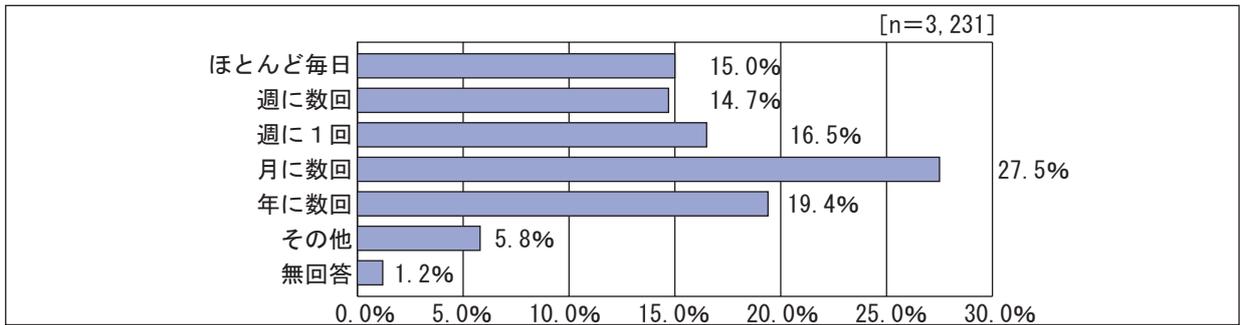
日頃最も行き来する親族との連絡頻度は（図3-28）、「月に数回」が27.5%と最も高く、次いで、「年に数回」が19.4%、「週に1回」が16.5%となっている。「ほとんど毎日」、「週に数回」と

「週に1回」の3つを合わせると46.2%となる。

このように親族との連絡頻度が週に1回以上と高い人が全体の4割半となる。

反対に連絡頻度が年数回の人が2割弱となっている。

図3-28 行き来する親族との連絡頻度

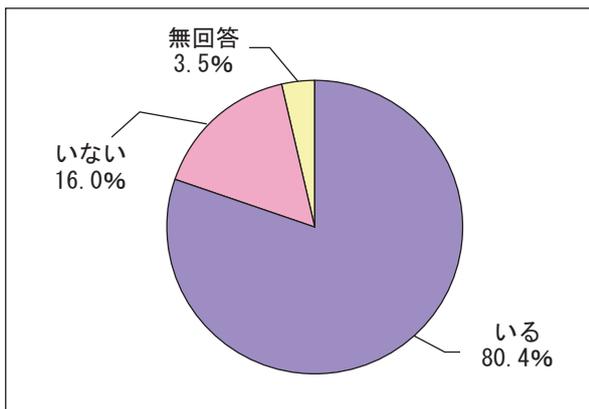


(9) 友人および近隣関係

ア 親しい友人・知人の有無

日頃親しくしている友人・知人がいるか否かについては(図3-29)、「いる」が80.4%と8割を超えており、「いない」は16.0%であった。

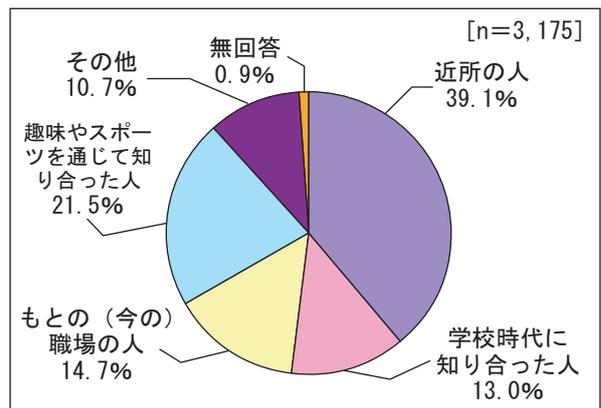
図3-29 親しい友人・知人の有無



イ 親しい友人・知人の種類

日頃親しくしている友人・知人は誰かということでは(図3-30)、「近所の人」が39.1%と最も高く、次いで、「趣味やスポーツを通じて知り合った人」が21.5%、「もとの(今の)職場の人」が14.7%となっている。

図3-30 親しい友人・知人の種類

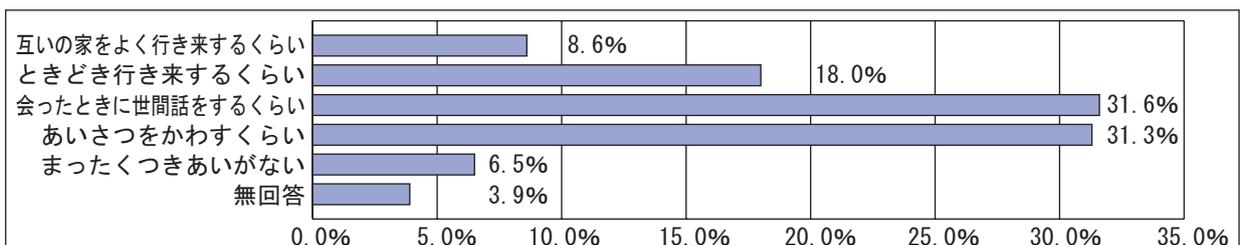


ウ 近所づきあいの程度

さて、近所づきあいの程度について図3-31によって見てみよう。「会ったときに世間話をするくらい」が31.6%と最も高く、次いで、「あいさつをかわすくらい」が31.3%、「ときどき行き来

するくらい」が18.0%となっている。「あいさつをかわすくらい」と「まったくつきあいが無い」を合わせた、<近所とのつきあいがあまりない人>が37.8%と、4割弱を占める。

図3-31 近所づきあいの程度



## (10) 緊急時の支援者と正月を過ごした相手

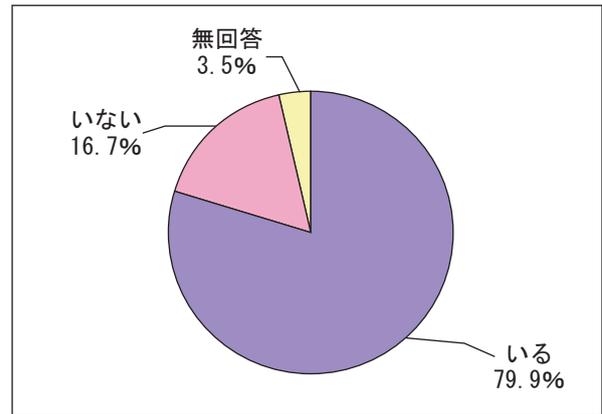
### ア 緊急時の支援者の有無

緊急時（病気などで手助けを必要とする時）にすぐに支援をしてくれる人があるかどうかについては（図3-32）、「いる」が79.9%、「いない」は16.7%である。このように緊急時にも支援者がいない人は1割半となっている。

### イ 緊急時の支援者の種類

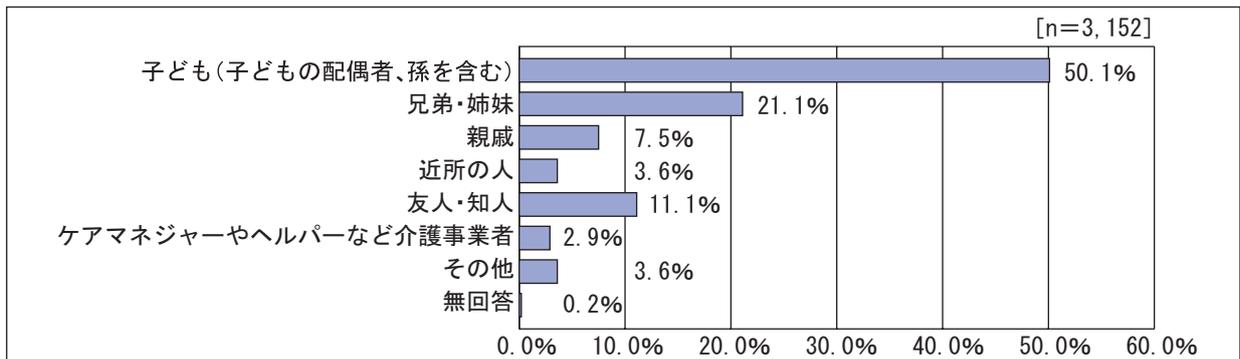
緊急時の主な支援者は誰かを図3-33によって見てみよう。「子ども（子どもの配偶者、孫を含む）」が50.1%と最も高く、次いで、「兄弟・姉妹」が21.1%、「友人・知人」が11.1%となっている。なお、「近所の人」は3.6%、「ケアマネジャーや

図3-32 緊急時の支援者の有無



ヘルパーなど介護事業者」は2.9%であった。

図3-33 緊急時の支援者の種類



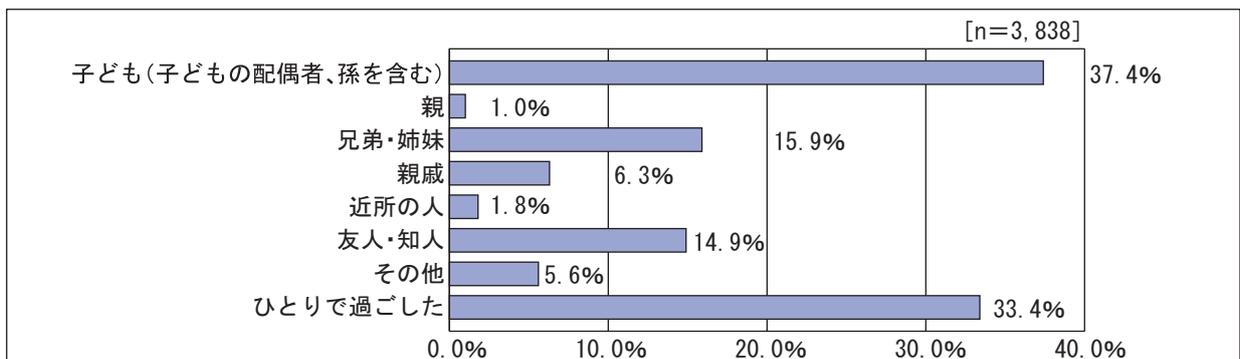
### ウ 正月三が日を過ごした相手

日本の場合、正月は親族とつながりが見える時期である。そこで「正月三が日」に限定して、そこでの人的つながりを見た。具体的には正月三が日を過ごした相手を尋ねた。その相手は（図3-34、

複数回答）、「子ども（子どもの配偶者、孫を含む）」が37.4%と最も高く、次いで、「兄弟・姉妹」が15.9%、「友人・知人」が14.9%となっている。

他方、「ひとりで過ごした」が、全体の33.4%を占めている。

図3-34 正月三が日を過ごした相手（複数回答）

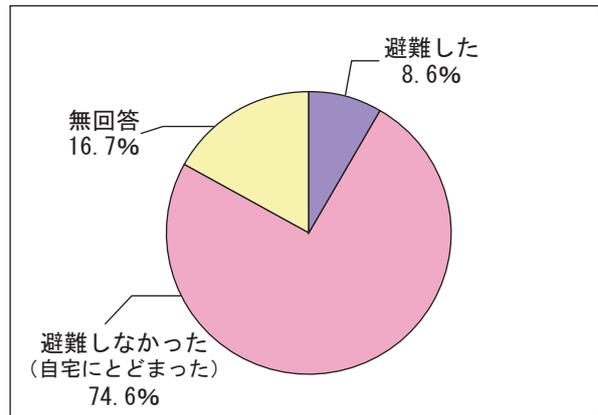


(11) 東日本大震災について

ア 東日本大震災時の避難の有無

2011年3月11日の東日本大震災時に避難したかどうかについては（図3-35）、「避難しなかった（自宅にとどまった）」が74.6%と7割を超え、「避難した」が8.6%であった。

図3-35 東日本大震災時の避難の有無



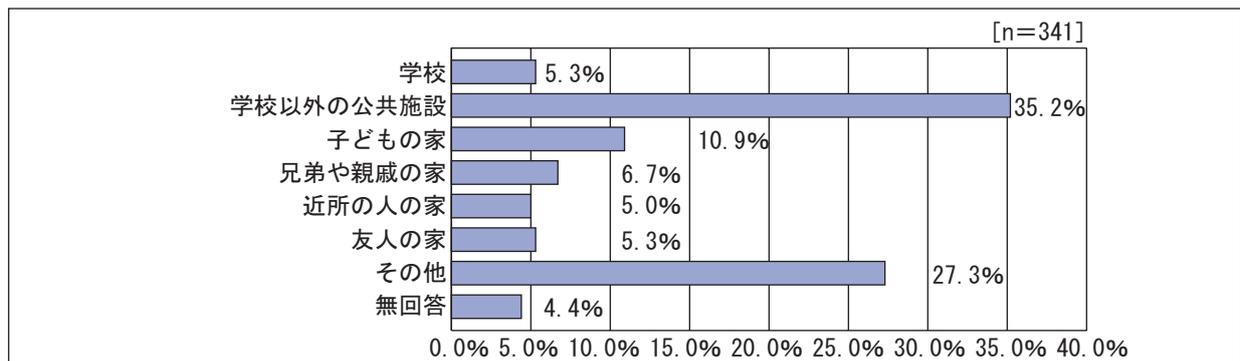
イ 東日本大震災時の避難先

上記の全体の8.6%を占める「避難した」人について、その避難先を見てみると（図3-36）、「学校以外の公共施設」が35.2%と最も高く、次いで、「子どもの家」が10.9%、「兄弟や親戚の家」が6.7%となっている。

園や広場など」が11.1%、「家の前や庭など」が10.2%であった。

なお、「その他」の内訳で最も高いのは、「公

図3-36 東日本大震災時の避難先



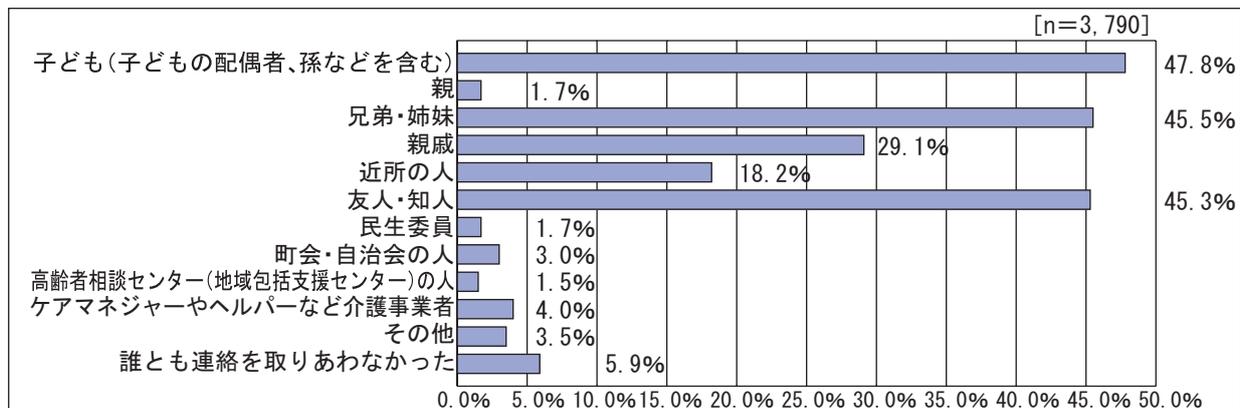
ウ 東日本大震災後の連絡相手

東日本大震災後、誰と連絡をとったかについては（図3-37、複数回答）、「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」が47.8%と最も高く、次いで、「兄弟・姉妹」が45.5%、「友人・知人」が45.3%

となっている。

他方、「誰も連絡を取りあわなかった」が全体の5.9%であった。

図3-37 東日本大震災後の連絡相手（複数回答）



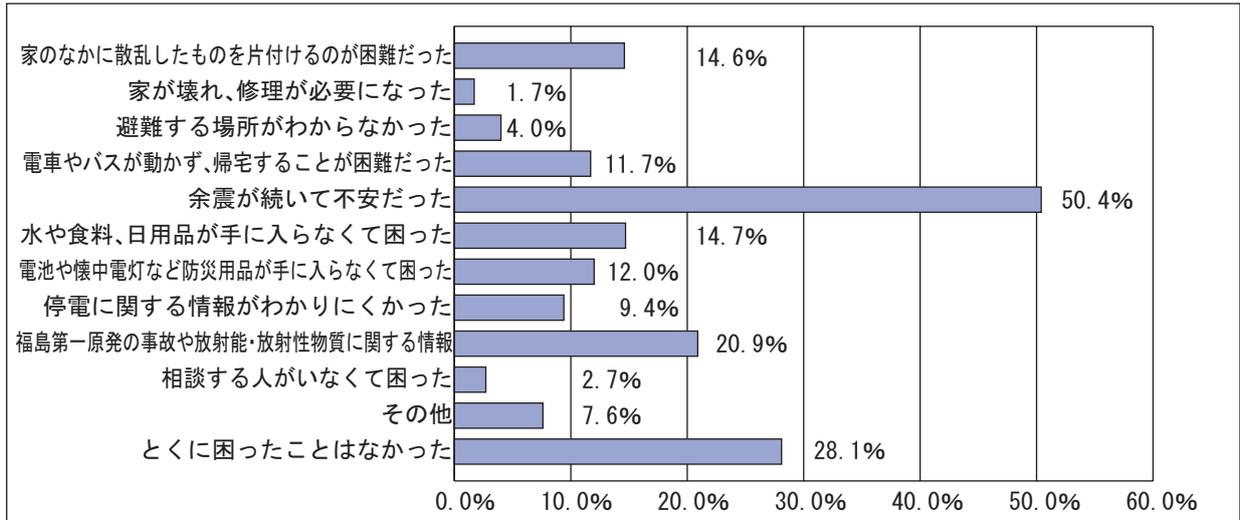
## エ 大震災時の困りごと

さらに、大震災時に困ったことについては（図3-38、複数回答）、「余震が続いて不安だった」が50.4%と最も高く、次いで、「福島第一原発の事故や放射能・放射性物質に関する情報がわかりにくかった」が20.9%、「水や食料、日用品が手に

入らなくて困った」が14.7%、「家のなかに散乱したものを片付けるのが困難だった」が14.6%となっている。

他方、「とくに困ったことはなかった」が、全体の28.1%を占めている。

図3-38 大震災時の困りごと（複数回答）



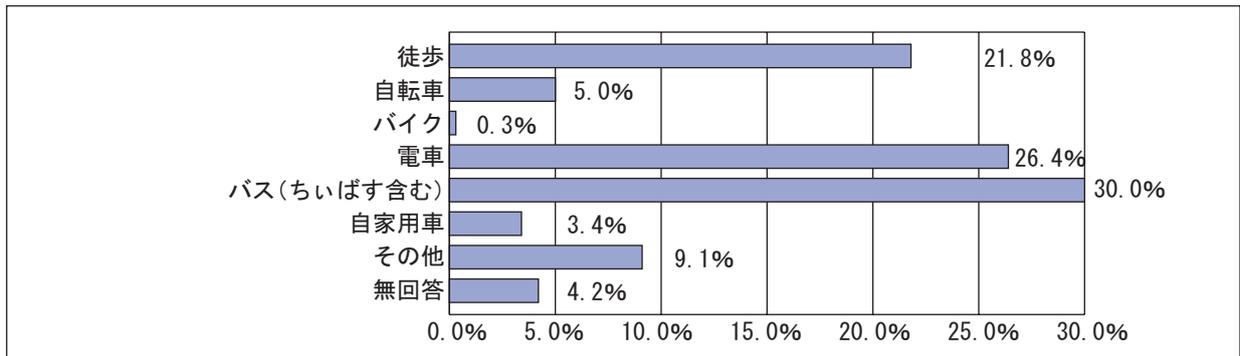
## (12) 外出状況について

### ア 主な外出手段

普段外出する際の主な外出手段はどのようなものか尋ねた。図3-39の通り、「バス（「ちいばす」

を含む）」が30.0%と最も高く、次いで、「電車」が26.4%、「徒歩」が21.8%となっている。「自転車」は5.0%であった。なお「ちいばす」とは、港区のコミュニティ・バスである。

図3-39 主な外出手段



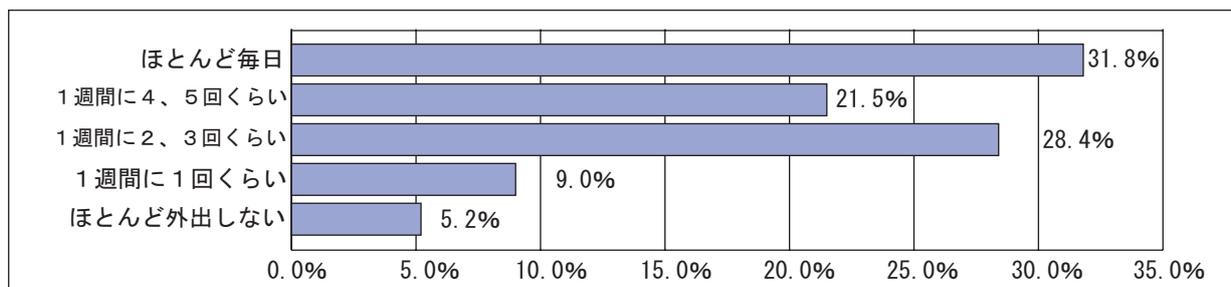
### イ 外出の頻度

外出の頻度について、図3-40によって見ると、「ほとんど毎日」が31.8%と最も高く、「1週間に4、5日くらい」が21.5%、「1週間に2、3日くらい」が28.4%となっている。他方、「ほとん

ど外出しない」人が5.2%いる。

外出頻度が「1週間に1回くらい」と「ほとんど外出しない」を合わせると14.2%と、全体の1割半となる。

図3-40 外出の頻度

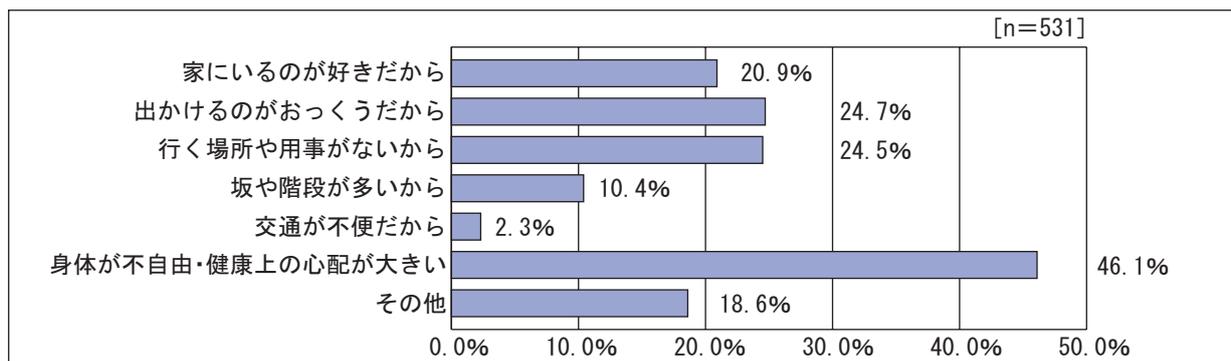


### ウ 外出が少ない理由

さて、外出頻度が「1週間に1回くらい」または「ほとんど外出しない」と答えた方に対し、外出が少ない理由について尋ねた（複数回答）。その結果、図3-41の通り、「身体が不自由・健康上の心配が大きい」が46.1%と最も高く、次いで、「出かけるのがおっくうだから」が24.7%、「行く場所や用事がないから」が24.5%となっている。

このように身体や健康上の理由で外出が少ない人が4割半を占めているが、「出かけるのがおっくう」とか「行く場所や用事がない」といった理由は、逆に言うならば「積極的な外出の機会を外からどのように用意するか」というという課題でもあり、そうした対象の人が2割半いるということに注目したい。

図3-41 外出が少ない理由（複数回答）



### エ 外出先での会話の程度

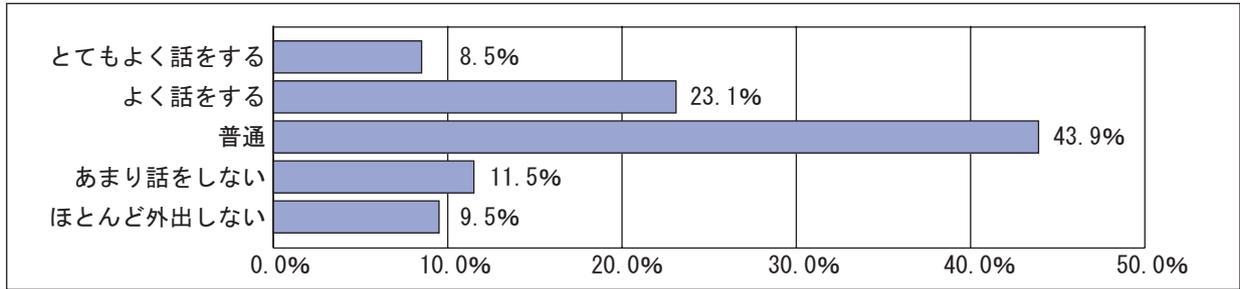
外出することは社会的接触の機会として大切であるが、外出しても誰とも会話がないうまま帰宅する高齢者の存在に我々は注目している。そのことから、今回の調査では外出先での会話の程度を尋ねた。

その結果は、図3-42のとおりで、外出先での会

話の程度について「普通」が43.9%と最も高い割合を占めている。「とてもよく話をする」と「よく話をする」を合わせると31.6%となり、他方、「あまり話をしない」と「ほとんど話をしない」を合わせて21.0%となっている。外出先での会話が少ないあるいはほとんどない人が2割いることに注目したい。



図3-42 外出先での会話の程度



## (13) 社会参加活動について

## ア 参加している団体・集まり

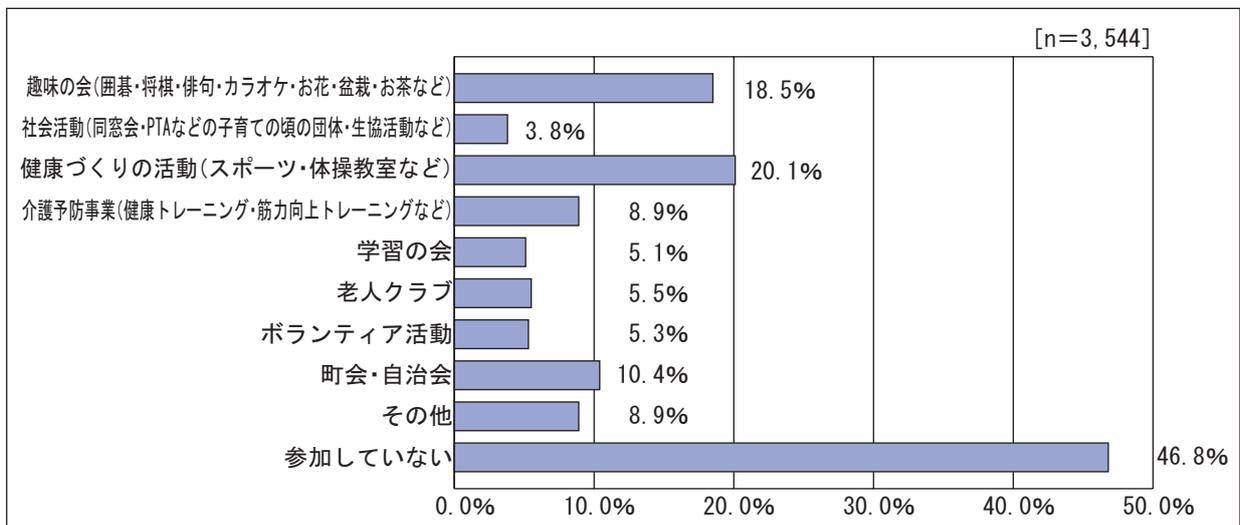
地域ではいろいろな活動がある。それらに参加しているか否か、参加している場合どのような活動に関わっているかは、その人の地域ネットワークの状況を大きく規定する。

地域で参加している団体や集まりは何かを図3-43によって見てみよう（複数回答）。まず、「健康づくりの活動（スポーツ・体操教室など）」が

20.1%と最も高く、次いで、「趣味の会（囲碁・将棋・俳句・カラオケ・お花・盆栽・お茶など）」が18.5%、「町会・自治会」が10.4%となっている。「介護予防事業」が8.9%、そして「学習の会」、「老人クラブ」、「ボランティア活動」がそれぞれ5%程度となっている。

他方、「参加していない」人は全体の半数弱の46.8%を占めている。

図3-43 参加している団体・集まり（複数回答）



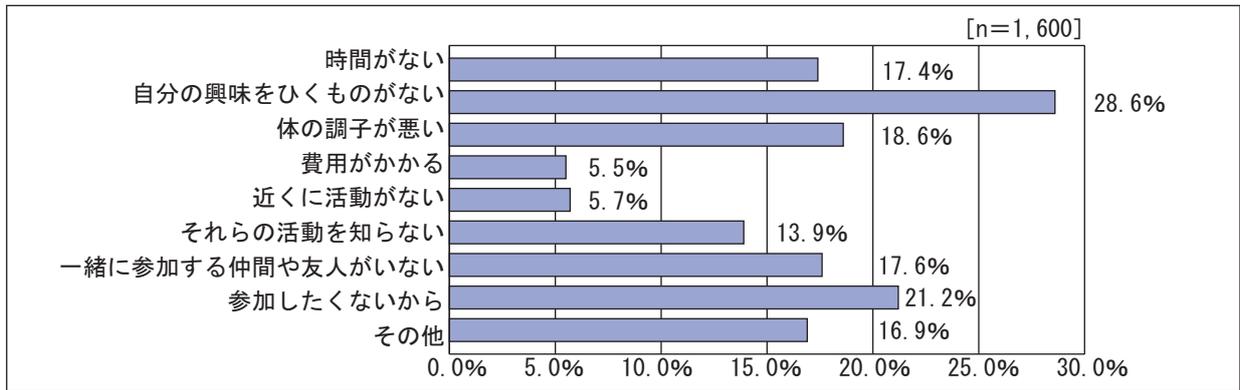
## イ 団体・集まりの活動に参加しない理由

全体の半数弱を占める「団体・集まりの活動に参加していない人」に、参加しない理由を尋ねた。その結果（図3-44、複数回答）、「自分の興味をひくものがない」が28.6%と最も高く、次いで、

「参加したくないから」が21.2%、「体の調子が悪い」が18.6%となっている。

ほか、「一緒に参加する仲間や友人がいない」が17.6%、「時間がない」が17.4%を占めた。

図3-44 団体・集まりの活動に参加しない理由（複数回答）

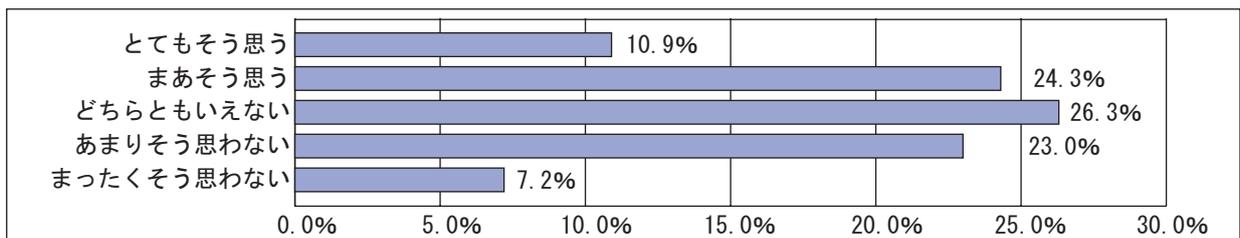


ウ 団体・集まりの活動への今後の参加希望

団体・集まりの活動への今後の参加希望については（図3-45）、「どちらともいえない」が26.3%と最も高い。これを中心に、一方に「そう思う」と

「まあそう思う」を合わせて35.2%、他方に「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を合わせて30.2%となる。全体として参加希望の方が5ポイント高い。

図3-45 団体・集まりの活動への今後の参加希望

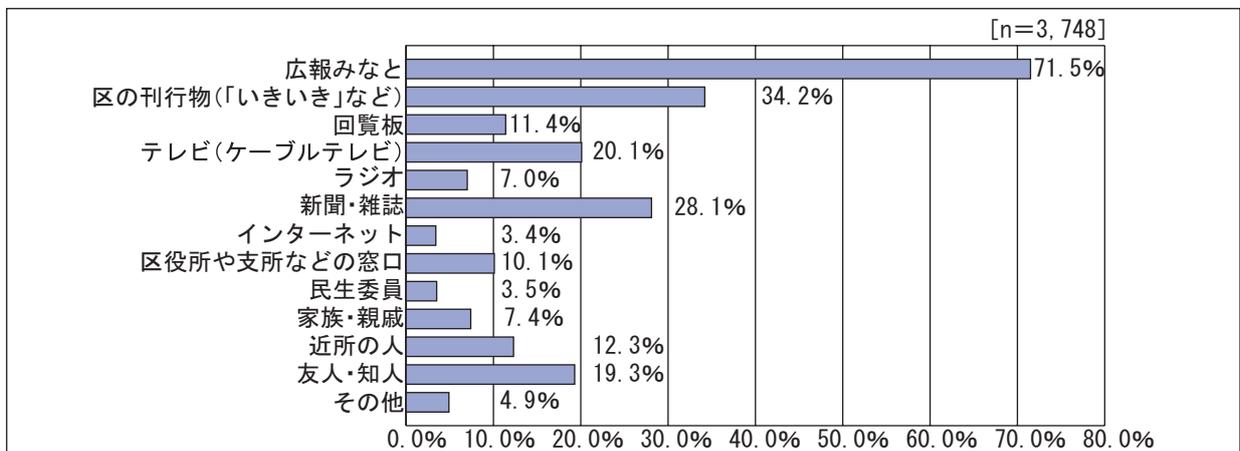


(14) 行政サービスの情報源

行政サービスの情報源については（図3-46、複数回答）、「広報みなと」が71.5%と最も高く、次いで、「区の刊行物」が34.2%、「新聞・雑誌」が

28.1%、「テレビ」が20.1%となっている。「回覧板」は11.4%と、1割程度であった。口コミとも言える「友人・知人」は19.3%。「近所の人」は12.3%である。

図3-46 行政サービスの情報源（複数回答）



### (15) 生活意識について

さて、次に掲げる生活に関わる10の設問について次の5つの選択肢を置き、それぞれ1つを選んでもらった。

1. 「とてもそう思う」
2. 「まあそう思う」
3. 「どちらともいえない」

4. 「あまりそう思わない」

5. 「まったくそう思わない」

それぞれの設問の結果を見る前に、各設問の答えの1～5の数値について中央値と最頻値を算出し、一覧表として掲載しておこう（表3-5）。それぞれの項目の中心傾向を見たいからである。

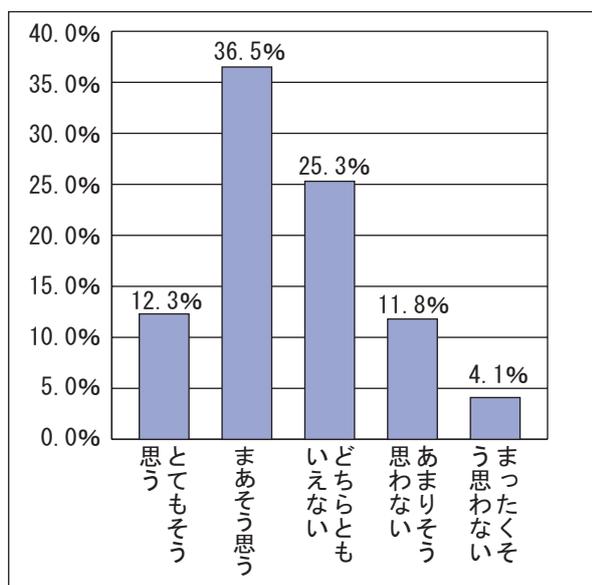
表3-5 生活意識に関する設問の中央値と最頻値

	今のくらしには張り合いがある	今のくらしにはストレスが多い	生活は充実している	生活して不安や心配がある	趣味をしている時間は楽しい	友人との関係に満足している	近所づきあいに満足している	自分には頼りがないと思う	周囲から取り残されたように感じる	将来は生活が安心できる
度数	3,555	3,444	3,524	3,511	3,239	3,454	3,420	3,444	3,437	3,556
欠損値	392	503	423	436	708	493	527	503	510	391
中央値	2.00	4.00	2.00	3.00	2.00	2.00	3.00	3.00	4.00	3.00
最頻値	2	4	2	4	2	2	3	3	4	3

#### ア くらしの張り合いの程度

まず、今のくらしには張り合いがあるかどうかについては（図3-47）、「まあそう思う」が36.5%と最も高く、次いで、「どちらともいえない」が25.3%、「とてもそう思う」が12.3%となっている。回答者は張り合いがある方に寄っている。

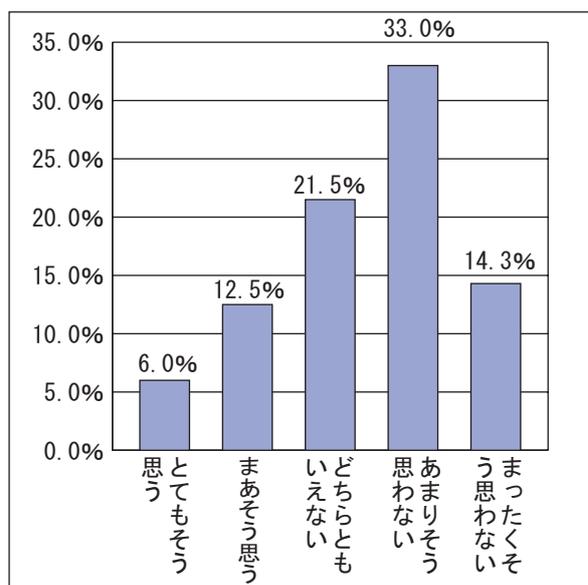
図3-47 くらしの張り合いの程度



#### イ くらしのストレスの程度

続いて、今のくらしにはストレスが多いかどうかについては（図3-48）、「あまりそう思わない」が33.0%と最も高く、次いで、「どちらともいえない」21.5%、「まったくそう思わない」14.3%となっている。回答は今のくらしにストレスが多いとは思わない方に寄っている。

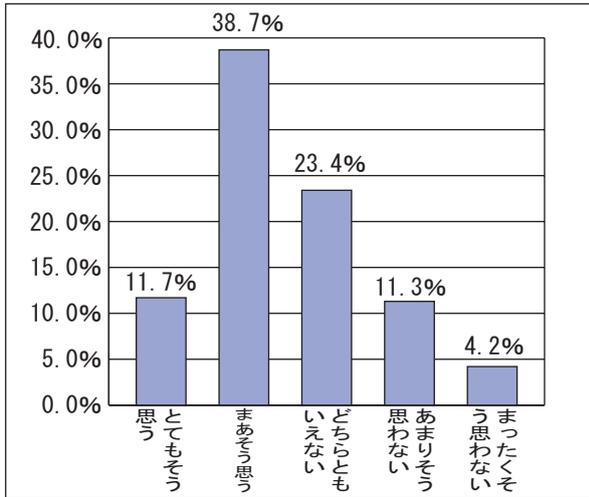
図3-48 くらしのストレスの程度



### ウ 生活の充実の程度

生活は充実しているかについては（図3-49）、「まあそう思う」が38.7%と最も高く、次いで、「どちらともいえない」23.4%、「とてもそう思う」11.7%となっている。回答は生活が充実していると思う方に寄っている。

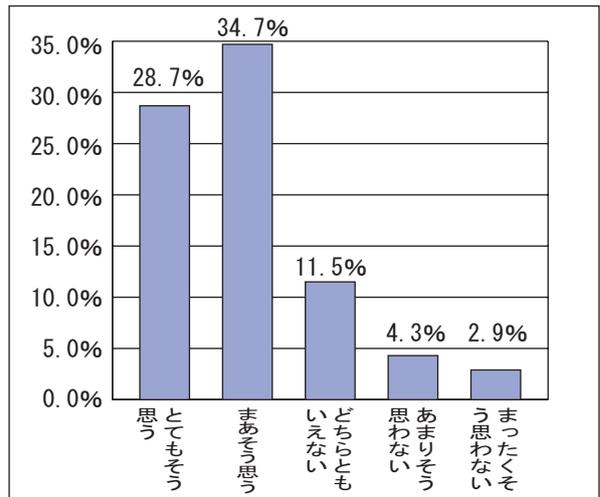
図3-49 生活の充実の程度



### オ 趣味の時間の満足度

趣味をしている時間は楽しいかどうかについては（図3-51）、「まあそう思う」が34.7%と最も高く、次いで、「とてもそう思う」28.7%、「どちらともいえない」11.5%となっている。回答は趣味の時間が楽しいと思う方に寄っている。

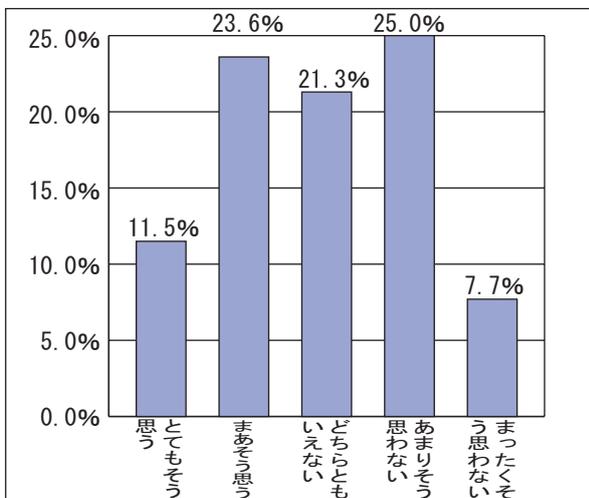
図3-51 趣味の時間の満足度



### エ 生活における不安・心配の程度

生活していて不安や心配があるかについては（図3-50）、「あまりそう思わない」が25.0%と最も高く、次いで、「まあそう思う」23.6%、「どちらともいえない」21.3%となっている。回答は不安や心配がある方に寄っている。

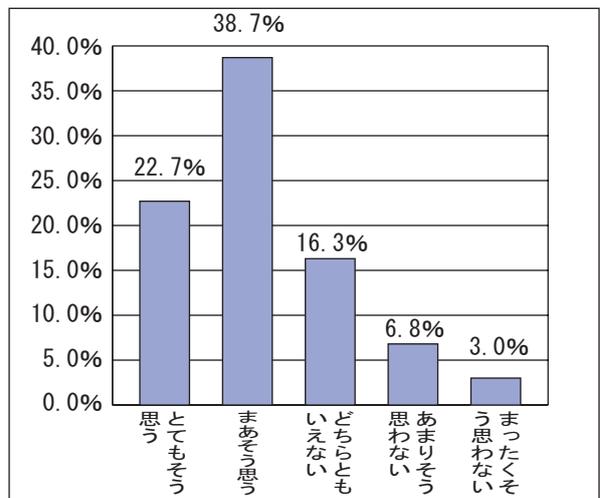
図3-50 生活における不安・心配の程度



### カ 友人関係の満足度

友人との関係に満足しているかについては（図3-52）、「まあそう思う」が38.7%と最も高く、次いで、「とてもそう思う」22.7%、「どちらともいえない」16.3%となっている。回答は友人との関係に満足していると思う方に寄っている。

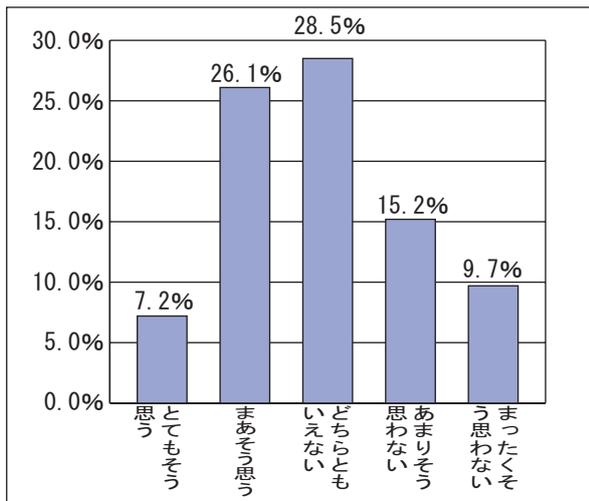
図3-52 友人関係の満足度



### キ 近所付き合いの満足度

近所付き合いに満足しているかについては（図3-53）、「どちらともいえない」が28.5%と最も高く、次いで、「まあそう思う」26.1%、「あまりそう思わない」15.2%となっている。近所付き合いに満足しているかどうかについて、回答の中心は「どちらともいえない」にある。

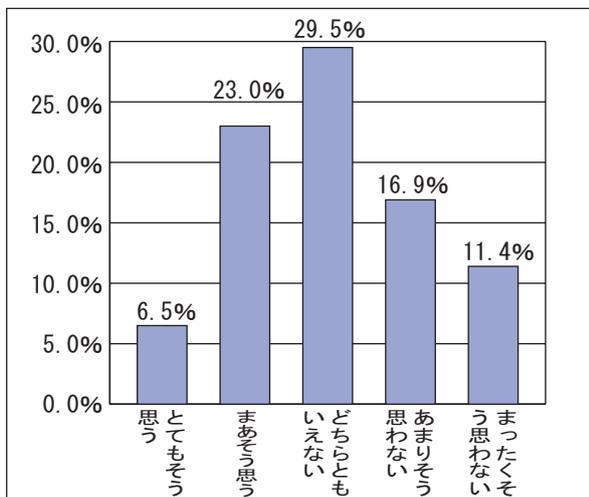
図3-53 近所づきあいの満足度



### ク 頼りにされていると感じる度合い

自分は頼りにされていると思うかについては（図3-54）、「どちらともいえない」が29.5%と最も高く、次いで、「まあそう思う」23.0%、「あまりそう思わない」16.9%となっている。これも回答の中心は「どちらともいえない」にある。

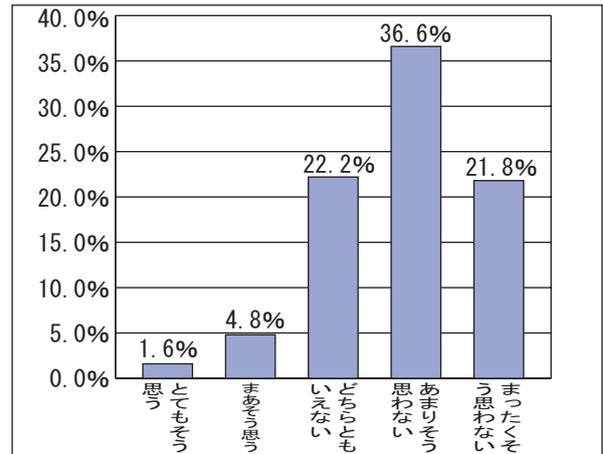
図3-54 頼りにされていると感じる度合い



### ケ 取り残されていると感じる度合い

周囲から取り残されたように感じるかについては（図3-55）、「あまりそう思わない」が36.6%と最も高く、次いで、「どちらともいえない」22.2%、「まったくそう思わない」21.8%となっている。回答は「取り残されている感じ」とは思わない方に寄っている。

図3-55 取り残されていると感じる度合い

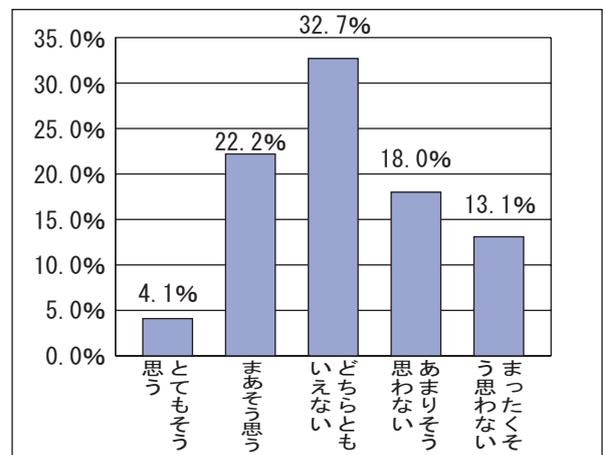


### コ 将来の生活への安心感

将来の生活は安心できるかについては（図3-56）、「どちらともいえない」が、32.7%と最も高く、次いで、「まあそう思う」22.2%、「あまりそう思わない」18.0%となっている。回答の中心は「どちらともいえない」にある。

本報告では、後に以上の10項目を使って因子分析を実施したい。

図3-56 将来の生活への安心感



## (16) 経済状況

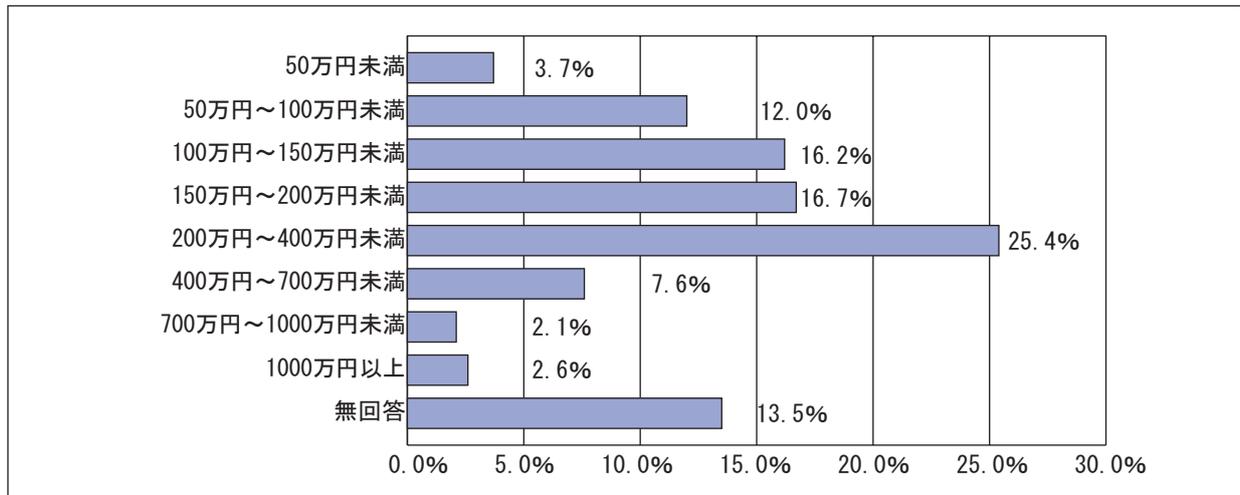
### ア 年間収入

次に、1年間の収入について見てみよう（図3-57）。「200万円～400万円未満」が、25.4%と最も高く、次いで、「150万円～200万円未満」16.7%、「100万円～150万円未満」16.2%となっ

ている。

150万円未満の合計は31.9%と、全体の3割を占める。年間200万円未満の合計をとると48.6%となり、全体の半数近くとなる。逆に400万円以上の方は12.3%となっている。その中で1000万円以上は全体の2.6%である。

図3-57 年間収入



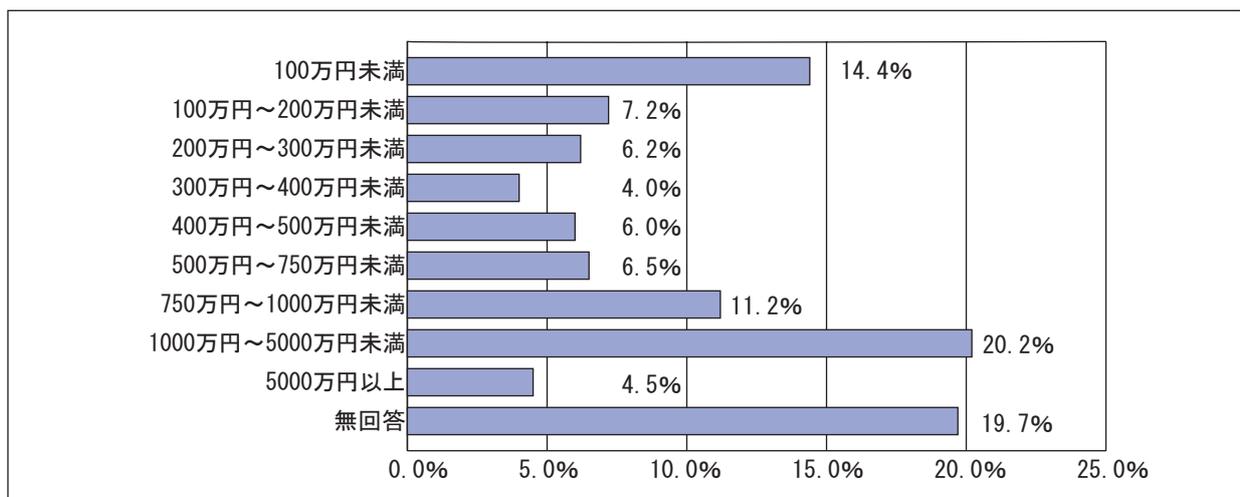
### イ 預貯金額

預貯金（有価証券、株券は除く）については（図3-58）、「1000万円～5000万円未満」が20.2%と最も高く、次いで、「100万円未満」14.4%、

「750万円～1000万円未満」11.2%となっている。

図に示されているように、預貯金は高額と低額の2極に分かれている。

図3-58 預貯金額

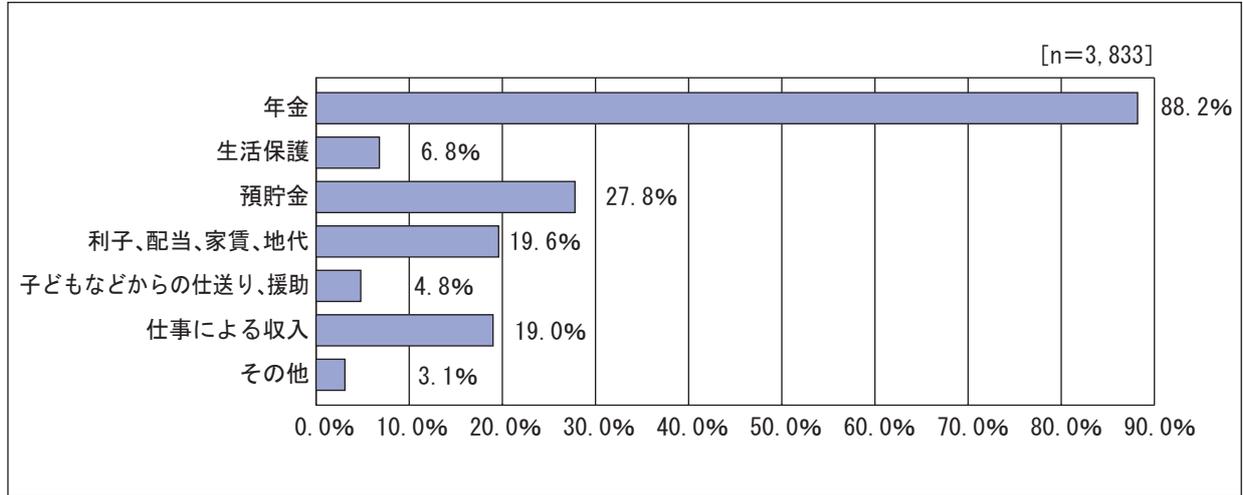


### ウ 収入の種類

収入の種類については（図3-59、複数回答）、  
「年金」が88.2%と最も高く、次いで「預貯金」

が27.8%、「利子、配当、家賃、地代」が19.6%。  
「仕事による収入」が19.0%となっている。

図3-59 収入の種類（複数回答）

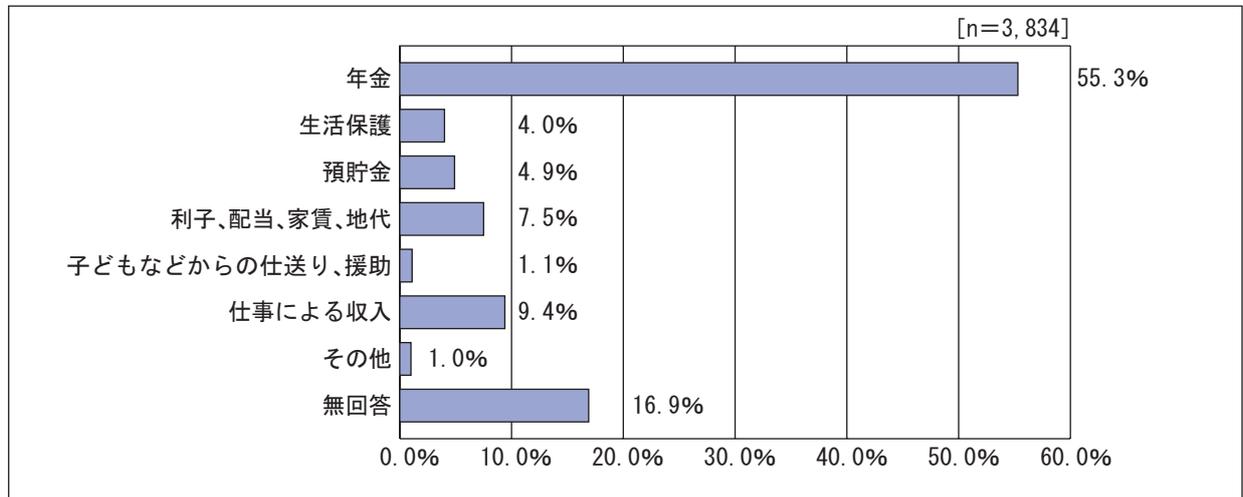


### エ 主な収入

主な収入は（図3-60）、「年金」が55.3%と最も

高く、次いで、「仕事による収入」が9.4%、「利子、  
配当、家賃、地代」が7.5%となっている。

図3-60 主な収入



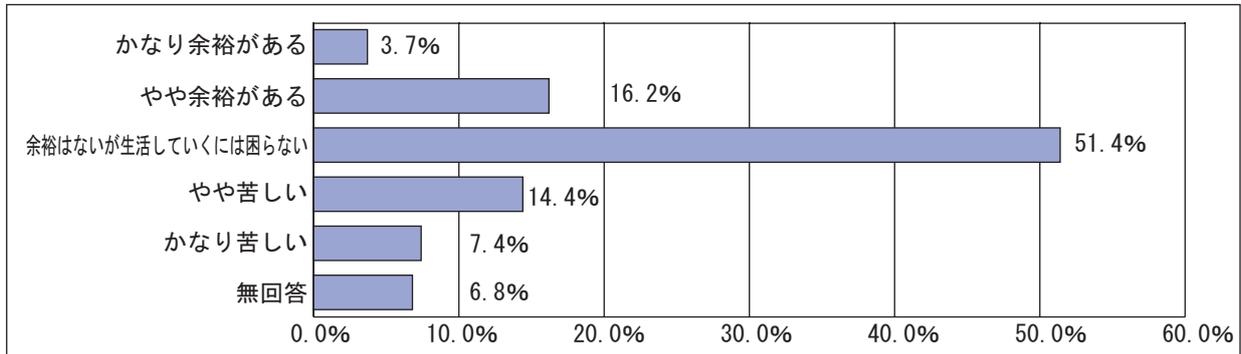
### オ 現在の経済状況の意識

現在の経済状況の意識を尋ねた（図3-61）。その結果、「余裕はないが生活していくには困らない」が51.4%と最も高く、次いで、「やや余裕がある」が16.2%、「やや苦しい」が14.4%となっ

ている。

「かなり余裕がある」と「やや余裕がある」を合わせると19.9%と、約2割となる。他方、「かなり苦しい」と「やや苦しい」を合わせると21.8%と、これも約2割となっている。

図3-61 現在の経済状況の意識



## 2 クロス集計

ここでは、1次調査から得られたデータをもとに、クロス集計等により若干の分析を行う。

### (1) 基本的情報—性別・年齢別の集計

まずは性別および年齢階層別に、住宅や健康状態、経済状況など区内のひとり暮らし高齢者の特徴を見てみたい。

### ア 年齢構成

表3-6は、男性・女性それぞれの年齢階層の構成を見たものである。男性は女性に比べて若い世代が多く、「65歳以上70歳未満」と「70歳以上75歳未満」を合わせた「前期高齢者」と「後期高齢者」が半々であった。一方、女性は年齢の高い人が多く、「前期高齢者」が34.3%、「後期高齢者」が65.7%であった。

表3-6 年齢階層×性別

年齢階層	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
65歳以上70歳未満	184	24.6%	405	13.1%	589	15.4%
70歳以上75歳未満	190	25.4%	655	21.2%	845	22.0%
75歳以上80歳未満	174	23.3%	837	27.1%	1,011	26.4%
80歳以上85歳未満	114	15.2%	679	22.0%	793	20.7%
85歳以上90歳未満	56	7.5%	385	12.5%	441	11.5%
90歳以上	30	4.0%	125	4.1%	155	4.0%
合計	748	100.0%	3,086	100.0%	3,834	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=86.113 自由度5 p=0.000\* \* p<0.05

### イ 居住年数

港区内への居住年数は、男性は平均33.6年、女性は平均38.9年であり、女性の方がやや長いこと

が分かる(表3-7)。なお、ひとりで暮らしている期間については男女差は見られなかった。

表3-7 居住年数の平均

	男性			女性			合計		
	平均値	中央値	最頻値	平均値	中央値	最頻値	平均値	中央値	最頻値
居住年数	33.6	30	40	38.9	40	50	37.9	40	40
独居年数	19.5	15	10	19.5	15	10	19.5	15	10



## ウ 住宅について

住宅の種類は、本人の経済状況や生活基盤の安定とかかわることから、特にひとり暮らし高齢者の生活をとらえる際には注目すべき点のひとつである。それを男女別に見ると（表3-8）、男性は「持ち家（一戸建て）」と「持ち家（分譲マンション）」を合わせた持ち家率が40.6%で、女性の持ち家率56.8%に比べて低かった。「都営・区営住宅に」に住む人の割合も、女性は21.5%であったのに対し、男性は18.6%と低かった。

一方で、「民間の賃貸住宅」に住む人の割合は、女性が12.9%であったのに対し、男性は27.9%と2倍以上であった。全体に女性の方が住宅事情が安定している傾向にあることが分かる。

表3-8 住宅の種類×性別

住宅の種類	男性		女性	
	実数	%	実数	%
持ち家（一戸建て）	102	13.5%	516	16.7%
持ち家（分譲マンション）	204	27.1%	1,240	40.1%
民間の賃貸住宅	210	27.9%	399	12.9%
都営・区営住宅	140	18.6%	664	21.5%
都市再生機構（UR）等の公的賃貸住宅	48	6.4%	121	3.9%
社宅・公務員住宅・管理人住宅	14	1.9%	19	0.6%
高齢者用住宅・シルバーピア	15	2.0%	53	1.7%
その他	20	2.7%	79	2.6%
合計	753	100.0%	3,091	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=138.802 自由度7 p=0.000\* \* p<0.05

住宅に関する困りごとを男女別に見たものが表3-9である。これによれば、男女とも「老朽化している」が最も高く、19.5%を占めたほか、男性では「階段の昇り降りが大変」が11.8%、「居室が狭い」が11.5%挙げられた。女性は、「階段の昇り降りが大変」が14.1%、「浴室・浴槽が使いにくい」が10.9%で男性よりも高かった。

表3-9 住宅の困りごと（複数回答）×性別

住宅の困りごと	男性		女性	
	実数	%	実数	%
階段の昇り降りが大変	86	11.8%	420	14.1%
エレベーターが設置されていない	51	7.0%	192	6.5%
浴室・浴槽が使いにくい	62	8.5%	324	10.9%
お風呂がない	58	7.9%	86	2.9%
トイレが使いにくい	38	5.2%	120	4.0%
居室が狭い	84	11.5%	263	8.8%
居室が広すぎる	10	1.4%	37	1.2%
室内に段差がある	23	3.2%	172	5.8%
冷房がない	51	7.0%	83	2.8%
老朽化している	142	19.5%	580	19.5%
その他	52	7.1%	235	7.9%
とくに困っていることはない	378	51.8%	1,556	52.3%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=91.878 自由度12 p=0.000\* \* p<0.05

## エ 健康状態・介助の状況について

健康状態について、男女別に集計したものが表3-10である。この表からは、健康状態については男女による違いが見られないことが分かる。

表3-10 健康状態×性別

健康状態	男性		女性	
	実数	%	実数	%
良い	101	13.4%	425	13.7%
まあ良い	151	20.0%	564	18.2%
普通	296	39.2%	1,281	41.4%
あまり良くない	146	19.3%	647	20.9%
良くない	61	8.1%	177	5.7%
合計	755	100.0%	3,094	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=7.987 自由度4 p=0.092

年齢階層別に見ると、どの世代も「普通」が最も多く、4割程度を占めているが、80歳以上になると3割半程度になる（表3-11）。「良い」と「まあ良い」を合わせて、健康状態が良いと回答している人は、「65歳以上70歳未満」では41.5%、「70歳以上75歳未満」では37.3%、「75歳以上80歳未満」では32.5%、「80歳以上85歳未満」では25.0%、「85歳以上90歳未満」では25.3%、「90歳以上」では20.4%で、年齢が上がるにつれ割合が

低くなっていることが分かる。反対に、「あまり良くない」と「良くない」を合わせて、健康状態が良くないと回答している人の割合は、「65歳以上70歳未満」では16.1%、「70歳以上75歳未満」で19.9%、「75歳以上80歳未満」では26.0%、「80

歳以上85歳未満」では34.4%、「85歳以上90歳未満」では38.6%、「90歳以上」では42.1%で、年齢が上がるにつれ割合が高くなっていることが分かる。

表3-11 健康状態×年齢階層

健康状態	65歳以上 70歳未満		70歳以上 75歳未満		75歳以上 80歳未満		80歳以上 85歳未満		85歳以上 90歳未満		90歳以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
良い	125	21.1%	146	17.1%	129	12.7%	79	9.9%	34	7.7%	14	9.2%
まあ良い	121	20.4%	173	20.2%	201	19.8%	120	15.1%	78	17.6%	17	11.2%
普通	251	42.4%	366	42.8%	422	41.5%	322	40.6%	160	36.1%	57	37.5%
あまり良くない	71	12.0%	135	15.8%	204	20.1%	212	26.7%	129	29.1%	46	30.3%
良くない	24	4.1%	35	4.1%	60	5.9%	61	7.7%	42	9.5%	18	11.8%
合計	592	100.0%	855	100.0%	1,016	100.0%	794	100.0%	443	100.0%	152	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=167.346 自由度20 p=0.000\* \* p<0.05

次に、介助の必要性について男女別にまとめた(表3-12)。健康状態と同様、介助の必要性についても男女による違いは見られない。

表3-12 介助の必要性×性別

介助の必要性	男性		女性	
	実数	%	実数	%
ほとんど自分でできる	623	82.8%	2,486	81.0%
一部介助を必要とする	116	15.4%	519	16.9%
ほとんどすべてに介助を必要とする	13	1.7%	64	2.1%
合計	752	100.0%	3,069	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=7.987 自由度4 p=0.092

年齢階層別に見ると、どの世代も「ほとんど自分でできる」が最も多い(表3-13)。しかし、その割合は大きく異なっている。65歳以上から80歳未満までの各年齢階層では、9割前後の人が「ほとんど自分でできる」と回答している。しかし、

「80歳以上85歳未満」では、「ほとんど自分でできる」人は76.0%、「一部介助を必要とする」は21.8%と2割を占める。「75歳以上80歳未満」では「一部介助を必要とする」人は11.6%であったので、10.2ポイント高くなっている。さらに「85歳以上90歳未満」では、「ほとんど自分でできる」と回答した人の割合は57.2%と更に低くなり、「一部介助を必要とする」人は37.1%で15.3ポイント高くなる。「90歳以上」では「ほとんど自分でできる」人の割合は41.6%と4割になり、「一部介助を必要とする」人は50.0%で半分を占める。とくに80歳を超えて以降は、「一部介助を必要とする」人の割合は、年齢が高くなるごとに急激に増加することが分かる。ただし、「ほとんどすべてに介助を必要とする」人の割合は、同様に高くなるもの、増え幅は小さい。なんらかの介助を必要とするようになる人の割合が、加齢に伴い高くなっていくことが分かる。

表3-13 介助の必要性×年齢階層

介助の必要性	65歳以上 70歳未満		70歳以上 75歳未満		75歳以上 80歳未満		80歳以上 85歳未満		85歳以上 90歳未満		90歳以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
ほとんど自分でできる 一部介助を必要とする	547	93.7%	771	90.6%	882	87.5%	599	76.0%	250	57.2%	64	41.6%
ほとんどすべてに介助 を必要とする	36	6.2%	67	7.9%	117	11.6%	172	21.8%	162	37.1%	77	50.0%
合計	584	100.0%	851	100.0%	1,008	100.0%	788	100.0%	437	100.0%	154	100.0%

※無回答は集計から除外

 $\chi^2$ 値=487.027 自由度10 p=0.000\* \* p<0.05

## オ 仕事について

仕事について、本人がこれまでに最も長く従事したものを男女別に見たものが表3-14である。

男性の最長職は、「自営業者・家族従業員」が17.2%、「勤労者（生産現場・技術職）」が16.9%、「会社経営者・会社役員・団体役員」が15.7%、「勤労者（事務職）」が12.4%であった。

女性の最長職は、「専業主婦」が最も多く27.3%であった。そのほか、「自営業者・家族従業員」が16.8%、「勤労者（事務職）」が15.5%であった。

表3-14 本人の最長職×性別

本人の成長職	性別			
	男性		女性	
	実数	%	実数	%
自営業者・家族従業員	127	17.2%	500	16.8%
公務員（教員含む）	36	4.9%	140	4.7%
会社経営者・会社役員・団体役員	116	15.7%	172	5.8%
勤労者（事務職）	92	12.4%	463	15.5%
勤労者（生産現場・技術職：工員、運転手など）	125	16.9%	46	1.5%
勤労者（販売・サービス業：店員、外交員など）	61	8.3%	229	7.7%
医療・福祉従事者（看護師、保育士など）	1	0.1%	68	2.3%
専門的技術的職業（医師、弁護士、研究者など）	21	2.8%	48	1.6%
臨時職・日雇い・パート・アルバイト・派遣職員	36	4.9%	197	6.6%
農林漁業	2	0.3%	1	0.0%
自由業（執筆業、芸術関係）	43	5.8%	109	3.7%
専業主婦・専業主夫・無職	24	3.2%	815	27.3%
その他	55	7.4%	196	6.6%
合計	739	100.0%	2,984	100.0%

※無回答は集計から除外

 $\chi^2$ 値=570.611 自由度12 p=0.000\* \* p<0.05

また、配偶者の最長職について、男女別に見たものが表3-15である。

本人が男性の場合、その妻の職業は「専業主婦」がもっとも多く39.3%を占めた。次いで、「自営業者・家族従業員」が16.2%であった。本人が女性である場合、夫の職業として「自営業者・家族従業員」が21.1%、「会社経営者・会社役員・団体役員」が20.3%とともに2割を占めた。

表3-15 配偶者の最長職×性別

配偶者の最長職	男性 (妻の職業)		女性 (夫の職業)	
	実数	%	実数	%
自営業者・家族従業員	82	16.2%	448	21.1%
公務員（教員含む）	16	3.2%	210	9.9%
会社経営者・会社役員・団体役員	19	3.7%	430	20.3%
勤労者（事務職）	48	9.5%	327	15.4%
勤労者（生産現場・技術職：工員、運転手など）	24	4.7%	268	12.6%
勤労者（販売・サービス業：店員、外交員など）	28	5.5%	97	4.6%
医療・福祉従事者（看護師、保育士など）	9	1.8%	5	0.2%
専門的技術的職業（医師、弁護士、研究者など）	6	1.2%	89	4.2%
臨時職・日雇い・パート・アルバイト・派遣職員	29	5.7%	15	0.7%
農林漁業	3	0.6%	7	0.3%
自由業（執筆業、芸術関係）	12	2.4%	73	3.4%
専業主婦・専業主夫・無職	199	39.3%	35	1.6%
その他	21	4.1%	85	4.0%
わからない・覚えていない	11	2.2%	34	1.6%

※無回答は集計から除外

 $\chi^2$ 値=869.024 自由度13 p=0.000\* \* p<0.05

現在も「仕事をしている」人の割合は、男性の方が高く、31.6%であった（表3-16）。また、年齢階層別に見ると（表3-17）、「65歳以上70歳未満」では43.5%、「70歳以上75歳未満」では30.7%、「75歳以上80歳未満」では20.6%、「80歳以上85歳未満」では15.8%、「85歳以上90歳未満」では8.4%、「90歳以上」では13.2%で、多少の上下はあるものの、全体的には年齢が高くなるにつれ、仕事をしている人の割合は低くなる傾向にある

ことが分かる。

表3-16 現在の仕事の有無×性別

現在の仕事の有無	男性		女性	
	実数	%	実数	%
仕事をしている	230	31.6%	648	21.8%
仕事をしていない	499	68.4%	2,325	78.2%
合計	729	100.0%	2,973	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=30.786 自由度1 p=0.000\* \* p<0.05

表3-17 現在の仕事の有無×年齢階層

現在の仕事の有無	65歳以上 70歳未満		70歳以上 75歳未満		75歳以上 80歳未満		80歳以上 85歳未満		85歳以上 90歳未満		90歳以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
仕事をしている	250	43.5%	254	30.7%	203	20.6%	118	15.8%	35	8.4%	20	13.2%
仕事をしていない	325	56.5%	573	69.3%	781	79.4%	631	84.2%	383	91.6%	131	86.8%
合計	575	100.0%	827	100.0%	984	100.0%	749	100.0%	418	100.0%	151	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=241.174 自由度5 p=0.000\* \* p<0.05

#### カ 経済状況について

経済状況について、まずは年間収入をおおまかに4つに区分し、それを男女別に見たものが表3-18である。

これによれば、「150万円未満」の人の割合は、男性が30.1%であったのに対し、女性は38.5%であった。「150万円以上200万円未満」の人は男女とも18~19%程度で違いはなかった。「200万円以上400万円未満」の人は男性が32.1%、女性は29.2%で、女性の方がやや少なく、「400万円以上」の人は男性が19.6%、女性が12.8%で女性の方が5ポイント程度低い割合を示した。

表3-18 年間収入×性別

年間収入	男性		女性	
	実数	%	実数	%
150万円未満	204	30.1%	1,031	38.5%
150万円以上200万円未満	123	18.2%	524	19.6%
200万円以上400万円未満	217	32.1%	781	29.2%
400万円以上	133	19.6%	342	12.8%
合計	677	100.0%	2,678	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=30.379 自由度3 p=0.000\* \* p<0.05

主な収入源については、男女とも6割以上の人が「年金」を挙げている（表3-19）。そのほか、男性は「仕事による収入」と回答する人が18.9%を占めている。

表3-19 主な収入源×性別

主な収入源	男性		女性	
	実数	%	実数	%
年金	370	62.5%	1,709	67.4%
生活保護	49	8.3%	99	3.9%
預貯金	16	2.7%	167	6.6%
利子、配当、家賃、地代	39	6.6%	246	9.7%
子どもなどからの送り、援助	3	0.5%	37	1.5%
仕事による収入	112	18.9%	243	9.6%
その他	3	0.5%	34	1.3%
合計	592	100.0%	2,535	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=81.669 自由度6 p=0.000\* \* p<0.05

預貯金額を男女別にみると、男性は「100万円未満」が最も多く29.7%とおおよそ3割を占めた。1000万円以上は25.4%であった（表3-20）。それに対し、女性は1000万円以上が32.4%、「750万円以上1000万円以上」が15.2%と男性に比べて預貯金額の高い人の割合が多く、「100万円未満」は14.9%で、男性よりも低い割合であった。

表3-20 預貯金額×性別

預貯金額	男性		女性	
	実数	%	実数	%
100万円未満	188	29.7%	370	14.9%
100万円以上200万円未満	59	9.3%	220	8.9%
200万円以上300万円未満	46	7.3%	197	7.9%
300万円以上400万円未満	41	6.5%	114	4.6%
400万円以上500万円未満	41	6.5%	187	7.5%
500万円以上750万円未満	42	6.6%	209	8.4%
750万円以上1000万円未満	56	8.8%	378	15.2%
1000万円以上5000万円未満	124	19.6%	665	26.8%
5000万円以上	37	5.8%	139	5.6%
合計	634	100.0%	2,479	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=93.359 自由度8 p=0.000\* \* p<0.05

経済状況の感じ方については、男性は「やや苦しい」が19.0%、「かなり苦しい」が11.1%で、どちらも女性に比べて高い割合を占めた(表3-21)。一方、女性は「余裕はないが生活していくには困らない」が56.1%、「やや余裕がある」が18.5%で、どちらも男性よりも高い割合を占めた。

表3-21 経済状況の感じ方×性別

経済状況の感じ方	男性		女性	
	実数	%	実数	%
かなり余裕がある	34	4.8%	111	3.8%
やや余裕がある	97	13.6%	536	18.5%
余裕はないが生活していくには困らない	368	51.5%	1,628	56.1%
やや苦しい	136	19.0%	417	14.4%
かなり苦しい	79	11.1%	209	7.2%
合計	714	100.0%	2,901	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=30.149 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

以上のことより、年間収入は男性よりも女性の方が低い傾向にあるものの、預貯金額は女性の方が高い傾向があり、それとのかかわりもあってか、経済状況の感じ方は、女性の方が比較的ゆとりがあると感じていることが分かる。

## (2) 日常の困りごとについて

本調査では、ひとり暮らし高齢者の抱える生活ニーズを把握するため、地域環境や生活全般に関する困りごとについて尋ねている。それらの基本的な特徴を見ていきたい。

### ア 地域の困りごとについて

なんらかの地域の困りごとがある人について、その内容を男女別に集計したものが表3-22である。

男性は、「近所に銭湯がない」を挙げる人の割合が22.8%と女性(13.6%)に比べて高い。「近所に外食する店がない」も14.5%で女性(6.8%)より高い。最も高い割合を占めたのは「物価が高い」で51.3%、次いで「地震などの防災対策に不安がある」が31.5%であったが、いずれも女性よりは割合が低い。そのほか、「防犯上の不安がある」を挙げた人が10.8%であった。

女性は、最も高い割合を占めたのは「物価が高い」で54.6%、次いで「地震などの防災対策に不安がある」が45.3%であった。そのほか、「防犯上の不安がある」が15.8%、「振り込め詐欺など不審な電話がある」が12.0%といずれも男性よりやや高い割合を占めた。そのほか、「近所に銭湯

表3-22 地域の困りごと(複数回答)×性別

地域の困りごと (複数回答)	男性(n=372)		女性(n=1,825)	
	実数	%	実数	%
近所に銭湯がない	85	22.8%	249	13.6%
近所に外食する店がない	54	14.5%	125	6.8%
そばや寿司など店屋物をとる店がない	32	8.6%	189	10.4%
近所に病院や診療所がない	21	5.6%	103	5.6%
近所にバスの停留所がない	11	3.0%	70	3.8%
近所に地下鉄・鉄道の駅がない	27	7.3%	112	6.1%
訪問販売員が多い	24	6.5%	98	5.4%
防犯上の不安がある	40	10.8%	288	15.8%
振り込め詐欺など不審な電話がある	35	9.4%	219	12.0%
物価が高い	191	51.3%	996	54.6%
地震などの防災対策に不安がある	117	31.5%	827	45.3%
その他	27	7.3%	146	8.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=81.602 自由度12 p=0.000\* \* p<0.05

がない」が13.6%、「そばや寿司など店屋物をとる店がない」が10.4%でともに1割を超えた。

### イ 日常生活上の困りごとについて

次に、日常生活上の困りごとについて男女別に見ていきたい。

男性は、「食事の準備」が45.8%、「掃除や洗濯」が46.2%で、ほかよりも割合が高い。そのほか、「通院・薬とり」が21.2%、「区役所等での手続き」が20.8%と2割程度の人が困りごととして挙げていた（表3-23）。

女性は男性に比べて、日常生活上の困りごととしてまんべんなく挙げる傾向にあった。その中で最も高い割合を占めたのは「掃除や洗濯」で30.9%であった。家事の中でも力を使う仕事であることから、困りごととして挙げる人が多いのではないかと考えられる。そのほか、「区役所等での手続き」が28.9%で3割近くを占めた。

表3-23 日常生活上の困りごと（複数回答）×性別

日常生活上の困りごと (複数回答)	男性 (n=236)		女性 (n=916)	
	実数	%	実数	%
バスや電車、車を使って外出すること	40	16.9%	210	22.9%
通院・薬とり	50	21.2%	198	21.6%
食事の準備	108	45.8%	197	21.5%
掃除や洗濯	109	46.2%	283	30.9%
ごみの分別やごみ出し	37	15.7%	168	18.3%
銀行や郵便局での手続き	29	12.3%	187	20.4%
区役所等での手続き	49	20.8%	265	28.9%
金銭管理や財産保全に関すること	17	7.2%	93	10.2%
生活に必要な情報を得ること	35	14.8%	169	18.4%
その他	26	11.0%	141	15.4%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=86.655 自由度11 p=0.000\* \* p<0.05

日常生活上の困りごとを、健康状態とのかかわりで見たとものが表3-24である。

表3-24 日常生活上の困りごと（複数回答）×健康状態（3区分）

日常生活上の困りごと (複数回答)	健康 (n=1,172)		普通 (n=1,458)		健康ではない (n=917)	
	実数	%	実数	%	実数	%
バスや電車、車を使って外出すること	30	2.6%	50	3.4%	170	18.5%
通院・薬とり	20	1.7%	47	3.2%	182	19.8%
食事の準備	38	3.2%	80	5.5%	190	20.7%
掃除や洗濯	53	4.5%	108	7.4%	231	25.2%
ごみの分別やごみ出し	31	2.6%	47	3.2%	129	14.1%
銀行や郵便局での手続き	27	2.3%	52	3.6%	141	15.4%
区役所等での手続き	50	4.3%	79	5.4%	186	20.3%
金銭管理や財産保全に関すること	24	2.0%	28	1.9%	58	6.3%
生活に必要な情報を得ること	32	2.7%	77	5.3%	103	11.2%
その他	34	2.9%	56	3.8%	77	8.4%
とくに困っていることはない	955	81.5%	1,102	75.6%	327	35.7%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=2303.350 自由度22 p=0.000\* \* p<0.05

健康状態が「良くない」と回答した人の場合、「良い」や「普通」と回答した人に比べて、「とくに困っていることはない」と回答する人の割合が低くなる。困りごとの内容は生活全般にわたるが、とくに「掃除や洗濯」が25.2%、「食事の準備」

が20.7%、「区役所等での手続き」が20.3%といずれも2割を超えていた。ほか、「通院・薬とり」が19.8%、「バスや電車、車を使って外出すること」が18.5%で、2割弱を占めた。

### (3) 買い物に関する困りごとについて

本調査では、日常生活上の困りごとのうち、買い物に関する困りごとや状況を把握することをひとつの柱としている。そこで、ここでは買い物に関する困りごとや、買い物方法などについて見ていきたい。

#### ア 基本的な特徴

買い物に関する困りごとの有無を男女別に見たものが表3-25である。「困りごとがある」人の割合は、男性では38.3%、女性では45.2%で、女性の方が高かった。

表3-25 買い物に関する困りごとと有無×性別

買い物に関する困りごと 有無	男性		女性	
	実数	%	実数	%
困りごとがある	266	38.3%	1,262	45.2%
困りごとはない	428	61.7%	1,530	54.8%
合計	694	100.0%	2,792	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=10.662 自由度1 p=0.001\* \* p<0.05

年齢については、若い人ほど「困りごとがない」と回答し、年齢が上がるに伴って「困りごとがある」と回答する人の割合が高くなる傾向がある(表3-26)。平均年齢は、「困りごとがある」場合には78.2歳、「困りごとがない」場合には76.2歳と2歳の違いが見られた。困りごとがあるグループの方が平均年齢がやや高いことが分かる(表3-27)。

表3-26 買い物に関する困りごとと有無×年齢階層

買い物に関する困りごとの有無	65歳以上 70歳未満		70歳以上 75歳未満		75歳以上 80歳未満		80歳以上 85歳未満		85歳以上 90歳未満		90歳以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
困りごとがある	184	34.1%	310	39.2%	383	41.5%	343	48.9%	222	56.9%	83	59.7%
困りごとはない	356	65.9%	480	60.8%	541	58.5%	359	51.1%	168	43.1%	56	40.3%
合計	540	100%	790	100%	924	100%	702	100%	390	100%	139	100%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=78.395 自由度5 p=0.000\* \* p<0.05

表3-27 買い物困難の有無別平均年齢

買い物困難の有無	平均値	度数	標準偏差
困りごとがある	78.2	1,525	6.996
困りごとはない	76.2	1,960	6.458

※無回答は集計から除外

次に、健康状態については(表3-28)、困りごとのあるグループでは健康状態が「良くない」と感じている人の割合が高く、「あまり良くない」と「良くない」を合わせて41.4%にものぼった。一方、困りごとのないグループでは、健康状態が良くない人は「あまり良くない」と「良くない」を合わせて14.5%であり、普通から健康であると感じている人の割合が高いことが分かる。

表3-28 健康状態×買い物に関する困りごとと有無

健康状態	困りごとがある		困りごとはない	
	実数	%	実数	%
良い	110	7.1%	373	18.9%
まあ良い	223	14.5%	445	22.5%
普通	570	37.0%	869	44.0%
あまり良くない	476	30.9%	237	12.0%
良くない	161	10.5%	50	2.5%
合計	1,540	100.0%	1,974	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=369.657 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

#### イ 買い物困難と性別—買い物方法と性別の特徴

買い物困難について、性別とのかかわりから見ていきたい。**ア 基本的な特徴**で見たように、男性よりも女性の方が、買い物困難を感じている人の割合が高い。では、その内容についてはどうで

あろうか。

表3-29によれば、男女とも「近所にお店がない」と「お米など重いものを運ぶのが大変」が突出して多い。女性はどちらも4割半程度を占めるが、男性の場合は「重いものを運ぶのが大変」がやや少なく37.2%である。

表3-29 買い物の困りごと（複数回答）×性別

買物の困りごと (複数回答)	男性		女性	
	実数	%	実数	%
近所にお店がない	118	44.4%	584	46.3%
お店の営業時間が短い	7	2.6%	10	0.8%
品揃えが少ない	43	16.2%	185	14.7%
お米など重いものを運ぶのが大変	99	37.2%	564	44.7%
ひとりで買い物に行くのが困難	51	19.2%	236	18.7%
買い物を頼める人がいない	27	10.2%	139	11.0%
配達してくれる店がない	13	4.9%	72	5.7%
宅配の利用方法がわからない	7	2.6%	11	0.9%
その他	24	9.0%	80	6.3%

※無回答は集計から除外

$\chi^2=21.287$  自由度9  $p=0.011^*$  \*  $p < 0.05$

次に買い物の方法について男女別に見てみよう。

表3-30から、男女とも利用率が最も高いのは「スーパーマーケット」であり、8割を超える人が利用していることが分かる。また、「近くの商店に買いに行く」も男女ともおよそ3割程度を占めていた。

一方、男女で違いが見られたのは「コンビニ」、「デパート」、「生協等の宅配」である。男性は「コンビニに買いに行く」と回答した人が48.1%と半分近くを占める。女性の場合は36.7%であり、男性はコンビニの利用が多いことが分かる。

反対に、男性の利用が少なく女性の利用が多かった買い物先のひとつは「デパート」である。男性は16.7%が買い物先として挙げたのに対し、女性は34.9%と2倍近い割合を占めた。もうひとつは「生協等の宅配」の利用で、女性は13.0%が利用していたが、男性は5.3%であった。

表3-30 買い物の方法（複数回答）×性別

買い物の方法 (複数回答)	男性		女性	
	実数	%	実数	%
スーパーマーケットに買いに行く	618	82.4%	2,478	80.4%
コンビニに買いに行く	361	48.1%	1,131	36.7%
近くの商店に買いに行く	223	29.7%	915	29.7%
デパートに買いに行く	125	16.7%	1,075	34.9%
生協等の宅配を利用する	40	5.3%	401	13.0%
商店に配達を依頼する	13	1.7%	151	4.9%
車で売りに来るのを利用する	29	3.9%	214	6.9%
インターネット通販(ネットスーパー)	34	4.5%	90	2.9%
ヘルパー等に来てもらう	44	5.9%	220	7.1%
家族に買ってきてもらう	25	3.3%	248	8.0%
友人や近所の人に買ってきてもらう	11	1.5%	58	1.9%
その他	14	1.9%	96	3.1%

※無回答は集計から除外

$\chi^2=217.802$  自由度12  $p=0.000^*$  \*  $p < 0.05$

全体に、男性に比べて女性の方が買い物方法の選択肢が幅広いと言える。また、女性は買い物そのものを楽しんでいる面もある。自由回答では、そうした声も聞かれた。男性のなかには、「買い物は男性のすることではないと思っていた」という声もあり、男女で買い物そのものへの感じ方が異なっていることがうかがえる。男女の違いといえば、日常生活上の困りごととして、男性は家事を挙げる割合が高い。こうしたことから、買い物を含む家事全般を苦手とする男性像が浮かぶ。

#### (4) 家族・親族ネットワークの状況

ここでは、高齢期のひとり暮らしの生活を支えるものとして、家族・親族とのつながり、ネットワークの基礎的な状況をとらえたい。行き来する相手や連絡をとりあう頻度などを、男女別や年齢別に見ていく。



### ア 行き来する家族・親族について

最もよく行き来する家族・親族は、「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」が最も多く4割を占めていたことは図3-26で見たとおりである。

それを性別でまとめたものが次の表3-31である。

最も行き来する相手が「兄弟・姉妹」の場合には、男性23.4%、女性28.2%と大きな差はなかった。しかし、「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」では、女性が46.8%と半分近かったのに対し、男性は37.2%で、9.6ポイントの差があった。男性は、子ども家族と行き来をする人が女性に比べて少ない傾向にあることが分かる。

さらに、「誰ともほとんど行き来がない」とする人は、女性では9.7%とおよそ1割であったのに対し、男性は28.7%と3割近くを占めた。

表3-31 最もよく行き来する家族・親族×性別

最もよく行き来する 家族・親族	男性		女性	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	264	37.2%	1,386	46.8%
親	4	0.6%	21	0.7%
兄弟・姉妹	166	23.4%	837	28.2%
親戚	30	4.2%	273	9.2%
その他	42	5.9%	158	5.3%
誰ともほとんど行き来がない	204	28.7%	288	9.7%
合計	710	100.0%	2,963	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2=189.080$  自由度 5  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

ここで、子どもの有無と家族・親族との行き来について見ておきたい。図3-24で見たように、現在生存している子どもが「いない」人は4割程度であった。生存子の有無と最もよく行き来をする家族・親族をクロス集計したものが表3-32である。これによれば、「生存子がいる」場合、最もよく

行き来をする相手は「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」が8割を占め、「誰ともほとんど行き来がない」人はわずか6.4%であった。「生存子がない」場合は、「兄弟・姉妹」が50.5%と半数を占め、ほか、「親戚」が16.0%であった。「誰ともほとんど行き来がない」人は21.9%と2割を占めた。

表3-32 最もよく行き来する家族・親族×生存子の有無

最もよく行き来する 家族・親族	生存子がいる		生存子はいない	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	1,639	81.8%	16	1.0%
親	7	0.3%	18	1.1%
兄弟・姉妹	157	7.8%	814	50.5%
親戚	32	1.6%	257	16.0%
その他	39	1.9%	153	9.5%
誰ともほとんど行き来がない	129	6.4%	353	21.9%
合計	2,003	100.0%	1,611	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=2373.363 自由度 5  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

次に、最もよく行き来する家族・親族について、年齢階層別に集計したものが表3-33である。なお、集計にあたって「親」については、件数がもともとわずかである上に、本人の年齢が高くなるにつれて亡くなってしまいうため、「兄弟・姉妹」に含めて集計した。

これによれば、年齢が高くなるにつれて、「親・兄弟・姉妹」との行き来が少なくなり、「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」と行き来する人の割合が高くなっている。また、「誰ともほとんど行き来がない」人の割合は若い世代ほど高く、高齢になるにつれて低くなっていることが分かる。

表3-33 最もよく行き来する家族・親族×年齢階層

最もよく行き来する 家族・親族	65歳以上 70歳未満		70歳以上 75歳未満		75歳以上 80歳未満		80歳以上 85歳未満		85歳以上 90歳未満		90歳以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	180	31.5%	323	39.6%	433	44.3%	347	46.5%	267	63.7%	100	69.0%
親・兄弟・姉妹	222	38.8%	278	34.1%	292	29.9%	180	24.1%	50	11.9%	6	4.1%
親戚	34	5.9%	37	4.5%	68	7.0%	84	11.2%	52	12.4%	27	18.6%
その他	33	5.8%	47	5.8%	53	5.4%	45	6.0%	15	3.6%	7	4.8%
誰ともほとんど 行き来がない	103	18.0%	130	16.0%	131	13.4%	91	12.2%	35	8.4%	5	3.4%
合計	572	100.0%	815	100.0%	977	100.0%	747	100.0%	419	100.0%	145	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=279.673 自由度20 p=0.000\* \* p < 0.05

### イ 家族・親族との行き来の状況

ここでは、家族・親族との行き来の状況を見てみよう。

まず、最もよく行き来する家族・親族とどの程度行き来したり連絡をとったりしているのか、その頻度を年齢階層別に集計したものが表3-34である。これによれば、80歳未満までは、「ほとんど毎日」と「週に数回」の割合は大きく変わらず、1割半程度で推移している。しかし、80歳以上になると、少し割合が高くなり、90歳以上の場合は24.6%が「ほとんど毎日」、21.0%が「週に数回」行き来していることが分かる。

また、「週に1回程度」行き来している人の割合は、「65歳以上70歳未満」では11.0%で1割程

度であるが、年齢が上がるにつれて徐々に割合が高くなり、80歳以上になると2割前後になっている。

「月に数回」行き来している人の割合は、85歳未満までは3割前後で推移するが、85歳以上になると2割程度になる。

「年に数回」行き来している人の割合は、「65歳以上70歳未満」では26.3%と4分の1を占めているが、年齢が上がるにつれて徐々に割合が低くなり、80歳以上では1割半程度、90歳以上ではわずか6.5%であった。

全体的な傾向として、年齢が高いほど行き来の頻度が少ない人の割合が低くなるということが分かる。

表3-34 行き来する家族・親族との連絡・行き来の頻度×年齢階層

行き来する家族・親族 との連絡・行き来の頻 度	65歳以上 70歳未満		70歳以上 75歳未満		75歳以上 80歳未満		80歳以上 85歳未満		85歳以上 90歳未満		90歳以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
ほとんど毎日	62	13.4%	93	13.6%	111	13.4%	98	15.1%	76	19.9%	34	24.6%
週に数回	65	14.0%	97	14.2%	119	14.3%	98	15.1%	62	16.3%	29	21.0%
週に1回	51	11.0%	99	14.5%	143	17.2%	126	19.5%	76	19.9%	29	21.0%
月に数回	146	31.5%	193	28.3%	242	29.1%	181	28.0%	82	21.5%	31	22.5%
年に数回	122	26.3%	165	24.2%	164	19.7%	105	16.2%	54	14.2%	9	6.5%
その他	18	3.9%	35	5.1%	52	6.3%	39	6.0%	31	8.1%	6	4.3%
合計	464	100%	682	100%	831	100%	647	100%	381	100%	138	100%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=97.383 自由度25 p=0.000\* \* p < 0.05

次に、行き来や連絡の頻度を男女別に見てみよう。

表3-35は、家族・親族との行き来や連絡の頻度を男女別に見たものである。この表によれば、女性で最も多かったのは「月に数回」で27.7%を占め、そのほかは1割半前後で分散した。最も連絡頻度の少ない「年に数回」は、17.2%であった。

表3-35 行き来する家族・親族との連絡・行き来の頻度×性別

行き来する家族・親族との連絡・行き来の頻度	性別			
	男性		女性	
	実数	%	実数	%
ほとんど毎日	59	11.8%	417	15.8%
週に数回	59	11.8%	407	15.4%
週に1回	56	11.2%	472	17.9%
月に数回	141	28.1%	732	27.7%
年に数回	163	32.5%	453	17.2%
その他	24	4.8%	160	6.1%
合計	710	100.0%	2,963	100.0%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2=71.366$  自由度 5  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

一方、男性の場合、「月に数回」は28.1%と女性の場合とほぼ変わらない割合であったものの、「ほとんど毎日」から「週に1回」までは1割強で、女性に比べて低かった。かわりに、「年に数回」が32.5%と3割強を占め、全体に女性に比べて連絡頻度が低いことがわかった。

このように、男性は女性に比べて、家族・親族と行き来がほとんどない人や、あっても頻度が「年に数回」と少ない人の割合が高いことが分かる。

### (5) 近隣ネットワークの状況

家族・親族のほかに、高齢期のひとり暮らしの生活を支えているのは、近隣とのつながりである。近所づきあいや友人とのつながりから、近隣ネットワークの基礎的状況を把握したい。

#### ア 近所づきあいについて

近所づきあいについては、「会ったときに世間話をするくらい」と「あいさつをかわすくらい」が3割ずつを占めていたことは、すでに図3-31で見たとおりである。

それを男女別に見たものが表3-36である。これによれば、女性は「会ったときに世間話をするくらい」と回答した人の割合は35.0%、「あいさつをかわすくらい」と回答した人の割合が28.8%で、全体の傾向とそう大きくは変わらないが、「互いの家をよく行き来する」人は10.0%、「ときどき行き来する」人は20.9%で、より親密に近所づきあいをする傾向にあることが分かる。

一方男性は、「あいさつをかわすくらい」がもっとも多く47.9%を占め、「会ったときに世間話をするくらい」が25.2%でやや低い割合であった。「まったくつきあいがいい」と回答した人も13.1%と1割を超え、一方で「互いの家をよく行き来する」、「ときどき行き来する」と回答した人の割合はそれぞれ4.7%、9.1%と1割以下であった。このように、男性の方が女性に比べて近所づきあいが疎遠な傾向にあることが分かる。

表3-36 近所づきあいの程度×性別

近所づきあいの程度	男性		女性	
	実数	%	実数	%
互いの家をよく行き来するくらい	34	4.7%	299	10.0%
ときどき行き来するくらい	65	9.1%	628	20.9%
会ったときに世間話をするくらい	181	25.2%	1,051	35.0%
あいさつをかわすくらい	344	47.9%	865	28.8%
まったくつきあいがいい	94	13.1%	159	5.3%
合計	718	100.0%	3,002	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=195.061 自由度 4  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

近所づきあいの程度を、年齢階層別に見たものが表3-37である。「65歳以上70歳未満」では、最も多いのは「あいさつをかわすくらい」で39.1%とおおよそ4割を占め、「70歳以上75歳未満」では「会ったときに世間話をするくらい」と「あいさつをかわすくらい」がそれぞれ34.4%を占めていた。「70歳以上75歳未満」では、最も多いのは「会ったときに世間話をするくらい」で35.4%を占め、以降「80歳以上85歳未満」「85歳以上90歳未満」「90歳以上」の各年齢階層においても、最

も多いのは「会ったときに世間話をするくらい」で3割半から3割弱程度であった。

「互いの家をよく行き来するくらい」と「ときどき行き来するくらい」を合わせた比較的親密に近所づきあいをしている人の割合は、「65歳以上70歳未満」では22.3%であるが、年齢階層が上が

るにつれその割合が高くなり、「75歳以上80歳未満」では28.8%、「90歳以上」では36.3%であった。

全体的な傾向としては、年齢が高くなるほど、親密に近所づきあいをする人の割合が高くなっていることが分かる。

表3-37 近所づきあいの程度×年齢階層

近所づきあいの程度	65歳以上 70歳未満		70歳以上 75歳未満		75歳以上 80歳未満		80歳以上 85歳未満		85歳以上 90歳未満		90歳以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
互いの家をよく行き来するくらい	41	7.2%	65	7.8%	93	9.4%	66	8.6%	51	12.1%	17	11.6%
ときどき行き来するくらい	86	15.1%	131	15.8%	192	19.4%	165	21.6%	87	20.6%	36	24.7%
会ったときに世間話をするくらい	166	29.1%	285	34.4%	350	35.4%	252	32.9%	137	32.4%	42	28.8%
あいさつをかわすくらい	223	39.1%	285	34.4%	305	30.8%	233	30.5%	127	30.0%	38	26.0%
まったくつきあいがいい	54	9.5%	63	7.6%	49	5.0%	49	6.4%	21	5.0%	13	8.9%
合計	570	100.0%	829	100.0%	989	100.0%	765	100.0%	423	100.0%	146	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=57.845 自由度20 p=0.000\* \* p<0.05

### イ 親しい友人・知人について

次に、親しい友人・知人の有無について男女別に集計した。表3-38によれば、女性は「親しい友人がいる」人が86.5%であったのに対し、男性は「親しい友人がいる」人が70.3%、「いない」人が29.7%であった。男性の方が「親しい友人がいる」人の割合が低いことが分かる。

35.0%、女性は40.3%であった（表3-39）。そのほか、女性は「趣味やスポーツを通じて知り合った人」が22.0%で、男性の20.8%よりもやや高く、「もとの（今の）職場の人」が13.8%で、男性の19.8%よりやや低かった。男女とも「学校時代に知り合った人」は13%程度である。

表3-38 親しい友人・知人の有無×性別

親しい友人・知人の有無	男性		女性	
	実数	%	実数	%
親しい友人がいる	507	70.3%	2,611	86.5%
親しい友人がいない	214	29.7%	406	13.5%
合計	721	100.0%	3,017	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=110.712 自由度1 p=0.000\* \* p<0.05

なお、友人・知人の種類を男女別に見ると、男女とも最も多いのは「近所の人」で、男性は

表3-39 友人・知人の種類×性別

友人・知人の種類	男性		女性	
	実数	%	実数	%
近所の人	175	35.0%	1,044	40.3%
学校時代に知り合った人	68	13.6%	340	13.1%
もとの（今の）職場の人	99	19.8%	356	13.8%
趣味やスポーツを通じて知り合った人	104	20.8%	569	22.0%
その他	54	10.8%	279	10.8%
合計	500	100.0%	2,588	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=13.755 自由度4 p=0.008\* \* p<0.05

親しい友人・知人の有無を、年齢階層別に見たものが表3-40である。全体的には、どの年齢階層においても「親しい友人・知人がいる」と回答している人が多く、その割合も8割を超えている世代が多い。「90歳以上」では「親しい友人・知人がいる」と回答している人は74.3%であるが、そ

れは年齢が高いために、同世代の友人や知人が亡くなってしまふことから、ほかの世代よりも低くなるのは仕方がない面があるだろう。それにしても、多くの人は、生涯にわたり親しい友人・知人を得ているということが分かる。

表3-40 親しい友人・知人の有無×年齢階層

親しい友人・知人の有無	65歳以上 70歳未満		70歳以上 75歳未満		75歳以上 80歳未満		80歳以上 85歳未満		85歳以上 90歳未満		90歳以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
いる	486	83.9%	713	84.5%	837	84.5%	638	83.5%	337	80.4%	107	74.3%
いない	93	16.1%	131	15.5%	154	15.5%	126	16.5%	82	19.6%	37	25.7%
合計	579	100.0%	844	100.0%	991	100.0%	764	100.0%	419	100.0%	144	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=12.874 自由度5 p=0.025\* \* p<0.05

## (6) 緊急時の支援の状況

ひとり暮らし高齢者の生活の安定を考える際に、緊急時支援のあり方について把握しておく必要がある。ここで言う緊急時とは、「病気やけがなどですぐに人の手を必要とする状況」のことで、緊急時の支援者とは、そうした緊急時に「すぐに来てくれる人」のことを指している。

### ア 緊急時の支援者に関する基本的状況—性別・年齢

緊急時の支援者が「いる」人は79.9%、「いない」人は16.7%であることはすでに見た(図3-32)。それを男女別にまとめたものが表3-41である。

表3-41 緊急時の支援者有無×性別

緊急時の支援者の有無	男性		女性	
	実数	%	実数	%
いる	516	71.2%	2,577	85.5%
いない	209	28.8%	437	14.5%
合計	725	100.0%	3,014	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ =83.952 自由度1 p=0.000\* \* p<0.05

この表によれば、男女とも緊急時の支援者が「いる」と回答した人の割合が高い。しかし、女性では緊急時の支援者が「いる」人が85.5%であるのに対し、男性は71.2%で、緊急時の支援者が「いない」人は28.8%にのぼることが分かる。

次に、年齢階層別にみると、75歳未満までは緊急時の支援者がいない人が21%程度であるが、75歳以上80歳未満では18.8%、80歳以上85歳未満では15.3%と徐々に割合が低くなっていく(表3-42)。高齢になればなるほど、緊急時への備えが必要となること、反対に言えば、緊急時の支援者が得られるという条件を満たしているからこそ、高齢であってもひとり暮らしを継続することができているともいえることができるだろう。

表3-42 緊急時の支援者の有無×年齢階層

緊急時の支援者の有無	65歳以上 70歳未満		70歳以上 75歳未満		75歳以上 80歳未満		80歳以上 85歳未満		85歳以上 90歳未満		90歳以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
いる	455	78.7%	646	78.2%	806	81.2%	655	84.7%	388	91.3%	147	98.0%
いない	123	21.3%	180	21.8%	187	18.8%	118	15.3%	37	8.7%	3	2.0%
合計	578	100.0%	826	100.0%	993	100.0%	773	100.0%	425	100.0%	150	100.0%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2=68.388$  自由度 5  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

イ 緊急時の支援者は誰か

緊急時の支援者の内訳は、半数が「子ども（子どもの配偶者、孫を含む）」であることはすでに述べた（図3-33）。高齢期の生活支援や緊急時支援を子どもに頼むのはごく自然な流れである。

では、頼るべき子どもがいない人はどのような状況にあるのだろうか。

表3-43は、生存子の有無と緊急時の支援者の有無について見たものである。生存子が「いる」場合には、緊急時の支援者が「いる」人の割合は92.2%で、「いない」人はわずか7.8%である。しかし、生存子が「いない」場合、緊急時の支援者が「いる」人の割合は71.2%と低くなり、支援者が「いない」人は28.8%と3割弱にのぼった。緊急時の支援については、最も身近な家族である子どもに頼る人が多いこと、そして、子どもがいないことで、緊急時の支援者を得られなくなる人が一定割合いることが分かる。

表3-43 緊急時の支援者の有無×生存子の有無

緊急時の支援者の有無	生存子がいる		生存子はいない	
	実数	%	実数	%
いる	1,855	92.2%	1,157	71.2%
いない	158	7.8%	467	28.8%
合計	2,013	100.0%	1,624	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=276.076 自由度 1  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

とはいえ、生存子がいなくても7割は緊急時の支援者がいる。それは誰なのか、内訳を見たも

のが表3-44である。生存子がいなくても、緊急時の支援者として依頼するのは「兄弟・姉妹」が最も多く46.1%を占め、次いで「友人・知人」が20.5%、「親戚」が16.9%であった。

表3-44 緊急時の支援者の種類×生存子の有無

緊急時の支援者の種類	生存子がいる		生存子はいない	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫を含む）	1,531	82.6%	16	1.4%
兄弟・姉妹	88	4.7%	532	46.1%
親戚	26	1.4%	195	16.9%
近所の人	46	2.5%	60	5.2%
友人・知人	88	4.7%	237	20.5%
ケアマネジャーやヘルパーなど介護事業者	43	2.3%	41	3.5%
その他	32	1.7%	74	6.4%
合計	1,854	100.0%	1,155	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=1961.161 自由度 6  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

男女別にはどのような特徴があるのだろうか。緊急時の支援者の種類を男女別に集計したものが表3-45である。男性、女性いずれも「子ども（子どもの配偶者、孫を含む）」が半数近くを占めており（男性47.0%、女性50.9%）、子ども家族に支援を依頼する人が多いことが分かる。

表3-45 緊急時の支援者の種類×性別

緊急時の支援者の種類	性別			
	男性		女性	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫を含む）	242	47.0%	1,310	50.9%
兄弟・姉妹	99	19.2%	554	21.5%
親戚	24	4.7%	211	8.2%
近所の人	14	2.7%	95	3.7%
友人・知人	84	16.3%	256	9.9%
ケアマネジャーやヘルパーなど介護事業者	21	4.1%	68	2.6%
その他	31	6.0%	79	3.1%
合計	515	100.0%	2,573	100.0%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2=39.928$  自由度 6  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

次に多いのは「兄弟・姉妹」であり、男女とも2割前後を占めている。「親戚」を挙げる人はわずかだが、子ども家族、兄弟姉妹、親戚を合わせて、男性では70.9%の人が、女性では80.6%の人が家族・親族に依頼していることが分かる。

女性に比べて、男性は家族・親族に依頼する割合がやや低いが、その分高い割合を占めたのは「友人・知人」で、16.3%を占めた。女性では9.9%であり、男女の差が大きかった。

### （7）外出・社会参加について

ここでは、ひとり暮らし高齢者の外出の状況や、社会参加について見ていく。

#### ア 外出時の主な交通手段について

まずは外出手段を男女別に見てみよう。表3-46によれば、男性は「徒歩」が最も多く29.3%、次いで「電車」が25.4%、「バス（ちいばす含む）」が20.1%、「自転車」が14.1%であった。女性は「バス（ちいばす含む）」が最も多く33.9%、次いで「電車」が28.1%、「徒歩」が21.3%であった。「自転車」は3.0%とほんのわずかであった。なお、「その他」の具体的な回答としては「タクシー」が圧倒的に多かった。

表3-46 外出時の主な交通手段×性別

外出時の主な交通手段	男性		女性	
	実数	%	実数	%
徒歩	213	29.3%	635	21.3%
自転車	103	14.1%	90	3.0%
バイク	5	0.7%	5	0.2%
電車	185	25.4%	839	28.1%
バス（ちいばす含む）	146	20.1%	1,013	33.9%
自家用車	31	4.3%	100	3.3%
その他	45	6.2%	304	10.2%
合計	728	100.0%	2,986	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=210.820 自由度 6  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

#### イ 外出頻度について

次に、外出頻度である。1週間にどの程度外出しているのか、その頻度を尋ねている。それを男女別にまとめたものが表3-47である。男性は、「ほとんど毎日」外出する人が最も多く、46.0%を占め、次いで「1週間に2、3日くらい」が22.6%、「1週間に4、5日くらい」が18.0%であった。女性は、最も多かったのは「1週間に2、3日くらい」で31.3%を占め、次いで「ほとんど毎日」が30.0%、「1週間に4、5日くらい」が23.6%であった。男女とも、「1週間に1回くらい」と「ほとんど外出しない」の割合は合わせて15%程度であり、全体によく外出している傾向にあることが分かる。また、「ほとんど毎日」と「1週間に4、5日くらい」を合わせると、男性は64.0%、女性は53.6%であり、男性の方が外出頻度が高いことが分かる。

表3-47 外出頻度×性別

外出頻度	男性		女性	
	実数	%	実数	%
ほとんど毎日	332	46.0%	898	30.0%
1週間に4、5日くらい	130	18.0%	707	23.6%
1週間に2、3日くらい	163	22.6%	936	31.3%
1週間に1回くらい	62	8.6%	286	9.6%
ほとんど外出しない	35	4.8%	167	5.6%
合計	722	100.0%	2,994	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=69.049 自由度 4  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

外出頻度を年齢階層別に見たものが表3-48である。「65歳以上70歳未満」では「ほとんど毎日」外出する人が44.3%を占め、「1週間に4、5日くらい」の25.3%と合わせると69.6%にのぼり、

およそ7割の人がよく外出していることが分かる。一方、「1週間に1回くらい」(5.6%)と「ほとんど外出しない」(2.3%)を合わせて7.9%の人は外出頻度が少ない。

表3-48 外出頻度×年齢階層

外出頻度	65歳以上 70歳未満		70歳以上 75歳未満		75歳以上 80歳未満		80歳以上 85歳未満		85歳以上 90歳未満		90歳以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
ほとんど毎日	255	44.3%	349	41.6%	324	32.5%	196	25.6%	84	20.8%	19	13.9%
1週間に4、5日くらい	146	25.3%	206	24.6%	244	24.5%	164	21.4%	59	14.6%	21	15.3%
1週間に2、3日くらい	130	22.6%	207	24.7%	316	31.7%	261	34.1%	144	35.6%	42	30.7%
1週間に1回くらい	32	5.6%	60	7.2%	81	8.1%	92	12.0%	61	15.1%	22	16.1%
ほとんど外出しない	13	2.3%	17	2.0%	31	3.1%	52	6.8%	56	13.9%	33	24.1%
合計	576	100.0%	839	100.0%	996	100.0%	765	100.0%	404	100.0%	137	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=358.528 自由度20 p=0.000\* \* p<0.05

「85歳以上90歳未満」では、「ほとんど毎日」(20.8%)と「1週間に4、5日くらい」(14.6%)を合わせて、よく外出している人の割合は35.4%になり、「1週間に1回くらい」(15.1%)と「ほとんど外出しない」(13.9%)を合わせて29.0%の人が外出頻度が少なくなっている。年齢が上がるにつれ、外出頻度が少なくなっていくことが分かる。

一般に、高齢期は加齢に伴い健康状態が悪化する傾向にある。年齢の上昇とともに外出頻度が少なくなるのは、そうした健康面の状況がかかわってくると考えられる。それは外出頻度が少ない理由で最も多いのが「身体が不自由・健康上の心配が大きい」という項目であることからもうかがえ

るだろう(図3-41)。

そこで、健康状態と外出頻度をクロス集計した(表3-49)。健康状態が「良い」場合、外出頻度は「ほとんど毎日」が50.8%、「1週間に4、5日くらい」が24.7%で、合わせて75.5%の人がよく外出している。しかし、健康状態が「良くない」場合には、「ほとんど毎日」は18.3%、「1週間に4、5日くらい」は11.0%で、よく外出する人は合わせて29.4%、3割に下がる。一方、「1週間に1回くらい」(17.0%)と「ほとんど外出しない」(25.7%)を合わせると、外出頻度の少ない人の割合は42.7%と4割を超える。健康状態や身体状況が優れなければ、外出頻度は少なくなってしまうことが分かる。

表3-49 外出頻度×健康状態

外出頻度	良い		まあ良い		普通		あまり良くない		良くない	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
ほとんど毎日	261	50.8%	313	44.5%	480	31.4%	148	19.1%	40	18.3%
1週間に4、5日くらい	127	24.7%	168	23.9%	396	25.9%	126	16.2%	24	11.0%
1週間に2、3日くらい	101	19.6%	165	23.5%	484	31.7%	294	37.9%	61	28.0%
1週間に1回くらい	16	3.1%	40	5.7%	126	8.2%	131	16.9%	37	17.0%
ほとんど外出しない	9	1.8%	17	2.4%	42	2.7%	77	9.9%	56	25.7%
合計	514	100.0%	703	100.0%	1,528	100.0%	776	100.0%	218	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=554.847 自由度16 p=0.000\* \* p<0.05



## ウ 外出時の会話の程度と性別

次に、外出した際にどの程度会話をしているかについて、男女別に見ておきたい。表3-50は、外出時の会話の程度と性別をクロス集計したものである。これによれば、女性の場合、「よく話をする」と回答した人は25.9%で、「とてもよく話をする」(9.4%)と合わせると35.3%の人が割とよく話をしていて回答していることが分かる。「あまり話をしない」(11.1%)と「ほとんど話をしない」(6.4%)を合わせても17.5%で2割以下である。

表3-50 外出時の会話の程度×性別

外出時の会話の程度	男性		女性	
	実数	%	実数	%
とてもよく話をする	44	6.1%	284	9.4%
よく話をする	116	16.0%	782	25.9%
普通	286	39.4%	1,419	47.1%
あまり話をしない	105	14.5%	335	11.1%
ほとんど話をしない	174	24.0%	194	6.4%
合計	725	100.0%	3,014	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=227.829 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

一方、男性の場合、「よく話をする」と回答した人は16.0%で、女性に比べ9.9ポイント低く、「とてもよく話をする」(6.1%)を合わせても22.1%で2割強であった。反対に「あまり話をしない」は14.5%、「ほとんど話をしない」は24.0%を占め、両者を合わせて38.5%の人が外出時に会話をしない傾向にあることが分かる。

## エ 社会参加の動向

外出は買い物や通院、福祉サービスの利用など様々な理由によってなされる日常的行為であるが、外出の契機となりうるもののひとつに、社会参加活動も挙げられる。ここでは、社会参加の動向についてまとめておく。

表3-51は、参加している活動の内容を男女別に見たものである。「参加していない」と回答した人の割合は、女性は43.3%であったが、男性は61.4%にのぼり、社会活動に参加している男性は4割程度にとどまることが分かる。

そのなかで、どのような活動に参加しているか内訳を見ると、男女ともに、「趣味の会」(男性11.1%、女性20.4%)、「健康づくりの活動」(男性10.4%、女性22.4%)に参加している人が多く、どちらも男性に比べて女性の方が10ポイント前後高い割合を占めていた。また、男女ともに1割の人が参加していると回答したのは「町会・自治会」であった。「老人クラブ」への参加率は低く、男性が3.1%、女性が6.0%であった。

表3-51 参加している社会活動(複数回答)×性別

参加している社会活動(複数回答)	男性(n=682)		女性(n=2,801)	
	実数	%	実数	%
趣味の会(囲碁・将棋・俳句・カラオケ・お花・盆栽・お茶など)	76	11.1%	571	20.4%
社会活動(同窓会・PTAなどの子育ての頃の団体・生協活動など)	20	2.9%	116	4.1%
健康づくりの活動(スポーツ・体操教室など)	71	10.4%	628	22.4%
介護予防事業(健康トレーニング・筋力向上トレーニングなど)	33	4.8%	275	9.8%
学習の会	19	2.8%	159	5.7%
老人クラブ	21	3.1%	169	6.0%
ボランティア活動	20	2.9%	166	5.9%
町会・自治会	76	11.1%	286	10.2%
その他	47	6.9%	264	9.4%
参加していない	419	61.4%	1,213	43.3%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=204.997 自由度10 p=0.000\* \* p<0.05

表3-52は、社会活動への参加意向を男女別に集計したものである。女性の場合、「とてもそう思う」(12.7%)と「まあそう思う」(27.3%)を合わせて40.0%の人が、今後も地域での活動や集まりに「参加したい」と考えている。一方、男性の場合は、「とてもそう思う」(8.3%)と「まあそう思う」(23.5%)を合わせて、「参加したい」と考えている人は31.8%であった。反対に、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を合わせて、今後活動等に参加したいと思わない人の割合は、男性は40.9%、女性は31.0%であった。

女性に比べて男性の方が、現在の活動参加も少なく、今後の参加意向も低いことが分かる。

表3-52 地域活動への参加意向×性別

地域活動への参加意向	男性		女性	
	実数	%	実数	%
とてもそう思う	57	8.3%	364	12.7%
まあそう思う	161	23.5%	784	27.3%
どちらともいえない	187	27.3%	833	29.0%
あまりそう思わない	206	30.1%	682	23.8%
まったくそう思わない	74	10.8%	207	7.2%
合計	685	100.0%	2,870	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=30.316 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

(8) 東日本大震災時の状況について

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、港区でも最大震度5弱を観測した。ここでは、震災時に連絡を取り合った相手や、震災後の困りごとなどを中心に見ていきたい。

ア 震災時の連絡

本調査では、震災のあとにどのような人と連絡をとりあったのかについて尋ねているが、多くの人が「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」や「兄弟・姉妹」、「友人・知人」などと連絡をとりあっていた（図3-37）。

それを男女別に見たものが表3-53である。これによれば、女性の場合、「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」と連絡をとりあった人は50.2%、「兄弟・姉妹」が48.2%、「友人・知人」が48.3%であり、ほか、「親戚」が32.3%、「近所の人」は20.1%であった。「誰とも連絡を取りあわなかった」人はわずか3.3%であった。

一方、男性は、「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」と連絡をとりあった人が37.7%と女性に比べて12.5ポイント低かった。「兄弟・姉妹」は35.3%、「友人・知人」は32.4%で、女性に比べて12から15ポイント程度低かった。ほか、「親戚」は16.0%、「近所の人」は10.5%で、ともに女性のおよそ半分程度であった。「誰とも連絡を取りあわなかった」人は16.7%で高い割合を占めた。

表3-53 震災時に連絡した相手（複数回答）×性別

震災時に連絡した相手 (複数回答)	男性 (n=706)		女性 (n=3,017)	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	266	37.7%	1,515	50.2%
親	9	1.3%	54	1.8%
兄弟・姉妹	249	35.3%	1,453	48.2%
親戚	113	16.0%	973	32.3%
近所の人	74	10.5%	605	20.1%
友人・知人	229	32.4%	1,458	48.3%
民生委員	4	0.6%	60	2.0%
町会・自治会の人	29	4.1%	85	2.8%
高齢者相談センター (地域包括支援センター) の人	7	1.0%	48	1.6%
ケアマネジャーやヘルパーなど介護事業者	26	3.7%	123	4.1%
その他	25	3.5%	107	3.5%
誰とも連絡を取りあわなかった	118	16.7%	101	3.3%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=438.11 自由度12 p=0.000\* \* p<0.05

次に、生存子の有無別に震災時に連絡を取りあった相手をまとめたものが表3-54である。生存子がいる場合、「子ども（子どもの配偶者、孫を含む）」と連絡をとりあったと回答する人の割合は87.6%と9割近くを占めた。そのほかの「兄弟・姉妹」(36.8%)や「親戚」(26.0%)、「友人・知人」(38.2%)とは大きな差が見られた。生存子がない場合は、「兄弟・姉妹」と連絡をとりあったと回答する人が56.4%、「友人・知人」が54.6%で半数を超え、そのほか「親戚」が33.0%であった。

生存子の有無にかかわらず、「近所の人」と連絡をとりあった人は2割弱程度であった。

また、「誰とも連絡を取りあわなかった」と回答した人は、生存子がいる場合には3.4%であったが、生存子がない場合は8.5%とやや高い割合であった。

表3-54 震災時に連絡した相手（複数回答）×生存子有無

震災時に連絡した相手 (複数回答)	生存子がある (n=1,997)		生存子はいない (n=1,619)	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	1,749	87.6%	26	1.6%
親	37	1.9%	27	1.7%
兄弟・姉妹	734	36.8%	913	56.4%
親戚	519	26.0%	535	33.0%
近所の人	358	17.9%	301	18.6%
友人・知人	762	38.2%	884	54.6%
民生委員	32	1.6%	27	1.7%
町会・自治会の人	64	3.2%	43	2.7%
高齢者相談センター (地域包括支援センター) の人	31	1.6%	22	1.4%
ケアマネジャーやヘルパーなど介護事業者	85	4.3%	58	3.6%
その他	63	3.2%	66	4.1%
誰とも連絡を取りあわなかった	67	3.4%	137	8.5%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=2951.338 自由度12 p=0.000\* \* p<0.05

緊急時の支援者の有無とのかかわりはどうであろうか。表3-55は、緊急時の支援者の有無別に震災時に連絡した相手を集計したものである。これによれば、緊急時の支援者がいる場合、「子ども（子どもの配偶者、孫を含む）」と連絡をとりあったと回答する人の割合は54.6%、「兄弟・姉妹」が47.2%、「親戚」が30.9%、「友人・知人」46.5%であった。「誰とも連絡を取りあわなかった人」は3.3%である。

一方、緊急時の支援者がいない人の場合、最も多くの人連絡をとりあったと回答したのは「友人・知人」が39.9%、次いで「兄弟・姉妹」が39.6%であったが、「子ども（子どもの配偶者、孫を含む）」については、17.1%と低い割合を示した。「親戚」も19.5%で2割程度にとどまり、「誰とも連絡を取りあわなかった」と回答した人は18.3%にのぼった。

表3-55 震災時に連絡した相手（複数回答）×緊急時の支援者の有無

震災時に連絡した相手 (複数回答)	緊急時の支援者がいる (n=3,080)		緊急時の支援者がいない (n=627)	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	1,683	54.6%	107	17.1%
親	55	1.8%	9	1.4%
兄弟・姉妹	1,454	47.2%	248	39.6%
親戚	952	30.9%	122	19.5%
近所の人	590	19.2%	81	12.9%
友人・知人	1,433	46.5%	250	39.9%
民生委員	43	1.4%	19	3.0%
町会・自治会の人	101	3.3%	11	1.8%
高齢者相談センター (地域包括支援センター) の人	44	1.4%	10	1.6%
ケアマネジャーやヘルパーなど介護事業者	135	4.4%	10	1.6%
その他	107	3.5%	23	3.7%
誰とも連絡を取りあわなかった	102	3.3%	115	18.3%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=600.485 自由度12 p=0.000\* \* p<0.05

## イ 大震災時の困りごと

本調査では、大震災時にどのようなことに困ったのかを尋ねている（図3-38）。余震に対する不安感や情報に関する心配などが挙げられているが、それを男女別に見たものが表3-56である。男女とも最も高い割合を占めたのは「余震が続いて不安だった」であり、男性では32.6%が、女性ではそれよりも22.1ポイント高く54.7%の人が回答した。次いで「福島第一原発の事故や放射能・放射性物質に関する情報がわかりにくかった」が多く、男性では19.2%、女性では21.3%の人が回答した。そのほか、「家のなかに散乱したものを片付けるのが困難だった」が男性では14.1%、女性では14.6%、「電車やバスが動かず、帰宅することが困難だった」が男性では12.1%、女性では11.6%と、男女ともほぼ同程度の割合であった。

このほか、「水や食料、日用品が手に入らなくて困った」は男性は18.9%、女性は13.7%、「電池や懐中電灯など防災用品が手に入らなくて困った」は男性は9.4%、女性は12.6%であった。

「とくに困ったことはなかった」と回答した人は、男性では36.2%であったのに対し、女性は

26.0%であった。

表3-56 大震災時の困りごと（複数回答）×性別

大震災時の困りごと (複数回答)	男性 (n=702)		女性 (n=2,990)	
	実数	%	実数	%
家のなかに散乱したものを片付けるのが困難だった	99	14.1%	437	14.6%
家が壊れ、修理が必要になった	15	2.1%	47	1.6%
避難する場所がわからなかった	22	3.1%	126	4.2%
電車やバスが動かず、帰宅することが困難だった	85	12.1%	348	11.6%
余震が続いて不安だった	229	32.6%	1,635	54.7%
水や食料、日用品が手に入らなくて困った	133	18.9%	411	13.7%
電池や懐中電灯など防災用品が手に入らなくて困った	66	9.4%	376	12.6%
停電に関する情報がわかりにくかった	52	7.4%	296	9.9%
福島第一原発の事故や放射能・放射性物質に関する情報がわかりにくかった	135	19.2%	638	21.3%
相談する人がいなくて困った	20	2.8%	79	2.6%
その他	36	5.1%	248	8.3%
とくに困ったことはなかった	254	36.2%	778	26.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=174.356 自由度12 p=0.000\* \* p<0.05

(9) 地区別の状況について

ここでは、調査結果について、港区内の総合支所管内別の5つの地区ごとに見ていきたい。

ア 現在居住している地区

港区の総合支所管内別の5つに分類し、調査対象者と調査回答者の分布を見たものが表3-57である。調査対象者の地区の構成割合と調査回答者の地区の構成割合は誤差1%以内である。これによると、高輪地区の対象者が25.1%、回答者が25.4%と最も多い。

表3-57 地区ごとの調査対象者と調査回答者

地区	調査対象者		調査回答者	
	実数	%	実数	%
芝地区	1,051	18.6%	714	18.5%
麻布地区	1,032	18.2%	690	17.9%
赤坂地区	1,235	21.8%	827	21.4%
高輪地区	1,419	25.1%	981	25.4%
芝浦港南地区	919	16.2%	651	16.9%
合計	5,656	100.0%	3,863	100.0%

イ 性別・年齢別

地区ごとに男女の構成割合を示したものが表3-58である。どの地区も男性が2割前後、女性が8割前後を占めている。男性の割合が高かったのが芝地区と芝浦港南地区でそれぞれ23.4%と22.1%、最も女性の割合が高かったのが麻布地区で85.3%だった。

表3-58 性別×地区

性別	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
男性	165	23.4%	100	14.7%	145	17.6%	194	20.0%	142	22.1%	746	19.5%
女性	541	76.6%	579	85.3%	680	82.4%	776	80.0%	500	77.9%	3,076	80.5%
合計	706	100.0%	679	100.0%	825	100.0%	970	100.0%	642	100.0%	3,822	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=21.480 自由度=4 p=.000\* \* p<0.05

次に地区ごとに年齢階層をまとめたものが表3-59である。どの地区も、最も多かったのは「75歳以上80歳未満」であり、25.0%から28.8%を占めた。地区ごとに年齢階層の構成割合を前期高齢

者（65歳以上75歳未満）と後期高齢者（75歳以上）に分けて見てみると、芝地区と芝浦港南地区の前期高齢者の割合がそれぞれ39.3%と41.0%で、他の3地区（麻布35.5%、赤坂35.7%、高輪

37.1%) に比べてやや高い。一方、平均年齢については、芝地区76.6歳、麻布地区77.7歳、赤坂地区77.7歳、高輪地区77.3歳、芝浦港南地区76.3歳で、地区による偏りがなく分布している。

なお、掲載している数字はすべて小数点第2位

を四捨五入した数字であるため、上記の地区ごとの前期高齢者（65歳以上75歳未満）の割合と下表の「65歳以上70歳未満」と「70歳以上75歳未満」の合計の数字は必ずしも一致しない。

表3-59 年齢階層×地区

年齢階層	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
65歳以上70歳未満	123	17.4%	91	13.2%	110	13.5%	167	17.2%	98	15.2%	589	15.4%
70歳以上75歳未満	154	21.8%	153	22.3%	181	22.2%	194	20.0%	167	25.9%	849	22.2%
75歳以上80歳未満	200	28.4%	178	25.9%	198	24.3%	243	25.0%	186	28.8%	1,005	26.3%
80歳以上85歳未満	142	20.1%	143	20.8%	179	21.9%	202	20.8%	127	19.7%	793	20.7%
85歳以上90歳未満	67	9.5%	81	11.8%	108	13.2%	127	13.1%	54	8.4%	437	11.4%
90歳以上	19	2.7%	41	6.0%	40	4.9%	39	4.0%	14	2.2%	153	4.0%
合計	705	100.0%	687	100.0%	816	100.0%	972	100.0%	646	100.0%	3,826	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=48.820 自由度=20 p=.000\* \* p<0.05

#### ウ 居住年数

現住所での居住年数を地区別に集計したものが表3-60である。居住年数は地区ごとに特徴があり、芝地区と麻布地区では「60年以上」が最も多く、それぞれ23.6%、21.6%であった。それに対し、芝浦港南地区は「10年未満」と回答した人が最も多く、22.1%を占めた。赤坂地区、高輪地区

では「40年以上50年未満」が最も多く、それぞれ25.3%、20.1%であった。さらに、平均居住年数を見ると、芝地区が40.2年、麻布地区が41.7年、赤坂地区が39.0年、高輪地区が38.6年と芝浦港南地区以外の4地区は近い数字であったが、芝浦港南地区は28.5年であり、他地区に比べ10年以上短い。

表3-60 居住年数×地区

居住年数	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
10年未満	76	10.8%	51	7.5%	67	8.2%	97	10.0%	142	22.1%	433	11.3%
10年以上20年未満	67	9.5%	65	9.5%	91	11.2%	113	11.6%	106	16.5%	442	11.6%
20年以上30年未満	60	8.5%	48	7.0%	63	7.7%	82	8.4%	69	10.7%	322	8.4%
30年以上40年未満	109	15.5%	106	15.5%	117	14.4%	174	17.9%	128	19.9%	634	16.6%
40年以上50年未満	125	17.8%	144	21.1%	206	25.3%	196	20.1%	89	13.8%	760	19.9%
50年以上60年未満	101	14.3%	122	17.8%	133	16.4%	130	13.4%	60	9.3%	546	14.3%
60年以上	166	23.6%	148	21.6%	136	16.7%	181	18.6%	49	7.6%	680	17.8%
合計	704	100.0%	684	100.0%	813	100.0%	973	100.0%	643	100.0%	3,817	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=219.786 自由度=24 p=.000\* \* p<0.05

## エ 住宅の種類

住宅の種類を「持ち家（一戸建て）」「持ち家（分譲マンション）」「民間の賃貸住宅」「都営・区営住宅」「その他」の5つに分類し、地区別に見たものが表3-61である。なお表3-61については、クロス分析を行うにあたり、回答数の少なかった「都市再生機構（UR）等の公的賃貸住宅」「社宅・公務員住宅・管理人住宅」「高齢者用住宅・シルバーピア」を「その他」に含めている。

地区ごとに持ち家率を見ると、最も高いのは麻布地区で71.7%を占め、次いで高輪地区

（63.0%）、芝地区（54.4%）、赤坂地区（44.1%）と続き、最も低いのは芝浦港南地区で31.2%であった。また、芝浦港南地区は、持ち家のほとんどが分譲マンションで、一戸建てはわずか1.6%である。

都営・区営住宅に住む人の割合が最も高いのは芝浦港南地区（49.1%）、次いで赤坂地区（30.5%）であった。これは、港区内の都営・区営住宅の戸数が最も多い地区が芝浦港南地区であり、次いで赤坂地区が多いことと合致する。

表3-61 住宅種類×地区

住宅種類	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
持ち家（一戸建て）	134	18.9%	179	26.2%	118	14.3%	167	17.1%	10	1.6%	608	15.8%
持ち家（分譲マンション）	251	35.5%	311	45.5%	245	29.7%	448	45.9%	191	29.7%	1,446	37.7%
民間の賃貸住宅	121	17.1%	125	18.3%	108	13.1%	222	22.7%	36	5.6%	612	16.0%
都営・区営住宅	122	17.2%	20	2.9%	251	30.5%	89	9.1%	316	49.1%	798	20.8%
その他	80	11.3%	48	7.0%	102	12.4%	51	5.2%	91	14.1%	372	9.7%
合計	708	100.0%	683	100.0%	824	100.0%	977	100.0%	644	100.0%	3,836	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=772.425 自由度=16 p=.000\* \* p<0.05

居住する階を地区別に見たものが表3-62であり、居住階については、地区ごとに特徴が見受けられる。「1・2階」の居住者が多かったのは、麻布地区と高輪地区で、階が高くなるにつれて割合が低くなっている。特に麻布地区は、5地区の中で最も「1・2階」の回答割合が高く、「10階以上」の割合は最も低い。芝地区と赤坂地区は「3～5階」の割合が最も高かったが、赤坂地区の「10階

以上」の割合が5.1%と低いのに対し、芝地区の「10階以上」の回答割合は19.0%と高かった。最も特徴的だったのが芝浦港南地区で、「10階以上」に居住する割合が37.5%と非常に高い。「6～9階」の回答と合わせて見ると、芝浦港南地区のひとり暮らし高齢者の66.8%が6階以上の住宅に居住しているという結果になった。

表3-62 居住階×地区

居住階	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
1・2階	181	25.6%	307	45.0%	284	34.8%	419	43.1%	56	8.6%	1,247	32.6%
3～5階	203	28.7%	225	33.0%	300	36.8%	286	29.4%	159	24.5%	1,173	30.7%
6～9階	189	26.7%	120	17.6%	190	23.3%	176	18.1%	190	29.3%	865	22.6%
10階以上	134	19.0%	30	4.4%	42	5.1%	92	9.5%	243	37.5%	541	14.1%
合計	707	100.0%	682	100.0%	816	100.0%	973	100.0%	648	100.0%	3,826	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=615.295 自由度=12 p=.000\* \* p<0.05

### オ 本人・配偶者の最長職

本人及び配偶者の職業の種類を「自営業者・家族従業員」「公務員（教員含む）」「会社経営者・会社役員・団体役員」「勤労者（事務職）」「勤労者（生産現場・技術職）」「勤労者（販売・サービス業）」「臨時職・日雇い・パート・アルバイト・派遣職員」「自由業（執筆業、芸術関係）」「専業

主婦・専業主夫・無職」「その他」の10種類に分類し、地域別に見たものが表3-63、表3-64である。なおこれらの表は、クロス分析を行うにあたり、回答数の少なかった「医療・福祉従事者（看護師、保育士など）」「専門的技術的職業（医師、弁護士、研究者など）」「農林漁業」を「その他」に含めている。

表3-63 本人の最長職×地区

本人の最長職	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
自営業者・家族従業員	138	20.0%	139	21.1%	122	15.5%	143	14.9%	87	14.0%	629	16.9%
公務員（教員含む）	32	4.6%	25	3.8%	42	5.4%	53	5.5%	21	3.4%	173	4.7%
会社経営者・会社役員・団体役員	66	9.6%	60	9.1%	61	7.8%	69	7.2%	31	5.0%	287	7.7%
勤労者（事務職）	94	13.6%	78	11.8%	106	13.5%	151	15.8%	122	19.7%	551	14.8%
勤労者（生産現場・技術職：工員、運転手など）	41	5.9%	16	2.4%	21	2.7%	53	5.5%	43	6.9%	174	4.7%
勤労者（販売・サービス業：店員、外交員など）	63	9.1%	43	6.5%	70	8.9%	50	5.2%	63	10.2%	289	7.8%
臨時職・日雇い・パート・アルバイト・派遣職員	51	7.4%	25	3.8%	42	5.4%	55	5.7%	60	9.7%	233	6.3%
自由業（執筆業、芸術関係）	27	3.9%	41	6.2%	45	5.7%	32	3.3%	7	1.1%	152	4.1%
専業主婦・専業主夫・無職	131	19.0%	159	24.1%	181	23.1%	250	26.1%	112	18.1%	833	22.4%
その他	48	6.9%	74	11.2%	95	12.1%	102	10.6%	74	11.9%	393	10.6%
合計	691	100.0%	660	100.0%	785	100.0%	958	100.0%	620	100.0%	3,714	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=165.698 自由度=36 p=.000\* \* p<0.05

表3-64 配偶者の最長職×地区

配偶者の最長職	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
自営業者・家族従業員	134	27.5%	99	21.4%	83	15.9%	128	19.4%	92	20.1%	536	20.7%
公務員（教員含む）	23	4.7%	52	11.3%	62	11.9%	57	8.6%	30	6.6%	224	8.6%
会社経営者・会社役員・団体役員	80	16.4%	110	23.8%	92	17.7%	126	19.1%	39	8.5%	447	17.3%
勤労者（事務職）	55	11.3%	62	13.4%	82	15.7%	105	15.9%	74	16.2%	378	14.6%
勤労者（生産現場・技術職：工員、運転手など）	49	10.0%	30	6.5%	56	10.7%	74	11.2%	79	17.2%	288	11.1%
勤労者（販売・サービス業：店員、外交員など）	29	5.9%	12	2.6%	32	6.1%	25	3.8%	28	6.1%	126	4.9%
臨時職・日雇い・パート・アルバイト・派遣職員	12	2.5%	7	1.5%	4	.8%	11	1.7%	11	2.4%	45	1.7%
自由業（執筆業、芸術関係）	13	2.7%	17	3.7%	19	3.6%	20	3.0%	16	3.5%	85	3.3%
専業主婦・専業主夫・無職	55	11.3%	35	7.6%	52	10.0%	53	8.0%	40	8.7%	235	9.1%
その他	38	7.8%	38	8.2%	39	7.5%	62	9.4%	49	10.7%	226	8.7%
合計	488	100.0%	462	100.0%	521	100.0%	661	100.0%	458	100.0%	2,590	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=129.324 自由度=36 p=.000\* \* p<0.05

本人、配偶者の最長職を見ると、港区全体の特徴として、「自営業者・家族従業員」、「勤労者（事務職）」「会社経営者・会社役員・団体役員」の割合が高い。「本人の最長職」を地区ごとに見てみると、芝地区では「自営業者・家族従業員」が20.0%で最も高く、芝浦港南地区では「勤労者（事務職）」が19.7%で最も高い。麻布、赤坂、高輪の3地区では「専業主婦・専業主夫・無職」がそれぞれ24.1%、23.1%、26.1%で最も高かった。

また「配偶者の最長職」を見ると、港区全体の特徴が顕著に見られる。調査回答者の約8割が女性のため、「配偶者の最長職」の対象は主に男性と考えられるが、全体の38.0%が「自営業者・家族従業員」もしくは「会社経営者・会社役員・

団体役員」と回答している。地区ごとに見ていくと、芝、高輪、芝浦港南の3地区では「自営業者・家族従業員」が、それぞれ27.5%、19.4%、20.1%と最も高かったが、麻布地区と赤坂地区では「会社経営者・会社役員・団体役員」がそれぞれ23.8%、17.7%と最も高い。「会社経営者・会社役員・団体役員」については、芝浦港南地区が8.5%と他地区に比べて割合が低かった。

#### カ 地域についての困りごと

地域の困りごとの有無を地区ごとに見たものが表3-65であり、その地域の困りごとの内容を地区ごとに見たものが表3-66である。

地域の困りごとの有無を地区ごとに見ていく

表3-65 地域の困りごとの有無×地区

地域の困りごとの有無	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
困りごとがある	419	62.7%	390	61.5%	495	64.7%	522	56.1%	373	60.0%	2,199	60.8%
困りごとはない	249	37.3%	244	38.5%	270	35.3%	408	43.9%	249	40.0%	1,420	39.2%
合計	668	100.0%	634	100.0%	765	100.0%	930	100.0%	622	100.0%	3,619	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=14.758 自由度=4 p=.005\* \* p<0.05



と、「困りごとがある」と回答した割合が最も高かったのが、赤坂地区で64.7%であり、次いで芝地区が62.7%で高い。最も低かったのが高輪地区で56.1%であった。

表3-66 地域の困りごとの内容×地区

地域の困りごとの内容 (複数回答)	地区											
	芝地区 (n=419)		麻布地区 (n=390)		赤坂地区 (n=495)		高輪地区 (n=522)		芝浦港南地区 (n=373)		合計 (n=2,199)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
近所に銭湯がない	62	14.8%	67	17.2%	56	11.3%	96	18.4%	55	14.7%	336	15.3%
近所に外食する店がない	22	5.3%	25	6.4%	26	5.3%	62	11.9%	43	11.5%	178	8.1%
そばや寿司など店屋物 をとる店がない	38	9.1%	32	8.2%	29	5.9%	49	9.4%	72	19.3%	220	10.0%
近所に病院や診療所がない	11	2.6%	8	2.1%	25	5.1%	16	3.1%	62	16.6%	122	5.5%
近所にバスの停留所がない	27	6.4%	12	3.1%	11	2.2%	15	2.9%	16	4.3%	81	3.7%
近所に地下鉄・鉄道の 駅がない	9	2.1%	42	10.8%	15	3.0%	20	3.8%	54	14.5%	140	6.4%
訪問販売員が多い	28	6.7%	15	3.8%	26	5.3%	19	3.6%	35	9.4%	123	5.6%
防犯上の不安がある	71	16.9%	62	15.9%	64	12.9%	77	14.8%	55	14.7%	329	15.0%
振り込め詐欺など不審 な電話がある	58	13.8%	48	12.3%	50	10.1%	65	12.5%	34	9.1%	255	11.6%
物価が高い	227	54.2%	218	55.9%	305	61.6%	277	53.1%	160	42.9%	1,187	54.0%
地震などの防災対策に 不安がある	198	47.3%	153	39.2%	217	43.8%	231	44.3%	144	38.6%	943	42.9%
その他	33	7.9%	37	9.5%	31	6.3%	38	7.3%	35	9.4%	174	7.9%
合計	419	100.0%	390	100.0%	495	100.0%	522	100.0%	373	100.0%	2,199	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=360.921 自由度=48 p=.000\* \*p<0.05

地域の困りごととして、港区全体で最も多かったのが「物価が高い」で54.0%、次いで「地震などの防災対策に不安がある」で42.9%であった。この傾向は、全地区に共通して言える事項である。特に赤坂地区では「物価が高い」の回答割合が6割を超えている。

地区ごとに特徴を見てみると、芝浦港南地区で

は、近所に店舗、病院がないといった回答が多く見られ、また芝浦港南地区と麻布地区では「近所に地下鉄・鉄道の駅がない」という回答がそれぞれ14.5%、10.8%と、他の3地区（芝地区2.1%、赤坂地区3.0%、高輪地区3.8%）に比べて高かった。

## キ 主な外出手段

外出手段を地区別に見たものが表3-67である。

表3-67 外出時の主な交通手段×地区

外出時の主な交通手段	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
徒歩	189	27.7%	139	21.1%	192	24.4%	201	21.3%	120	18.9%	841	22.7%
自転車	55	8.1%	38	5.8%	25	3.2%	37	3.9%	40	6.3%	195	5.3%
バイク	1	0.1%	2	0.3%	2	0.3%	0	0.0%	5	0.8%	10	0.3%
電車	218	31.9%	148	22.5%	255	32.4%	250	26.5%	155	24.4%	1,026	27.7%
バス（ちいばす含む）	126	18.4%	235	35.7%	209	26.6%	329	34.9%	258	40.7%	1,157	31.2%
自家用車	23	3.4%	25	3.8%	23	2.9%	41	4.3%	18	2.8%	130	3.5%
その他	71	10.4%	72	10.9%	80	10.2%	85	9.0%	38	6.0%	346	9.3%
合計	683	100.0%	659	100.0%	786	100.0%	943	100.0%	634	100.0%	3,705	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=146.981 自由度=24 p=.000\* \* p < 0.05

芝地区では「徒歩」が27.7%、「自転車」が8.1%と他地区より高い一方、「バス」は18.4%と低く、5地区の中で唯一2割に満たなかった。

麻布地区、高輪地区、芝浦港南地区は「バス」の割合がもっとも高かった。特に芝浦港南地区は、「バス」の回答割合が40.7%と4割を超えている。

「電車」の割合が高かったのは芝地区と赤坂地区で3割を超えている一方、最も割合が低かったのは麻布地区で22.5%であった。

## ク 近所づきあい

近所づきあいについて地区別に見たものが表3-68である。近所づきあいの薄い人に着目するため、「あいさつをかわすくらい」と「まったくつきあいがなし」を合わせた割合を見ると、芝浦港南地区（34.6%）と赤坂地区（36.8%）が他の3地区（芝地区40.9%、麻布地区39.6%、高輪地区43.2%）よりも低い割合を示している。

表3-68 近所づきあいの程度×地区

近所づきあいの程度	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
互いの家をよく行き来するくらい	72	10.4%	44	6.6%	72	9.1%	72	7.7%	72	11.4%	332	8.9%
ときどき行き来するくらい	103	14.8%	125	18.9%	155	19.7%	181	19.3%	135	21.3%	699	18.8%
会ったときに世間話をするくらい	235	33.9%	231	34.9%	271	34.4%	279	29.8%	207	32.7%	1,223	32.9%
あいさつをかわすくらい	228	32.9%	223	33.7%	231	29.3%	350	37.4%	177	28.0%	1,209	32.6%
まったくつきあいがなし	56	8.1%	39	5.9%	59	7.5%	54	5.8%	42	6.6%	250	6.7%
合計	694	100.0%	662	100.0%	788	100.0%	936	100.0%	633	100.0%	3,713	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=42.138 自由度=16 p=.000\* \* p < 0.05

### ケ 家族・親族との行き来

最もよく行き来する家族・親族について地区別に見たものが表3-69である。この表によれば、どの地区も最も多い回答が「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」で、次いで多いのが「兄弟・姉妹」という傾向は変わらないが、赤坂地区の

「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」の回答割合（41.0%）が、他地区に比べやや低かった。

また「誰ともほとんど行き来がない」と回答した割合が最も高かったのは、芝浦港南地区で16.2%であった。

表3-69 もっともよく行き来する家族・親族×地区

もっともよく行き来する家族・親族	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	312	45.7%	308	47.9%	321	41.0%	408	43.7%	298	47.9%	1,647	44.9%
親	3	0.4%	6	0.9%	6	0.8%	7	0.7%	3	0.5%	25	0.7%
兄弟・姉妹	192	28.1%	170	26.4%	214	27.3%	266	28.5%	158	25.4%	1,000	27.3%
親戚	49	7.2%	59	9.2%	74	9.5%	82	8.8%	35	5.6%	299	8.2%
その他	33	4.8%	32	5.0%	55	7.0%	51	5.5%	27	4.3%	198	5.4%
誰ともほとんど行き来がない	94	13.8%	68	10.6%	113	14.4%	120	12.8%	101	16.2%	496	13.5%
合計	683	100.0%	643	100.0%	783	100.0%	934	100.0%	622	100.0%	3,665	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=31.563 自由度=20 p=.048\* \*p<0.05

### コ 緊急時の支援者の有無

緊急時の支援者の有無について地区別に見たものが表3-70である。「緊急時の支援者がいる」と回答した人が最も多かったのは麻布地区の86.3%

であった。一方「緊急時の支援者がいない」回答した人が最も多かったのは、20.5%の芝浦港南地区で、5地区のなかで唯一2割を超えている。

表3-70 緊急時の支援者の有無×地区

緊急時の支援者の有無	地区											
	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
いる	588	84.8%	572	86.3%	641	80.2%	782	82.9%	503	79.5%	3,086	82.7%
いない	105	15.2%	91	13.7%	158	19.8%	161	17.1%	130	20.5%	645	17.3%
合計	693	100.0%	663	100.0%	799	100.0%	943	100.0%	633	100.0%	3,731	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=16.256 自由度=4 p=0.003\* \*p<0.05

### 3 生活意識に関する分析

本調査では、ひとり暮らし高齢者が自身の生活に対してどのように感じているのかを把握するため、10項目の意識に関する調査項目を置いた。意

識については「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階で回答している（5件法）。ここでは、緊急時の支援者の有無や経済状況など、いくつかの生活上の諸条件ごとに、生活に関する意識の比較を行いたい。

## (1) 生活上の諸条件と意識

### ア 緊急時の支援者の有無と意識

まずは、緊急時の支援者の有無別に、10項目の意識の平均値を集計し、平均値の差の検定（t検定）を行った。表3-71は、意識の項目ごとに、緊急時の支援者がいるグループといないグループの平均値と標準偏差、平均値の標準誤差を表している。この表から、「今の暮らしには張り合いがある」の平均値は、緊急時の支援者が「いる」場合には2.47で、「いない」場合には2.87であることがわかる。調査票では、「とてもそう思う」は1、「まったくそう思わない」は5として5段階で尋ねていることから、この項目については、数が小さいほど「今の暮らしに張り合いがある」と感じ、大きいほど「そう思わない」すなわち「暮らしに張り合いがない」と感じていることを表す。この比較からは、平均値が2.47であった緊急時の支援者が「いる」グループの方が、「いない」グループ（平均値2.87）よりも暮らしに張り合いがあると感じている人が多いことが分かる。同様に、「生活は充実している」、「趣味をしている時間は楽しい」、「友人との関係に満足している」、「近所づきあいに満足している」、「自分は頼りにされて

いると思う」、「将来の生活は安心できる」の6項目については、数が小さいほど満足していたり、安心できるといったように、プラスの意識を示しており、それぞれの項目において緊急時の支援者が「いる」グループの方が、「いない」グループよりも平均値が低く、意識面で安定していることがうかがえる。

一方、「今の暮らしにはストレスが多い」については、数が小さいほど「そう思う」すなわち「ストレスが多い」と感じており、大きいほど「そう思わない」すなわち「ストレスがない」と感じていることを表す。緊急時の支援者が「いる」グループでは平均値は3.50であったが、「いない」グループでは平均値は3.13で、「いる」グループの方が平均値が高く、ストレスが少ないと感じていることが分かる。同様に、「生活していて不安や心配がある」、「周囲から取り残されたように感じる」の2項目についても、数が小さいほど不安や心配があるといったマイナスの意識で、数が大きいほどプラスの意識であることを示しており、緊急時の支援者が「いる」グループの方が、「いない」グループよりも平均値が高く、意識面で安定していることが分かる。

表3-71 緊急時の支援者の有無と意識（グループ統計量）

	緊急時の支援者の有無	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
今の暮らしには張り合いがある	いる	2867	2.47	0.995	0.019
	いない	594	2.87	1.124	0.046
今の暮らしにはストレスが多い	いる	2770	3.50	1.088	0.021
	いない	586	3.13	1.245	0.051
生活は充実している	いる	2849	2.44	0.984	0.018
	いない	584	2.90	1.109	0.046
生活していて不安や心配がある	いる	2819	3.00	1.155	0.022
	いない	598	2.63	1.269	0.052
趣味をしている時間は楽しい	いる	2621	1.95	0.989	0.019
	いない	539	2.23	1.074	0.046
友人との関係に満足している	いる	2807	2.07	0.952	0.018
	いない	562	2.72	1.149	0.048
近所づきあいに満足している	いる	2769	2.83	1.093	0.021
	いない	564	3.42	1.106	0.047
自分は頼りにされていると思う	いる	2788	2.96	1.098	0.021
	いない	570	3.42	1.189	0.050
周囲から取り残されたように感じる	いる	2772	3.87	0.903	0.017
	いない	578	3.62	1.016	0.042
将来の生活は安心できる	いる	2866	3.04	1.055	0.020
	いない	596	3.64	1.110	0.045

これらの平均値の差を検定したものが表3-72である。ここでは独立サンプルの平均値の差の検定（t検定）を行った。ここから「今の暮らしには張り合いがある」を取りあげて見てみよう。まず、平均値の差の検定を行う際の仮定である等分散の仮定を確認する。等分散性のための Levene の検定により、2つのグループにおいて分散が等しいという帰無仮説を検定したところ、有意確率が0.05以下であるために、等分散の仮定が満たされないことがわかった。そこで、表3-72の「2つの母平均の差の検定」では、「等分散を仮定しない」下段の数値を見ていく。緊急時の支援者が

「いる」グループと「いない」グループの平均値の差は-0.404であり、有意確率（p値）は0.000で、0.05以下であることから、2つのグループは母集団において有意な差があるということが出来る。

同様に、他の項目においても統計的有意差を確認することができた。

なお、今回は等分散の仮定が満たされなかったことから、ノンパラメトリック検定（Mann-Whitney 検定）も併せて行ったところ、t検定の結果と同様に2グループ間の有意差が認められた。

表3-72 緊急時の支援者の有無と意識（独立サンプルの検定）

	等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定							
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率(両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の95%信頼区間		
								下限	上限	
今の暮らしには張り合いがある	10.485	0.001	-8.797	3459	0.000	-0.404	0.046	-0.494	-0.314	
			-8.122	796.797	0.000	-0.404	0.050	-0.502	-0.306	
今の暮らしにはストレスが多い	20.067	0.000	7.173	3354	0.000	0.364	0.051	0.265	0.464	
			6.572	784.855	0.000	0.364	0.055	0.255	0.473	
生活は充実している	8.326	0.004	-10.147	3431	0.000	-0.464	0.046	-0.554	-0.374	
			-9.383	782.481	0.000	-0.464	0.049	-0.561	-0.367	
生活していて不安や心配がある	25.746	0.000	7.138	3415	0.000	0.378	0.053	0.274	0.482	
			6.714	819.824	0.000	0.378	0.056	0.267	0.488	
趣味をしている時間は楽しい	17.173	0.000	-5.740	3158	0.000	-0.273	0.047	-0.366	-0.179	
			-5.437	737.351	0.000	-0.273	0.050	-0.371	-0.174	
友人との関係に満足している	86.342	0.000	-14.257	3367	0.000	-0.651	0.046	-0.740	-0.561	
			-12.589	723.166	0.000	-0.651	0.052	-0.752	-0.549	
近所づきあいに満足している	5.553	0.019	-11.631	3331	0.000	-0.589	0.051	-0.688	-0.489	
			-11.538	802.604	0.000	-0.589	0.051	-0.689	-0.488	
自分は頼りにされていると思う	28.801	0.000	-8.880	3356	0.000	-0.455	0.051	-0.555	-0.354	
			-8.427	779.946	0.000	-0.455	0.054	-0.561	-0.349	
周囲から取り残されたように感じる	35.652	0.000	5.958	3348	0.000	0.252	0.042	0.169	0.334	
			5.516	778.350	0.000	0.252	0.046	0.162	0.341	
将来の生活は安心できる	21.954	0.000	-12.465	3460	0.000	-0.597	0.048	-0.691	-0.503	
			-12.052	833.194	0.000	-0.597	0.050	-0.695	-0.500	

## イ 正月三が日の過ごし方と意識

次に、正月三が日を「誰かと過ごした」場合と「ひとりで過ごした」場合の2つに分類した上で、それぞれ意識の平均値を集計し、平均値の差の検定（独立したサンプルのt検定）を行った。表3-73は意識についての10項目ごとに、正月を「誰かと過ごした」グループと「ひとりで過ごした」グループそれぞれの集計値を示したものである。この表から、「今の暮らしには張り合いがある」の平均値を比較すると、正月三が日を「誰かと過ごした」グループの平均値は2.39であり、正月三が日を「ひとりで過ごした」グループの平均値（2.85）よりも低く、前者の方が暮らしに張り合いがあると感じている人が多いことが分かる。同様に、「生活は充実している」、「趣味をしている時間は楽しい」、「友人との関係に満足している」、「近所づきあいに満足している」、「自分は頼りにされていると思う」、「将来の生活は安心できる」の6項目についても、正月三が日を「誰かと

過ごした」グループの方が、「ひとりで過ごした」グループよりも平均値が低く、意識面で安定していることがうかがえる。

一方、「今の暮らしにはストレスが多い」については、正月三が日を「誰かと過ごした」グループの平均値は3.51であり、「ひとりで過ごした」グループの平均値（3.27）よりも高く、ストレスが少ないと感じていることが分かる。同様に、「生活していて不安や心配がある」、「周囲から取り残されたように感じる」の2項目についても、正月三が日を「誰かと過ごした」グループの方が、「ひとりで過ごした」グループよりも平均値が高く、意識面で安定していることが分かる。t検定の結果についても（表3-74）、有意確率（p値）はすべての項目において0.05を下回り、統計的に有意であることが分かる。また、ノンパラメトリック検定（Mann-Whitney検定）についても有意差が認められた。

表3-73 正月三が日の過ごし方と意識（グループ統計量）

正月三が日の過ごし方	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
今の暮らしには張り合いがある	誰かと過ごした	2352	2.39	0.954
	ひとりで過ごした	1126	2.85	1.102
今の暮らしにはストレスが多い	誰かと過ごした	2261	3.51	1.079
	ひとりで過ごした	1109	3.27	1.189
生活は充実している	誰かと過ごした	2332	2.38	0.939
	ひとりで過ごした	1113	2.82	1.118
生活していて不安や心配がある	誰かと過ごした	2296	3.03	1.148
	ひとりで過ごした	1140	2.74	1.230
趣味をしている時間は楽しい	誰かと過ごした	2162	1.91	0.943
	ひとりで過ごした	1012	2.18	1.115
友人との関係に満足している	誰かと過ごした	2310	2.02	0.904
	ひとりで過ごした	1074	2.54	1.156
近所づきあいに満足している	誰かと過ごした	2270	2.77	1.060
	ひとりで過ごした	1080	3.26	1.162
自分は頼りにされていると思う	誰かと過ごした	2285	2.87	1.082
	ひとりで過ごした	1087	3.40	1.145
周囲から取り残されたように感じる	誰かと過ごした	2267	3.91	0.883
	ひとりで過ごした	1099	3.65	0.989
将来の生活は安心できる	誰かと過ごした	2339	3.01	1.046
	ひとりで過ごした	1142	3.44	1.117

表3-74 正月三が日の過ごし方と意識（独立サンプルの検定）

		等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率(両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の95%信頼区間	
									下限	上限
今の暮らしには張り合いがある	等分散を仮定する。	30.047	0.000	-12.501	3476	0.000	-0.455	0.036	-0.527	-0.384
	等分散を仮定しない。			-11.886	1956.788	0.000	-0.455	0.038	-0.530	-0.380
今の暮らしにはストレスが多い	等分散を仮定する。	18.440	0.000	5.849	3368	0.000	0.239	0.041	0.159	0.320
	等分散を仮定しない。			5.660	2022.771	0.000	0.239	0.042	0.156	0.322
生活は充実している	等分散を仮定する。	56.460	0.000	-12.196	3443	0.000	-0.444	0.036	-0.516	-0.373
	等分散を仮定しない。			-11.472	1885.101	0.000	-0.444	0.039	-0.520	-0.368
生活していて不安や心配がある	等分散を仮定する。	18.647	0.000	6.707	3434	0.000	0.286	0.043	0.202	0.369
	等分散を仮定しない。			6.553	2138.140	0.000	0.286	0.044	0.200	0.371
趣味をしている時間は楽しい	等分散を仮定する。	44.463	0.000	-7.150	3172	0.000	-0.273	0.038	-0.347	-0.198
	等分散を仮定しない。			-6.730	1710.800	0.000	-0.273	0.041	-0.352	-0.193
友人との関係に満足している	等分散を仮定する。	209.369	0.000	-14.247	3382	0.000	-0.521	0.037	-0.593	-0.450
	等分散を仮定しない。			-13.047	1706.726	0.000	-0.521	0.040	-0.600	-0.443
近所づきあいに満足している	等分散を仮定する。	29.975	0.000	-12.089	3348	0.000	-0.489	0.040	-0.568	-0.410
	等分散を仮定しない。			-11.703	1957.541	0.000	-0.489	0.042	-0.571	-0.407
自分は頼りにされていると思う	等分散を仮定する。	24.829	0.000	-13.030	3370	0.000	-0.529	0.041	-0.609	-0.450
	等分散を仮定しない。			-12.772	2030.810	0.000	-0.529	0.041	-0.611	-0.448
周囲から取り残されたように感じる	等分散を仮定する。	59.050	0.000	7.772	3364	0.000	0.262	0.034	0.196	0.329
	等分散を仮定しない。			7.474	1968.252	0.000	0.262	0.035	0.194	0.331
将来の生活は安心できる	等分散を仮定する。	51.275	0.000	-11.318	3479	0.000	-0.437	0.039	-0.513	-0.361
	等分散を仮定しない。			-12.052	833.194	0.000	-0.437	0.040	-0.515	-0.360

### ウ 年間収入と意識

年間収入については、「200万円未満」と「200万円以上」の2つに分類して、それぞれの意識の平均値を集計し、平均値の差の検定（独立したサンプルのt検定）を行った。表3-75は意識についての10項目ごとに、年間収入が「200万円未満」のグループと「200万円以上」のグループそれぞれの集計値を示したものである。この表から、「今の暮らしには張り合いがある」の平均値を比較すると、年間収入が「200万円以上」のグループの平均値は2.32であり、年間収入が「200万円未満」のグループの平均値（2.68）よりも低く、前者の方が暮らしに張り合いがあると感じている人が多いことが分かる。同様に、「生活は充実している」、「趣味をしている時間は楽しい」、「友人との関係に満足している」、「自分は頼りにされていると思う」、「将来の生活は安心できる」の5項目についても、年間収入が「200万円以上」のグ

ループの方が、「200万円未満」のグループの平均値よりも低いことが分かる。意識面で安定していることがうかがえる。

一方、「今の暮らしにはストレスが多い」については、年間収入が「200万円以上」のグループの平均値は3.57であり、年間収入が「200万円未満」のグループの平均値（3.33）よりも高く、ストレスが少ないと感じていることが分かる。同様に、「生活していて不安や心配がある」、「周囲から取り残されたように感じる」の2項目についても、年間収入が「200万円以上」のグループの方が、「200万円未満」のグループよりも平均値が高く、意識面で安定していることが分かる。

平均値の差の検定の結果については（表3-76）、有意確率（p値）は「近所づきあいに満足している」以外の9項目において0.05を下回り、統計的に有意であると認められる。また、ノンパラメトリック検定（Mann-Whitney検定）においても有

意差が認められた。

ただし、「近所づきあいに満足している」については、年間収入が「200万円以上」のグループの平均値2.92と、「200万円未満」のグループの平均値2.96とではほとんど差がない（平均値の差0.041）ことがわかる。ここでは、等分散性の仮定が満たされている（Levene 検定の有意確

率0.538）ことから、表3-76の上段の数値を見る。すると、2つのグループの平均値の差がほとんどなかったことから、2つの母平均の差についても、p 値が0.306で0.05を上回り、母集団において有意な差がないとする帰無仮説を棄却することができないことがわかる。

表3-75 年間収入と意識（グループ統計量）

年間収入 2 区分		N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
今の暮らしには張り合いがある	年間収入200万円未満	1768	2.68	1.037	0.025
	年間収入200万円以上	1416	2.32	0.952	0.025
今の暮らしにはストレスが多い	年間収入200万円未満	1722	3.33	1.142	0.028
	年間収入200万円以上	1387	3.57	1.072	0.029
生活は充実している	年間収入200万円未満	1757	2.71	1.029	0.025
	年間収入200万円以上	1416	2.27	0.933	0.025
生活していて不安や心配がある	年間収入200万円未満	1766	2.75	1.196	0.028
	年間収入200万円以上	1391	3.19	1.102	0.030
趣味をしている時間は楽しい	年間収入200万円未満	1597	2.08	1.042	0.026
	年間収入200万円以上	1326	1.90	0.941	0.026
友人との関係に満足している	年間収入200万円未満	1716	2.29	1.042	0.025
	年間収入200万円以上	1388	2.05	0.949	0.025
近所づきあいに満足している	年間収入200万円未満	1719	2.96	1.110	0.027
	年間収入200万円以上	1369	2.92	1.113	0.030
自分は頼りにされていると思う	年間収入200万円未満	1723	3.17	1.136	0.027
	年間収入200万円以上	1388	2.84	1.081	0.029
周囲から取り残されたように感じる	年間収入200万円未満	1723	3.74	0.948	0.023
	年間収入200万円以上	1383	3.96	0.877	0.024
将来の生活は安心できる	年間収入200万円未満	1781	3.40	1.086	0.026
	年間収入200万円以上	1410	2.85	0.990	0.026



表3-76 年間収入と意識（独立サンプルの検定）

		等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率(両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の95%信頼区間	
									下限	上限
今の暮らしには張り合いがある	等分散を仮定する。	20.804	0.000	10.228	3182	0.000	0.365	0.036	0.295	0.435
	等分散を仮定しない。			10.324	3122.772	0.000	0.365	0.035	0.295	0.434
今の暮らしにはストレスが多い	等分散を仮定する。	8.161	0.004	-5.959	3107	0.000	-0.239	0.040	-0.317	-0.160
	等分散を仮定しない。			-6.000	3034.977	0.000	-0.239	0.040	-0.317	-0.161
生活は充実している	等分散を仮定する。	37.689	0.000	12.508	3171	0.000	0.441	0.035	0.372	0.510
	等分散を仮定しない。			12.640	3127.306	0.000	0.441	0.035	0.373	0.509
生活していて不安や心配がある	等分散を仮定する。	15.175	0.000	-10.529	3155	0.000	-0.436	0.041	-0.517	-0.355
	等分散を仮定しない。			-10.632	3078.558	0.000	-0.436	0.041	-0.517	-0.356
趣味をしている時間は楽しい	等分散を仮定する。	9.893	0.002	4.788	2921	0.000	0.177	0.037	0.105	0.250
	等分散を仮定しない。			4.833	2900.177	0.000	0.177	0.037	0.105	0.249
友人との関係に満足している	等分散を仮定する。	45.402	0.000	6.693	3102	0.000	0.242	0.036	0.171	0.313
	等分散を仮定しない。			6.759	3058.529	0.000	0.242	0.036	0.172	0.312
近所づきあいに満足している	等分散を仮定する。	0.378	0.538	1.024	3086	0.306	0.041	0.040	-0.038	0.120
	等分散を仮定しない。			1.024	2930.544	0.306	0.041	0.040	-0.038	0.120
自分は頼りにされていると思う	等分散を仮定する。	5.248	0.022	8.174	3109	0.000	0.328	0.040	0.249	0.406
	等分散を仮定しない。			8.217	3024.227	0.000	0.328	0.040	0.249	0.406
周囲から取り残されたように感じる	等分散を仮定する。	37.477	0.000	-6.646	3104	0.000	-0.220	0.033	-0.285	-0.155
	等分散を仮定しない。			-6.703	3042.311	0.000	-0.220	0.033	-0.284	-0.156
将来の生活は安心できる	等分散を仮定する。	47.240	0.000	14.694	3189	0.000	0.547	0.037	0.474	0.620
	等分散を仮定しない。			14.852	3126.064	0.000	0.547	0.037	0.475	0.619

## エ 経済状況の感じ方と意識

経済状況について「余裕はあるが生活していくには困らない」と「やや余裕がある」、「かなり余裕がある」の3つを「生活には困らない・余裕がある」グループとし、「やや苦しい」、「とても苦しい」の2つを「苦しい」グループとして、大きく2つに分類した。その上で、それぞれ意識の平均値を集計し、平均値の差の検定を行った。表3-77は、意識についての10項目ごとに、経済状況が「生活には困らない・余裕がある」と感じているグループと、「苦しい」と感じているグループの集計を示したものである。この表から、「今の暮らしには張り合いがある」の平均値を比較すると、「生活には困らない・余裕がある」と感じているグループの平均値は2.39であり、経済状況を「苦しい」と感じているグループの平均値(3.02)よりも低く、前者の方が暮らしに張り合いがあると感じている人が多いことが分かる。同様に、

「生活は充実している」、「趣味をしている時間は楽しい」、「友人との関係に満足している」、「近所づきあいに満足している」、「自分は頼りにされていると思う」、「将来の生活は安心できる」の6項目についても、「生活には困らない・余裕がある」と感じているグループの方が、経済状況を「苦しい」と感じているグループよりも平均値が低く、意識面で安定していることがうかがえる。

一方、「今の暮らしにはストレスが多い」については、「生活には困らない・余裕がある」と感じているグループの平均値は3.56であったが、経済状況が「苦しい」と感じているグループの平均値(2.98)よりも高く、ストレスが少ないと感じていることが分かる。同様に、「生活していて不安や心配がある」、「周囲から取り残されたように感じる」の2項目についても、「生活には困らない・余裕がある」と感じているグループの方が、経済状況が「苦しい」と感じているグループより

も平均値が高い。特に、「将来の生活は安心できる」の平均値については、「生活には困らない・余裕がある」グループの平均値は2.91であったのに対し、経済状況が「苦しい」と感じているグループの平均値は4.01で、両者の差は他の項目に比べて高かった。「生活には困らない・余裕がある」グループの方が、意識面が安定していること

が分かる。

平均値の差の検定の結果についても、有意確率（p値）はすべての項目において0.05を下回り、統計的に有意であることが分かる（表3-78）。また、ノンパラメトリック検定（Mann-Whitney検定）の結果からも有意差が認められた。

表3-77 経済状況の感じ方と意識（グループ統計量）

経済状況 2 区分		N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
今の暮らしには張り合いがある	生活には困らない・余裕がある	2597	2.39	0.959	0.019
	苦しい	768	3.02	1.090	0.039
今の暮らしにはストレスが多い	生活には困らない・余裕がある	2525	3.56	1.066	0.021
	苦しい	746	2.98	1.185	0.043
生活は充実している	生活には困らない・余裕がある	2587	2.33	0.910	0.018
	苦しい	754	3.18	1.098	0.040
生活していて不安や心配がある	生活には困らない・余裕がある	2539	3.14	1.107	0.022
	苦しい	789	2.27	1.163	0.041
趣味をしている時間は楽しい	生活には困らない・余裕がある	2389	1.92	0.948	0.019
	苦しい	687	2.27	1.143	0.044
友人との関係に満足している	生活には困らない・余裕がある	2534	2.09	0.952	0.019
	苦しい	747	2.52	1.143	0.042
近所づきあいに満足している	生活には困らない・余裕がある	2505	2.85	1.080	0.022
	苦しい	747	3.20	1.185	0.043
自分は頼りにされていると思う	生活には困らない・余裕がある	2526	2.93	1.087	0.022
	苦しい	752	3.41	1.180	0.043
周囲から取り残されたように感じる	生活には困らない・余裕がある	2517	3.91	0.885	0.018
	苦しい	752	3.55	1.003	0.037
将来の生活は安心できる	生活には困らない・余裕がある	2592	2.91	0.971	0.019
	苦しい	778	4.01	1.015	0.036

表3-78 経済状況の感じ方と意識（独立サンプルの検定）

	等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定							
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の95%信頼区間		
								下限	上限	
今の暮らしには張り合いがある	7.375	0.007	-15.542	3363	0.000	-0.632	0.041	-0.712	-0.553	
			-14.507	1141.279	0.000	-0.632	0.044	-0.718	-0.547	
今の暮らしにはストレスが多い	4.769	0.029	12.897	3269	0.000	0.588	0.046	0.499	0.677	
			12.180	1125.172	0.000	0.588	0.048	0.493	0.683	
生活は充実している	61.819	0.000	-21.529	3339	0.000	-0.852	0.040	-0.929	-0.774	
			-19.442	1072.475	0.000	-0.852	0.044	-0.937	-0.766	
生活していて不安や心配がある	0.715	0.398	19.057	3326	0.000	0.871	0.046	0.781	0.960	
			18.569	1263.184	0.000	0.871	0.047	0.779	0.962	
趣味をしている時間は楽しい	61.861	0.000	-8.195	3074	0.000	-0.353	0.043	-0.437	-0.268	
			-7.394	973.198	0.000	-0.353	0.048	-0.446	-0.259	
友人との関係に満足している	94.206	0.000	-10.308	3279	0.000	-0.428	0.042	-0.510	-0.347	
			-9.337	1069.034	0.000	-0.428	0.046	-0.519	-0.338	
近所づきあいに満足している	25.781	0.000	-7.642	3250	0.000	-0.352	0.046	-0.442	-0.262	
			-7.270	1140.725	0.000	-0.352	0.048	-0.447	-0.257	
自分は頼りにされていると思う	39.774	0.000	-10.288	3276	0.000	-0.474	0.046	-0.564	-0.384	
			-9.842	1156.381	0.000	-0.474	0.048	-0.568	-0.379	
周囲から取り残されたように感じる	48.371	0.000	9.591	3267	0.000	0.364	0.038	0.290	0.439	
			8.965	1122.633	0.000	0.364	0.041	0.284	0.444	
将来の生活は安心できる	2.064	0.151	-27.341	3368	0.000	-1.097	0.040	-1.176	-1.018	
					0.000	-1.097	0.041	-1.178	-1.016	

### オ 住宅の種類と意識

住宅の種類を、「民間の賃貸住宅」と「都営・区営住宅」、「民間賃貸・都営・区営以外（持ち家・その他）」の3つに分類してその違いを見た。住宅の種類ごとに意識についての10項目の平均値を集計し、その差の検定をするために分散分析を行った。表3-79は統計量を、表3-80は等分散性の検定結果を、表3-81は分散分析の結果を示している。

表3-79から、住宅の種類別に「今の暮らしには張り合いがある」の平均値を比較すると、「民間賃貸・都営・区営以外（持ち家・その他）」の平均値は2.43、「民間の賃貸住宅」の平均値は2.77、

「都営・区営住宅」の平均値は2.71で、住宅の種類によって意識に差があることが分かる。グループ間の差を検定するため、まず等分散性の検定を行った（表3-80）。その結果、「今の暮らしにはストレスが多い」以外は、等分散性の仮定が満たされないことがわかる。次に、分散分析を行った結果、p値は0.05を下回っていることから、グループ間の平均値には有意な差があると判断することができる。このことから、住宅の種類によって意識に差があることが分かった。また、等分散性の仮定が満たされないことから、ノンパラメトリック検定を行った結果、全ての項目について有意な差が認められた。

表3-79 住宅の種類と意識（統計量）

		度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間	
						下限	上限
今の暮らしには張り合いがある	民間賃貸・都営・区営以外	2247	2.43	0.972	0.021	2.39	2.47
	民間の賃貸住宅	540	2.77	1.173	0.050	2.67	2.87
	都営・区営住宅	727	2.71	1.028	0.038	2.63	2.78
	合計	3514	2.54	1.027	0.017	2.51	2.58
今の暮らしにはストレスが多い	民間賃貸・都営・区営以外	2186	3.47	1.110	0.024	3.42	3.51
	民間の賃貸住宅	516	3.28	1.189	0.052	3.18	3.38
	都営・区営住宅	704	3.42	1.115	0.042	3.34	3.51
	合計	3406	3.43	1.125	0.019	3.39	3.47
生活は充実している	民間賃貸・都営・区営以外	2236	2.41	0.963	0.020	2.37	2.45
	民間の賃貸住宅	534	2.81	1.166	0.050	2.71	2.91
	都営・区営住宅	716	2.69	1.028	0.038	2.61	2.76
	合計	3486	2.53	1.023	0.017	2.49	2.56
生活していて不安や心配がある	民間賃貸・都営・区営以外	2202	3.03	1.155	0.025	2.98	3.08
	民間の賃貸住宅	542	2.69	1.240	0.053	2.59	2.79
	都営・区営住宅	726	2.82	1.195	0.044	2.73	2.91
	合計	3470	2.93	1.184	0.020	2.89	2.97
趣味をしている時間は楽しい	民間賃貸・都営・区営以外	2066	1.94	0.957	0.021	1.90	1.98
	民間の賃貸住宅	482	2.20	1.165	0.053	2.09	2.30
	都営・区営住宅	655	2.04	1.026	0.040	1.96	2.12
	合計	3203	2.00	1.009	0.018	1.97	2.04
友人との関係に満足している	民間賃貸・都営・区営以外	2192	2.12	0.967	0.021	2.08	2.16
	民間の賃貸住宅	518	2.32	1.117	0.049	2.23	2.42
	都営・区営住宅	707	2.29	1.068	0.040	2.21	2.37
	合計	3417	2.19	1.016	0.017	2.15	2.22
近所づきあいに満足している	民間賃貸・都営・区営以外	2174	2.92	1.097	0.024	2.88	2.97
	民間の賃貸住宅	496	3.10	1.227	0.055	2.99	3.21
	都営・区営住宅	715	2.84	1.084	0.041	2.76	2.92
	合計	3385	2.93	1.117	0.019	2.89	2.97
自分は頼りにされていると思う	民間賃貸・都営・区営以外	2179	2.96	1.089	0.023	2.91	3.00
	民間の賃貸住宅	517	3.16	1.229	0.054	3.06	3.27
	都営・区営住宅	712	3.22	1.138	0.043	3.13	3.30
	合計	3408	3.04	1.127	0.019	3.01	3.08
周囲から取り残されたように感じる	民間賃貸・都営・区営以外	2175	3.87	0.917	0.020	3.83	3.90
	民間の賃貸住宅	516	3.72	1.002	0.044	3.63	3.80
	都営・区営住宅	711	3.80	0.902	0.034	3.74	3.87
	合計	3402	3.83	0.929	0.016	3.80	3.86
将来の生活は安心できる	民間賃貸・都営・区営以外	2241	3.01	1.025	0.022	2.96	3.05
	民間の賃貸住宅	545	3.51	1.187	0.051	3.41	3.61
	都営・区営住宅	729	3.34	1.099	0.041	3.26	3.42
	合計	3515	3.15	1.086	0.018	3.12	3.19

表3-80 等分散性の検定

	Levene 統計量	自由度 1	自由度 2	有意確率
今の暮らしには張り合いがある	19.775	2	3511	0.000
今の暮らしにはストレスが多い	2.622	2	3403	0.073
生活は充実している	21.746	2	3483	0.000
生活していて不安や心配がある	9.358	2	3467	0.000
趣味をしている時間は楽しい	23.295	2	3200	0.000
友人との関係に満足している	26.847	2	3414	0.000
近所づきあいに満足している	8.531	2	3382	0.000
自分は頼りにされていると思う	16.246	2	3405	0.000
周囲から取り残されたように感じる	9.244	2	3399	0.000
将来の生活は安心できる	40.422	2	3512	0.000

表3-81 住宅の種類と意識（分散分析）

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
今の暮らしには張り合いがある	グループ間	75.073	2	37.537	36.292	0.000
	グループ内	3631.361	3511	1.034		
	合計	3706.434	3513			
今の暮らしにはストレスが多い	グループ間	14.341	2	7.170	5.682	0.003
	グループ内	4294.107	3403	1.262		
	合計	4308.447	3405			
生活は充実している	グループ間	92.471	2	46.235	45.328	0.000
	グループ内	3552.706	3483	1.020		
	合計	3645.176	3485			
生活していて不安や心配がある	グループ間	62.078	2	31.039	22.405	0.000
	グループ内	4803.007	3467	1.385		
	合計	4865.085	3469			
趣味をしている時間は楽しい	グループ間	26.854	2	13.427	13.293	0.000
	グループ内	3232.146	3200	1.010		
	合計	3259.000	3202			
友人との関係に満足している	グループ間	26.831	2	13.415	13.093	0.000
	グループ内	3498.164	3414	1.025		
	合計	3524.994	3416			
近所づきあいに満足している	グループ間	20.771	2	10.386	8.365	0.000
	グループ内	4198.737	3382	1.241		
	合計	4219.508	3384			
自分は頼りにされていると思う	グループ間	44.487	2	22.243	17.679	0.000
	グループ内	4283.999	3405	1.258		
	合計	4328.486	3407			
周囲から取り残されたように感じる	グループ間	10.231	2	5.116	5.950	0.003
	グループ内	2922.226	3399	0.860		
	合計	2932.458	3401			
将来の生活は安心できる	グループ間	144.728	2	72.364	63.540	0.000
	グループ内	3999.698	3512	1.139		
	合計	4144.426	3514			

(2) 住宅の種類と意識の関連性

(1) オの結果を受けて、住宅の種類別（3分類）にそれぞれの意識の差を比較したものを図で

図3-62 今の暮らしには張り合いがある

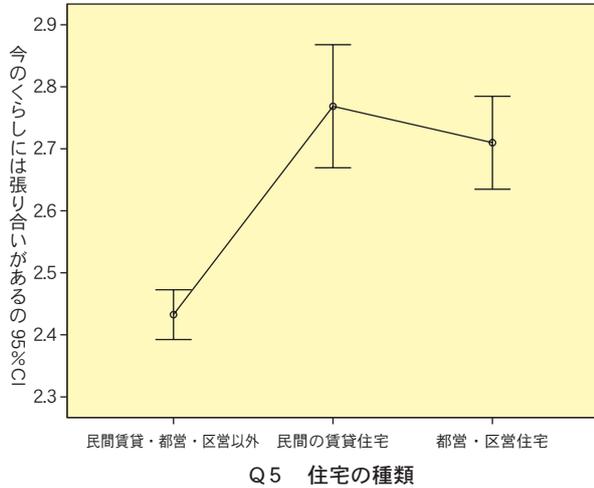


図3-63 今の暮らしにはストレスが多い

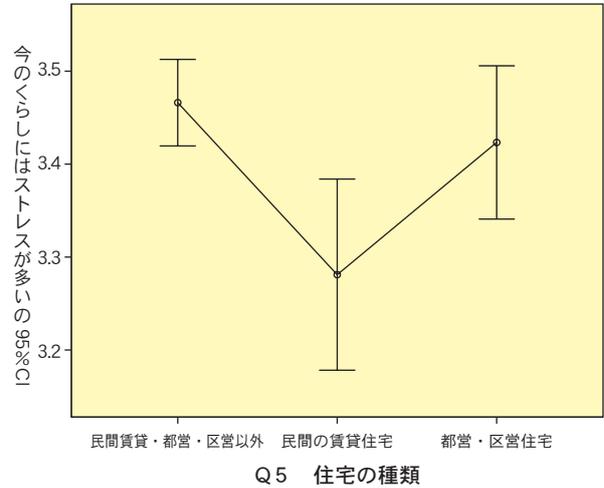


図3-64 生活は充実している

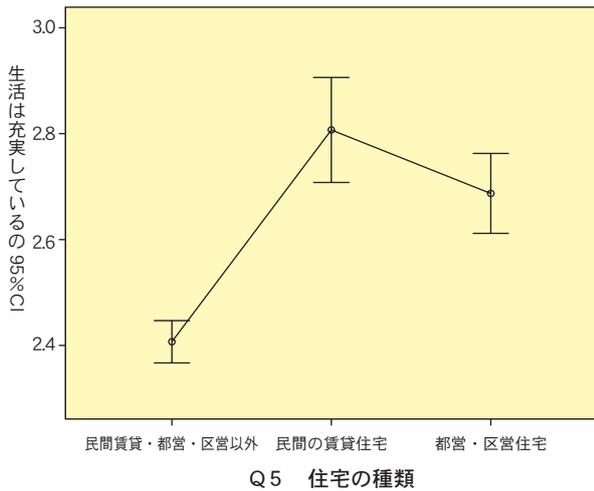


図3-65 生活していて不安がある

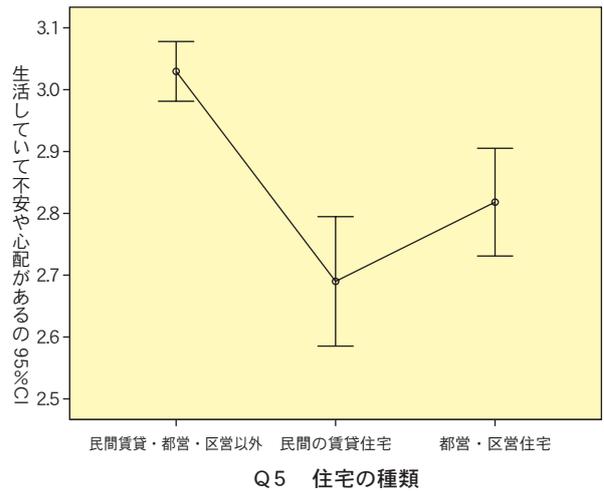


図3-66 趣味をしている時間は楽しい

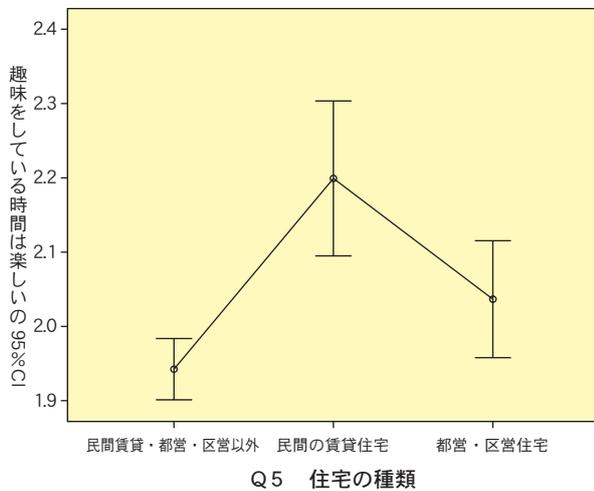


図3-67 友人との関係に満足している

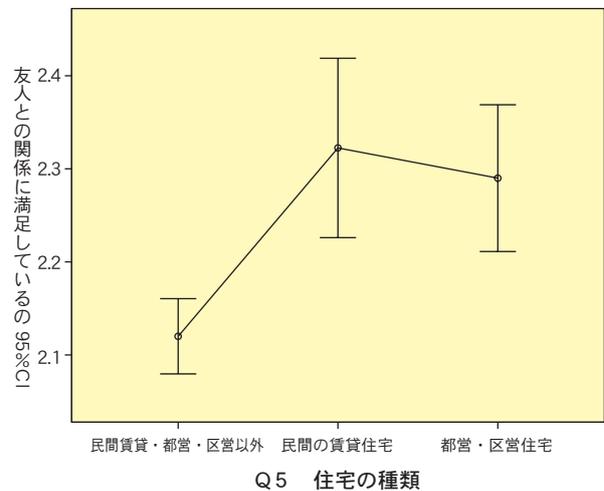


図3-68 近所づきあいに満足している

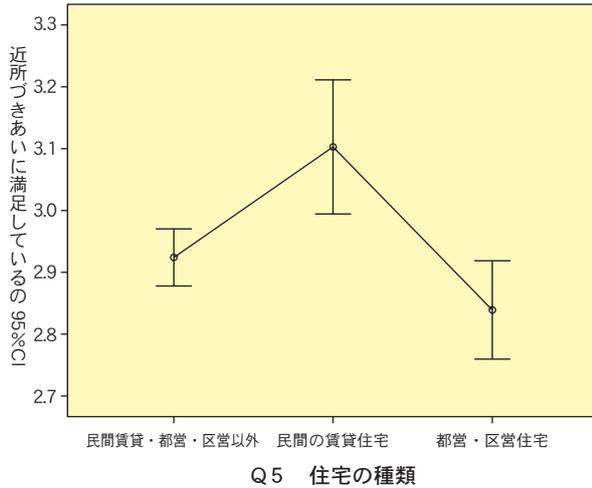


図3-69 自分は頼りにされていると思う

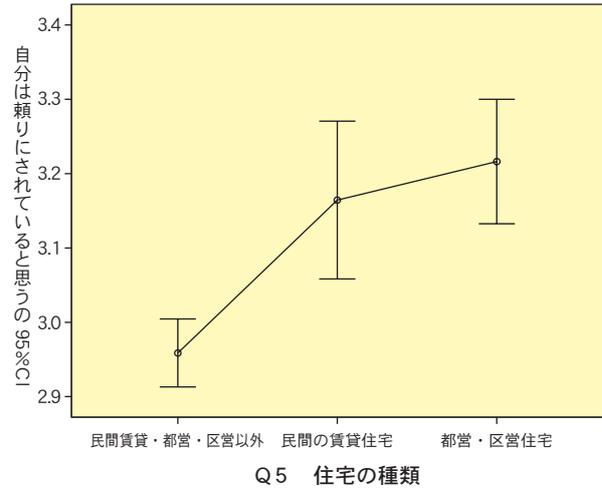


図3-70 周囲から取り残されたように感じる

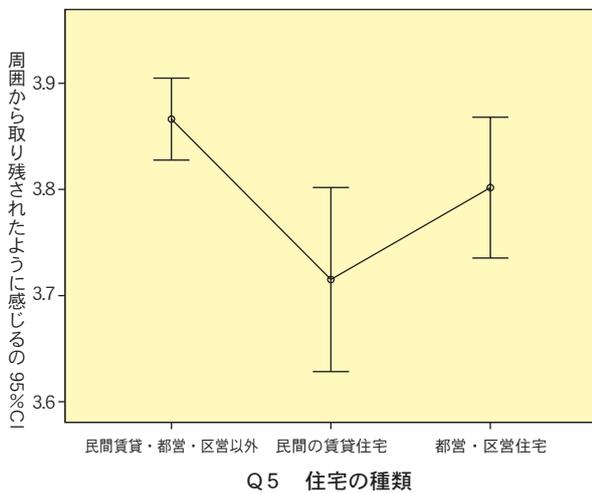
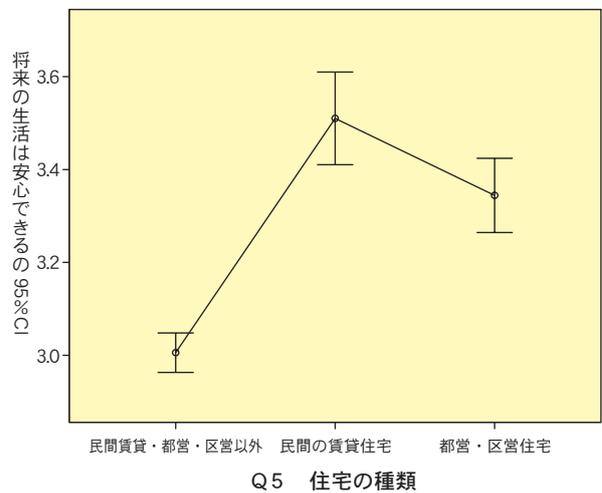


図3-71 将来の生活は安心できる



表したものが図3-62から図3-71である。

例えば、図3-62「今の暮らしには張り合いがある」の場合には、値が高ければ、張り合いがないと感じていることを示している。「民間賃貸住宅」に居住する人と「都営・区営住宅」に居住する人は、「民間賃貸・都営・区営以外（持ち家・その他）」に居住する人に比べて、平均値が高く、暮らしに張り合いがないと感じる傾向にあることが分かる。また、平均値から上下に伸びたバーの95%信頼区間において、「民間賃貸・都営・区営以外（持ち家・その他）」のカテゴリは、他のカテゴリと重なり合わないことから、有意に差があると考えられる。多重比較の検定（Bonferroni法）においては、5%水準で有意な差があることが分かっている。

同様に、図3-63「今の暮らしにはストレスが多い」の場合には、値が高いと「そう思わない」すなわちストレスは少ないと感じており、値が低いと「そう思う」すなわちストレスが多いと感じていることを示す。「民間賃貸住宅」に居住する人は、ストレスが多いと感じていることが分かる。

これらの図から、「自分は頼りにされていると思う」を除いた9つの意識のどれもにおいて、「民間賃貸住宅」に居住する人の平均値が最も低いまたは高い値を示していることが分かる。生活への充実感が乏しく、周囲から取り残されたように感じており、友人・近隣との付き合いへの満足感が低いことを示している。

また、「近所づきあいに満足している」においては、「都営・区営住宅」に居住する人の平均

値が最も低く、満足感が高いことが分かっている。一方、「自分は頼りにされていると思う」については、「都営・区営住宅」に居住する人が最も「そう思わない」すなわち、頼りにされていないと感じていることが分かる（図3-69）。

将来の生活に対し、最も安心感があるのは「民間賃貸・都営・区営以外（持ち家・その他）」に居住する人である（図3-71）。「民間賃貸・都営・区営以外（持ち家・その他）」に居住する人は、どの項目でも安心感があり、充実していると感じていることが分かる。

以上のことより、住宅の種類と生活意識には関連があると言えるだろう。

#### 4 自由回答

##### (1) 買い物について普段感じていることの内容 ア 内容について

問17で「買い物について普段感じていること」について自由に記入する欄（問17 買い物について普段感じていることをご自由にお書きください。）を設けた。この自由記述の回答者は1,268人で全体の3割程度を占めている。

##### イ 内容の分類項目とケース数

項目ごとに分類した内容について、その分類における項目とケース数を示す。なお、回答者は1,268人であるが、1人の回答が複数の分類でカウントされている場合も存在するため、ケース数の合計と回答者数は一致しない。

「買い物について普段感じていること」の分類項目とケース数

分類項目	ケース数
「お店（店がない、店があって便利、など）」に関する意見	406
「生協など配達を利用している」という意見	136
「重いもの」に関する意見	129
「価格、物価が高い」という意見	124
「買い物時に利用する交通手段」に関する意見	95
「買い物や外出、外出時の歩行や身体状況」に関する意見	68
「1人用（少量パック）・高齢者用などの商品が欲しい」という意見	61
「ヘルパーや家族に買い物を頼んでいる」という意見	61
「品揃え」に関する意見	59
「運動や健康のために買い物に行く」という意見	59
「将来の不安」に関する意見	38
「買い物が楽しみ」という意見	14
その他の意見	135

##### ウ 具体的な内容（抜粋）

分類項目のうち、ケース数で上位5位までの項目の中で代表的なものを下記のとおり掲載する。なお、極力、回答者が記述した原文のまま記載している。

また、「お店（店がない、店があって便利、など）」に関する意見、「買い物時に利用する交通手段」に関する意見については、居住地区と関わりが深い事項であるので、回答者の居住地区についても掲載している。



## 「お店（店がない、店があって便利、など）」に関する意見

性別	年齢	地区	内容
女性	89	芝	私の住んでいる新橋附近はスーパーがなくコンビニストアが色々あり生鮮食品も多少はありますが、やはり不便でございます。
男性	70		新橋のスーパーが小さくなり、必要な品が入手できない。その前に、芝公園のスーパーがなくなって困った。
女性	77		芝4丁目に住んでいますが、商店街の変化が著しく、昔あったお店がなくなり殆度、電車（シルバーパス）を利用して三田線→高島平近くの新沼まで40分要して野菜を一週間分買って来ます。肉、魚、等は築地まで行くようにしています。果物、納豆、豆フ、などは近くの店で、日用雑貨なども近くの店で買います。重たい物はリュック、又はカートで用事をして居ります。
女性	71		三田駅、田町駅の駅ビルに毎日食べるフードショップがないので通勤途上の品川駅や蒲田駅の駅ビルの豊富なお店に寄って、買ってきています。その意味で田町駅は田舎の駅の様です。年寄りが外に出て、目で見て選んでショッピングを楽しめると、ボケもすすまないかと思えます。
女性	69		スーパーマーケットに買い物に行くのに約10分かかります。去年のように夏の暑い日が続いた時に不便を感じました。買い物だけでも支援して頂きたいと思えます。
女性	67	麻布	十番に近い住まいは、品物によりスーパーや商店を選べる自由があり便利です。
女性	73		私のマンションは近くに明治屋、ナショナルスーパー、広尾商店街等があり、とても便利なので困ることはないです。
女性	80		(旧)本村町に住んで居ますが商店が（お花やさんを除いて）全部なくなりました。
女性	66		西麻布1丁目には、生活必需品を販売している店としては、スーパーマーケットが1件あるのみです（コンビニを除く）。この店にないものは麻布十番又は広尾商店街まで買いに行かなければなりません。せめて西麻布十番商店街間をちいバスが運行してくれたら、もっと生活がしやすくなるのですが。少量のものをインターネットで購入すると、コストが高くなり不経済です。
女性	86		おみせの人は親切で配達もして下さるので、その点は良いのですが、歩いて20分片道かかるので、買いに行く事そのことが大変である。まだ杖はついていないけど、いつまごついて倒れるのかと、いつも気にしながら歩いている。体力の低下と共に精神的にも非常にストレスになっていて、これが世にいう老人の悲哀というものかなあと感じています。
女性	80	赤坂	赤坂、乃木坂は生活用品のスーパー、店が少ない。とくに生鮮食品の店が少なく、一週間分購入の場合はタクシーを利用する不便さがある。住みはじめた時より、オフィスビルが多く、住み人にとってはなにかと不便。但し外出には便利であり、自分宅なので、ここで一生を終えるつもりです（自活できる間は）。
女性	80		都心に住むのは、交通の便利さで、腰・膝痛で杖を使用して、バスを使って毎日買い物です。運動のためと思い毎日行きますが、お店が少ない事と、港区内でも青山地区は、一番物価が高いと感じます。商店が皆ビル群になり、昔の青山と全く異なりました。他地区のアーケードのある商店街等に行くと安いなと、つくづく感じます。
女性	71		日常の買い物はスーパーで間に合わせていますが、小売の商店が全くといっていいほどなくなってしまったのはさびしい残念（仕方がないのかもしれませんが）。
男性	77		近くのスーパーで買い物をするのがほとんど。専門店（八百屋、魚屋も含めて）がないので結局スーパーになってしまう。特に地域性もあるのだろうが、男性用の品物（例えば衣料など）が極端に少ない。
女性	88		現在の住居になってからは、近隣に店がないので、10年近く長女に頼んでいる。

男性	89		近くにスーパーが有り大変便利をして居ます。広島に自宅がありますがこちらが気に入り永住する積りです。
女性	80		歩いて三分のところの大型スーパーがあり、重いものはショッピング・カート（他は自分で）で運んでいます。ただし、小売店がなくなり（電気店、文房具店、時計、眼鏡屋など）、不便です。震災以後、外出はタクシーを利用しています。
女性	76		高輪4丁目はコンビニのみ（種類がないので不便）、坂が多いので大変。
女性	76	高輪	以前は、高輪台駅の近くに色々の商店がありスーパーもありましたが、みななくなり、マンションだけが出来て近所の皆様ほとんどの方が日常の生活用品には、バスなど利用で大変不便になりました。商店がなくなり、その場所に背の高いマンション等ばかり出来て、高輪台近くは人の波の流れが変わって来ました。近所に品数、品質の良いスーパーが出来ると町も元気になるし私共老人たちも助かりますが夢でしょうね・・・。
女性	67		地域柄、店が限定されて物の豊富さや安価にはえんがない
男性	77		芝浦三丁目に住んで居ます。近くに大きな食品スーパーマーケット、薬局（12時間営業）24時間営業のコンビニ多数、買い物は便利で幸せです。
女性	78		10年以上前は店舗もなく（スーパー・コンビニ）毎日の買物に不便だったがこの頃は都バスも家の前から出るミニバスもあり、住宅内に風呂もあり50年前に住んでいた時の事がウソの様に思う。健康で毎日を趣味や友達との食事会などで楽しく過ぎてとても幸せに感じてます。
男性	72	芝浦港南	台場地区において、食料外の店がないので不便であり、バスにて浜松町に行っても一般の店舗がほとんどなく、困っております。田町までの交通の便があれば助かると思っております。
男性	88		別になし。台場も当初より商店も増えよくなった。
女性	73		食料品はありますが衣料品店がない。高級品（専門店はあります）は品川駅構内にはありますけど。

#### 「生協など配達を利用している」という意見

性別	年齢	内容
女性	86	近くにスーパーがないので少し不便ですが、車で売りに来るヤオヤさんが週に3回位来ますので重い物等は間に合います。只生物や家庭の食料以外の物は困ります。前に生協に入った事もありますがメンドウになり止めました。牛乳は取っています。
女性	75	現在のところ健康なので買いものに行きます。重いもの（水・お米・ビールなど）はインターネットで配達してもらっています。ひとり暮らしだとスーパーなど単位が（ひと袋）大きいのでムダが出てしまう。
女性	81	以前生協で1週間に1回買物配達をお願いしていましたが、港区のおむすびサービスのお弁当を1日、1食いただけるようになりましたので、生協はやめました。スーパーに比べて重いものは200円の配送費を出して依頼しております。
男性	76	我が団地の広場に八百屋さんが来る。いつのまにか顔見知りの人達が集まり、会話をかわすことにより、老人にとっては、いい社交の場になっている。コミュニケーションは、最も重要なことだ！
女性	76	重いものはまとめて、配達してもらえスーパーで購入している。なじみの個人商店が年々無くなるのは不便であり、淋しい。

## 「重いもの」に関する意見

性別	年齢	内容
女性	77	品物を、持ち歩く事が、つらいので手押し車を利用している。
女性	77	古い都営ですので3階まで重たくて腰がいたく大変です。
女性	79	液体類をまとめて買うと重くて、何時まで出来るのかなと時々心配になる。
女性	79	重い荷物が、だんだんもてなくなりました。リュックとか、ショッピングカーなどを利用することが多い。牛乳1リットルでも、手で下げてもちたくない。
無回答	無回答	食料品の買物は重たいので、73歳の私はかなり大変な毎日を感じている。このアパートは都営住宅で高台にあって、坂へと階段が100段もあるので日々苦勞を感じる。

## 「価格、物価が高い」という意見

性別	年齢	内容
男性	78	港区の普通の品物は高いので戸越銀座とかアメ横あたりまで電車で行くが、脚が悪いので1人で行くのが大変（週1回位）。
女性	71	六本木7丁目周辺は個人商店がなく、スーパーは高く困ります。野菜等は約2倍位高いと感じます（近効）。
女性	83	青山という街は物価高すぎると思う。年金だけでやっていくには毎日が心細い限りです。だから買物は娘の処へ遊びに行った帰りに大きなリュックに沢山つめこんで汗びっしょりになりながら杖を頼りに帰ってきます。お米は買わなくても娘から2合とか3合貰って来ます。いずれにしても物価下げて欲しいと思う。
男性	82	高輪地区は物価高く態々遠方の地迄交通機関利用し買物に行くのが大変。
無回答	無回答	年金生活で生活費が足りなく食品期限がせまった割引品を求めていますがお台場は商品が高く困ります。

## 「買い物時に利用する交通手段」に関する意見

性別	年齢	地区	内容
女性	75	芝	近くにコンビニしかありません。バスで買物に行こうと思っても1時間1回しか来ません。せめてミニバスが来てくれれば良いなあと常々思っています。
女性	76		大江戸線にて、築地にて買物している。セカンドハウスと半々の生活。
男性	79		自転車で行っていますが、バランスが悪く歩行者との関係で危険を感じています。
女性	70	麻布	坂の町なので「ちいばす」を利用できるのでとても助かります。
女性	80		広尾か十番へ買物に行きますが、どちらも、帰りは坂を荷物を持って昇らなければなりません。最近「ちいばす」のおかげでとても助かって居ます。尚もしくらやみ坂を「ちいばす」が昇って下さったら有難いと願って居ります。
女性	82		足が悪い為、買い物に困っている。外出はタクシー以外、外出困難。ここに暮らして、一番困っている事が買物が出来ない事、コンビニ以外ない。
女性	78	赤坂	幸い、繁華街に近いし、交通の便もよいのでありがたく思っている。しかし、じゃが芋や大根の重いものを運ぶ時は、自転車を利用するが最近危くなり慎重に用心している。
女性	76		新聞の朝刊をとっていないため、スーパーの広告等が見られず買物に不便を感じています。20分間隔のちいバスを待ってスーパーへ行き、売り出しが終った日など残念に思う。
女性	70		近くに100円バスが走るようになり、重いものの買い物が楽になった。

性別	年齢	地区	内容
女性	82	高輪	まだバス・電車で出掛けられるので美味しい物を食べに行ったり年下で良くして下さる友人2人がおりまして買物もいっしょに下さいますので今の所困った事はありません。元気で世話かけないようにと区の体操などにも進んで行っております。
男性	82		自宅前のバス（清正公前）を利用、ホテルのシャトルバス（目黒往復）を利用するので助かっています。歩いて行ける近所のスーパーやお店では重いものをさけている。
女性	75		近くにコンビニもないので、徒歩10分強位のスーパーや八百屋さんに行っています。この春には腰痛でこの距離も歩けず、タクシーを利用していました。今は大分よくなったので又、歩いて行き、配送サービスで届けてもらっています。今後もっと年を取って体が不自由になったら困る事になるかな？と思います。
男性	72	芝浦 港南	自転車を利用しているが、自転車専用レーンがないので危険を感じる事が多い。自分はゆっくり歩道を走っているが…（徒歩の場合衝突されそうになる事多し）。
女性	82		もう少し広いスーパーがほしい。レストランにしても年配者用の料理が無いのでバスとかを使って食事に出掛ける事が多い。
女性	68		港南地区は、人口が増えた割にはスーパーがない。1軒あるが、マンションの中なので駐車場がなく不便。車で、前住人でした麻布十番まで買物に行く。

## （２）平成23年3月11日に発生した東日本大震災に際して、困ったことや考えたことなどの内容

### ア 内容について

問31で「東日本大震災に際して、困ったことや考えたこと」について自由に記入する欄（問31 この震災に際して、困ったことや考えたことなどをご自由にお書きください。）を設けた。この自由記述の回答者は1,142人で全体の3割弱を占め

ている。

### イ 内容の分類項目とケース数

項目ごとに分類した内容について、その分類における項目とケース数を示す。なお、回答者は1,142人であるが、1人の回答が複数の分類でカウントされている場合も存在するため、ケース数の合計と回答者数は一致しない。

「東日本大震災に際して、困ったことや考えたこと」の分類項目とケース数

分類項目	ケース数
震災時の様子や困ったことなど	343
防災、災害対策に関する意見	264
不安、心配など	251
震災全般に関する意見	136
今後の災害等に関する意見（東京で起きたらどうなるかの心配など）	126
品薄状態になったことについて	65
原発、放射能、電気エネルギーに関する意見	53
情報に関する意見	45
隣近所とのつながりに関する意見	41
政治（国政）に対する意見	36
とくになし	36
被災地支援に関する意見	26
港区に対する意見	18

仕事に対する意見	4
その他の意見	32

ウ 具体的な内容（抜粋） に代表的なものを下記のとおり掲載する。なお、分類項目のうち、ケース数で上位の項目を中心 極力、回答者が記述した原文のまま記載している。

#### 震災時の様子や困ったことなど

性別	年齢	内容
女性	77	食器棚は突っ張り棒があつて倒れなかったけれど、扉の止め金が外れて、食器が落ち散らかった。30ヶほど壊れた。大きな本箱の扉が外れ、多くの本が散乱した。10階建ての10階に住み、見晴らしがよく、上の階の人に煩わされることなく平穩に過ごしていました。柔構造の建物で倒れる心配は少ないのでしょうか、家具については考えなくては、と思いました。物を少なくし身軽にしようと思いました。
女性	87	認知症で、地震があつた事、余震が続いていて危険な事をすぐ忘れてしまい。私の家においてもらう事がかなり大変でした。安全確保の為に、連れて来たにもかかわらず、妄想がひどくなり、帰宅願望が強くなり、かなりの興奮状態になり、仕方なく、母の家に連れて帰りました。ご近所の方に事情を話し、何かあつたら、連絡して下さいお願いして帰って来ました。こんな時は、どうしたら良いのでしょうか？
女性	71	○外壁の1部・はがれ落ち、ご近場の作業員さんに手伝ってもらい、下請業者を紹介して頂き、早目に修理出来感謝。○3/11揺れ後、有栖川公園に避難時、友人に会い、その家で1夜を明かした。人のやさしさを感じ、つながりの大切さを感じさせられた。
女性	84	3月12日（震災の次の日）墓参りのため田町～品川まで50分かゝつた。大都会の避難者で田町駅は人で埋まっていた。震災の日出かけており、その帰りに銀座に買い物を買ったが他所で用事を終えて家に帰宅したのが幸い。2時15分、万一銀座に行っていたら、正に避難民となつており、恐怖を覚える。大都会の出先の震災も恐ろしいと考えて、その為の対策は多分不十分と思われる。
女性	70	マンションのオーナーからの、何の対応もなく非常に心細かつた。緊急の放送又は何の知らせもなく、30分以内に家を出ましたが、取り合えず交番に向かっている最中、異常な静けさが孤独感を強くした。パトカーの音も皆無でした。
男性	78	ちょうど風呂（三田いきいきプラザ）に行こうと思ひ玄関の戸を開けた時だったので手摺に伝つて下に降り、近所の人沢山居たので一緒に居た。
女性	76	3/11日の大地震の時に、港区役所の中に居て助かつた。もし、自分の家で、ひとりで体験したのなら本当にどうなつていたか。周りの人達とも余りつき合いもないし、老人が多い。団地の中とは言つても表札もないし名前も国籍もわからない。いざ災害に合つた時は東北の人達のようにうまく助け合うことが出来るのでしょうか。大きな疑問である。
女性	76	同階に100歳近い老人が日中1人で居て息子さん勤めの為、何かあつたらよろしくと常々言われて居たので自分の部屋のテレビやその他落下するのを見たらもおばあちゃんの所に行き、おばあちゃんを抱えて二人で助けて誰か7Fに来てとさげぶも無駄でした。私も実母を102歳で1昨年亡しましたが母とだぶりました。
女性	82	娘が野菜や果物などわざわざ届けてくれ、気づかってくれて、とてもうれしかつた。買溜めにも行かず、冷蔵庫のものや乾物などで、食事は困らなかつた。管理人さんが各個を訪ね安否を確認して下さいのが、ありがたかつた。

性別	年齢	内容
女性	80	困った事はエレベーターが動かなくなる10Fまで帰るのに死ぬ思いでした。両股関節が人工なもので階段は3段のぼるのが限度です。あの時は本当にもう死なせて欲しいと思いました。10Fまでの階段は162段58分かかって登りましたが手やひざなど血だらけ心ぞうは悪いし肺ガンの術後だったし何かが落ちていてどうしようもなかった。あれ以来外出がこわくて出来ない。
女性	74	今年2月中旬からマンションの外内補修工事（10年ごと）に入っていたため工事用の足場カバー等が倒れたりくずれたりしたら大変な事になると思い不安でしたし、工事発注者のマンションの理事会、工事担当責任者、ひと言のアドバイスがなく不安だった。この様な状況下での町内の安全等のアピールが望まれる。
女性	76	ゆりかもめ不通、レインボーブリッジも閉鎖のため、お台場の我が家へは東銀座～豊洲回りで65K、13,000歩で帰宅、後期高齢者の私がよくぞ帰れたものと思います。それも新橋で出会ったシンガポールのお嬢さん（日本へ初めての旅行、有明のホテルが宿とか）上野の芸大で美術史専攻の留学生のお嬢さん（国際交流会館が住いとか）の2人と珍道中で帰宅出来たこと、良い思い出です。後日シンガポールの彼女の会社の上司からお礼のお電話をいただき恐縮しました。
女性	74	外出中の出来事で避難場所など頭には浮びませんでした。帰宅までの道のりは概ね知っていましたが徒歩（私の歩行距離で約4 km）で約1時間以上を要しました。水分と飴状のものは持参しておりますので幸いでした。車社会の恐ろしさを目の当りにしたこと、ハザードランプをつけて車を脇に寄せる人など1人もいなかった。渋滞の中タバコを吸って我れ関せずの人すらいる事は恐い事です。地震後の災害は人災でもあるという思いです。
女性	67	エレベーターが止まり非常階段はあっても、足腰が悪いので一人で家にいるしかなく、電話もつながりにくくなった為震災の経験（こわさ）などを話せる相手がいないので一人で余震の不安の中にずっといたことが辛かった。2日後に食料を買いに行ったら、殆ど物がなくなっていた。恐怖を分かち合える人とせめて電話さえ通ずれば友人や家族と話せ気持ちも安心していられたと思う。ある意味では一人で暮らすということの覚悟もできたと思うが…。

#### 防災、災害対策に関する意見

性別	年齢	内容
男性	68	1. 原発事故に関する不安 / 2. 関東直下型地震の際の対応（通信機能の不備を含む） / 3. 帰宅難民への対応 / 4. 水、トイレ、食料の備蓄強化
女性	77	自分自身の防災対策は心がけますが、区としても、建物の崩壊と火災についての想定を的確になさって下さい。
女性	82	○身辺整理を早目にして置こうと思った。○遺言書を書いた。○現金を手元に置くことにした。○寄付をしようと考え実行した。
女性	75	昔は町会等の連絡が又区からの震災器具たとえば（軍手、バケツ、衛生用品等）これらが配布されていましたが今は何の話し合いもなく年よりの方は不便かと思えます
女性	71	マンションの倒壊を心配しています。管理組合長に相談しても、診てもらえばかならず耐震の補強が必要だと言われるからお金がかかるから・・・と積極的な態度がみられないので悩んでいます。
女性	84	驚いて物忘れがひどく娘の家の電話番号も思い出せず、持物にそれから電話番号と住所を書いておくことにした。外出する時は（ボトル茶）持ち歩く様になりました。自分の避難場所がわからない。はっきり青南小学校とか教えてほしい。以前は福祉会館だと思って居りましたが。

性別	年齢	内容
男性	74	白金団地には貯水槽があるが断水時に給水栓が取り付けられるよう便宜を図って欲しい。
女性	73	近くに見守連絡所などがほしい。サポートを受けたり、又、サポートしたり、お互い助け合えるきよてん場所をつくっておいたらよいと思う。
女性	88	マンションの管理組合に災害対策が必要である。近く総会があるが話題にしたい。
女性	89	(考えたこと) 大事な物は一つにして何時にもげられるようにすること。お水をビンに何本か入れておく事。にげる時のクツは何時もきめておくこと。
女性	80	震災がおきた時避難する場所を複数知っていたい。特に火災の場合に安全な逃げ場を日頃知っておきたい。
女性	80	真夜中だったらと思った。寝る時、色々考えて寝方を考えた。ケイタイ・ラジオ・電池を、いつも身近においてる。
男性	70	水、非常食品、防災用具は用意済み、もし災害が起きて長期間ビルのエレベーターが停止、水が断水・ガスが止まる、など考え簡易トイレグッズ(約30日間用)と燃料(ボンベ・登山などに使う(キャンプ)固形燃料)など用意したいと!(それと非常食品を今より少し多めに保管)。
女性	87	1) 血圧の薬は2週に1度もらいに行っていたが1回に4週分もらい次は2週間たったら2週間分貰うようにした。2) 持ち出しするものを整理しリュックにつめ、また昔使った防災ずきんヘルメットなど身近におくようにした。
女性	74	防災用品の準備がなかったので、簡易トイレ、ヘルメット、電池等買いました。又恐怖から遠のくと忘れてしまいそうで、なるべくそうならないように心掛けようと思います。

## 不安・心配など

性別	年齢	内容
女性	67	電話不通、交通不通、飲み物や食品に品物がたりなくなる。今回東京はそれ以外はあまり目立った事がなかったことは幸いと思いましたが、これから何がどの様な事が起こるか不安です。
女性	83	余震が続いて室内にいるのが、一人でいるのが怖く不安でした。物が落下して片付けるのが厄介であった。腰痛や膝痛がありいざという時は不安です。内部疾患(心臓ペースメーカー)喘息などあり不安に感じます。
女性	75	この日は自宅におりましたので、とても恐かったです。揺れが落ちついた時、自分は何をしたらいいのか不安でした。テレビのニュースを聞きながら震災地の情報ばかりで、住んでいる所の状況が分らず外にも出られずとても心配でした。皆さん同じ思いだったでしょう。一人暮らしとしては一寸呼びかけがあったら気持ちが落ち着いたと思います。
女性	68	病院に居りましたので先生がケアしてくれ助かりました。家に1人で居ましたらパニックだったと恐くなりました。1人暮らしが、大変不安になりました。
女性	73	あのような被害にあった時、怪我、病気になった時どこまで面倒をみてもらえるのか不安です。家、財産等何一つ持ち合せていない私には、生き残れたとしても苛酷な毎日を耐える気力が持てるかどうかわからない。
女性	72	区で指定された避難場所迄、混乱の中、実際に行けるかどうか心配です。3月11日デパートの地下で地震にあいました。照明が消えなかったので、自分で判断して階段で昇り、外に出ましたが、徒歩で帰宅する際、歩道が人でいっぱい若い人達や男性が大きなバックや荷物を引いて早足で歩いているので恐ろしかった。
男性	74	高層マンション(33階建)ですが、もっと大きなゆれに対しての、たい震性がどの程度のものなのか大変心配している。購入時に説明を受けたと思うのですが、お台場という土地柄地盤その他で実際のタイシンについて、わだかまりがあり心配です。

性別	年齢	内容
女性	73	東北の惨状を目にするにつけ、いずれ東京にも起ると言われている大地震と想像し、「明日は我が身」の感じでいっぱい。東北の老人が「すべてを失っても、この身が助かって幸せ」という言葉を聞き、それは日頃近所同志助け合って生活しているからこそであって孤立して生きている私なら、すべてを失ったら、生きる希望などない、不安だらけ・この身が無事でも決して幸せとは思わない。
女性	73	余震で揺れるたび、タワーマンションに住むことに不安を感じた。
女性	70	一人生活なのに、一人暮らしの届けも出しているのに、無事でいるかどうかの確認は全くなし、部屋の中で倒れていても誰にも気づかれないのでは？・・・と不安になった。
女性	67	震災直後に自分の安否をどこに知らせるのか判らなかつた。逆にその必要もない事にガクゼンとした。
男性	80	歩行困難な者にはすべてが恐しかったです
女性	74	生きるのに不安を感じました。ひとり暮らしの心細さと親族が遠方のため、今後考えなければ実感しています。
女性	78	集合住宅（11室）昼間は勤人 e t c で誰も表に出ず声さえ聞こえません。少し不安と孤独を感じました。

#### 震災全般に関する意見

性別	年齢	内容
女性	84	私は戦後の日本を知って居ます。兄は沖なわ特攻で叔父は中支で戦死、主人は100万の戦死者を出したフィリピン、ミンダナオの山中に（立てこもり）終戦を知らず昭和二十年一月に麻布の本家に帰宅しました。多くの海軍の友人を戦艦ヤマトと共に失いました。災害の方々にお見舞の心は一杯ですが、広島、長崎を知り昭和19. 3. 10東京大空しゅうを目に、身に感じ知って居る者は、日本は必ず立ち上り、日本から世界の平和が広がると信じます。この度の災害に、水やお米を買いだめた人々も居ると聞き、（日本人か！）と怒りを感じました。残念です（ほんの一部の人でしょう。）。
男性	85	当日は私は日本橋から地下鉄で帰りました。着替えてしばらくしてからあの大きな地震がありました。いろいろ考えさせられました。母が存命中関東大震災のことをよく話しました。テレビで数字を見て今度の方が大きいことをしり、いろいろとずっと先々のことを考えました。
女性	75	津波のおそろしさを映像で知らされた。大勢の命が一瞬のうちに流されて、大変気の毒に感じた。仮設暮らしの人や、これからの見通しのつかない原発の被災者を思うと、我身の平凡な暮りに感謝する。政治も経済も平和になってほしいものである。



## 今後の災害等に関する意見（東京で起きたらどうなるかの心配など）

性別	年齢	内容
女性	75	震度五弱で、あれだけ交通も麻痺して、道は歩く人の行列、車は渋滞。大地震が来たら、海岸の方は危険なので、増上寺方面へ逃げようと考えたら、いやビルが倒壊して歩いてなんか行けないのでは・・・と、まあお仕上げよ！
女性	79	津波が大きかったら困るし、こわいと思った。近くの重いしっかりしたビルに避難出来たら良いと思うがエレベーターがどこも止まってしまうので歩いて階段は無理と思う。
女性	73	東京に地震が来たり津波が来たら、港区はどうなるだろうと考えた。
女性	67	今度の震災の時、交通もマヒ、すべてに機能しないことを考えると、例え、けがをしても救急車も無理と思いますので、静かにあきらめる行動をとる考えです。運次第と思えます。
女性	73	芝浦は埋立地ですが、我家は大正7年埋立なので多少安心してはいます。現在はどんどん海側に高層マンションが建って、屏風のように涼しい海風を遮っています。昔の芝浦は田町駅を降りると潮の香がして大変涼しかった。節電になると窓を開けても熱風が入って来る状態では、夏が思いやられます。直下型の地震が起きたら、運河の街芝浦は橋で道路が繋がっているので落ちたらどうなるのでしょうか。
女性	77	引っ越して一年位だったので近くの地形や安全性が判らず、岩の上なのか、液状化する土地なのか、とても不安になりました。東京に「つなみ」が来た夢をみて（ビルの4階位まで水没していて、どこにも行けない状態で困っている）心配になりました。
女性	71	もしこの震災が都心部で起っていたら、隣近所の家族構成もわからず、的確な判断も出来ず、東北のような絆は出来ないと思います。

## 品薄状態になったことについて

性別	年齢	内容
女性	86	地震のあと、日用品や食料などを沢山買い溜めに走る人が多かつたらしいですが、小さい子供が2～3人も居ればともかく、大人や大きな子供ばかりの家庭で、そんな事をして一時的にでも世間の流通を狂わせるのは良くありません。日本人はもっと冷静になれないのでしょうか？
女性	80	1人住いなどで電池と懐中電灯がなく不安でパニックになりました。近所の方や友人知人がいかに頼りになったか良くわかりました。
女性	81	マンションの水道が止まった。2日間、その間、水が手に入らず、困りました。
女性	74	外出していたのですぐに買物にスーパーに行つてびっくりしたのは既にも買いだめが始まっていた事。宅配で取っていた物が前触れもなく、届かなかつた事には、それぞれの業者の無責任さに驚いた。
女性	89	ヨーグルトなどやわらかい食べものしか食べられないが、入手できないので、困った。
男性	73	○「買溜め」が異状に大量に長期間発生しました。スーパー等「何時もの」時間に行くとも日常生活食料品がほとんどなくなっていた。（約1ヶ月～1ヶ月半つづいた）スーパーに聞くと開店前から並んだ人が開店と同時に入店買い込んだ。店は1人1点等の努力はしていた。奪い合いは足りない、分け合えば足りる。譲り合えば「余る」はず！！都心に住む人にマンション住いの人は身勝手が多い！！
女性	71	ガソリン給油に車が行列して給油しにくかつた。幸に1ヶ月位もつたので助かりました。
無回答	77	いろいろと品不足でしたが、牛乳、玉子など小さいお子さん達の家族優先しない大人が多くて残念に思いました。

原発、放射能、電気エネルギーに関する意見

性別	年齢	内容
女性	73	特に原発事故による放射能汚染は胸が痛みます。原発はいりません。一日も早い復興を願わずには居られません。
女性	74	私は福島県の中通りが実家です。畑、たんぼ、果園、皆んなこまっております。原発の事でめい達は、子供が小さいので、水、野菜は、県外の物を食べています。又、保育園は、子供を外で遊ばせません。早く、どうにかして下さい。お願い致します。
女性	70	自然の力の恐ろしさ。原発に対して声を大にして反対してこなかったこと。そして原発が発電する電気を何も考えずに使っていたこと。それが若い世代に大変な影響を及ぼしたこと等の反省。
女性	72	原発を開発施工した人、企業は止める事閉鎖の仕方も解決しないで始めた事が日本人として理解出来ない。日毎に前日より悪い状態になっている気がする。一日も早くコントロール出来るよう切に望みます。
女性	72	福島第一原発の事故に関する情報が少なくお洗たく物を外に（屋上）出して干しても良いか悪いかを判断出来ず困りました。それは現在も続いています。
男性	69	津波と原発事故が被害を大きくした。脱原発は急にはムリだが早急に代替発電を検討しなければならない。必ず襲ってくる震災だから、町会ぐるみで対策を講じる必要がある。
女性	69	放射能の汚染度、例えば地面、草、ベランダの植木等の汚染。余震の不安。
女性	76	危険な原発は早く日本から無くしてほしい。今後、太陽光、地熱、震動発電など安全な電力を使ったらいいのに…放射能の処理が不安です。後始末も出来ない未完成な物を何故作ったのか？

情報に関する意見

性別	年齢	内容
女性	76	①停電の情報 港区はどのグループに区分されているのかわからなかった。NHKの報道なし。パソコンをみてと解説者は言うばかり、明け方までTVをみていたが一切なし。民放は報道していたとのこと、NHKとして対応悪し。②原発のことはわかりにくかったところではない。今もって、真実のことはわからないのでは？！
女性	71	聴力障害でほとんど聞えないので情報が入らないので困りました。
女性	68	Golfで千葉（多胡方面）にいて24時間かけて自宅に戻って来ましたが（15時に出発して翌6時に着きました）テレビでは現場の情報が多く、東京に向う道路情報が手に入らなかった。
女性	74	状況を把握できる情報が遅いと思いました！気になる人に連絡がつくことが安心につながりますので。
女性	66	電気がきれなかったおかげでテレビで震災の状況がわかったが、もし情報がまったく絶たれたら、どのように行動してよいか不安に陥ったにちがいない。拡声器で街中にながれる公報は聞きとりやすく、何を言われているかわからないので、これの改善を考えていただきたい。
女性	67	正しい情報が果たしてどれであるか選択が難しかった。あまりいろいろなコメントが方々からでていたためテレビ新聞などの情報が果たしてどこまで正しいものなのか不安だった。

## 隣近所とのつながりに関する意見

性別	年齢	内容
無回答	無回答	都営団地に住んで、お会いする時会釈していただきますが隣同志無事の確認がない・・・プライベート的に声がかけにくい
女性	88	同じ階の親しい女性の夫妻が心配して訪問してくれたが、大変嬉しかった。遠くの肉身、親戚より近くの友人が頼りになろう。また非力ながら働きたい。
女性	80	いざというとき、声をかけて下さる人を有料でもいいから近所にもつべきだと思った。向う三軒両隣が会社の人や大学生だったりして交流がないのが気になる。これからは近くの人で声をかけてくれる人が有料でも必要。
女性	69	地域活動の仲間からの安否確認など、お互いにしたのでより安心感を持つことが出来、又、コミュニティーでの仲間作りの大切さを実感した。

## 被災地支援に関する意見

性別	年齢	内容
女性	71	被災地のことを思うと胸が痛く切なかった。毎日そのニュースから一日が始り今も胸が痛む。ボランティアに行く人を応援したいと思う。自分では募金位しか出来ないの・・・。
女性	77	せつかく協力した義援金を、早く現地にさしあげて欲しいと思っています。

## 港区に対する意見

性別	年齢	内容
女性	72	私が知らないだけかもしれませんが、港区として援助している内容が知りたい。港区の災害対策は、どのようなものがあるか知りたい。情報、真実を伝えて欲しい。
女性	66	港区役所へのお願い。避難場所のシュミレーションを今年中に実施して下さい。不安で仕方ありません。ライフラインの対応、確保をお願いします。
男性	71	港区より阪神大震災後配布されたラジオ・ライト付手動発電（電池不要）を頂き今回は、電池の買い占めに走らず大変助かっています。
女性	76	港区では家具転倒防止器具を無償で支給し高令者には設置していただける制度があるのに、全く無関心でしたが、この震災ですぐに申請し現在設置して下さる日を待っている状況です。
女性	70	東日本大震災で、国の援助はなく、国は助けにならないことが明白になりましたので、港区の行政内で緊急の支援、対応策をぜひともお考え頂きたい。

### (3) 区への要望や生活についての自由意見

#### ア 内容について

1次調査の調査票の最後に、区に対する意見や生活での困りごとを自由に記入する欄（問42 区

に対するご意見や、あなたの生活でお困りのことがあれば何でもご自由に記入して下さい。）を設けた。この自由記述の回答者数は1,227人で、全体の3割を占めている。

#### イ 分類

自由記述の分類項目とケース数

分類項目	ケース数
生活全般に関する意見（今の暮らしぶり、将来の不安など）	461
住居、住宅、老人ホーム等に関する意見	204
港区行政、行政サービス等にかかわる意見	180
福祉制度、福祉サービス、民生委員、年金、介護保険等に関する意見	176
社会参加や地域の人々との交流、趣味活動などに関する意見	108
健康状態、病状、医療費に関する意見	95
地域環境、開発、治安、マナーなどに関する意見	86
交通に関する意見	64
「とくにない」という意見	52
震災、放射能、防災等に関する意見	47
アンケートに関する意見	44
税金に関する意見	39
その他の意見	56

#### ウ 具体的内容（抜粋）

分類項目のうち、ケース数で上位7位までの項目を中心に代表的なものを下記のとおり掲載する。なお、極力、回答者が記述した原文のまま記載している。また掲載した分類項目のうち、「福祉制

度、福祉サービス、民生委員、年金、介護保険等に関する意見」と「地域環境、開発、治安、マナーなどに関する意見」については、見やすくするため、区分を設けている。

生活全般に関する意見（今の暮らしぶり、将来の不安など）

性別	年齢	内容
女性	73	将来もっと年令を重ね、最終章にさしかかった時点で発生する諸々の問題（入院時、最低限の身の回りを世話してくれる人、手術等の保証人、葬儀を実施してくれる人 e t c）について悩んでいる。これらを金銭で解決してくれる組織が多く出来ればと願っている。
女性	80	高令者社会になり、年寄りばかり増え、本当に困ったと思っております。なるべく子供達に世話にならない様心がけてますが、いつどうなるかわからないのが、不安です。現在は友達5～6名で、一週間に一回近場を歩き帰りは食事をしておしゃべりして帰って来ます。一番楽しい時です。お互いに意見を交かんして色々勉強になります。きらわれない年寄りになりたいと心がけております。
女性	76	子供の居ない一人生活です。常日頃1. 食事は自分で作り、外食は、さけている。2. 健康第1に朝夕・柔軟体操している。3. 家中、外出、歩く時は常に転ばないように注意している。4. 皆様に迷惑をかけない事をモットーにしている。でも上記の事が何時迄続けられるか、保障ない。
女性	81	意見とか困ることではございませんが…。只淋しいのが実情です。年令にもかかわらず仕事に従事しておりますものの、嫁や娘の旦那にきがねして一人で生活している毎日が淋しいのです。我儘と充分承知していますが、何故生きているのか、むなしい時がございます。

性別	年齢	内容
女性	76	当方目下とりあえず元気で老婆街道を歩んでおりますが、老いは確実に追いかけて来ています。しかしわからないシステム（保健福祉サービス）（要支援）（要介護）などの方法、ホームヘルパー、ケアマネジャーと言うお役目など知りたいと思いました。1人で出来るのもいつまでかと考えると不安になります。妹の家族はそばにいますが皆老いていきますので…よろしくお願い致します。
女性	81	孫達が来て、お小遣いをあげたいがなかなかきびしい。あげないと忙しい事もあるのでしょうがあまり来ません。
女性	80	今一番悲しい事はパソコン、インターネットが操れない事。機器は2台持っているが教えて下さる方（女の方）がいない。病気が多く入院する事が度々で本当に生きがいが無い。知りたい事をインターネットで自由に自分で調べる事が出来ればどんなにいいかしらというも考へてます。
女性	78	1人暮らしは、とても淋しいです。年に2回ほど、シンガポールに住む次男の所に行きますが、飛行機で7時間、又子供達に送り迎えして頂いてますが、膝が数年前から悪く、年々ひどくなっています。歩けなくなったらどうしよう、港区に嫁いで58年他に移る気持はありません。年老いて、1人生きてゆくのが不安です。これから、安心して希望の持てる人生はあるのでしょうか？
女性	72	今のところは、とりわけ困っている事はありません。なるべく行政に依存しないで生きていければいいと思います。あまりにも、すぐ「行政が！」「国が！」の声が多くうんざりです。子孫に払い切れない程の赤字国債を残さないために、出来るだけ、自力で生きたいと、毎日、健康に気をつけて生きてます。いづれ、区政のお世話になる時もあるでしょうがそれまでは…。スポーツクラブに通ったり、ボランティアをしたりしております。

#### 住居、住宅、老人ホーム等に関する意見

性別	年齢	内容
男性	72	年金（企業年金では無い）だけでは、生活が出来ないのが、現状！！月10万円位収入が無いと、家賃を払って生活出来ない！！
男性	73	今回の震災避難民の一時受入れに、相当数の公営又は都営等の住宅が提供されている。それ程余裕あるのに、何故「求めつづける都民」には対応しないのか不思議。
男性	77	仕事をしています。仕事場の近くの区都の住宅に募集しますが何回も落ちました。朝10時～夜11時までの営業では遠くでは仕事が出来ません。高い家賃の今の住まいではつらいです。なんとか青山1丁目あたりのシルバーピアに入りたいです。
女性	81	港区は福祉会館は充実していますが、老人ホーム、特養ホーム（南麻布ありすの杜）の様なホームを造ってもらいたいです。港区も金持、資産もちばかりではありませんから。
女性	68	港区に住み始めて2年になります。幸運にシルバーピアに入居出来老後がとても安心です。現在元気に仕事に励んでおり健康に何の心配もありません。唯一つだけ通勤の際使う地下鉄（青山一丁目駅）エレベーターがないのがとてもつらいです。
女性	78	都営住宅に暮らしているが、できれば身体障害者なので、子どもや孫と住みたいが、都営住宅の継承権がない為一緒に住む事が出来ない。住人本人が身体障害者の場合も一緒に住む子どもに継承権があったら良いと思う。
女性	73	現在UR都市機構に住んでいますが、来年立退きをいい渡されています。できることなら港区に住み続けたいのですが、家賃が高すぎて無理なようです。
女性	80	将来寝たきりに近い状態になった時有料老人ホームは高く金銭的にも無理です。区立の特別養護老人ホームに入りたいと思いますが順番待ちが多くてすぐに入ることが出来ません。もっと施設をふやして待機人数が多くならないようにして欲しいと思います。
女性	84	特養は無理でも高齢者が入れるような食事付のケア。マンションか、是非とも欲しい。

港区行政、行政サービス等にかかわる意見

性別	年齢	内容
男性	75	港区は23区の中でも富裕な区であり、いろいろな事業を行っているが、バラまきになっていないか。区役所や出張所のイベント案内のパンフレットにしても、どうみても多すぎる。もっと不要な経費を削り、将来のために貯めておくべきではないか。
男性	74	・広報で区の情報を得ている。・新聞を定期購読すると入手できるが、何かよい方法は？
女性	74	1. 港区はめんど見の良い行政区だと思います。広報やとり組みを通じて「ひとりじゃない」感を頂いています。このアンケートもその一つです。2. (世田谷区のように)在宅介護を24時間対応でほんとうに「可能」にしてほしい。3. 区の広報カーのスピーカーからの声が聞きとれない。廃品回業者ものははっきり聞こえるのにどうしてでしょう。不安だけをもたらします。なんとか改善して下さい。4. 港区の詳細なハザードマップを配布して下さい。5. 毎年の狂犬病予防注射済登録の費用が高い(どうして?何に使うのか明りょうでない)。身体の不自由な高齢者は登録手続きを、郵送でできるようにしてほしいです。切望。6. 住宅地の中に稼働式駐車場を建てるのを規制してほしいです。切望。以上
女性	78	何でもHPでは困ります。ネットをやっていないので情報が分かりません。自転車のマナーが大変悪い。もっときびしくちゃんとみて下さい。信号無視は皆やっています。今余り困らなくてもこれからが不安です。甘える気持はありませんがしっかりとした高齢者対策をお願いします。ちいバスはとてもよいと思います。

福祉制度、福祉サービス、民生委員、年金、介護保険等に関する意見

性別	年齢	区分	内容
女性	76	福祉制度・サービス	港区に居を移してから、多々御配慮頂きます。諸サービスにとっても感謝しております。保養施設、スポーツクラブ、いきいきプラザ等申し訳わからない程利用させて頂き、感謝の気持で一杯です。
男性	70		行政に関しては健康医療等、又シルバーパス、健康福祉館等生活支援(民生委員の巡回等)かなり行き届いていると感ずる。
女性	70		港区の取り組みは、子育て支援しかり、高齢者への目線しかり、東京都の中で充実していることを常に実感しておりますが、後見人制度は直近の重要課題ながら、今ひとつ中途半端な流れと受け止めております。私の様に親族のいない高齢者が増える中、最期の安心の支えが見当りません。
女性	80		緊急通報システム・災害時援護者登録、希望してます。よろしくお願い致します。
女性	72		配食サービスを受けての感想 1食470円のサービスを受けたが、港区が食費の半額を負担しているとのことで1食940円の計算になる。人件費、配達等の費用を含んでいるとしても、不潔でまずい(不美味)！！
女性	88		4月から入浴券を頂き、バス(3つ)で週1回利用しているが、熟睡できて、体力維持に効果があり、感謝している。他区では行われていない処もある事。
女性	69	年金・介護保険	(国民年金厚生年金老齢基礎)785,496円しかないのに毎年介護保険料、国保が毎年支払いが多くて、年金の手取が少なくて生活するのに大変です。保険料の多さにびっくりしてます。
女性	67		現在介護保険料をおさめていますが、将来期待していません。払うだけ払ってサービスはほんのわずかか?今の厚生年金問題と同じように、(もらえる額がへったり、サービスが低下したり)長生きしていくとどうなるか不安。
女性	85		年金が改定との通知があり引下げるとの事。本当にどうなるのでしょうか。国民年金です。生活保護にさせていただきたいと思います。

性別	年齢	区分	内容
男性	70	年金・介護保険	年令的、健康的に仕事による増収は期待出来ない状況の中で保険料が高すぎるのが実感です。
女性	72	民生委員	町会長様、民生委員の方が、よく頑張っておっしゃっていますので、感謝しています。

#### 社会参加や地域の人々との交流、趣味活動などに関する意見

性別	年齢	内容
女性	76	◎老人の、ウォーキングの集りとか、老人でも健康な人の集りが少ない！皆で元気に居たい！◎学習とか色々有ると良い◎老人の交流も、1人暮らしの人の仲間作りが有れば良い。
女性	80	私にとって区と直接かかわりのあるのは〈キスポーツ〉です。一人で参加して音楽・寄席などをたのしみにしています。
女性	66	生涯学習、趣味の会等が徒歩圏内で行なわれると参加しやすくなります。(ex、図書館、夜間の小・中学校) 新橋の生涯学習センターや、各種スポーツセンター等は遠いので途中で止めてしまう事が多い。近くに高齢者用にパソコンや、英会話(各国語学講習)、軽いスポーツ、趣味の講座等をボランティアや格安料金で運営していただけると行きやすく、続きやすいと思います。
女性	75	要介護の方々への援助も大切ですが、元気に暮している人々にも、観劇や映画、散歩食事会等楽しい機会を多く作り、パソコン、携帯電話、ハイテク学習も教えていただけて、皆で介護の御世話にならずに済む、楽しい港区を作りたいです。
女性	66	福祉関係ばかりでなく港区住民である以上港区の歴史(古くから現在まで)を学ぶ機会がほしい。
女性	68	12年ほど前から、港区の施設で週に1度ですが、筋力トレーニングを1人で続けております。
女性	76	麻布支所のいきいき体操はとても楽しいので週2回位あればうれしいのですが、自分一人では心掛けてもなかなか運動出来ず体力不足になりがちです。
女性	69	体操教室(赤坂)に参加させて頂いています。始めてから、つまづかなくなり、姿勢も好くなり、散歩も毎日苦にならず出来る様になり感謝しております。高令者がだんだん多くなる世の中なので、教室等をもっと広げてもっとたくさん設置して頂けたらと思っています。介護が必要としない体力作りに重点を置いて、なるべく介護費用を無くしましょう。
女性	78	マンション生活なので、地域の方々との接する機会が少なく又あってもなかなか時間的なこともあり、今のところご挨拶程度のお付き合いです。
男性	71	健康な70歳でも仕事が欲しい シルバー無し。65歳仕事アッセン無し

健康状態、病状、医療費に関する意見

性別	年齢	内容
女性	77	両ひざが悪いので出不精になるのが困る。
女性	71	昨年耳からのめまいで歩けなくなり、暫らく入院しました。単身用の住宅のためトイレが共用なのでめまいがあるとトイレに行くのが大変です。
女性	79	私は身体が悪いと云っても寝たきりではなく、心臓にペースメーカーが入っており腎臓も人工透析をしており此の間吐血したので、病院へ行ったら内視鏡で静脈瘤といわれ又長年の肝硬変といわれ、又緑内障なので眼科には行ってますが目がこれより見えなくなるのではないかと心配です。
女性	77	毎日・腰・足の痛みになやんでいる。大学病院でブロック注射や、手術もしたが治らず、歩行器がないと動けない状態です。
男性	82	二年前に大動脈解離で激しい発作に襲われた時、自分で救急車にTELをした後、意識を失ってしまった。幸い7時間に及ぶ大手術で一命はとりとめたものの、若しTELする力がなく、そのまま失心していたら多分絶命していたと思う。1人暮らしの恐しさは平常は何事もないが命のかかわる急病にかかった時、手の施しようが自分では全くないことをとても恐ろしいことだと思った。
女性	69	年金も満額ではなく月にすると3万位です。子供も苦しい中2万ずつ仕送りしてくれてますので普段の生活は何とかやれますが、持病のリウマチがあり、免疫が低い為いろいろな症状ができます。昨年は医療費が40万近くかかり生活がとても苦しかったです。
女性	73	医療の高いのが困って居ます。現在1ヶ月1万5千～2万位かかり、もしも入院した時の事が心配です。
男性	73	現在私は心臓病のタメ、だんだんと身体が動かなくなり日常生活が、だんだん困って来ています。
女性	74	老人なのに税金が多すぎる。医療費が高い。
女性	87	21年8月から今日まですべて3割負担で困っています。早々見直しをしてほしいと思います。税別の知識がないので3割負担の医療費には近いうちに手術するのもにも心配です。
女性	93	・このままの生活をしていると預貯金もどんどん減り、年金だけで生活が出来ることが不安である。寝たきりのためヘルパーさん無しでは生活が成り立たない。また病院からの訪問看護も受けているので、医療費もかかります。寝たきり一人暮らしでは、介護保険内ではまかなえず、自費の支出が多く、ほんの数年で預貯金は底をついてしまい、生きていけません。・先祖代々高輪に居て、ここ10年ちょっと前に白金地区で生活しています。ず～っと港区に居られることを願います。



## 地域環境、開発、治安、マナーなどに関する意見

性別	年齢	区分	内容
女性	74	地域環境	数年前から生活環境が悪化しています。私の家の北側にビル、飲食店が出来まして恐らくこれ等の何らかが原因と思われます騒音、振動に悩まされ続けて居ります。
女性	68		昼間の人口が防犯上差が有り、寺院と病院の町になり、活動が駐車場のみの町になりつつあり昔の活気がありません。昔からの住人でバブル時代の貸ビル架空ビルに地主持ちのビルで高額賃貸でマンションも空き室ばかりの実体が判っていない行政ではないのでしょうか？不動産事業部が買って売る時代は早く手を打たないと欠陥ビル・マンションが増えると思います。
女性	78	開発	森ビルと港区の開発について、只今虎ノ門5丁目あたりは開発の工事をしています。もう私達の年代で移動したりするのはとても大変なので今のままでこの地域での開発はしてほしくないです。
女性	76		田町駅（芝浦口）周辺の再開発は慎重に進めて欲しいと思う。不要不急の箱物的なものは見直し再考を望む。地震について高令者にも何らかの（避難訓練など）指導、対策を打ち出して欲しい。マンションなどに住んでいる高令者は地震などの時孤立してしまうと思う。
男性	71	治安・マナー	夜間の六本木交差点附近の環境（風俗関係）が地元民でも不気味、外国人の客引きが多い。安心して生活出来る町づくりにご尽力頂ければと思います。
女性	83		エコに協力というので、街灯などがまばらになり、夜間は歩行しにくくなってしまいました。特に私の住んでいるあたりは、学校、マンションが多く夜は人気がありません。エコも大切ですが、これからの世情を考えると防犯のことも、大切ではないでしょうか。事実、去年は近くのマンションの独り暮らしのお年寄が、物取り目的の者に殺されました。夜間のパトロール強化等のご配慮があればと思います。南青山は住み心地のよいところなので、これからは安心して暮らせるようだと、うれしいと思います。
女性	67		緑を大切にしてほしい（住民がしなければいけない）（緑を枯らして次々植えて税金のむだ使いである）。木を切らないでほしい。自転車に乗る人、歩道を早く走りすぎるので危険です。こわくてならない。車道ならスピードだしても本人の責任だけど、歩道は歩く人を優先してほしい。おいこすときはベルをならしてほしい。緑を大切に作るボランティアがあると良いと思う。
女性	71		近所に交番は有ってもポリスがいない事が多い。最近全体的に交番に常駐している警官がいないのでいざと言う時が心配
女性	68		港区の数ヶ所で「禁煙」と書いたベストを着て呼びかけをしている方を見かけます。通行人はその時だけタバコの火を消しても何の効果はありません。テレビや新聞で港区は路上禁煙になりましたと言ってほしいです。

交通に関する意見

性別	年齢	内容
女性	76	ちいばすの路線をふやしてほしい。運行時間さえ正確であれば何時間かかってもよいという世代に外出の機会をふやしていただけるのではないか？
女性	81	1年余り前から運行するようになったミニバス（チイバス）は大変便利で、助かります。今迄は陸の孤島の感がありました。
男性	72	台場では何となく社会面、文化面等取り残されているのではないか？すぐにでも区の中心部に出られる交通等手配されればと思っております。
女性	71	都バスの路線が新橋－渋谷間に限定されています。以前のように青山、新宿3面、又、東京駅3面への路線があったら良いと思います。
女性	77	毎日元気でいられるのは何よりシルバーパスです。時間と頭を使えばパスでどこにも行けます。区分地図を見ながら計画をたてるのが何よりたのしみです。
女性	77	シルバーパスについて（区だけの問題じゃなくすみませんが）非課税の方と課税の方の1,000円と20,510円は差があり過ぎるとかねがね考えます。私共位の年令の者の外出は、そう多くないので20,510円も支払うなら、止めて、家にこもっていきましょう。という方が多くいらっしゃいます。

## IV 2次調査の結果

### 1 2次調査の概要

#### (1) 2次調査の目的と方法

2次調査として、訪問面接調査を実施した。この調査は、数量的データのみでは測ることのできない個別の課題や生活の実態を把握するために、質的データを収集することを目的としている。

#### (2) 類型化について

2次調査の実施にあたり、まずは1次調査で得られた結果から、いくつかの指標を用いて対象者の類型化を行った。

指標として挙げたのは、①経済的指標、②家族・親族ネットワーク、③近隣ネットワークの3点である。経済的な状況は、住居、外出や買い物などひとり暮らし高齢者の生活に大きな影響を及ぼすものとして注目していることから、類型化の際に外せない指標として取り上げた。ここでは、年間収入を「150万円未満」、「150万円以上200万円未満」、「200万円以上400万円未満」、「400万円以上」の4つに区分して使用した。

次に、ひとり暮らし高齢者の生活を支える機能をもつネットワークとして②家族・親族ネット

ワークを指標とした。具体的には、家族・親族との行き来の有無と、連絡頻度の多少から大きく2段階に分類した。表4-1では家族・親族のネットワークが強いものを「親族あり」、弱いものを「親族なし」と略して表記している。

そして、もうひとつの生活支援ネットワークとして③近隣ネットワークを取り上げた。近所づきあいの程度を大きく2段階に分類した。表4-1では、比較的近所づきあいをしている場合を「近所あり」、近所づきあいがあまりない場合を「近所なし」と略して表記している。

以上3つの指標により、表4-1のとおり16類型に分類することができた。

#### (3) 類型ごとの対象ケースと調査の実施状況

2次調査の実施を前提として、1次調査の調査票に、訪問面接の受け入れが可能かどうか確認する欄を設けていた。その結果、643人が「2次調査の受け入れ可」と回答してくださった。そのうち、類型に該当したのは487ケースである。

類型ごとに2～6ケースずつ、全体で70ケースを訪問することができた(表4-2)。

表4-1 類型番号と内容

類型番号	内 容
類型1	150万円未満×親族なし×近所なし
類型2	150万円未満×親族なし×近所あり
類型3	150万円未満×親族あり×近所なし
類型4	150万円未満×親族あり×近所あり
類型5	150～200万円未満×親族なし×近所なし
類型6	150～200万円未満×親族なし×近所あり
類型7	150～200万円未満×親族あり×近所なし
類型8	150～200万円未満×親族あり×近所あり
類型9	200～400万円未満×親族なし×近所なし
類型10	200～400万円未満×親族なし×近所あり
類型11	200～400万円未満×親族あり×近所なし
類型12	200～400万円未満×親族あり×近所あり
類型13	400万円以上×親族なし×近所なし
類型14	400万円以上×親族なし×近所あり
類型15	400万円以上×親族あり×近所なし
類型16	400万円以上×親族あり×近所あり

表4-2 類型別該当数と訪問数

類型番号	該当数	訪問数
類型1	39人	6人
類型2	48人	6人
類型3	27人	6人
類型4	77人	6人
類型5	17人	6人
類型6	24人	6人
類型7	14人	6人
類型8	39人	6人
類型9	23人	4人
類型10	31人	4人
類型11	27人	3人
類型12	64人	3人
類型13	6人	2人
類型14	8人	2人
類型15	18人	2人
類型16	25人	2人

## 2 2次調査の結果（事例）

### （1）質問項目

2次調査は調査票（VI資料3参照）に即してインタビュー形式で行った。聞き取りの内容を項目別に示したものが表4-3である。

表4-3 質問項目一覧

1	住宅状況
2	地域環境（観察）
3	生活歴・職業歴
4	健康状態・通院の状況
5	現在の生活状況
6	買い物物の状況について
7	緊急時対応
8	正月三が日の過ごし方
9	近隣関係について
10	今後の生活について
11	行政サービスへの期待
12	その他（特記事項）
13	調査員所見

### （2）事例の内容

ここでは、70ケースの中から、類型ごとに事例を抜粋して掲載する。事例の記述の柱は、①生活状況（住宅を含む）、②本人の生活歴、③家族や地域とのつながり、④生活上の不安や困りごとの4点である。なお、掲載に当たってはプライバシー保護の観点から、事例の内容に影響のない範囲で加工している。

#### ■類型1 150万円未満×親族づきあいなし×近所づきあいなし

事例1 男性 70代

#### 1 生活状況

築50年以上の賃貸アパートの2階に居住。風呂はなく、畳や壁、襖の傷みが激しい。階段が急で、これまでに転げ落ちたことがあるという。膝が悪く、杖歩行である。血圧等で内科に通院しているほかは、サービスなどの利用はない。生活全般について、買い物など誰かに付き添ってほしいと思うのだが、相談センターでは「介護度がつかないと難しい」と言われ、今は自分でするしかない状況である。生活リズムは規則的だが、食事につい

ては、朝食はあるものですませ、昼食はファストフードを食べたり、食事をとらないこともあるという。夕食は買って来たものを食べている。日中はやることがないので部屋で過ごすことが多い。1次調査では、自身の経済状況について「余裕はないが生活していくには困らない」と回答している。

#### 2 本人の生活歴

出身は九州地方。20年以上前に離婚して以後、いく度かの転居を経て港区へ移り住む。当初は製造業に就いていたが、その後職を転々とし、都内では管理人の仕事などをしてきた。

#### 3 家族や地域とのつながり

離婚後、家族とは会っていない。親戚などともつきあいはない。正月三が日は毎年1人で過ごしている。近所づきあいは、隣のひとと話をする程度で、町会・自治会にも加入していない。緊急時に来てくれるような人はおらず、警備会社と契約しているのみである。

#### 4 生活上の不安や困りごと

近所に店がないため、週に1回、バスで区外へ出かけているが、杖を使っており、膝も痛いため、重いものを持つのがつらい。買い物への付き添いが欲しいと思っている。経済状況については、年金生活であり、不安はない。住宅について、都営住宅に何度も申し込んでいるが当たらないので、供給量を増やしたり、高齢者用の住宅を整備してほしいと思っている。

事例2 女性 70代

#### 1 生活状況

築15年以上の木造賃貸アパートの1階に居住。歩くと床がギシギシし、部屋は全体的に老朽化している。日当たりが悪く部屋は暗い。水道は止まっているが、外の蛇口からは水が出る。自宅に風呂はあるものの、水道が止まっていることと、老朽化が激しいことから使っていない。入浴は銭湯を利用している。普段はパートで清掃の仕事をしており、来年定年を迎える。自身の経済状況については、1次調査で「かなり苦しい」と回答している。体は元気で、普段はテレビを観たり、ス

トレッチをしたり、ときどき買い物に行ったりしている。

## 2 本人の生活歴

関東地方出身。若いころは旅行が好きでよく出かけていた。若いころは会社勤めをしていたが倒産。結婚して地方都市に居住していたが、子どもが大きくなってから離婚して家を出た。その後は飲食店の手伝いや清掃の仕事などを転々とする。途中、お店の借金を肩代わりするなどして苦労したが、借金については返済した。

## 3 家族や地域とのつながり

月1回程度、職場が同じだった友人と交流している。近所の人とは挨拶を交わす程度だが、そのくらいがちょうどいいと思っている。回覧板は見ることがなく、町会があるかどうかは知らない。正月三が日は、今年は1人だったが、友人の家に行くこともある。緊急時に来てくれるような人はいない。

## 4 生活上の不安や困りごと

家事や買い物など日常生活は1人でやっていける。少し健康に不安もあるが、大きな病気はしたことがなく、元気である。買い物は週に1回程度スーパーでまとめて買い、そのほかコンビニにも足を運ぶ。小分けにして売っているものを利用するので、重いものを運ぶことなどに不便を感じたことはない。将来、もっと年をとって動けなくなったとき、友人に頼むのも気が引けるため、どうしたらよいか不安に思っている。また、定年後は収入がなくなってしまう。仕事を探しているが見つからなく困っている。行政には、住む所をあっせんしてほしいと思っている。

### ■類型2 150万円未満×親族づきあいなし×近所づきあいあり

#### 事例3 女性 70代

## 1 生活状況

持ち家（一戸建て）である。普段生活しているのは1階部分のみで、2階は物置に使っている。3階は人に貸している。経済状況については1次調査で「かなり苦しい」と回答している。体調の良い時はよく歩いているが、ぜんそくで風邪をひ

きやすく、通院している。介護サービスなどは利用していない。生活リズムは規則的で、朝5時半には起床、夜9時ころには就寝。日中はお稽古ごとに通ったり、友人と会ったりするなど、ほとんど外出している。

## 2 本人の生活歴

港区の出身。転居したことはない。兄弟は多いが、みんな都外に住んでいる。近所づきあいは挨拶したり、お茶を飲んだりする間柄である。地元なので幼いころからのつきあいがあり、仲の良い友人がいる。正月三が日も、3日のうち1日は友人と過ごしている。友人はみんな高齢なので、増える事はなく、減る一方であることがさびしい。仕事は10年ほど金融関係で働いたあと、総務関係の仕事に従事。途中、親の介護で退職したこともあるが、その後復職し、数年前まで働いていた。

## 3 家族や地域とのつながり

結婚したことはなく、子どももいない。姪が将来の面倒を見てくれるというが、当てにはしていない。友人との交流は多く、自治会にも加入し、バス旅行などにも参加している。緊急時の支援者は近隣の人で、鍵も預けていて、時折様子を見に来てくれている。

## 4 生活上の不安や困りごと

今のところは健康であり、困っていない。買い物には週2～3回行っており、重いものは分割して買うようにしている。物価が高いことと、将来、歩けなくなったときのことを考えると、買い物だけでなく生活全般が不安である。近所で孤独死の話も聞く。もしここで倒れたら、電話はできても鍵を開けられないのではと心配である。ほかに、経済面では固定資産税の負担が大きく、家賃収入がなくなった場合のことを考えると不安である。

#### 事例4 男性 70代

## 1 生活状況

都営住宅の中層階に住んでいる。老朽化はしていないが、風呂やトイレが狭くて使いづらい。自身の経済状況については、1次調査で「余裕はないが生活していくには困らない」と回答している。持病があり、手術後、通院を続けている。食

事は1日1食のみで、昼すぎに外食ですませている。外出するのは通院するときと食事をするときだけで、日中は自宅でテレビを見るなどして過ごしている。時折カラオケの会に参加することもある。入浴などは自分でできるが、料理は全くできない。

## 2 本人の生活歴

関西地方出身。父親を戦争で亡くし、母に育てられた。高校卒業後、農家の手伝いを経て設計関係の会社に勤務。退職後、都営住宅に当選したことがきっかけで港区に転入してきた。婚姻歴はない。

## 3 家族や地域とのつながり

兄弟はいるが全く連絡をとっていない。近所の人とは会えば世間話をする程度のつきあいはしている。自治会に加入しているが活動はしていない。緊急時に来てくれるような人はいない。

## 4 生活上の不安や困りごと

経済的には年金で賄えるので心配はない。料理ができないため、将来体が動かなくなってきたときに不安になる。

### ■類型3 150万円未満×親族つきあいあり×近所つきあいなし

#### 事例5 女性 70代

## 1 生活状況

築30年以上の民間賃貸マンションの中層階に居住。老朽化しているものの住宅設備に不満はない。ただし家賃が高い。自身の経済状況については、1次調査で「やや苦しい」と回答している。白内障の手術をした以外は健康で、毎朝体操をしている。生活リズムも規則正しく、住環境も気に入っている。今も現役で仕事を続けている。

## 2 本人の生活歴

関東地方出身。戦時中は小学生だったので、東北地方に疎開していた。戦後もそのまま東北に住み、就職もしたが、兄弟を頼って上京。仕事を見つけ、港区内に居住するようになった。結婚したことはない。

## 3 家族や地域とのつながり

姉とは仲が良く、映画を見に行ったり一緒に旅行に行ったりしている。正月三が日は1人で過ご

しているが、緊急時には姉が駆けつけてくれる。近隣の人とは挨拶をする程度。仕事をしているので時間や話が合わないと感じている。自治会の活動については知らない。

## 4 生活上の不安や困りごと

近くに店がなく、買い物が不便である。自分は自転車に乗って買い物に行けるのでいいのだが、将来が少し心配。また、生活費については、年金だけでは足りず、持ち出しとなっている。家賃が高いため、都営住宅に入居したいと思っている。そうすれば年金のみで暮らせると思う。しかし、10年前から何十回と申し込んでも当たらないので困っている。

#### 事例6 女性 80代

## 1 生活状況

築数年の賃貸マンションに居住。本人の家賃負担はなく、夫の死後、親戚の好意で借りてもらっている。自身の経済状況については、1次調査で「余裕はないが生活していくには困らない」と答えている。交通の便が良いが、緑内障を患っており、ひとりで外出することができない。室内も杖歩行である。日中は室内にすることが多い。週2回、ヘルパーを利用。料理の下ごしらえや買い物などをしてもらっている。生活リズムは規則正しく、3食ともカロリー計算されたものを食べている。

## 2 本人の生活歴

関東地方出身。親の代から教員である。1次調査で「結婚したことがある」と回答している。

## 3 家族や地域とのつながり

現在つきあいのある親族は姪で、なにかと助けられている。しかし都外に住んでいるため、緊急時は姪よりもヘルパーの方が到着が早いと思う。正月三が日は1人で過ごしている。近所づきあいは全くないが、このマンションに住んでいる人はあまり近所づきあいをしたいとは思っていないと思う。回覧板もなく、自治会についてはよく分からないが、連絡事項は管理事務所から直接来ている。

## 4 生活上の不安や困りごと

近くにお店があるので、自分で買い物に行くこ

ともあるが、目が悪く商品の札が読めない。決まったものだけなら自分で買えるが、そのほかの買い物は人に頼むしかない。また、今は親戚の好意でここに住んでいるが、いつまでここにいられるのかはわからないので、物件を探したいと思っている。以前、高齢者を狙った詐欺に遭ったこともあり、心配。

#### ■類型4 150万円未満×親族づきあいあり×近所づきあいあり

##### 事例7 女性 80代

#### 1 生活状況

築10年以上の区営住宅に居住。高齢者専用なのでバリアフリー化が進み、住みやすい。本人は健康で通院もしていない。生活リズムは規則正しく、日中、短時間だが飲食店でアルバイトをしている。家賃が安いので、年金と不定期の仕事の収入で生活費は十分賄えており、経済状況について「余裕はないが生活していくには困らない」と感じている（1次調査回答）。多趣味で、コンサートに出かけたり友人と会食したりとアクティブに過ごしている。

#### 2 本人の生活歴

港区の出身。父親は職人だったが、その後商店を営む。兄弟は3人。本人は女学校卒業後、書店、飲食店などいろいろな仕事を経験した。25歳のとき見合い結婚したが、40歳で離婚。子どもはいない。

#### 3 家族や地域とのつながり

兄弟は仲が良く、関東地方にバラバラに住んでいるが、親の命日などに集まっている。緊急時には兄弟が駆けつけてくれる。近所づきあいはよくしていて、隣近所の人に手料理を持っていっておすそ分けをしたりしている。正月三が日は、小学校時代の友人と過ごした。

#### 4 生活上の不安や困りごと

商店街が残っているので、買い物も至便、友人との交流も多く、特に困っていることはない。将来自分が死んだときに、葬式代だけ出せるようにしてあり、それ以外は考えても仕方がない、毎日が楽しいという。

##### 事例8 男性 70代

#### 1 生活状況

築20年以上の持ち家一戸建てに居住。以前、両目の白内障の手術をし、現在、緑内障も患っている。数年前から膝が悪く、ゆっくりであれば歩行はできるが畳に座るのはつらくなってきた。心臓にペースメーカーを入れており、身障者手帳を持っている。健康管理のため、粗食にするよう心がけている。食事は3食とも自炊している。風呂はいきいきプラザを利用し、バイクで通っている。生活リズムは規則正しく、夜8時ころには就寝、明け方に起床する。読書が趣味で、家では本を読んでいる時間が長い。買い物はやはりバイクで区外まで出かける。時々電車で遠出することもある。1次調査では、自身の経済状況について「かなり苦しい」と答えている。

#### 2 本人の生活歴

港区出身。現在の場所にずっと住んでいる。兄弟は妹が都外に住んでいる。中学卒業後からずっと大工をしている。結婚し子どもをもうけたが20年以上前に離婚している。

#### 3 家族や地域とのつながり

子どもが月1回程度様子を見に来てくれるので、緊急時にも駆けつけてくれると思う。近隣は昔からの住民も多く、つきあいは親密で、町会の役員もしていたことがある。今は役員はしていないが、何かと頼られることが多い。

#### 4 生活上の不安や困りごと

現在は年金のみで生活しているが、なんとか食べていける。以前はスポーツセンターに通ったりもしていたが、今は膝が悪く歩くのもつらいので行っていない。あちこち病気で悪くしているので、将来については不安がある。

#### ■類型5 150万円以上200万円未満×親族づきあいなし×近所づきあいなし

##### 事例9 女性 60代

#### 1 生活状況

築20年以上の民間賃貸アパートに居住。老朽化が進んでいる。生活リズムは規則正しく、仕事を

している。日中は外に出ている。健康状態は良く、買い物については困っていない。仕事で精一杯の毎日である。経済状況は「かなり苦しい」（1次調査回答）。

## 2 本人の生活歴

関東地方出身。ひとりっ子で兄弟はない。学校卒業後、モデルの仕事などをする。結婚して10年もしないうちに夫が他界し、以後ひとりで暮している。

## 3 家族や地域とのつながり

緊急時には姪が来てくれると思うが、普段のつながりはとくにない。近所づきあいは挨拶程度で、町会・自治会には加入しているものの、活動はしていない。

## 4 生活上の不安や困りごと

20年ほど前に飲食店を経営していたが、景気の悪化に伴い店を閉めた。ローンだけが残り、その返済のために現在も掛け持ちで仕事をして返済に充てている状況である。生活はぎりぎり、貯えがなく、保険にも加入していないため不安である。今は元気で働いているが、体を壊して仕事を失ったら、ローンを返済できなくなり、ホームレスになってしまうのではと心配している。

### 事例10 女性 70代

## 1 生活状況

築50年の民間賃貸マンションに居住。健康状態は良く、睡眠と食事に気をつけているという。サービスは利用していないし、利用したいと思わない。生活リズムは規則正しく、朝5時に起床、夜は11時ころ就寝。夕食はとらず1日2食である。日中は家事、買い物等に出かけ、午後は仕事をしている。家事は好きではないため、手助けがあれば助かるが、自分でできないというわけではない。買い物には2、3日に1度スーパーに出かける。1次調査では、自身の経済状況について「かなり苦しい」と回答している。

## 2 本人の生活歴

関東地方出身。兄弟は多い。結婚したことはない。若いころは音楽やスポーツなどの趣味に熱中し、大学を出たあとは幼稚園に30年ほど勤め転職。海外に住んでいた時期もあったが、両親の介護の

ため帰国、看取ったあとも現住所にとどまっている。

## 3 家族や地域とのつながり

兄弟とは連絡をとり合っていない。近所づきあいは挨拶を交わす程度だがこのくらいがちょうどいい。あまり親密につきあうことは望んでいない。マンションの組合には参加しているが、町会・自治会には加入していない。緊急時には近所に住む教え子が来てくれ、この人とは週に何度かやり取りをしている。この10年ほど正月三が日はひとりで過ごしている。1年のうちひとりでのおんぴりできるのはこの時期くらい。

## 4 生活上の不安や困りごと

今はスーパーに買い物に行っているが、近くの商店がなくなっていくのは困る。訪問販売が多く、物価が高いなど、住みにくく感じることもある。ホームドクターがいないのは不安。仕事の収入と年金で生活しており、貯金がないことが不安。家賃の補助があればいいのと思う。しかし、全体的には現状で満足していて、快適に暮らしている。

### ■類型6 150万円以上200万円未満×親族づきあいなし×近所づきあいあり

### 事例11 男性 70代

## 1 生活状況

築10年未満の都営住宅に居住。老朽化はしていないが、部屋は雑然としている。経済状況は「やや苦しい」と感じている（1次調査回答）。健康状態はあまり良くないが、通院はしていない。生活リズムは特に定まっていない。昼前に朝昼兼用の食事をとり、夕方夕食をとる。どちらも自炊している。日中は部屋でテレビを観て過ごすことが多い。そのほか、家事や植木の手入れをしている。夜はテレビゲームをしている。ときどき温泉にでかけたり、友達と会ったりしている。

## 2 本人の生活歴

関東地方の出身。父親は軍人だったが、本人が小学生のころ死別している。兄弟はない。学校もあまり通わず、住み込みの仕事やタクシーの運転手などをしてきた。結婚したことはない。天涯孤独の身で家族はなく、親族ともつきあいはない。



都営住宅に当たったので港区に転入してきた。

### 3 家族や地域とのつながり

家族はなく、親族とのつきあいもない。近所の人とは時々行き来したり、お茶を飲みに行ったりしている。町会に加入はしているが、活動はしていない。回覧板はないが掲示板がある。

### 4 生活上の不安や困りごと

年金生活で、生活そのものに不安はない。買い物は1～2週に1度程度スーパーに行っていて、特に困ってはいない。緊急時に来てくれる人はいないが、おそらく近所の人に来てくれるのではないかと思っている。自分の望みは特になく、とにかく周りに迷惑をかけたくないと思っている。自分が死んだとき、どうなるのか不安に思っている。

#### 事例12 男性 70代

### 1 生活状況

民間賃貸住宅の一室に居住。老朽化はしていないが、ワンルームで、ユニットバス。室内は雑然としている。1次調査では、自身の経済状況について「余裕はないが生活していくには困らない」と回答している。健康状態は内臓の病気をしており、あまり良くない。生活リズムは規則正しく、朝は4時頃起床、夜は9時ころ就寝。食事は3回とるが、いずれも買って来た簡単なもので済ませている。日中はテレビを見たり、昼寝をしたりして過ごし、社会参加活動はしていない。

### 2 本人の生活歴

関東地方出身。兄弟は多かったが、兄や姉はみんな亡くなってしまった。弟たちは生存している。小学生の時に終戦を迎える。高校卒業後は、しばらく地元で仕事をしていた。山が好きで、山小屋の仕事をしたこともある。その後、新聞配達の仕事をしながら関東各地を転々としたが、60歳のとき無職になり、バイクで仕事を探しに都心まで出てきたものの見つからず、ホームレスとなった。生活保護を受け、現在に至る。

### 3 家族や地域とのつながり

離婚経験があり、子どもや元妻とは交流がない。近所づきあいもない（※註：1次調査では「ときどき行き来するくらい」のつきあいがあると回答

していたため、類型6に分類されている）。

### 4 生活上の不安や困りごと

今後の事を考えると、マンションの更新費や転居費用もないので不安である。具体的な不安というよりも、気力がなくただ生きているだけで、何故生きているのか疑問に感じている。社会に何の役にも立たない自分のような人間が生きていても仕方ないと思っている。

### ■類型7 150万円以上200万円未満×親族づきあいあり×近所づきあいなし

#### 事例13 女性 80代

### 1 生活状況

築40年以上の集合住宅に居住。持ち家である。建物は古いが室内は整理整頓されている。風呂・トイレ・台所あり。数年前に入院して以来定期的に通院しているが、経過は良好で元気である。生活リズムは規則正しく、自宅とは別の場所に自身の店を構えており、午前中はその店の手伝いをしている。家事は自分で行っているが、買い物については知人に依頼している。年に数回程度、学校時代の友人と会って食事をしたりしている。経済状況は「やや苦しい」と感じている（1次調査回答）。

### 2 本人の生活歴

港区出身。兄弟の多い大家族で育つ。戦争中は一時都外へ疎開していた。学校卒業後は、飲食店経営や販売店などを手掛け、現在は小売店のオーナーである。現在のマンションには父親が存命中からずっと居住している。結婚したことはなく、ペットと暮らしている。

### 3 家族や地域とのつながり

生存している兄弟とは行き来があり、よく連絡をとり合っている。緊急時の支援者はその兄弟である。また、買い物については週に1回知人に頼んでいる。近所の人とは、マンションの別の階に住んでいる人とおすそ分けをしあうこともあるが、その程度。これ以上親密につきあいをしたいとも思わず、現状で満足している。町会はあると思うが分からない。

#### 4 生活上の不安や困りごと

家事などには不便はないが、買い物だけは知人を買ってきてもらっているので自分で欲しいものを見て選ぶことができないのが不便である。将来については、体が動かなくなったら家事ができなくなると思うと不安である。また、自分が何歳まで生きられるのか分からないので、お金をどのくらい残しておけばいいかわからない。なるようにしかならないので、考えないようにしている。

#### 事例14 女性 70代

##### 1 生活状況

築30年以上の集合住宅に居住。持ち家である。このマンションが建ったときからずっと住んでいる。健康状態は、20年以上前に大病を患い、以後通院を続けているが、それ以外は元気で、ダンスやジムに通っている。炊事、家事、入浴などはすべて自分でやっている。日中はあちこち外出していてあまり家にいない。物価は高いと思うが住みやすいと感じている。経済状況については「余裕はないが生活していくには困らない」と感じている（1次調査回答）。

##### 2 本人の生活歴

中国・四国地方の出身。兄弟は多く、本人は末っ子だった。学校に通うために上京、卒業後は会社勤めをしていた。20代で結婚し、専業主婦になった。子どもが1人いる。

##### 3 家族や地域とのつながり

夫と死別してからひとりで暮している。子どもは近くに住んでおり、メールなどで連絡をとり合っている。また、兄弟の1人が関東地方に住んでおり、本人が面倒を見ているが、そのほかの兄弟とは連絡をとり合っていない。緊急時には子どもが来てくれる。正月三が日にも子ども家族が訪ねてくる。夫が生きていたころは旅行などもしていたが、今はひとりなので、子どもが来ていないときは家にいる。近所づきあいは一切ない。マンションに住んでいる人とは挨拶を交わすことはあるが、多くの持ち主は個別に部屋を貸しているため、誰が住んでいるのかわからない。若い人とは生活時間帯も合わない。このようなことではいけ

ないと思っている。

#### 4 生活上の不安や困りごと

買い物については、週に1回、カートを引いてスーパーに出かけている。配達サービスを利用することもある。子どもも近くに住んでいるので、とくに困っていない。経済的にも困ってはいない。不安があるとすれば将来のことで、子どもの世話になりたくないで、どこか老人ホームなどに入居したいと思っている。健康管理をして自立したい。

#### ■類型8 150万円以上200万円未満×親族づきあいあり×近所づきあいあり

#### 事例15 女性 90代

##### 1 生活状況

築50年以上の集合住宅に居住。風呂・トイレは共同で、部屋が狭く片付かないことが悩み。15年ほど前に入院・手術をしたが、その後は定期的に健康診断をしている程度で元気である。生活リズムは規則正しく、1日2食自炊している。就寝は少し遅い。月1回ほどのペースで小旅行に出かけるなどしている。1次調査では、自身の経済状況について「余裕はないが生活していくには困らない」と答えている。

##### 2 本人の生活歴

関東地方の出身。兄弟は今も存命。尋常小学校卒業後、働きに出る。戦前に満州に渡り、タイプを習い、帰国後はタイプの仕事をしていた。在宅でも仕事ができるので、長く働いていた。結婚したことはない。

##### 3 家族や地域とのつながり

緊急時には親戚が来てくれることになっている。年末に兄弟の家へ出向き、正月三が日はあちこち初詣に出かけている。近所づきあいは、古い知り合いと挨拶程度のつきあいがある。都内に住む友人とは食事会をしたりしている。

##### 4 生活上の不安や困りごと

買い物には週3回程度行っており、特に不便はない。経済的にもなんとかやっつけていける。将来については、周りに迷惑をかけたくないと思っている。

## 事例16 女性 80代

## 1 生活状況

築20年以上の管理人住宅に居住。風呂はない。今年中に引っ越さなければならず、都営住宅の抽選を待っている。経済状況については「余裕はないが生活していくには困らない」と感じている(1次調査回答)。健康状態は良好で、仕事をするのが健康の秘訣だという。生活リズムは規則正しく、朝5時ころ起床、夜は9時すぎには就寝。朝食は自宅で、昼食は外食、夕食は買って来た惣菜を食べている。日中は毎日仕事をしており、土日にたまった家事をこなし、そのあと自宅で過ごしている。

## 2 本人の生活歴

関東地方の出身。戦争の前後に両親を相次いで亡くし、兄弟も他界した。残った他の兄弟は離ればなれになり、本人はある会社の経営者家族に育ててもらい、そのまま就職した。内縁関係にあった元夫との間に子どもがいる。子どもとの親交はあるが、元夫とは会っていない。

## 3 家族や地域とのつながり

関東地方に住む子どもたちとは日々親交があり、緊急時にも駆けつけてくれる。近所づきあいについては、近所に住む友人と日常的につきあいがある。民生委員もよく知っていて交流がある。町会・自治会には参加していない。

## 4 生活上の不安や困りごと

経済的には年金生活で、最低限あれば足りるので困らない。ただし、勤務先の会社がなくなるため、管理人住宅も出ていかななくてはならない。都営住宅に当たらないと生活が厳しくなってしまうので、当たるかどうか不安である。

## ■ 類型9 200万円以上400万円未満×親族づきあいなし×近所づきあいなし

## 事例17 女性 80代

## 1 生活状況

築40年以上の集合住宅の7階に居住。持ち家である。室内はリフォームされておりきれいだが、居室が狭く、収納が少ないのが悩み。マンション

内の他の部屋は事務所として利用している人が多い様子。1次調査では、自身の経済状況について「やや余裕がある」と答えている。健康状態は持病があり、あまり良くない。要介護度1である。月に1回通院している。介護保険でホームヘルパーを週3回利用、掃除をしてもらっている。生活リズムは、朝の起床はゆっくりで、昼食は朝食と兼用でとっている。夕食は夕方、どちらも自炊である。日中はほとんど外出せず、テレビを見て過ごしている。

## 2 本人の生活歴

関西地方の出身。父親は会社を経営、兄弟の一番上だった。戦時中は会社の経営状況も良かったが、終戦後は景気が落ち込み、同業の会社が次々に倒産。父親の会社も倒産してしまった。専門学校で資格取得後、関西地方の会社に数年間勤務。20代のころ関東へ転居し、会社員として勤務を続け、貯蓄をしてマンションを購入した。マンションの購入が港区への転入のきっかけである。結婚はしたことがない。

## 3 家族や地域とのつながり

兄弟のうち1人は居場所が分かっているものの、音信不通である。そのほかの兄弟は20年以上連絡をとったことがないので生きていられるかどうか分からない。緊急時に来てくれる人はいない。正月三が日はいつもひとりで過している。近所の人とは挨拶程度のつきあいである。マンションの自治会に加入はしているが、活動はしていない。

## 4 生活上の不安や困りごと

買い物は週に1回スーパーへ行くか、ヘルパーに依頼する。お店が少なくなり、あっても日用品を扱わなくなったりして不便に感じている。また、ひとりで行くのが大変である。経済的には、年金と預貯金で贅沢をしなければ不安はないが、ひとりの生活でさびしく不安で死にたくなる。「どうやったら楽に死ぬるか」と考える。周りが相手にしてくれず、3、4日誰とも話をしないこともある。ヘルパーしか話し相手がない。兄弟とも関係を断ち、友人を作ったことがなかった自分が悪いと思っている。

## 事例18 女性 70代

### 1 生活状況

築40年以上の民間賃貸住宅に居住。古いので多少不具合がある。20年以上住んでいる。家賃はこのあたりとしては安いのかもしれないが、本人には高い。経済状況については1次調査で「かなり苦しい」と回答している。健康状態は普通で、月1回程度通院している。生活リズムは朝が少し遅い。朝食は10時ころ自炊している。昼食は食べたいときに自炊。夕食は夕方早めにとり、夜間に清掃のアルバイトをしている。日中は、体を休めたり読書をしたりしている。週末は礼拝にでかけたり、友人と食事をしたりしている。

### 2 本人の生活歴

東北地方の出身。父親は土木関係の仕事をしてきた。兄弟はいるが、自分は親戚に引き取られて育てられた。小学生のころ終戦を迎えた。戦前と戦後であまり生活は変わらなかった。地元の専門学校を出て美容師の資格を取り、関東地方で仕事をしてきた。結婚はしたことがない。職場からの距離が近かったので現在の地に住んでいる。この地域には住みなれているので愛着がある。結婚したことはない。

### 3 家族や地域とのつながり

兄弟は数年前に他界し、兄弟の子どもが関東地方にも住んでいるが、最近では連絡をとっていない。緊急時には教会の友人が来てくれる。近隣とは挨拶程度のつきあいで、町会・自治会があるのかどうか分からないため加入していない。正月三が日はひとりで過ごしている。元旦には教会に行く。働いているころは友人と過ごしていた。

### 4 生活上の不安や困りごと

この周辺では生鮮食料品を扱っていないので、配達を頼んでいる。そのほかのものは、毎日コンビニやスーパーで買っている。近くのスーパーがつぶれてコンビニになってしまったのが残念。年金だけでは家賃負担が大きいため生活費が足りず、アルバイトをしている。年金だけで生活できる人もいるが、自分は生活できない。ずっと仕事して税金、年金納めて来たのに、人生の最後に来て困るとは思わなかった。住宅問題を何とかして

ほしい。都営や区営は家族としか入れないが、友人とも入れるようにしてほしい。

## ■類型10 200万円以上400万円未満×親族つきあいなし×近所つきあひあり

## 事例19 女性 60代

### 1 生活状況

築数年の分譲マンションの3階に居住。室内は雑然としている。居室が狭く、台所が使いにくい。健康状態はあまり良くなく、定期的に通院している。家事援助サービスを週1回利用している。生活は規則正しく、朝食は簡単に済ませている。昼食と夕食は買って来たものを食べている。経済状況については「やや苦しい」と感じている（1次調査回答）。日中は室内で家事をしたりテレビを見たりして過ごしている。ほかにはボランティア活動や教会に出かけている。

### 2 本人の生活歴

港区出身。家族関係は複雑で、母親とは血がつながっていない。幼少のころ終戦を迎えた。都外で学校に通ったりしばらく仕事をしたあと、地元に戻って再就職をする。働きながら資格を取り、病院等で働く。結婚したことはない。母親は10年前に他界した。

### 3 家族や地域とのつながり

家族はいない。母方の親戚が地方にいるが連絡をとったことがない。従兄弟や本家の親戚とはたまに連絡をとったりしている。正月三が日はいつも教会と自宅ですべてひとりで過ごしている。近所つきあいについては、1人だけ年に数回行き来する友人がいるがそれ以外はない。町会・自治会には加入していない。地域のふれあいが欲しいと思っている。

### 4 生活上の不安や困りごと

買い物は毎日スーパーに行っており、不便はない。経済的には年金暮らしで、将来税金や物価、医療費等が上がらないか不安に思っている。お中元、お歳暮、年賀状は送らないようにした。将来のことを考えると病気に障るので、できるだけ考えないようにしている。

## ■類型11 200万円以上400万円未満×親族づきあ いあり×近所づきあいなし

事例20 男性 70代

### 1 生活状況

築40年の都営住宅の高層階に居住。西日がきついでベランダに簾をかけている。バリアフリー工事をして段差をなくしてある。血圧が少し高いため、通院し、自分でも毎日血圧を測っている。また、10年ほど前から耳が悪くなり、補聴器をしており、障害者手帳を持っている。耳が悪いと人と会うのが億劫になり人づきあいをしなくなる。補聴器はわざと目立つものを使い、横を向いて補聴器を見せ、耳が悪いということをアピールするようにしている。1次調査では、自身の経済状況について「余裕はないが生活していくには困らない」と答えている。生活リズムは規則正しく、朝早く起床、夜早く就寝している。日中は、週に1度は妻が入所している施設に見舞いに行くが、他の日は買い物に行く程度で、あとは家でテレビを見て過ごしている。家事は自分でしている。

### 2 本人の生活歴

港区出身。兄弟は多く、本人は長男であった。小学生の時に関東の地方都市へ家族で疎開した。中学卒業後、親戚の会社に勤め、30代のころに転職、技術職として従事し定年まで勤め上げた。20代で結婚、子どもがいる。妻はパートで働いていたが、10年ほど前に病気で倒れ、今は施設に入所している。それ以来ひとり暮らしをしている。子どもの家族がよく様子を見に行ってくれている。

### 3 家族や地域とのつながり

子どもとの連絡は密にあり、FAXで毎日体の様子やその日の予定などを送信している。妻の施設に見舞いに行くときの送迎もしてもらっている。正月三が日には子ども家族が遊びにきて、みんなでご飯を食べた。緊急時には子どもの家族が来てくれる。近所づきあいは挨拶をする程度。自治会に加入していて、以前は役員もやっていたが、今は耳が悪く人と話すのが面倒になり、やっていない。地域の敬老会などにも参加していない。民生委員との交流はある。

### 4 生活上の不安や困りごと

買い物は、近くに商店街がないので区外の大型スーパーなどに出かけている。近所にスーパーがあればと思うが仕方がないと思っている。生活全般については子ども家族がよくしてくれているので心配がない。年金生活で不足はない。妻の施設の費用のことは子どもに任せている。将来は、もう少し妻の面倒を見たいと思っている。

## ■類型12 200万円以上400万円未満×親族づきあ いあり×近所づきあいあり

事例21 女性 70代

### 1 生活状況

築数年程度の方譲マンションに居住。室内はバリアフリー化されている。集合住宅だが、玄関に続く廊下が細かく分かれ独立した印象で、同じ階でも横の部屋へは行けない構造になっている。経済状況については「やや余裕がある」と感じている（1次調査回答）。耳が悪く補聴器を使用しているが、その他は健康で、ラジオ体操や区の健康教室に通い、運動を心がけている。生活リズムは規則正しく、1日3食だいたい決まった時間にとっている。日中はボランティア活動にでかけている。

### 2 本人の生活歴

出身は信越地方。生育家族については、大陸から引き揚げてきたこと以外は回答がなかったため不明。結婚するまで数年間看護師をしていたこともあるが、20代で結婚後は専業主婦だった。港区には50年以上住んでいる。港区はサービスが良く、他区の友達からもうらやましがられるほどで、暮らしやすいと感じている。

### 3 家族や地域とのつながり

夫は他界した。子どもは関東地方に住んでおり、週1回程度来る。孫を連れて遊びに来ることもある。金銭管理を頼んでいる。緊急時にも子どもが来てくれる。近所づきあいはあまりない。挨拶程度である。建物の構造上、ほかの部屋に住んでいる人と顔を合わせる機会がなかなかない。町会・自治会には参加していない。

#### 4 生活上の不安や困りごと

スーパーも近く、毎日買い物に行けるので不便はない。駅やバス停も近い。経済的にも年金その他収入で賄えている。夫が亡くなってから気を遣う必要がなくなり、自分の好きなことをして過ごせるので楽しい。いろいろなことをしたいと思っている。心配の種は健康面だけである。

#### ■類型13 400万円以上×親族づきあいなし×近所づきあいなし

事例22 男性 90代

##### 1 生活状況

築10年ほどの都営住宅に居住。室内はきれいに整頓されている。健康状態としては本人は「普通」だと感じている。入院や手術を経験、現在要支援2で、歩行器を使用している。そのほか定期的な通院をしている。ホームヘルパーと、配食サービスを利用している。生活リズムは規則正しく、朝食は自炊、昼食は買ってきたものを食べ、夕食は配食サービスを利用している。日中は部屋でテレビを見ていることが多く、時々散歩することもある。昔はデイサービスに行っていたが、現在は社会参加はしていない。家事についてはヘルパーが掃除や洗濯のほか、散歩がてらの買い物に付き添ってくれる。1次調査のデータでは、自身の経済状況について「やや余裕がある」と答えている。

##### 2 本人の生活歴

東海地方の出身。父親は鉄道関係に勤め、転勤が多かった。兄弟は今も東海地方に住んでいる。健康状態が悪かったために徴兵されなかったので戦争には行かなかった。高校卒業後、製造業に長く勤める。現場勤務が長い。港区へは都営住宅に当選したのがきっかけで転入してきた。

##### 3 家族や地域とのつながり

妻は数年前に他界した。子どもはいるが連絡はほとんどとっていない。緊急時には子どものうち1人が来てくれると思うが、すぐにではないと思う。正月三が日は毎年ひとりで過ごしている。近所づきあいは挨拶程度で、深いつきあいはない。自治会には加入しているが活動はしていない。

#### 4 生活上の不安や困りごと

家賃が上がっているので、年金だけでは生活できなくなってきた。関東地方に土地を持っているが、維持費や税金で終わってしまう。将来の生活はひとりきりなので不安や孤独感がある。施設に入りたいと考えるようになった。

#### ■類型14 400万円以上×親族づきあいなし×近所づきあいあり

事例23 女性 80代

##### 1 生活状況

築10年ほどの分譲マンションに居住。段差もなく住み心地はいいという。経済状況については「かなり余裕がある」と感じている（1次調査回答）。健康状態はよく、プールやストレッチに通って健康維持を心がけている。軽い脳こうそくを起こしたことがあり、外出時は杖を持って出かけている。子どもの送迎で通院をしている。生活リズムは規則正しく、食事は内容を工夫して3食自炊している。日中は室内で押し花などを行っている。以前は旅行もよくしていたが、今はあまりしなくなっている。

##### 2 本人の生活歴

関東地方の出身。実家は大きな商店を営み、店は忙しかったが暮らしぶりは裕福だった。学校を卒業後、結婚してからずっと港区に住んでいる。夫が亡くなった時に出身地へ戻りたいと思ったが、いまは港区の暮らしが気に入っている。

##### 3 家族や地域とのつながり

子どもは近くに住んでおり、買い物を頼むこともある。正月三が日は初詣に出かけている。近所づきあいは同じフロアの人とはよくつきあっている。近所の人に買い物を頼むこともある。町会費は払っているが活動はしていない。

##### 4 生活上の不安や困りごと

買い物は週に1回程度は自分で行き、そのほかは生協の宅配を利用したり、近所の人や子どもに買い物を頼んだりしていて、特に困ってはいない。荷物が重いときはタクシーを利用している。経済的にも将来的にも特に不安はない。

## ■類型15 400万円以上×親族づきあいあり×近所づきあいなし

事例24 女性 80代

### 1 生活状況

築数年の民間賃貸マンションに居住。若いころに大病をしたが、今は健康状態は普通程度。外出するときは杖かカートを押して歩き、タクシーで移動している。家事援助や訪問リハビリのサービスを利用している。生活リズムは規則正しく、3食きちんと食べている。料理教室の講師をしており、その準備や勉強などで忙しくしている。1次調査では、自身の経済状況について「やや余裕がある」と回答している。

### 2 本人の生活歴

関東地方の出身。父親は公務員だった。姉妹ばかりである。結婚後しばらくして港区に転入し、今までずっと住んでいる。

### 3 家族や地域とのつながり

子どもがそう遠くないところに住んでおり、緊急時にも駆けつけてくれる。正月三が日はみんなでホテルに宿泊したり食事をしたりして過ごす。近所づきあいは挨拶を交わす程度で、町会活動の内容は知っている。

### 4 生活上の不安や困りごと

買い物については、近くの商店がなくなってしまい不便になったので、生協やお店の配達などを利用している。そのほか、ヘルパーにも依頼している。港区の介護サービスには感謝している。経済的には不安はないが、将来料理をすることができなくなったらという不安は少しあり、老人ホームに入りたいと思っている。

## ■類型16 400万円以上×親族づきあいあり×近所づきあいあり

事例25 女性 80代

### 1 生活状況

築15年程度に分譲マンションに居住。自身の経

済状況については「やや余裕がある」と感じている（1次調査回答）。健康状態は中年期に手術をしたこともあるが今は普通程度。杖を使わずに歩行できる。マッサージにも通っている。ホームヘルプサービスを利用、掃除やゴミ出し、重いものを運ぶなどの家事を依頼している。給食サービスを利用しようと思い申し込んだが、好き嫌いがあったので数回でやめた。生活リズムは規則正しく、朝早く起きて体操をし、食事は自炊している。日中は新聞を読んだりテレビでスポーツ観戦をしたりして過ごす。また、歩くことが好きなので散歩にも出かけ、趣味の会にも参加している。週末は教会に行っている。

### 2 本人の生活歴

港区出身。父親が小売業を営んでおり、子どもの頃から、店の手伝いをしていた。専門学校に通って国家資格も取得している。結婚後も父の店で70代半ばまで働いていた。

### 3 家族や地域とのつながり

子どもと孫がいて、連絡をすればすぐに来てくれる。日常的支援も頼めるが、頼むと大ごとになるのであえてヘルパーに依頼している。正月の1日はひとりで過ごし、教会に行ったりお雑煮を食べたりしているが、三が日のうちには家族が料理を持ち寄って集まって来てくれる。友人とは一緒に外出して食事をしたりしている。マンションの人とは挨拶をする程度だが、それ以上は必要ないと思っている。マンションで親しい友人を作ろうとは思っていない。マンションが町会に加入していて、祭りなどの行事があるようだが参加はしていない。民生委員は昔からの知り合いなので電話などで連絡をとったりしている。

### 4 生活上の不安や困りごと

買い物する店も近く、便利で住みやすいので特に困っていることはない。オレオレ詐欺の電話がかかってきたこともあるが、機転を利かせて対応した。これからも趣味を広げていきたいと考えており、充実した毎日を送っている。将来寝付いてしまったときのことが不安ではある。

## V 調査から言えること

### 1 意識と生活の諸条件

すでに見てきたように、ひとり暮らし高齢者の安心感や満足感といった生活意識は、経済状況や社会的ネットワーク、住宅事情などの諸条件により異なってくる。ここでは、多変量解析の手法を用いて、さらに詳細に意識と生活条件に関する分析を行う。

#### (1) 生活意識を表すもの—因子分析から

本調査の質問項目から、健康状態や近所づきあい、外出、買い物の頻度などの身体的・行動的側面に関するもの、収入や預貯金、経済状況の感じ方など経済的側面に関するもの、そして意識に関する18の項目を選んだ(表5-1)。それらを変数として探索的因子分析(本分析においては最尤法、プロマックス回転を採用した)を行ったところ、5つの因子を抽出することができた(表5-2、表5-3)。第1因子は「生活の満足」、第2因子は「経済状況の苦しさ」、第3因子は「人間関係(コミュニケーション)」、第4因子は「不安・ストレ

ス」、第5因子は「外出・買い物の頻度」と解釈することができる。

表5-1 因子分析に用いた変数(一覧)

1	Q 8 健康状態
2	Q25近所づきあいの程度
3	Q33(1)外出頻度
4	Q34外出時の会話の程度
5	Q37(1)今の暮らしには張り合いがある
6	Q37(2)今の暮らしにはストレスが多い
7	Q37(3)生活は充実している
8	Q37(4)生活していて不安や心配がある
9	Q37(5)趣味をしている時間は楽しい
10	Q37(6)友人との関係に満足している
11	Q37(7)近所づきあいに満足している
12	Q37(8)自分は頼りにされていると思う
13	Q37(9)周囲から取り残されたように感じる
14	Q37(10)将来の生活は安心できる
15	Q38年間収入
16	Q39預貯金額
17	Q41経済状況の感じ方
18	Q14買物の頻度

表5-2 パターン行列

	因子				
	1	2	3	4	5
Q37(1)今の暮らしには張り合いがある	0.985				
Q37(3)生活は充実している	0.919				
Q37(5)趣味をしている時間は楽しい	0.510				
Q37(8)自分は頼りにされていると思う	0.414				
Q 8 健康状態	0.341				
Q41経済状況の感じ方		0.865			
Q39預貯金額		-0.684			
Q38年間収入		-0.608			
Q37(10)将来の生活は安心できる		0.332			
Q25近所づきあいの程度			0.698		
Q37(7)近所づきあいに満足している			0.673		
Q37(6)友人との関係に満足している	0.387		0.415		
Q34外出時の会話の程度			0.357		
Q37(4)生活していて不安や心配がある				0.822	
Q37(2)今の暮らしにはストレスが多い				0.739	
Q37(9)周囲から取り残されたように感じる				0.402	
Q33(1)外出頻度					0.895
Q14買物の頻度					0.431

因子抽出法: 最尤法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 0.3以下の値は非表示



表5-3 構造行列

	因子				
	1	2	3	4	5
Q37 (1) 今の暮らしには張り合いがある	0.861	0.345	0.438	-0.421	
Q37 (3) 生活は充実している	0.820	0.419	0.376	-0.444	
Q37 (8) 自分は頼りにされていると思う	0.574		0.517		
Q37 (5) 趣味をしている時間は楽しい	0.545		0.404		
Q8健康状態	0.506			-0.399	0.386
Q41経済状況の感じ方	0.376	0.858		-0.390	
Q39預貯金額		-0.626			
Q38年間収入		-0.593			
Q37 (10) 将来の生活は安心できる	0.543	0.568		-0.542	
Q37 (7) 近所づきあいに満足している	0.486		0.735		
Q37 (6) 友人との関係に満足している	0.610		0.629		
Q25近所づきあいの程度			0.593		
Q34外出時の会話の程度	0.508		0.527		
Q37 (4) 生活していて不安や心配がある	-0.348	-0.359		0.794	
Q37 (2) 今の暮らしにはストレスが多い				0.680	
Q37 (9) 周囲から取り残されたように感じる	-0.467		-0.367	0.507	
Q33 (1) 外出頻度	0.331				0.891
Q14買物の頻度					0.418

因子抽出法：最尤法

回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 0.3以下の値は非表示

## イ 因子得点の比較

次に、因子分析で得られた得点の平均値を比較した。

表5-4は、性別に因子得点の平均値を見たものである。

「生活の満足」は、得点が低いほど満足度が高いことを示すが、女性は-0.093であったのに対し、男性は0.314と高く、男性の方が生活に対する満足度が低いことが分かる。

「経済状況の苦しさ」は、得点が高いほど経済状況が苦しいことを示す。女性は-0.037であったのに対し、男性は0.123と高く、男性の方が経済状況が苦しいことが分かる。

「人間関係（コミュニケーション）」は、近所づきあいや友人関係への満足度などをその構成としている因子である。得点が低いほどコミュニケーションへの満足度（充足感）が高いことを示す。男性が0.446であったのに対し、女性は-0.131と低く、女性の方が人間関係（コミュニケーション）に関して満足していることが分かる。

「不安・ストレス」は、得点が低いほど不安や

ストレスを感じていることを示す。女性の0.012に比べ、男性は-0.047とわずかではあるが得点が低く、男性の方が不安やストレスをより感じていることが分かる。

「外出・買い物の頻度」は、得点が低いほどよく外出や買い物をしていることを示し、男性は-0.124と女性の0.036に比べて低く、よく外出していることが分かる。

女性の方が生活への満足度が高く、経済的な苦しさが少なく、人間関係・コミュニケーションに満足していて、不安やストレスが少ないことから、総じて女性の生活ぶりの安定性が高いことがうかがえよう。

表5-4 性別

	平均値		
	男性	女性	合計
生活の満足	0.314	-0.093	-0.003
経済状況の苦しさ	0.123	-0.037	-0.001
コミュニケーション	0.446	-0.131	-0.002
不安・ストレス	-0.047	0.012	-0.001
外出・買い物	-0.124	0.036	0.000

表5-5 地区別

	平均値					
	芝	麻布	赤坂	高輪	芝浦港南	合計
生活の満足	-0.012	-0.058	-0.008	-0.015	0.104	0.000
経済状況の苦しさ	0.041	-0.132	0.019	-0.084	0.199	0.000
コミュニケーション	-0.034	-0.023	-0.038	0.017	0.086	0.001
不安・ストレス	-0.048	0.072	-0.020	0.024	-0.034	0.000
外出・買い物	-0.017	0.030	-0.021	-0.008	0.022	0.000

次に、地区別に平均値を比較した（表5-5）。

芝地区は、「不安・ストレス」の得点が5地区の中で最も低く（-0.048）、不安・ストレスが比較的高い状態にあることがうかがえる。

麻布地区は、「生活の満足」の得点が5地区中最も低く（-0.058）、生活への満足度が高いことがうかがえ、また、「不安・ストレス」の得点は5地区中で最も高く（0.072）、不安・ストレスが少ない状況にあることが分かる。

赤坂地区は、「人間関係（コミュニケーション）」の得点が最も低く（-0.038）、コミュニケーションの満足度が高いことが分かる。

高輪地区は、「経済状況の苦しさ」の得点が低く（-0.084）、経済状況が安定していることが分かる。

芝浦港南地区は、「生活の満足」、「経済状況の苦しさ」、「人間関係（コミュニケーション）」のいずれも得点が高かった。生活への満足度が低く、経済状況が苦しく、人間関係への満足度が低いことがうかがえる。

## （2）将来への不安と生活基盤

すでにⅢ 1次調査の結果 3生活意識に関する分析で見たように、緊急時の支援者の有無や経済状況、住宅の種類ごとに生活に関する意識には差が見られることが分かっている。そこでより詳細に意識と生活上の諸条件とのかかわりを見るために、意識のうち「将来の生活は安心できる」という質問項目への回答（「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階）の平均値を用いて、生活上の諸条件との関連性についてCHAID（カイ二乗値を用いたアルゴリズム）による決定木（ディシジョンツリー）分析を行っ

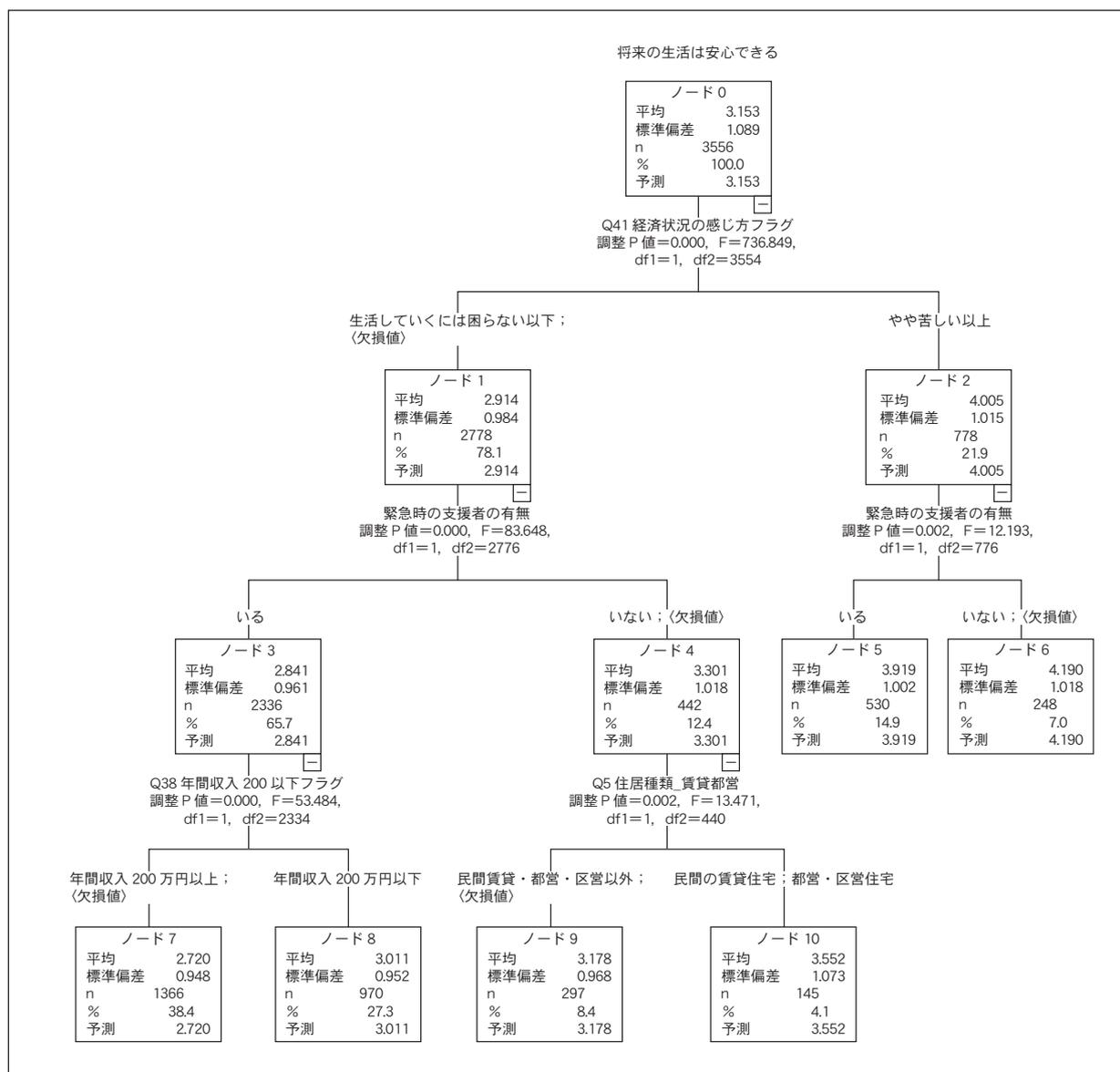
た。これにより、関連の強い変数が枝分かれ状に細分化され、グループに分類される。分類されたグループをノードと呼び、分析の結果は、「将来の生活は安心できる」を根（ルートノード）とした樹形図に表すことができる（図5-1）。

なお、本分析に用いた項目は、「緊急時の支援者の有無」、「正月三が日の過ごし方」、「年間収入」、「経済状況の感じ方」、「住宅の種類（民間の賃貸住宅、都営・区営住宅、それ以外の3分類）」の5つである。

最も上に位置するルートノード（ノード0）より、「将来の生活は安心できる」への回答の全体の平均値は3.153であることが分かる。そこから、まずは「経済状況の感じ方」により2つに分かれている。このことから、「将来の生活は安心できる」について最も関連のある変数は「経済状況の感じ方」であることが分かる。その経済状況について、「苦しい」または「やや苦しい」と回答している場合（ノード2）では、「将来の生活は安心できる」への回答の平均値は4.005で、全体の平均値より高いことが分かる。この平均値は、数が小さいほど「安心している」ことを示し、数が大きいほど「不安」であることを示しているため、経済状況が「苦しい」または「やや苦しい」場合には、生活への安心感が低いことが分かる。さらに、そのうち緊急時の支援者が「いる」場合（ノード5）では「将来の生活は安心できる」への回答の平均値は3.919で、「いない」場合（ノード6）では、4.190であった。どちらも全体の平均値より高く、将来への安心感が低い。そして、緊急時の支援者が「いない」場合にはその不安感が増すことが分かる。

次に、経済状況について「生活していくには困

図5-1 CHAID を用いたディジションツリー



らない」、「やや余裕がある」、「かなり余裕がある」、あるいは無回答であった場合を見ていきたい(ノード1)。ノード1からは、「将来の生活は安心できる」への回答の平均値は2.914で、経済状況が苦しい人に比べて平均値が低く、生活への安心感が高いことが分かる。そのうち、緊急時の支援者が「いない」場合(ノード4)では、平均値は3.301で全体の平均値よりも高くなり、経済的に安定している層でも、緊急時の支援者がいない場合には、不安感が強まることが分かる。

このような経済状況は安定しているが、緊急時の支援者がいない人の場合には、更に住宅の種類

との関連が見られた。ノード10は、経済状況は安定しているが、緊急時の支援者がなく、「民間の賃貸住宅」または「都営・区営住宅」に住んでいる人のグループであるが、これによれば、「将来の生活は安心できる」への回答の平均値は3.552で、全体の平均値よりも高く、不安を感じていることが分かる。

これらの結果から、将来の生活への安心感・不安感は、経済状況との関連が最も強く、そしてそれは緊急時の支援者の有無によって分類することができること、そして住宅事情との関連性もあることが分かった。

## 2 結果の分析

これまでの結果を踏まえ、以下の4つの柱、①買い物困難と生活課題、②緊急時支援と社会的ネットワーク、③外出行動と社会参加、④地区別の考察、を立てて分析を行う。

### (1) 買い物困難と生活課題

Ⅲ 2 クロス集計 (3) ですで見たとように、買い物についてなんらかの困りごとを抱えている人のおおまかな特徴は、比較的女性が多いこと、平均年齢が高いこと、健康状態が良くないグループの方が買い物に関する困りごとを抱える人の割合が高いことなどが挙げられる。ここでは、健康状態を始めとする身体状況と買い物困難に注目して分析していきたい。

#### ア 買い物困難と身体状況

まず、健康状態と買い物に関する困りごとの有無をまとめた表を再掲し(表3-28)、買い物に関する困りごとを抱えた人の健康状態について見ておきたい。

表3-28 (再掲) 健康状態×買い物に関する困りごとの有無

健康状態	困りごとがある		困りごとはない	
	実数	%	実数	%
良い	110	7.1%	373	18.9%
まあ良い	223	14.5%	445	22.5%
普通	570	37.0%	869	44.0%
あまり良くない	476	30.9%	237	12.0%
良くない	161	10.5%	50	2.5%
合計	1,540	100.0%	1,974	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=369.657 自由度4  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

表3-28によれば、困りごとのあるグループでは健康状態が「良くない」と感じている人の割合が高く、困りごとのないグループでは、健康状態が良い人の割合が高いことが分かる。

次に、介助を必要とする人の状況についても見ていきたい。

健康状態が良くない人のなかには、日常的に介助を要する人が多く含まれている。表5-6は、健康状態を「良い」と「まあ良い」を合わせた「健康」と、「普通」、そして「良くない」と「あまり良くない」を合わせた「健康ではない」の3つに区分したものと介助の必要性をクロス集計したものである。

「健康」である場合、「ほとんど自分でできる」と回答する人が93.8%と9割を超えており、介助を必要としていないことが分かる。「健康ではない」場合、「ほとんど自分でできる」人の割合は53.4%と半数近くに減り、「一部介助を必要とする」人が40.5%を占める。また「ほとんどすべてに介助を必要とする」人は、「健康」や「普通」の場合には1%にも満たなかったものが、「健康ではない」場合には、わずかではあるものの、6.1%を占める。

「健康ではない」と感じている人の4割半程度が、実際になんらかの介助を必要としていることが分かる。このように、健康状態と介助の必要性には明確なかわりがあると言える。

表5-6 介助の必要性×健康状態 (3区分)

介助の必要性	健康		普通		健康ではない	
	実数	%	実数	%	実数	%
ほとんど自分でできる	1,169	93.8%	1,417	89.8%	549	53.4%
一部介助を必要とする	71	5.7%	152	9.6%	417	40.5%
ほとんどすべてに介助を必要とする	6	0.5%	9	0.6%	63	6.1%
合計	1,246	100.0%	1,578	100.0%	1,029	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=743.143 自由度4  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

そこで、買い物に関する困りごとを抱えている人の身体状況を、介助の必要性の面から見てみよう。表5-7は介助の必要性を「必要がない」と「必要がある」の2つに分類し直したものと買い物困難の有無を集計したものである。買い物に関する困りごとを抱えている人のうち、「一部または全部に介助を必要とする」人は30.5%であった。買い物に関する「困りごとはない」場合、91.0%の人が「介助の必要性はない」と回答し、「一部または全部に介助を必要とする」人はわずか9.0%であることから、買い物に関する困りごとがある人は、日常的になんらかの介助を必要としている人の割合が高いことが分かる。

表5-7 介助の必要性の有無×買い物に関する困りごとの有無

介助の必要性	困りごとがある		困りごとはない	
	実数	%	実数	%
介助の必要はない	1,062	69.5%	1,788	91.0%
一部または全部に介助を必要とする	465	30.5%	177	9.0%
合計	1,527	100.0%	1,965	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値 = 263.340 自由度 1  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

では、買い物に関する困りごとがある人のうち、どのくらいの人が要介護認定を受けているのであろうか。要介護認定の有無と買い物に関する困りごとの有無を集計したものが表5-8である。

この表によれば、買い物に関する「困りごとはない」人の場合、要介護認定を受けているのは11.7%であるが、「困りごとがある」人のうち、32.1%が「要介護認定を受けている」ことが分かる。

表5-8 要介護認定の有無×買い物に関する困りごとの有無

要介護認定の有無	困りごとがある		困りごとはない	
	実数	%	実数	%
要介護認定を受けている	435	32.1%	200	11.7%
要介護認定を受けていない	736	54.3%	1,282	74.7%
わからない	185	13.6%	234	13.6%
合計	1,356	100.0%	1,716	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値 = 201.0 自由度 2  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

また、介護保険サービスの利用有無と、買い物に関する困りごとの有無についてまとめた表5-9によれば、困りごとのない人で介護保険サービスを利用している人は8.9%と1割未満であるのに対し、困りごとある人の24.1%が介護保険サービスを利用していることが分かる。

表5-9 介護保険サービスの利用×買い物に関する困りごとの有無

介護保険サービスの利用	困りごとがある		困りごとはない	
	実数	%	実数	%
利用している	366	24.1%	173	8.9%
利用していない	1,152	75.9%	1,775	91.1%
合計	1,518	100.0%	1,948	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値 = 150.683 自由度 1  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

これらのことから、買い物困難者のグループは、そうでないグループに比べて、健康状態が良くないと感じている人が多く、介助や介護の必要性も高いこと、すなわち身体状況が良くない人が多いということが分かった。

## イ 身体状況から見る買い物困難の内容

買い物困難の内容としては、全体に、「近所にお店がない」や「重いものを運ぶのが大変」が多く挙げられていることは22ページで述べた。それを健康状態とクロス集計したものが次の表5-10である。健康状態にかかわらず、「近所にお店がない」「お米など重いものを運ぶのが大変」といった項目は高い割合を占めているが、「健康ではない」グループの場合には、それがより顕著に表れている。「健康ではない」グループでは、「近所にお店がない」と回答した人は、26.2%、「お米など重いものを運ぶのが大変」と回答した人の割合は30.7%であった。また、「ひとりで買い物に行くのが困難」と回答した人の割合は、「健康である」グループではわずか2.1%、「普通」のグループでも4.0%であるが、「健康ではない」グループでは22.8%にのぼった。

健康状態が良くない人は、お店まで出かけるための体力、重いものを持つための筋力等が必要とされる買い物行動そのものが負担となっているこ

表5-10 買い物の困りごと（複数回答）×健康状態（3区分）

買い物の困りごと（複数回答）	健康状態3区分					
	健康である (n=1,151)		普通 (n=1,439)		健康ではない (n=924)	
	実数	%	実数	%	実数	%
近所にお店がない	184	16.0%	283	19.7%	242	26.2%
お店の営業時間が短い	6	0.5%	7	0.5%	4	0.4%
品揃えが少ない	63	5.5%	78	5.4%	89	9.6%
お米など重いものを運ぶのが大変	125	10.9%	257	17.9%	284	30.7%
ひとりで買い物に行くのが困難	24	2.1%	57	4.0%	211	22.8%
買い物を頼める人がいない	21	1.8%	48	3.3%	97	10.5%
配達してくれる店がない	9	0.8%	26	1.8%	52	5.6%
宅配の利用方法がわからない	1	0.1%	6	0.4%	11	1.2%
その他	24	2.1%	27	1.9%	57	6.2%
とくに困っていることはない	818	71.1%	869	60.4%	287	31.1%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2=1091.374$  自由度20  $p=0.000*$  \*  $p<0.05$

とがうかがえる。

こうしたことは、介助の必要性の有無別に見るとより明確に現れる。表5-11は、買い物の困りごとの内容を、介助の必要性の有無別に見たものである。「近所にお店がない」ことを困りごととして挙げている人の割合は、「介助の必要はない」グループでは19.1%であったが、「一部または全部に介助を必要とする」グループでは24.9%

で5ポイント程度高い。また、「お米など重いものを運ぶのが大変」を困りごととして挙げている人の割合は、「介助の必要はない」グループでは17.4%であるが、介助を必要とするグループでは25.4%と高くなる。健康状態と同様、店に出かけることや重いものを持つことが困難になっていることがうかがえる。

表5-11 買い物に関する困りごと（複数回答）×介助の必要の有無

買物の困りごと（複数回答）	介助の必要はない (n=2,850)		一部または全部に介助を必要とする (n=642)	
	実数	%	実数	%
近所にお店がない	543	19.1%	160	24.9%
お店の営業時間が短い	14	0.5%	3	0.5%
品揃えが少ない	177	6.2%	51	7.9%
お米など重いものを運ぶのが大変	495	17.4%	163	25.4%
ひとりで買い物に行くのが困難	54	1.9%	238	37.1%
買い物を頼める人がいない	110	3.9%	56	8.7%
配達してくれる店がない	52	1.8%	36	5.6%
宅配の利用方法がわからない	9	0.3%	9	1.4%
その他	73	2.6%	34	5.3%
とくに困っていることはない	1,788	62.7%	177	27.6%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=1228.461 自由度10  $p=0.000*$  \*  $p<0.05$

さらに、介助を必要とするグループで特徴的な点は、「ひとりで買い物に行くのが困難」な人の割合の高さである。介助の必要がないグループではわずか1.9%であるが、介助を必要とするグループでは37.1%の人が回答していた。それは、健康状態別に見た場合にも同様の傾向が見られ、表5-10によれば、「健康ではない」人のグループでは22.8%が「ひとりで買い物に行くのが困難」と回答している。

「ひとりで買い物に行くのが困難」という項目からは、いくつかの状況が思い浮かぶ。健康状態や介助の必要性といった身体状況に起因するもの、例えば、歩行が不安定であったり、荷物を持つことができないために、ひとりでは買い物に行けず、誰かの手を必要としているという状況である。また、公共交通機関の利用や役所等での手続き、金銭管理などに不安があるために、「ひとりで買い物に行くのが困難」となっている場合も考えられよう。自由回答や2次調査の事例からは、「値札が読めない」、「お金の計算が不安」といった声も聞かれている。また、買い物を代行してもらっている場合でも、「欲しいものを見て選ぶことができない」という不便さを挙げるケースもあった。このような買い物ニーズへの支援としては、買い物を代行する、商品を届けるといった方法のほか、買い物や外出に付き添うような支援も考えられるのではないだろうか。

### ウ 身体状況と生活課題

健康状態や介助の必要の有無といったことは、買い物に限らず生活全般に影響を及ぼす。買い物に関する困りごとを抱えている人は、住宅や地域、日常生活上もなんらかの困りごとを抱えていることが指摘できる。

表5-12は、買い物に関する困りごとの有無と、日常生活上の困りごとの有無との関係を見たものである。買い物に関する「困りごとがある」場合、日常生活上の「困りごとがある」人は55.6%で、半数を超える。一方、買い物に関する「困りごとはない」場合、日常生活上の「困りごとがある」人は15.9%である。買い物に関する困りごとを抱えている人のうち、身体状況が良くない人が

一定の割合を占めていることを考えると、日常生活上もニーズを抱えやすい傾向にあることは容易に想像できる。

表5-12 日常生活上の困りごとの有無×買い物に関する困りごとの有無

生活上の困りごと 有無	買い物困難の有無			
	困りごとがある		困りごとはない	
	実数	%	実数	%
困りごとがある	785	55.6%	302	15.9%
困りごとはない	627	44.4%	1,598	84.1%
合計	1,412	100.0%	1,900	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=579.033 自由度1 p=0.000\* \* p<0.05

表5-13は、日常生活上の困りごとの有無と健康状態を見たものである。日常生活上の「困りごとがある」人のうち、健康状態が良くない人は50.7%（あまり良くない36.1%、良くない14.6%）である。一方、日常生活上の困りごとがない人のうち、健康状態が良くない人は13.7%（あまり良くない11.9%、良くない1.8%）である。買い物困難について見られた傾向と同様に、日常生活上の困りごとのある人は、健康状態が良くない傾向にあることが分かる。

表5-13 健康状態×日常生活上の困りごと有無

健康状態	日常生活上の困りごと有無			
	困りごとがある		困りごとはない	
	実数	%	実数	%
良い	59	5.1%	438	18.4%
まあ良い	159	13.7%	517	21.7%
普通	356	30.6%	1,102	46.2%
あまり良くない	420	36.1%	284	11.9%
良くない	170	14.6%	43	1.8%
合計	1,164	100.0%	2,384	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=615.582 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

また、身体状況に起因する日常生活上の困難が買い物に影響を及ぼす例として、住宅に関する困りごとからも考察することができる。本調査では、住宅に関する困りごとの選択肢として、「階段の昇り降りが大変」という項目を置いている。この項目は住宅に関する困りごとのうちでも、身体状況との関係が深い。そこで、住宅に関する困りご

表5-14 住宅の困りごと（複数回答）×買い物困難の有無

住宅の困りごと（複数回答）	買い物困難の有無			
	困りごとがある (n=1,486)		困りごとはない (n=1,936)	
	実数	%	実数	%
階段の昇り降りが大変	319	21.5%	134	6.9%
エレベーターが設置されていない	129	8.7%	87	4.5%
浴室・浴槽が使いにくい	244	16.4%	118	6.1%
お風呂がない	74	5.0%	56	2.9%
トイレが使いにくい	98	6.6%	46	2.4%
居室が狭い	196	13.2%	127	6.6%
居室が広すぎる	25	1.7%	15	0.8%
室内に段差がある	130	8.7%	47	2.4%
冷房がない	78	5.2%	42	2.2%
老朽化している	390	26.2%	275	14.2%
その他	142	9.6%	115	5.9%
とくに困っていることはない	548	36.9%	1,267	65.4%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2=832.050$  自由度12  $p=0.000*$  \*  $p<0.05$

と、買い物困難のかかわりについてクロス集計したものが表5-14である。これによれば、買い物困難者のうち、住宅に関する困りごととして「階段の昇り降りが大変」を挙げている人は21.5%であった。「困りごとがない」人の場合は6.9%であり、実にその3倍である。

これらのことから、買い物困難を含む生活上の様々なニーズの要因のひとつとなっているのは、本人の健康状態、身体状況であると考えることができる。買い物困難への支援を検討する際には、それを入り口として、生活全般にも視野を広げた総合支援につなげていく視点も重要となるだろう。

## エ 買い物困難と地域性

次に、買い物困難と地域性について見ておきたい。買い物に関する困りごとのうち、「近くに店がない」というニーズは、地域環境上の問題でもある。「近く」というのは本人の主観が関係し、長時間歩くことに特に問題がない人とそうでない人とでは「近く」の示す距離には違いが生じる。そのため、本人の身体状況の影響があることも考慮すべき点ではある。しかし一方で、店のある・なしは、地域環境に左右される問題である。港区内でも、大型スーパーの出店がある地域、昔ながらの商店街が残っている地域、飲食店ばかり

で小売のスーパーがなくコンビニばかりの地域など、店舗の状況ひとつとっても地域性が見られる。

そこで、まずは地域環境上の困りごとと買い物困難の有無をクロス集計した（表5-15）。買い物に関する「困りごとがある」場合、地域の「困りごとがある」人は81.5%にのぼった。

表5-15 地域の困りごとの有無×買い物困難の有無

地域の困りごと 有無	買い物困難の有無			
	困りごとがある		困りごとはない	
	実数	%	実数	%
困りごとがある	1,193	81.5%	852	44.2%
困りごとはない	270	18.5%	1,075	55.8%
合計	1,463	100.0%	1,927	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=484.227 自由度1  $p=0.000*$  \*  $p<0.05$

表5-16は、地域の困りごとが「ある」と回答した人（2,045人）の困りごとの内容を、買い物困難の有無別に集計したものである。

この表のうち、「近所に外食する店がない」や「そばや寿司など店屋物をとる店がない」など、店舗の有無に関する項目を挙げている人の割合の差が、買い物に関する困りごとの「ある」グループと「ない」グループで大きい。買い物先としての店だけでなく、飲食店なども少ない場合があるのではないだろうか。



表5-16 【地域の困りごとがある人】地域の困りごと（複数回答）×買い物困難の有無

地域の困りごと（複数回答）	買い物困難の有無			
	困りごとがある（n=1,193）		困りごとはない（n=852）	
	実数	%	実数	%
近所に銭湯がない	205	17.2%	111	13.0%
近所に外食する店がない	140	11.7%	33	3.9%
そばや寿司など店屋物をとる店がない	150	12.6%	59	6.9%
近所に病院や診療所がない	99	8.3%	24	2.8%
近所にバスの停留所がない	60	5.0%	15	1.8%
近所に地下鉄・鉄道の駅がない	100	8.4%	35	4.1%
訪問販売員が多い	76	6.4%	41	4.8%
防犯上の不安がある	210	17.6%	107	12.6%
振り込め詐欺など不審な電話がある	157	13.2%	88	10.3%
物価が高い	683	57.3%	421	49.4%
地震などの防災対策に不安がある	545	45.7%	340	39.9%
その他	89	7.5%	73	8.6%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=155.256 自由度12 p=0.000\* \* p<0.05

これらは港区全域のことというより、地域による違いがある。表3-66では、地域別に地域の困りごとの内容を集計しているが、そこでは「近所に外食する店がない」と「そばや寿司など店屋物をとる店がない」の2項目だけを見ても地区により差が見られている。

そこで、地域別に買い物困難の有無についてクロス集計した（表5-17）。これによれば、買い物

に関する「困りごとがある」と回答した人の割合が低かったのは麻布地区（36.5%）、芝浦港南地区（38.7%）で、高輪地区も40.8%とさほど高くなかった。一方で、芝地区、赤坂地区では買い物に関する「困りごとがある」と回答した人の割合がそれぞれ50.8%、51.0%と半数を超えた。買い物困難を抱えている人の出現には地域性があることがうかがえる。

表5-17 買い物困難の有無×地区

買い物困難の有無	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
困りごとがある	329	50.8%	224	36.5%	377	51.0%	363	40.8%	227	38.7%
困りごとはない	319	49.2%	390	63.5%	362	49.0%	526	59.2%	359	61.3%
合計	648	100.0%	614	100.0%	739	100.0%	889	100.0%	586	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=51.074 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

表5-18は、買い物の困りごとがある人について、その内容を地区別に集計したものである（無回答を除いたケース数は1,520人）。これによれば、「近所にお店がない」と回答している人の割合が高いのは赤坂地区（57.0%）、芝地区（55.9%）で、「買い物に困りごとがある」人の多い2地区でも

ある。また、「品揃えが少ない」については、芝浦港南地区で23.3%、芝地区で21.9%の人が回答している。芝浦港南地区は「近所にお店がない」と回答している人は34.4%にとどまっているものの、品揃えの面では困っている人の割合が高いようである。

表5-18 買い物困りごと（複数回答）×地区

買物の困りごと（複数回答）	芝地区 (n=329)		麻布地区 (n=224)		赤坂地区 (n=377)		高輪地区 (n=363)		芝浦港南地区 (n=227)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
近所にお店がない	184	55.9%	100	44.6%	215	57.0%	124	34.2%	78	34.4%
お店の営業時間が短い	7	2.1%	2	.9%	1	0.3%	6	1.7%	1	0.4%
品揃えが少ない	72	21.9%	22	9.8%	35	9.3%	42	11.6%	53	23.3%
お米など重いものを運ぶのが大変	131	39.8%	91	40.6%	150	39.8%	175	48.2%	112	49.3%
ひとりで買い物に行くのが困難	62	18.8%	55	24.6%	59	15.6%	75	20.7%	35	15.4%
買い物を頼める人がいない	30	9.1%	32	14.3%	37	9.8%	45	12.4%	21	9.3%
配達してくれる店がない	28	8.5%	9	4.0%	18	4.8%	17	4.7%	15	6.6%
宅配の利用方法がわからない	4	1.2%	2	0.9%	6	1.6%	4	1.1%	2	0.9%
その他	22	6.7%	15	6.7%	28	7.4%	28	7.7%	14	6.2%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=150.737 自由度36 p=0.000\* \* p<0.05

地域別に買い物の方法についても集計した（表5-19）。芝地区では「スーパーマーケットに行く」人の割合が72.8%と他地区に比べてやや低く、「コンビニに行く」人の割合が49.3%と5地区の中で最も高い。

赤坂地区は「スーパーマーケットに行く」人の割合は81.0%で8割を超えていた。「コンビニに行く」人の割合は39.2%でほぼ4割程度であり、芝地区よりは10ポイント程度低い

ものの、そのほかの3地区よりは高い割合である。「近くの商店に行く」人の割合は5地区で最も低く20.6%であった。また、赤坂地区では「車で売りに来るのを利用する」と回答した人の割合が、5地区中突出して高く、12.0%であった。

芝浦港南地区は、「近くの商店に行く」人の割合が赤坂地区に次いで低く、23.6%である。また、「デパートに行く」と回答している人の割合が25.5%で5地区中最も低い。

表5-19 買い物の方法（複数回答）×地区

買物の方法（複数回答）	芝地区 (n=729)		麻布地区 (n=680)		赤坂地区 (n=814)		高輪地区 (n=977)		芝浦港南地区 (n=644)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
スーパーマーケットに行く	517	72.8%	544	80.0%	659	81.0%	823	84.2%	553	85.9%
コンビニに行く	350	49.3%	251	36.9%	319	39.2%	329	33.7%	236	36.6%
近くの商店に行く	235	33.1%	270	39.7%	168	20.6%	309	31.6%	152	23.6%
デパートに行く	241	33.9%	233	34.3%	275	33.8%	285	29.2%	164	25.5%
生協等の宅配を利用する	72	10.1%	83	12.2%	96	11.8%	113	11.6%	80	12.4%
商店に配達を依頼する	22	3.1%	46	6.8%	33	4.1%	48	4.9%	14	2.2%
車で売りに来るのを利用する	46	6.5%	18	2.6%	98	12.0%	30	3.1%	54	8.4%
インターネット通販（ネットスーパー）	19	2.7%	28	4.1%	28	3.4%	29	3.0%	17	2.6%
ヘルパー等を買ってきてもらう	47	6.6%	41	6.0%	49	6.0%	88	9.0%	35	5.4%
家族を買ってきてもらう	61	8.6%	57	8.4%	57	7.0%	62	6.3%	35	5.4%
友人や近所の人を買ってきてもらう	13	1.8%	16	2.4%	8	1.0%	20	2.0%	11	1.7%
その他	32	4.5%	17	2.5%	25	3.1%	21	2.1%	16	2.5%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=335.425 自由度48 p=0.000\* \* p<0.05

このように、買い物方法の違いには地域性が表れている。買い物に関する困りごとを把握する場合、困っている人の有無や分布、困りごとの内容と併せて、地区ごとに商店の種類と配置、利用のしやすさなど、地区それぞれの傾向を把握しておくことは、買い物の支援方策を検討する際にひとつの基礎資料となるだろう。

## カ 買い物困難と経済状況

ここまで、買い物困難について身体状況に起因するニーズを取り上げ、また、地域性に焦点をあてて分析してきた。最後にもう1点、経済状況とのかかわりを見ておきたい。

経済状況と買い物困難についてクロス集計してみると（表5-20）、経済状況が「苦しい」と感じている人の場合、買い物に関する「困りごとがある」と回答している人の割合が54.9%と半数を超え、「困りごとはない」と回答している人の割合は45.1%であった。経済状況に「余裕がある」または「余裕はないが生活していくには困らない」場合には、買い物に関する「困りごとはない」と回答している人が6割前後を占め、「困りごとがある」人の割合は3割半から4割強程度である。経済状況と困りごとにはややかわりがあると考えられる。

表5-20 買い物困難の有無×経済状況の感じ方

買い物困難の有無	余裕がある		余裕はないが生活していくには困らない		苦しい	
	実数	%	実数	%	実数	%
困りごとがある	262	36.2%	774	42.0%	427	54.9%
困りごとはない	461	63.8%	1,067	58.0%	351	45.1%
合計	723	100.0%	1,841	100.0%	778	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=57.945 自由度2  $p=0.000$ \* \*  $p<0.05$

次に、年間収入を大きく4つに区分したものと買い物に関する困りごとの有無のかかわりを見たものが表5-21である。買い物に関する「困りごとがある」グループでは、年間収入が「150万円未満」の人が43.8%を占めるのに対し、「困りごとはない」グループでは、年間収入が「150万円未満」の人は30.9%である。「200万円以上400万

円未満」は、買い物に関する「困りごとがある」グループでは24.3%であるが、「困りごとはない」グループでは34.1%と10ポイント近く上回る。全体に、買い物に関する困りごとのあるグループの方が、収入額が少ない傾向にあることが分かる。

また、表5-22は、経済状況の苦しさを表す因子得点の平均値を、買い物に関する困りごとの有無別に計算したものである。経済状況の苦しさを表す因子得点は、数が大きいくほど経済状況が苦しいことを示す。これによれば、買い物に関する困りごとがあるグループでは、経済状況の苦しみの因子得点の平均が0.179で、困りごとのないグループの因子得点の平均値-0.131に比べて高い。このことから、買い物に関する困りごとを抱えている人は、比較的経済的に余裕がない傾向にあることがうかがえる。

表5-21 年間収入（4区分）×買い物に関する困りごとの有無

年間収入4区分	困りごとがある		困りごとはない	
	実数	%	実数	%
150万円未満	588	43.8%	546	30.9%
150万円以上 200万円未満	265	19.8%	332	18.8%
200万円以上 400万円未満	326	24.3%	603	34.1%
400万円以上	162	12.1%	288	16.3%
合計	1,341	100.0%	1,769	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=72.453 自由度7  $p=0.000$ \* \*  $p<0.05$

表5-22 買い物困難の有無別に見た経済状況の苦しさ  
(因子得点)の平均

買い物困難の有無	経済状況の苦しさ		
	平均値	度数	標準偏差
困りごとがある	0.179	822	0.932
困りごとはない	-0.131	1,211	0.875
合計	-0.005	2,033	0.911

買い物困難の内容の選択肢には物価についての項目は設けていない。「その他」でも物価高について記述してあったのは6件であった。しかし、「地域の困りごと」を尋ねる設問では、選択肢の

1つに「物価が高い」を置いている。そこで、地域の困りごとと経済状況の感じ方をクロス集計した(表5-23)。この表からは、地域の困りごととして「物価が高い」を挙げる人の割合が、経済状況について「余裕がある」グループでは19.4%であったのに対し、「余裕はないが生活していくには困らない」グループでは30.8%と11.4ポイント高く、「苦しい」と感じているグループでは49.6%とほぼ半数にのぼることが分かる。経済状況が苦しくなるほど、物価高への負担感が増していることがうかがえる。

表5-23 地域の困りごと(複数回答)×経済状況の感じ方

地域の困りごと(複数回答)	余裕がある(n=737)		余裕はないが生活していくには困らない(n=1,915)		苦しい(n=817)	
	実数	%	実数	%	実数	%
近所に銭湯がない	34	4.6%	175	9.1%	108	13.2%
近所に外食する店がない	26	3.5%	92	4.8%	57	7.0%
そばや寿司など店屋物をとる店がない	43	5.8%	105	5.5%	65	8.0%
近所に病院や診療所がない	10	1.4%	70	3.7%	44	5.4%
近所にバスの停留所がない	15	2.0%	42	2.2%	22	2.7%
近所に地下鉄・鉄道の駅がない	21	2.8%	82	4.3%	35	4.3%
訪問販売員が多い	19	2.6%	53	2.8%	45	5.5%
防犯上の不安がある	50	6.8%	157	8.2%	106	13.0%
振り込め詐欺など不審な電話がある	54	7.3%	117	6.1%	75	9.2%
物価が高い	143	19.4%	589	30.8%	405	49.6%
地震などの防災対策に不安がある	141	19.1%	490	25.6%	266	32.6%
その他	31	4.2%	90	4.7%	45	5.5%
とくに困っていることはない	388	52.6%	790	41.3%	192	23.5%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=467.522 自由度26 p=0.000\* \* p<0.05

## (2) 緊急時支援と社会的ネットワーク

緊急時の支援者の存在は、高齢期のひとり暮らし生活を支える重要な柱である。しかし、実際には、緊急時の支援者を得られない人が一定数存在する。ここでは、緊急時の支援者がいる人といない人の状況を比較しながら把握していくことにより、緊急時の支援者がいない人の生活の実態を分析していきたい。

### ア 緊急時支援者のいない人の基本的特徴

緊急時の支援者がいないグループは男性の割合が高いことはすでに述べたとおりである。以下に

その表を再掲する。男性のうち、緊急時の支援者がいない人は28.8%、女性で緊急時の支援者がいない人は14.5%である。

表3-41(再掲) 緊急時の支援者の有無×性別

緊急時の支援者の有無	男性		女性	
	実数	%	実数	%
いる	516	71.2%	2,577	85.5%
いない	209	28.8%	437	14.5%
合計	725	100.0%	3,014	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=83.952 自由度1 p=0.000\* \* p<0.05

また、緊急時の支援者の多くは子どもとその家族であり、生存子の有無によって緊急時の支援者の有無に違いがあることもすでに見たとおりである（52ページ表3-43）。それと関連して、結婚歴の有無と緊急時支援者の有無をクロス集計したものが表5-24である。

表5-24 緊急時の支援者の有無×結婚歴

緊急時の支援者の有無	結婚したことがある		結婚したことはない	
	実数	%	実数	%
いる	2,336	87.5%	738	70.9%
いない	333	12.5%	303	29.1%
合計	2,669	100.0%	1,041	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=145.814 自由度1 p=0.000\* \* p<0.05

この表からは、「結婚したことがある」場合、そのうちの87.5%が緊急時の支援者が「いる」と回答しているのに対し、「結婚したことがない」場合には、緊急時の支援者が「いる」人は70.9%と7割にとどまり、「いない」人は29.1%とおおよそ3割にのぼることが分かる。

さらに、表5-25は、結婚したことがある人について、生存子の有無と緊急時の支援者の有無のかかりを見たものである。これによれば、結婚したことがある人のうち、「生存子がいる」場合には、緊急時の支援者が「いる」人が92.2%にのぼるが、「生存子はいない」場合には、緊急時の支援者が「いる」人は74.2%となり、支援者が「いない」人が25.8%となる。このことから、結婚歴の有無が直接緊急時の支援者の有無につながるといよりは、生存子の有無が大きな要因となっていると考えられるのではないだろうか。

表5-25 結婚したことがある人の緊急時の支援者の有無×生存子の有無

緊急時の支援者の有無	結婚したことがある			
	生存子がいる		生存子はいない	
	実数	%	実数	%
いる	1,786	92.2%	475	74.2%
いない	151	7.8%	165	25.8%
合計	1,937	100.0%	640	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=144.641 自由度1 p=0.000\* \* p<0.05

次に、緊急時の支援者の有無と日常生活上の支援者の有無について考えてみたい。緊急時とは、病気やけがなどによって手助けを必要とする状態のことを指す。しかし、そこまで至らなくても、日常生活上でなにか困ったことが起きたり、相談したいことが起こる場合があるだろう。そのときに支援したり相談できる相手がいる人は、緊急時にも支援してくれる人がいると考えられるのではないだろうか。

表5-26は、日常生活上の支援者の有無を、緊急時の支援者の有無別に見たものである。

表5-26 日常の相談相手の有無×緊急時の支援者有無

日常の相談相手の有無	支援者がいる		支援者がいない	
	実数	%	実数	%
手伝ってくれる人がいる	2,899	96.0%	325	52.3%
手伝ってくれる人がいない	120	4.0%	297	47.7%
合計	3,019	100.0%	622	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=974.502 自由度1 p=0.000\* \* p<0.05

緊急時の支援者が「いる」場合には、日常的にも「手伝ってくれる人がいる」人の割合が96.0%にのぼる。一方、緊急時の支援者が「いない」場合は、「手伝ってくれる人がいる」人は52.3%と半数程度になり、「手伝ってくれる人がいない」人が47.7%と半数近くになる。緊急時の支援者がいない人は、日常的にも支援をしてくれる相手がいなかったことが分かる。

次に、緊急時の支援者の有無と、経済状況について見ておきたい。表5-27は、経済状況の感じ方と緊急時の支援者の有無のかかりを見たものである。これによれば、緊急時の支援者が「いる」人に比べて、「いない」人の方が、経済状況が「やや苦しい」「かなり苦しい」と感じている人の割合が高いことが分かる。

表5-27 経済状況の感じ方×緊急時の支援者の有無

経済状況の感じ方	支援者がいる		支援者がいない	
	実数	%	実数	%
かなり余裕がある	132	4.5%	13	2.1%
やや余裕がある	562	19.1%	71	11.3%
余裕はないが生活していくには困らない	1,668	56.6%	299	47.7%
やや苦しい	400	13.6%	152	24.2%
かなり苦しい	186	6.3%	92	14.7%
合計	2,948	100.0%	627	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=116.955 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

次の表5-28は、年間収入額を4つに区分したものと、緊急時の支援者の有無をクロス集計したものである。これによれば、年間収入が「150万円未満」と「150万円以上200万円未満」の人の割合は、緊急時の支援者が「いない」グループの方が高い。年間収入が「200万円以上400万円未満」と「400万円以上」の人の割合は、緊急時の支援者が「いる」グループの方が高い。全体的に見て、緊急時の支援者がいない人の方が、収入が少ない傾向にあることが分かる。

表5-28 年間収入（4区分）×緊急時の支援者の有無

年間収入（4区分）	支援者がいる		支援者がいない	
	実数	%	実数	%
150万円未満	973	35.6%	249	42.4%
150万円以上200万円未満	509	18.6%	131	22.3%
200万円以上400万円未満	827	30.2%	151	25.7%
400万円以上	425	15.5%	56	9.5%
合計	2,734	100.0%	587	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=24.949 自由度3 p=0.000\* \* p<0.05

また、因子分析によって抽出された「経済状況の不安定さ」を示す因子の得点の平均を、緊急時の支援者の有無別に集計したところ（表5-29）、緊急時の支援者が「いる」場合には、経済状況の不安定さを示す因子得点の平均は-0.082と低く、「いない」場合には0.375と高かった。緊急時の支援者のいないグループでは、経済状況があまり良くないという傾向が見られることが分かる。

表5-29 「経済状況の苦しさ」因子得点 平均の比較

緊急時の支援者の有無	平均値	度数	標準偏差
いる	-0.082	1,767	0.888
いない	0.375	380	0.928
合計	-0.001	2,147	0.912

### イ 緊急時支援者の有無と性別－支援者のいない男性

ここでは、緊急時支援者のいない人のうち、とくに男性に焦点をあてて見ていきたい。アで見たように、女性に比べて男性の方が、緊急時の支援者がいない人が多い。緊急時の支援者はその多くが家族であることは見てきたとおりであるが、では、男性と女性では、家族の有無や家族との関係に、何らかの違いがあるのだろうか。それにより、緊急時の支援者の有無に差が出てきているのだろうか。

そこで、まずは、緊急時の支援者として最もよく頼られる存在である子どもについて、生存子の有無から見てみよう。表5-30によれば、男女とも「生存子がいる」人が5割半程度、「生存子がない」人が4割半程度で、ほぼ同じ程度であり、性別による差は見られない。これは結婚歴についても同様で、結婚歴の有無に男女差は見られない（表5-31）。

表5-30 生存子の有無×性別

生存子の有無	男性		女性	
	実数	%	実数	%
生存子がいる	384	53.6%	1,633	55.2%
生存子はいない	332	46.4%	1,328	44.8%
合計	716	100.0%	2,961	100.0%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2$ 値=0.537 自由度1 p=0.464

表5-31 結婚歴×性別

結婚の有無	男性		女性	
	実数	%	実数	%
結婚したことがある	521	71.1%	2,163	71.5%
結婚したことはない	212	28.9%	862	28.5%
合計	733	100.0%	3,025	100.0%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2$ 値=0.053 自由度1 p=0.819

では、家族や親族との普段の行き来はどうか。

最もよく行き来する家族・親族を男女別に見た表3-31を以下に再掲する。

これによれば、男性は、子ども家族と行き来をする人が女性に比べて少ない傾向にあることが分かる。

さらに、「誰ともほとんど行き来がない」とする人は、男性は3割近くを占めており、男性は、女性に比べて家族や親族との行き来をしない人が多いことが分かる。

表3-31 (再掲) 最もよく行き来する家族・親族

最もよく行き来する 家族・親族	男性		女性	
	実数	%	実数	%
子ども(子どもの配偶者、孫などを含む)	264	37.2%	1,386	46.8%
親	4	0.6%	21	0.7%
兄弟・姉妹	166	23.4%	837	28.2%
親戚	30	4.2%	273	9.2%
その他	42	5.9%	158	5.3%
誰ともほとんど行き来がない	204	28.7%	288	9.7%
合計	710	100.0%	2,963	100.0%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2=189.080$  自由度5  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

次に、家族・親族との行き来の状況を見てみよう。すでに表3-35で見たように、家族・親族との行き来の状況は、男性の方が連絡頻度が低いことがわかっている。

表3-35 (再掲) 行き来する家族・親族との連絡・行き来の頻度×性別

行き来する家族・親族との連絡・行き来の頻度	男性		女性	
	実数	%	実数	%
ほとんど毎日	59	11.8%	417	15.8%
週に数回	59	11.8%	407	15.4%
週に1回	56	11.2%	472	17.9%
月に数回	141	28.1%	732	27.7%
年に数回	163	32.5%	453	17.2%
その他	24	4.8%	160	6.1%
合計	710	100.0%	2,963	100.0%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2=71.366$  自由度5  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

こうした連絡や行き来の頻度の差は、相手の居住地との距離からくるのだろうか。そこで、連絡や行き来をする相手の居住地について、男女別に違いがあるのかまとめた(表5-32)。しかし、明確な男女差は見られない。居住地には違いがないにもかかわらず、連絡頻度には違いがみられるということは、男性は、その物理的距離に関わらず、女性に比べて家族や親族との行き来が少ないということが分かる。

表5-32 行き来する家族・親族の居所×性別

行き来する家族・親族の居所	男性		女性	
	実数	%	実数	%
徒歩で行ける範囲	54	10.8%	323	12.2%
港区内	55	11.0%	320	12.1%
東京都内	211	42.3%	1,087	41.2%
東京都外	179	35.9%	908	34.4%
合計	499	100.0%	2,638	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=1.511 自由度3  $p=0.680$

次に、日常生活で困りごとがあったときに誰に相談するかについて、男女別に見てみたい(表5-33)。女性は42.5%の人が「子ども(子どもの配偶者、孫などを含む)」を挙げていた。ほか、「兄弟・姉妹」が21.0%、「友人・知人」が25.1%であった。「手伝ってもらう人がいない」と回答した人は9.3%であった。

一方、男性は、「子ども(子どもの配偶者、孫などを含む)」が最も多かったものの28.6%にとどまり、「友人・知人」が22.6%、「兄弟・姉妹」は15.4%であった。「手伝ってもらう人がいない」と回答した人は21.2%にのぼった。

男性は、女性に比べて日常的な支援を受ける相手がいなくて多く、子ども家族に依頼する人も少ないことが分かる。

女性に比べて緊急時の支援者がいない人が多い男性は、緊急時の支援者と期待される家族や親族との交流が少なく、また日常的な支援者もいない人が多い傾向にあることが分かる。

表5-33 困りごとを手助けしてくれる人（複数回答）  
×性別

困りごとを手助けしてくれる人（複数回答）	男性（n=713）		女性（n=2,974）	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫など含む）	204	28.6%	1,264	42.5%
兄弟・姉妹	110	15.4%	625	21.0%
親戚	43	6.0%	328	11.0%
友人・知人	161	22.6%	746	25.1%
近所の人	42	5.9%	369	12.4%
民生委員	20	2.8%	65	2.2%
町会・自治会の人	17	2.4%	63	2.1%
マンションの管理人	35	4.9%	263	8.8%
ホームヘルパー	60	8.4%	287	9.7%
ケアマネジャー	28	3.9%	136	4.6%
高齢者相談センター（地域包括支援センター）の人	26	3.6%	131	4.4%
役所の人	19	2.7%	33	1.1%
ボランティア	1	0.1%	4	0.1%
その他	75	10.5%	240	8.1%
手伝ってもらえない人	151	21.2%	277	9.3%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2=208.908$  自由度15  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

### ウ 緊急時の支援者がいない人と社会的ネットワーク

ここまで、家族や親族との関係性を中心に緊急時の支援者がいない人の特徴を見てきた。次に、友人・知人の有無や近所づきあい、近隣との関係性などから緊急時の支援者のいない人の置かれた状況を把握していきたい。

まずは友人・知人と緊急時の支援者のかかわりから見ていく。緊急時の支援者として、「友人・知人」を挙げた人は全体の1割程度であった（27ページ、図3-33）。それを生存子の有無別に見ると、「生存者がいない」場合、20.5%の人が「友人・知人」を緊急時の支援者として回答していた（表5-34）。

表5-34 緊急時の支援者の種類×生存子の有無

緊急時の支援者の種類	生存子がいる		生存子はいない	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫を含む）	1,531	82.6%	16	1.4%
兄弟・姉妹	88	4.7%	532	46.1%
親戚	26	1.4%	195	16.9%
近所の人	46	2.5%	60	5.2%
友人・知人	88	4.7%	237	20.5%
ケアマネジャーやヘルパーなど介護事業者	43	2.3%	41	3.5%
その他	32	1.7%	74	6.4%
合計	1,854	100.0%	1,155	100.0%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2$ 値=1961.161 自由度6  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

そこで、友人・知人の有無と緊急時の支援者の有無をクロス集計したものが表5-35である。

緊急時の支援者が「いる」場合、親しい友人が「いる」と回答している人の割合は87.5%で、友人が「いない」人は12.5%である。一方、緊急時の支援者が「いない」場合、親しい友人が「いる」人は63.6%にとどまり、友人が「いない」人は36.4%にのぼった。

表5-35 親しい友人の有無×緊急時の支援者の有無

親しい友人・知人の有無	支援者がいる		支援者がいない	
	実数	%	実数	%
いる	2,699	87.5%	410	63.6%
いない	384	12.5%	235	36.4%
合計	3,083	100.0%	645	100.0%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2$ 値=221.488 自由度1  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

次に、近所づきあいの程度とのかかわりを見てみよう。表5-36は、近所づきあいの程度を緊急時の支援者の有無別に見たものである。この表からは、近所づきあいについて「互いの家をよく行き来するくらい」と「ときどき行き来するくらい」を合わせた「近所づきあいが親密」な人の割合は、緊急時の支援者が「いる」場合には31.0%、「いない」場合には12.7%と大きく異なることが分かる。また、「あいさつをかわすくらい」と「まったくつきあいがいい」を合わせた「近所づきあいが薄い」人の割合が、緊急時の支援者が「いる」



場合には35.4%、「いない」場合には57.6%にもものぼった。

表5-36 近所づきあいの程度×緊急時の支援者の有無

近所づきあいの程度	支援者がいる		支援者がいない	
	実数	%	実数	%
互いの家をよく行き来するくらい	321	10.5%	15	2.3%
ときどき行き来するくらい	627	20.5%	67	10.4%
会ったときに世間話をするくらい	1,033	33.7%	192	29.7%
あいさつをかわすくらい	913	29.8%	294	45.4%
まったくつきあいが無い	171	5.6%	79	12.2%
合計	3,065	100.0%	647	100.0%

※無回答は欠損値として処理  
 $\chi^2=146.161$  自由度4  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

実際に近所の人に緊急時の支援を依頼する人は少ない(27ページ図3-33)。日常生活上の困りごとを手伝ってくれる相手として、近所の人を挙げている人も1割程度である(23ページ図3-22)。港区においては、緊急時であるかないかにかかわらず、近所の人から生活のための支援を受ける人は少ないと言える。しかし、実際に緊急時の支援者として期待されるか否かにかかわらず、緊急時の支援者がいない人は、友人や知人がいない人が多く、近所づきあいが希薄な傾向にあると言える。それはすなわち、社会とのかかわりが弱い=社会的孤立状態にある、ということを示してはいないだろうか。

そこで、「正月三が日に過ごした相手」について見てみよう。日本では、正月三が日には家族・親族が集まってお節料理を囲み、新年を祝う。ふるさとに帰って旧交を温める人もいるだろう。その正月三が日をどう過ごしたのか、緊急時の支援者の有無とクロス集計したのが表5-37である。

これによれば、緊急時の支援者が「いる」グループでは、実に44.3%の人が「子ども(子どもの配偶者、孫を含む)」と正月三が日を過ごしている。次いで、「兄弟・姉妹」が17.7%、「友人・知人」が15.7%であった。「ひとりで過ごした」人は25.6%である。

一方、緊急時の支援者が「いない」グループでは、「子ども(子どもの配偶者、孫を含む)」と回答した人は7.8%、「兄弟・姉妹」は8.1%、「友人・知人」が10.4%であり、「ひとりで過ごした」人が68.8%と7割弱にもものぼった。

もともと正月三が日は、家族や親戚と過ごすことが多く、そのため、生存者がいない人の多い「緊急時の支援者がいない」人のグループで、家族や親戚と過ごす人が少なくなるのは当然とも言える。しかしながら、それ以外の交流もなく、1割程度の人は友人・知人と過ごしているにしても、7割近い人がひとりで正月を過ごしていることは、緊急時の支援者がいない人の社会的ネットワークの希薄さを示すものではないだろうか。

表5-37 正月三が日を過ごした相手(複数回答)×緊急時の支援者の有無

正月三が日を過ごした相手(複数回答)	支援者がいる(n=3,100)		支援者がいない(n=657)	
	実数	%	実数	%
子ども(子どもの配偶者、孫を含む)	1,372	44.3%	51	7.8%
親	33	1.1%	7	1.1%
兄弟・姉妹	548	17.7%	53	8.1%
親戚	225	7.3%	13	2.0%
近所の人	61	2.0%	5	.8%
友人・知人	487	15.7%	68	10.4%
その他	168	5.4%	37	5.6%
ひとりで過ごした	794	25.6%	452	68.8%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=842.678 自由度8  $p=0.000*$  \*  $p < 0.05$

さて、本調査では、東日本大震災のときに、誰と連絡をとりあったかについて尋ねている。港区内では具体的な被害があったわけではないので、安否の確認をしようという「非常時の連絡」に焦点を絞り、緊急時の支援とはまた異なるかたちで、人々のつながりの様相をとらえようとした。

すでに28ページ図3-37で見ているとおり、連絡をとりあった相手は「子ども(子どもの配偶者、孫を含む)」や「兄弟・姉妹」、「友人・知人」が多い。被害の大きかった東北地方に親戚や知り合いがいて、連絡をとりあった人もいるだろう。そのなかで、「誰とも連絡を取りあわなかった」と回答したのは5.9%であった。「緊急時の支援者が

いない」人は16.7%であったことを考えると、割合としては少ないというべきかもしれない。緊急時支援のように、実際に駆けつけて手伝ってもらうのではなく、電話などで「連絡をとりあう」という行動であるからこそ、そして未曾有の大震災であったことから、多くの人が誰かしらと連絡をとりあっていたことがうかがえる。

これを、緊急時の支援者の有無別に集計したものが表5-38である。この表からは、緊急時の支援者が「いる」場合、「子ども（子どもの配偶者、孫を含む）」(54.6%)、「兄弟・姉妹」(47.2%)、「友人・知人」(46.5%)、「親戚」(30.9%)などと連絡をとりあっている人が多いことが分かる。「近所の人」は19.2%、「誰とも連絡を取りあわなかった」人は、わずか3.3%であった。一方、緊急時の支援者が「いない」グループでは、「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」は17.1%で、「兄弟・姉妹」(39.6%)、「友人・知人」(39.9%)に回答が集中した。「親戚」は19.5%、「近所の人」は12.9%であった。そして、「誰とも連絡を取りあわなかった」人の割合は18.3%で、緊急時の支

表5-38 震災時に連絡した相手（複数回答）×緊急時の支援者の有無

震災時に連絡した相手（複数回答）	支援者がいる (n=3,080)		支援者がいない (n=627)	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	1,683	54.6%	107	17.1%
親	55	1.8%	9	1.4%
兄弟・姉妹	1,454	47.2%	248	39.6%
親戚	952	30.9%	122	19.5%
近所の人	590	19.2%	81	12.9%
友人・知人	1,433	46.5%	250	39.9%
民生委員	43	1.4%	19	3.0%
町会・自治会の人	101	3.3%	11	1.8%
高齢者相談センター（地域包括支援センター）の人	44	1.4%	10	1.6%
ケアマネジャーやヘルパーなど介護事業者	135	4.4%	10	1.6%
その他	107	3.5%	23	3.7%
誰とも連絡を取りあわなかった	102	3.3%	115	18.3%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=600.485 自由度12 p=0.000\* \* p<0.05

援者が「いる」人との差が大きく開いた。緊急時の支援者がいない人の社会的ネットワークの希薄さが、ここにひとつ表れているのではないだろうか。

### （3）外出行動と社会参加

外出は、買い物や通院、銀行等での手続きなど、生活していく上で欠かせない行動のひとつである。さらにそれは、外出先で人とかかわったり、なにかのグループや活動に参加したりと、社会との接点ともなりうる。ここでは港区のひとり暮らし高齢者の外出行動と社会参加の動向を見ることにより、今後どのようなアプローチが必要とされているのか、検討する資料としたい。

#### ア 外出時の会話と外出頻度－性別による違いを見る

Ⅲ 1 (12) において見てきたように、外出頻度は「ほとんど毎日」の人が最も多く3割程度で、1週間に2、3日以上外出する人が8割以上を占めている（30ページ図3-40）。男女別にクロス集計した表を以下に再掲するが、それによれば、男性の方が外出頻度の多い人の割合が高く、「ほとんど毎日」(46.0%)と「1週間に4、5日くらい」(18.0%)を合わせて64.0%の人がよく外出をしている。

表3-47（再掲） 外出頻度×性別

外出頻度	男性		女性	
	実数	%	実数	%
ほとんど毎日	332	46.0%	898	30.0%
1週間に4、5日くらい	130	18.0%	707	23.6%
1週間に2、3日くらい	163	22.6%	936	31.3%
1週間に1回くらい	62	8.6%	286	9.6%
ほとんど外出しない	35	4.8%	167	5.6%
合計	722	100.0%	2,994	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=69.049 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

さて、すでに見たように、男性は外出先での会話の程度が女性に比べて少ないことが分かっている。以下にその表を再掲する。

表3-50 (再掲) 外出時の会話の程度×性別

外出時の会話の程度	男性		女性	
	実数	%	実数	%
とてもよく話をする	44	6.1%	284	9.4%
よく話をする	116	16.0%	782	25.9%
普通	286	39.4%	1,419	47.1%
あまり話をしない	105	14.5%	335	11.1%
ほとんど話をしない	174	24.0%	194	6.4%
合計	725	100.0%	3,014	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=227.829 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

男性は、女性に比べて外出頻度が高い傾向にあるのにもかかわらず、なぜ外出時の会話が少ないのだろうか。外出頻度と会話の程度にはかかわりがないのだろうか。

そこで、外出頻度と会話の程度をクロス集計した(表5-39)。「ほとんど毎日」外出する人は、「とてもよく話をする」人が15.2%、「よく話をする」人が25.5%で、「あまり話をしない」人(7.4%)や「ほとんど話をしない」人(9.0%)に比べて高い割合を占め、その傾向は「1週間に4、5日くらい」でも同様であった。一方、外出頻度が「1週間に1回くらい」の場合、「とてもよく話をする」人は3.5%、「よく話をする」人は13.2%で、「あまり話をしない」人(18.5%)、「ほとんど話をしない」人(19.1%)に比べて低かった。さらに、外出頻度の高いグループと比べても、会話の程度が少なくなる傾向は明らかで、外出頻度が高ければ会話の程度も多くなることが分かる。

そこで、更に男女別に分けて、外出頻度と外出時の会話を見たものが、表5-40の多重クロス表で

ある。

男女とも、外出頻度が高くなると会話の程度が多くなるという全体的な傾向は同様である。しかし、その構成割合が異なっている。例えば、男性で「ほとんど毎日外出する」場合でも、「とてもよく会話をする」(10.1%)と「よく話をする」(20.2%)を合わせて、外出時によく会話をする人はおよそ30.3%である。反対に、「あまり話をしない」(10.4%)、「ほとんど話をしない」(18.4%)を合わせてあまり話をしない人の割合は28.8%であった。

一方、女性で「ほぼ毎日外出する」場合、「とてもよく話をする」(16.9%)と「よく話をする」(27.7%)を合わせて44.6%で、「あまり話をしない」(6.4%)、「ほとんど話をしない」(5.4%)を合わせてあまり話をしない人の割合は11.8%であった。

これらのことから、もともと男性に比べて女性の方がよく会話をする傾向にあり、その影響が強いため、外出頻度が少しばかり女性よりも高くても、会話の程度については女性の方が圧倒的によく会話をしているということがうかがえよう。

会話をするには相手が必要である。会話の相手としての友人・知人とのかかわりはどうであろうか。

表5-41は、親しい友人の有無別に外出時の会話の程度を集計したものである。「親しい友人がいる」場合、外出時に「とてもよく話をする」(10.0%)と「よく話をする」(27.9%)を合わせて37.9%の人がよく会話をしている。「あまり話をしない」(9.5%)と「ほとんど話をしない」(5.5%)を合わせた外出時にあまり会話をしない

表5-39 外出時の会話の程度×外出頻度

外出時の会話の程度	ほとんど毎日		1週間に4、5日くらい		1週間に2、3日くらい		1週間に1回くらい		ほとんど外出しない	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
とてもよく話をする	187	15.2%	68	8.1%	62	5.6%	12	3.5%	2	1.1%
よく話をする	314	25.5%	274	32.7%	243	21.9%	45	13.2%	18	9.8%
普通	528	42.9%	378	45.2%	552	49.7%	156	45.7%	63	34.2%
あまり話をしない	91	7.4%	80	9.6%	164	14.8%	63	18.5%	42	22.8%
ほとんど話をしない	111	9.0%	37	4.4%	90	8.1%	65	19.1%	59	32.1%
合計	1,231	100.0%	837	100.0%	1,111	100.0%	341	100.0%	184	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=380.832 自由度16 p=0.000\* \* p<0.05

表5-40 外出時の会話の程度×性別×外出頻度

外出時の会話の程度	男性									
	ほとんど毎日		1週間に4、5日くらい		1週間に2、3日くらい		1週間に1回くらい		ほとんど外出しない	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
とてもよく話をする	33	10.1%	6	4.8%	4	2.5%	1	1.6%	0	0.0%
よく話をする	66	20.2%	23	18.3%	19	11.7%	5	8.2%	2	6.3%
普通	133	40.8%	58	46.0%	68	42.0%	14	23.0%	10	31.3%
あまり話をしない	34	10.4%	17	13.5%	28	17.3%	15	24.6%	7	21.9%
ほとんど話をしない	60	18.4%	22	17.5%	43	26.5%	26	42.6%	13	40.6%
合計	326	100.0%	126	100.0%	162	100.0%	61	100.0%	32	100.0%

外出時の会話の程度	女性									
	ほとんど毎日		1週間に4、5日くらい		1週間に2、3日くらい		1週間に1回くらい		ほとんど外出しない	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
とてもよく話をする	149	16.9%	61	8.7%	58	6.2%	11	4.0%	2	1.3%
よく話をする	244	27.7%	249	35.6%	218	23.5%	38	13.9%	16	10.7%
普通	384	43.6%	316	45.2%	477	51.3%	139	50.9%	53	35.3%
あまり話をしない	56	6.4%	59	8.4%	131	14.1%	47	17.2%	33	22.0%
ほとんど話をしない	48	5.4%	14	2.0%	45	4.8%	38	13.9%	46	30.7%
合計	881	100.0%	699	100.0%	929	100.0%	273	100.0%	150	100.0%

※無回答は集計から除外

男性： $\chi^2$ 値=62.663 自由度16 p=0.000\* \* p<0.05 女性： $\chi^2$ 値=388.323 自由度16 p=0.000\* \* p<0.05

人は、15.0%である。

一方、「親しい友人がいない」場合、「とてもよく話をする」(3.0%)と「よく話をする」(6.1%)を合わせても、外出時によく会話をする人回答した人はわずか9.1%である。「あまり話をしない」(22.8%)と「ほとんど話をしない」(31.8%)を合わせると、外出時にあまり会話をしない人は54.6%にのぼった。

友人の有無が外出時の会話の程度と大きくかかわっていることが分かる。

表5-41 外出時の会話の程度×親しい友人の有無

外出時の会話の程度	親しい友人がいる		親しい友人がいない	
	実数	%	実数	%
とてもよく話をする	307	10.0%	18	3.0%
よく話をする	860	27.9%	37	6.1%
普通	1,454	47.1%	219	36.3%
あまり話をしない	293	9.5%	138	22.8%
ほとんど話をしない	170	5.5%	192	31.8%
合計	3,084	100.0%	604	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=571.665 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

それを更に男女別に多重クロス集計を行ったものが表5-42である。親しい友人の有無が、外出時の会話の程度にかかわっていることは男女とも同様の傾向である。なかでも男性は、「親しい友人がいない」場合に、「ほとんど話をしない」人の割合が52.7%と半数を超え、「あまり話をしない」人と合せると67.0%にものぼった。女性では、「親しい友人がいない」場合でも、「あまり話をしない」(26.0%)と「ほとんど話をしない」(21.4%)を合わせて47.4%で、友人がいる場合(12.8%)に比べれば圧倒的に高い割合ではあるものの、男性の場合とは20ポイント近い差がある。

男性は、女性に比べて外出頻度が高い傾向にあるものの、もともと女性ほど会話をする傾向になるために、外出時の会話の程度も少なくなることが分かる。親しくしている友人や知人がいない場合には、女性よりも顕著に会話の程度が少なくなる。

外出時によく会話をするのかどうかという一点のみで、その人の社会的ネットワークの強弱を測ることはできない。一般的に、男性は女性に比べ

表5-42 外出時の会話の程度×性別×親しい友人・知人の有無

外出時の会話の程度	男性				女性			
	親しい友人がいる		親しい友人がいない		親しい友人がいる		親しい友人がいない	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
とてもよく話をする	39	7.9%	4	2.0%	262	10.3%	14	3.6%
よく話をする	107	21.7%	6	3.0%	742	29.2%	29	7.5%
普通	217	44.0%	57	28.1%	1,211	47.7%	161	41.5%
あまり話をしない	68	13.8%	29	14.3%	220	8.7%	101	26.0%
ほとんど話をしない	62	12.6%	107	52.7%	103	4.1%	83	21.4%
合計	493	100.0%	203	100.0%	2,538	100.0%	388	100.0%

※無回答は集計から除外

男性： $\chi^2$ 値=144.027 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

女性： $\chi^2$ 値=330.896 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

て会話が少ない傾向にあり、それ自体が社会とのつながりを示しているわけではないからである。しかしながら、会話という「社交」を通じて社会との接点を見出すとするならば、そこにはまず社交の相手としての「友人・知人」の存在が大きなかかわりをもつといえるのではないだろうか。

### イ 外出時の会話と社会参加

次に、社会参加と外出時の会話の程度のかかわりを見ていきたい。地域社会で友人・知人を得るために、社会活動への参加は有効な手段のひとつである。親しい友人・知人の種類を26ページ図3-30で見ているが、それによれば「近所の人」(39.1%)に次いで、「趣味やスポーツを通じて知り合った人」(21.5%)が挙げられている。友人がいる人は、外出時の会話の程度が多くなることはすでに述べた。では、そのような友人が集まる社会活動への参加の有無と、外出時の会話の程度にもかかわりがあるのではないだろうか。

そこで、まずは社会参加の有無と親しい友人・知人の有無とのかかわりを見ておきたい(表5-43)。社会活動に「参加している」場合、親しい友人が「いる」人の割合は91.0%と高い。一方、社会活動に「参加していない」場合、親しい友人が「いる」人の割合は75.0%とやや低くなり、親しい友人が「いない」人が25.0%と4分の1を占める。

表5-43 親しい友人・知人の有無×社会参加の有無

親しい友人・知人の有無	参加している		参加していない	
	実数	%	実数	%
いる	1,681	91.0%	1,201	75.0%
いない	166	9.0%	400	25.0%
合計	1,847	100.0%	1,601	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=159.950 自由度1 p=0.000\* \* p<0.05

それを踏まえて、外出時の会話の程度を社会参加の有無別にまとめたものが表5-44である。社会活動に「参加している」場合、「あまり話をしない」(7.8%)と「ほとんど話をしない」(4.4%)を合わせて、外出時にあまり会話をしない人は12.2%である。社会活動に「参加していない」場合には、「あまり話をしない」(16.1%)と「ほとんど話をしない」(16.1%)を合わせて、外出時にあまり会話をしない人は32.2%で、社会活動に参加している場合に比べて20ポイント高かった。

表5-44 外出時の会話の程度×社会参加の有無

外出時の会話の程度	参加している		参加していない	
	実数	%	実数	%
とてもよく話をする	206	11.1%	101	6.3%
よく話をする	578	31.1%	274	17.1%
普通	846	45.6%	714	44.5%
あまり話をしない	145	7.8%	258	16.1%
ほとんど話をしない	82	4.4%	259	16.1%
合計	1,857	100.0%	1,606	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=262.295 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

ところで、本調査の結果を用いて行った因子分析により、5つの因子が抽出されている。そのなかに、「生活の満足」と「人間関係（コミュニケーション）」を示す因子がある。その得点を用いて、社会参加の有無別に「生活の満足」と「人間関係（コミュニケーション）」の度合いを見てみたい。

表5-45は、生活満足度を示す因子得点の平均を、社会参加の有無別に求めたものである。

表5-45 社会参加有無×人間関係（コミュニケーション）因子得点

社会参加有無		人間関係
参加している	平均値	-0.247
	度数	1,160
	標準偏差	0.791
参加していない	平均値	0.311
	度数	903
	標準偏差	0.869
合計	平均値	-0.002
	度数	2,063
	標準偏差	0.871

※無回答は集計から除外

これによれば、社会活動に参加している場合、人間関係についての因子得点の平均値は-0.247であり、社会活動に参加していない場合は0.311である。人間関係に関する因子得点は、数の小さい方が満足度が高いことを示す。このことから、社会参加をしている方が、していない方に比べて人間関係について満足している傾向にあることが分かる。

表5-46は、同様に社会参加の有無別に「生活の満足」を示す因子得点の平均値をまとめたものである。これによれば、社会活動に参加している場合、生活の満足についての因子得点の平均値は-0.240であり、社会活動に参加していない場合は0.285である。生活の満足に関する因子得点についても、数の小さい方が満足度が高いことを示している。このことから、社会参加をしている方が、生活についてより満足している傾向にあることが分かる。

表5-46 社会参加有無×生活の満足因子得点

社会参加有無		生活の満足
参加している	平均値	-0.240
	度数	1,160
	標準偏差	0.826
参加していない	平均値	0.285
	度数	903
	標準偏差	1.005
合計	平均値	-0.010
	度数	2,063
	標準偏差	0.945

※無回答は集計から除外

社会参加活動は、地域社会で人とのかかわり接する機会である。その内訳は、趣味の活動やスポーツ、町会・自治会と多岐にわたるが、港区のひとり暮らし高齢者の半数以上が何かしらの活動に参加している（31ページ図3-43）。友人・知人は、地域生活を送る上で、家族の次に強いつながりをもたらす。緊急時の支援者や、正月三が日に過ごす相手として、家族や親族に次いで友人・知人が挙げられていることはすでに見たとおりである。社会活動への参加を促すことは、地域でのつながりを築くひとつのきっかけとなるのではないだろうか。

#### ウ 地域活動への参加意向から見る活動促進の方向

地域活動への参加促進を検討するために、まずは現在の動向を把握しておきたい。

表5-47は、地域活動への参加意向を、現在の社会活動への参加有無別に見たものである。現在活動に参加している人の場合、「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせた60.0%の人が、今後も地域活動へ参加したいと考えていることが分かる。一方で、現在参加していない人の場合、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を合わせた49.8%の人が、今後も地域活動へ参加したいとは思っていないことが分かる。

表5-47 地域活動への参加意向×社会活動への参加有無

地域活動への参加意向	参加している		参加していない	
	実数	%	実数	%
とてもそう思う	349	20.1%	64	4.0%
まあそう思う	694	39.9%	216	13.6%
どちらともいえない	410	23.6%	516	32.5%
あまりそう思わない	244	14.0%	577	36.4%
まったくそう思わない	41	2.4%	213	13.4%
合計	1,738	100.0%	1,586	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=705.950 自由度4 p=0.000\* \* p<0.05

つまり、現在活動に参加している人の方が、参加していない人よりも、今後の活動への参加意向が強いと言える。社会活動への参加を促進しようと考えた場合には、現在何らかの活動に参加している人が、その活動を継続したり、新たな活動に参加したりできるよう支援する一方で、現在参加していない層へのアプローチも検討することが大切である。現在参加していなくても、「参加したい」という意向をもつ人と、「どちらともいえない」と迷っている人を合わせると半数程度である。その人たちの参加を実現できるような条件整備がまず求められるだろう。また、参加したくないと考えている人々に対しても、参加に意欲が出るようなアプローチの仕方を考えることができるのではないだろうか。

そのひとつのヒントとして、社会活動に参加しない理由について見ておくことが役に立つだろう。

表5-48は、社会活動に参加していない理由を男女別に見たものである。

男女ともに、「自分の興味をひくものがない」最も多く、男性では30.5%、女性では28.0%の人が挙げている。そのほか、「時間がない」（男性15.5%、女性18.2%）、「体の調子が悪い」（男性15.5%、女性19.5%）の二つは、男性よりも女性の方がやや高い割合を占めた。また、「それらの活動を知らない」（男性17.0%、女性13.1%）、「一緒に参加する仲間や友人がいない」（男性19.2%、女性17.2%）については、男性の方がやや高い割合を占めた。

男女の間に大きな差が見られるわけではない。

しかし細かい点に注目するならば、女性は「時間がない」や「体の調子が悪い」など自身の都合によるものを参加しない理由として挙げる人が男性よりもやや多かった。また、男性は「それらの活動を知らない」や「一緒に参加する仲間や友人がいない」といった参加に関する条件、それも最初のアクセスにかかわるものを理由として挙げている人が、女性よりもやや多かった。社会活動への参加を促進する取り組みを展開する際には、こうした違いも少し考慮に入れながらアプローチの仕方を考えることもできるのではないだろうか。

表5-48 社会活動に参加しない理由（複数回答）×性別

社会活動に参加しない理由（複数回答）	男性 (n=407)		女性 (n=1,167)	
	実数	%	実数	%
時間がない	63	15.5%	212	18.2%
自分の興味をひくものがない	124	30.5%	327	28.0%
体の調子が悪い	63	15.5%	227	19.5%
費用がかかる	20	4.9%	65	5.6%
近くに活動がない	19	4.7%	68	5.8%
それらの活動を知らない	69	17.0%	153	13.1%
一緒に参加する仲間や友人がいない	78	19.2%	200	17.2%
参加したくないから	98	24.1%	234	20.1%
その他	54	13.3%	214	18.4%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=19.552 自由度9 p=0.021\* \* p<0.05

#### （４）地区別の考察

ここでは、地区ごとの特徴についてこれまでの述べてきたことをまとめながらさらに分析を行いたい。

##### ア 地区別に見た生活環境

これまで見てきたように、居住年数や住宅の種類、地域の困りごとなどは地区別に特徴がある。本調査で重点課題の1つとしている買い物困難については、買い物先としての商店の有無や、交通機関の利便性など地区別の地域性をとらえることにより、それぞれの特徴に応じた支援策を検討することができるだろう。また、それは買い物のみならず、生活課題の解決を考えていく上でも重要

な資料となる。

そこで、地区ごとのおおまかな特徴を以下にまとめていきたい。

すでに述べたとおり、麻布地区は平均居住年数が41.7年で5地区中最も長い。60ページ表3-61にあるように、持ち家率は7割を超え、5地区の中で最も高い。しかも「持ち家（一戸建て）」の占める割合は4分の1を超えている。生活拠点である住宅が安定している人が最も多い地区と言える。居住階は「1・2階」に住む人の割合が45%で5地区中最も高く、6階以上は2割程度であった。地域の困りごとについては、「ある」と回答した人の割合は高い方であった。その内容は、「近所に銭湯がない」や「近所に地下鉄・鉄道の駅がない」などが他地区に比べて高い割合であった（63ページ表3-66）。外出手段として「電車」と回答した人の割合が5地区中最も低い（64ページ表3-67）。住居は安定しているが、交通手段の面では、バス利用が多く、電車についてはやや不便さがあると言えるだろう。

持ち家率が次に高いのは高輪地区で、6割程度を占める。一方、「民間の賃貸住宅」に住む人の割合は5地区中最も高く2割を超えている。「1・2階」に住む人の割合は43.1%で麻布地区に次いで高く、6階以上の高層階に住む人の割合は3割程度であった。居住年数の平均は38.6年で5地区中4番目である。地域の困りごとが「ない」と回答する人の割合が5地区中最も高い。困りごととしては「近所に外食する店がない」と回答する人の割合が5地区中で最も高かった。事業所等の少ない住宅街であるため、飲食店の出店が少ないのではないだろうか。

芝地区は、持ち家率が5地区中3番目での高さで、5割半程度である。居住年数は麻布地区に次いで長く、平均で40.2年であった。居住階数は「1・2階」の割合が25.6%と低くなり、6階以上の高層階に住む人の割合が45.7%で5地区中2番目に高い。地域の困りごとが「ある」と回答した人の割合が5地区中2番目に高く、「防犯上の不安」や「振り込め詐欺など不審な電話がある」や「地震などの防災対策に不安がある」といった治安、防災面などを挙げている人の割合が他地区

よりも高かった。交通手段は「バス」の利用が5地区中突出して少なく、「徒歩」や「自転車」の割合が5地区中最も高かった。

赤坂地区は、持ち家率は5地区中4番目である。都営・区営住宅が地区内に多いことともかかわって「都営・区営住宅」に住む人の割合が3割を占め、5地区中2番目の高さである。地域の困りごとについては6割半の人が「ある」と回答し、5地区中で最も高かった。その内容として「物価が高い」を挙げている人の割合が5地区で唯一6割を超え、最も高かった。外出手段は「徒歩」の割合が芝地区に次いで高く4分の1程度を占めている。

芝浦港南地区は、持ち家率が5地区中最も低く3割である。しかも「持ち家（一戸建て）」の割合はわずか1.6%であり、持ち家のほとんどは分譲マンションであることが分かる。赤坂地区と同様に、都営・区営住宅が多いことから、「都営・区営住宅」に居住する人の割合が高く、49.1%とほぼ半数を占め、5地区中最も高い割合を示した。平均居住年数は28.5年で他地区よりも10年以上も短い。比較的若い年代が多いのもこの地区の特徴である。地域の困りごとが「ある」と回答した人の割合は5地区中2番目に低い。しかし、困りごとの内容は「近所に地下鉄・鉄道の駅がない」という交通機関の整備にかかわるものや、外食したり出前を取ったりする店舗がないとするもの、「近所に病院や診療所がない」といった生活の利便性にかかわる社会資源の不足について、他地区に比べて多く挙げられていた。

## イ 地区別に見た経済状況

次に、経済状況の違いを地区別に見ていきたい。

表5-49は、地区別に経済状況の感じ方をクロス集計したものである。経済状況について「かなり余裕がある」と「やや余裕がある」を合わせた割合が最も高いのは麻布地区で26.8%、次いで高輪地区が24.0%であった。芝地区と赤坂地区はそれぞれ21.8%、21.1%で麻布地区・高輪地区に比べてやや低く、芝浦港南地区は12.1%と5地区の中で最も低かった。反対に、「やや苦しい」と「かなり苦しい」を合わせて、経済状況が苦しいと感じている人の割合は、芝浦港南地区で最も高く



28.9%で、芝地区、赤坂地区、高輪地区は23%前後であった。最も低かったのは麻布地区の16.4%である。

表5-49 経済状況の感じ方×地区

経済状況の感じ方	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
かなり余裕がある	27	4.1%	31	4.8%	30	3.9%	45	4.8%	11	1.8%
やや余裕がある	117	17.7%	142	22.0%	131	17.2%	179	19.2%	63	10.3%
余裕はないが生活していくには困らない	363	54.8%	366	56.7%	410	53.9%	490	52.6%	359	58.9%
やや苦しい	102	15.4%	67	10.4%	125	16.4%	146	15.7%	114	18.7%
かなり苦しい	53	8.0%	39	6.0%	65	8.5%	72	7.7%	62	10.2%
合計	662	100.0%	645	100.0%	761	100.0%	932	100.0%	609	100.0%

※無回答は集計から除外

$\chi^2$ 値=62.649 自由度16 p=0.000\* \* p<0.05

次に、「経済状況の苦しさ」を示す因子の得点の平均値を地区別に比較したものが表5-50である。得点の平均値が最も小さいのは麻布地区で-0.132、次いで高輪地区が-0.084であった。これらの地区では経済状況が安定している傾向にある

ことが分かる。最も得点が大きかったのは芝浦港南地区で、0.199を示し、経済状況が苦しい傾向にあることが分かった。次いで、芝地区の0.041、赤坂地区の0.019の順に得点が大きかった。

表5-50 地区別の経済状況の苦しさ（因子得点の平均値）

	平均値					
	芝地区	麻布地区	赤坂地区	高輪地区	芝浦港南地区	合計
経済状況の苦しさ	0.041	-0.132	0.019	-0.084	0.199	0.000

芝浦港南地区ではなぜ経済状況が苦しい傾向にあるのか。そのひとつの理由として、芝浦港南地区に都営・区営住宅が多いこととのかかわりが指摘できるのではないだろうか。

地区ごとに住宅の種類傾向が違っていることはすでに述べたとおりである。芝浦港南地区は赤坂地区と並んで「都営・区営住宅」に居住する人が多い。これはこの2地区に都営・区営住宅が集中していることとかわっている。また、持ち家率については、最も高かった麻布地区と最も低かった芝浦港南地区とでは倍以上の差が開いている。

表5-51は、因子分析で得られた「経済状況の苦しさ」を示す因子得点の平均値を、住宅の種類別に集計したものである。「経済状況の苦しさ」については、得点が小さいほど安定していることを

意味している。これによれば、最も得点が小さいのは「持ち家（分譲マンション）」で-0.327、次いで「持ち家（一戸建て）」が-0.233で、持ち家の場合には、経済状況が安定している傾向にあることが分かる。最も得点が大きかったのは「民間の賃貸住宅」で0.522、次いで「都営・区営住宅」が0.446であった。持ち家に比べて経済状況が安定していない傾向にあることが分かる。

表5-51 住宅の種類別経済状況の苦しさ（因子得点の平均値）

住宅種類5区分	平均値	度数	標準偏差
持ち家（一戸建て）	-0.233	338	0.859
持ち家（分譲マンション）	-0.327	908	0.808
民間の賃貸住宅	0.522	290	0.934
都営・区営住宅	0.446	422	0.772
その他	0.192	198	0.889
合計	0.001	2,156	0.910

この傾向は、「経済状況の感じ方」からも明確に見ることができる。表5-52は、住宅の種類別に経済状況の感じ方を集計したものである。これによれば、「かなり余裕がある」と「やや余裕がある」を合わせて、経済状況に余裕があると感じている人の割合は、「持ち家（一戸建て）」では29.8%、「持ち家（分譲マンション）」の場合には33.1%であるが、「民間の賃貸住宅」では9.3%、

「都営・区営住宅」では7.6%で1割にも満たない。「やや苦しい」と「かなり苦しい」を合わせて、経済状況が苦しいと感じている人の割合は、「都営・区営住宅」の場合には34.1%、「民間の賃貸住宅」の場合には45.1%にもものぼる。一方、「持ち家（一戸建て）」では10.7%、「持ち家（分譲マンション）」では11.7%でともに1割程度であった。

表5-52 経済状況の感じ方×住宅の種類（5分類）

経済状況の感じ方	持ち家（一戸建て）		持ち家（分譲マンション）		民間の賃貸住宅		都営・区営住宅		その他	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
かなり余裕がある	30	5.2%	91	6.6%	6	1.0%	7	0.9%	11	3.1%
やや余裕がある	142	24.6%	364	26.5%	48	8.3%	50	6.7%	32	9.1%
余裕はないが生活していくには困らない	344	59.5%	759	55.2%	265	45.6%	438	58.3%	197	56.3%
やや苦しい	37	6.4%	121	8.8%	161	27.7%	175	23.3%	64	18.3%
かなり苦しい	25	4.3%	40	2.9%	101	17.4%	81	10.8%	46	13.1%
合計	578	100.0%	1,375	100.0%	581	100.0%	751	100.0%	350	100.0%

※無回答は集計から除外  
 $\chi^2$ 値=537.830 自由度16 p=0.000\* \* p < 0.05

これらの結果より、住宅の種類と経済状況にはかかわりがあることは明らかであろう。芝浦港南地区で経済状況が苦しい傾向が見られたのは、都営・区営住宅に居住する人の割合がほぼ半数であったこととかかわりがあるのではないだろうか。

### ウ 地区別に見た生活意識

最後に、因子分析により抽出された5つの因子のうち、「生活の満足」、「不安・ストレス」、「人間関係（コミュニケーション）」の3つの得点の平均から、地区別の生活意識を分析した（表5-55）。ここで示すのは、調査回答者がそれぞれの意識に関する質問において回答した結果を得点化し、その平均値を比較したものであり、あくまでも地区ごとの傾向である。なお、「生活満足度」と「人間関係（コミュニケーション）」は点数が小さい方が安定していることを示し、「不安・ストレス」は点数が大きい方が不安やストレスが高い状況、すなわち安定していないことを示している。

表5-53から、麻布地区は「生活の満足」の得点が5地区中最も小さく（-0.058）、生活への満

足度が高いことがうかがえる。また、「不安・ストレス」の得点は5地区中で最も大きく（0.072）、不安やストレスが少ない状況にあることが分かる。高輪地区は、「生活の満足」の得点は-0.015で麻布地区に次いで小さく、生活への満足度が高いことが分かる。また、「不安・ストレス」は0.024で麻布地区について大きく、不安やストレスが少ない状況にあることが分かる。

一方、芝地区は「人間関係（コミュニケーション）」は-0.034で赤坂地区に次いで少なく、安定した傾向を示しているが、「不安・ストレス」の得点が5地区の中で最も低く（-0.048）、不安やストレスが比較的高い状態にあることがうかがえる。

赤坂地区は「人間関係（コミュニケーション）」の得点が-0.038で5地区中最も小さく、比較的良好な状況にあることが分かる。「生活の満足」は-0.008で5地区中2番目の大きさで、満足度が低い傾向にある。

芝浦港南地区は、「生活の満足」と「人間関係（コミュニケーション）」の得点が大きかった。生活への満足度、人間関係への満足度が低い傾向にあることがうかがえる。

表5-53 因子得点の平均値×地区別

	平均値					合計
	芝地区	麻布地区	赤坂地区	高輪地区	芝浦港南地区	
生活の満足	-0.012	-0.058	-0.008	-0.015	0.104	0.000
コミュニケーション	-0.034	-0.023	-0.038	0.017	0.086	0.001
不安・ストレス	-0.048	0.072	-0.020	0.024	-0.034	0.000

### 3 まとめ—調査から言えること

最後に、これまで分析してきた内容を踏まえて調査から言えることを述べ、本報告のまとめとしたい。

#### (1) 買い物困難から考える生活支援

本調査では、ひとり暮らし高齢者の生活課題の1つとして「買い物」に注目し、その実態とニーズの把握を目的に分析を行ってきた。「買い物困難」とは、買い物に関する何らかの困りごと、ニーズを抱えた状態のことをいう。調査結果からは、半数近くの人が買い物に関する何らかの困りごとを抱えていることが明らかになり、さらに「今はなんとかなるが、将来は不安」という声が多く聞かれた。

買い物困難の状況は、以下の3つの点からまとめることができる。1つは健康状態・身体状況が良くないために、買い物困難を抱えているというものである。買い物には、歩く、荷物を持つ、商品を選ぶ、判断する、金銭管理をするといった一連の行動が必要とされる。健康状態が悪化したり、身体機能が低下したりすることにより、歩くことが不便になったり、重い荷物を持ち運ぶことが困難になったりしている。中には値札を読むことができなったり、商品を選ぶことが難しくなったり、金銭管理に自信がなくなるケースもある。個々人のADL（日常生活動作）、IADL（手段的日常生活動作）に注目しながら、どのような買い物支援を行うことが適切かを検討することが肝要である。また、買い物困難は、数ある生活課題の1つとして出現している可能性があることも考慮に入れる必要がある。本調査の結果からは、買い物困難を抱えている人は、生活全般についても、何かしら困りごとを抱えやすい傾向にあることが分かった。買い物支援を入り口とした、総合的な生

活支援を展開することも大切である。

2つめは経済状況から見た買い物困難である。買い物困難を抱える人は経済基盤が弱い傾向にあることが、調査結果から分かっている。地域の困りごとについても「物価が高い」と回答している人の割合は、経済状況が苦しいと感じている人ほど高い。自由回答でも物価に関する声は多く寄せられた。物価だけでなく、配達の利用に関しても、その利用料負担を心配する声も聞かれる。経済的負担に配慮した支援策の検討が求められるところである。

3つめは、地域性の問題である。地域により商店の有無や交通網の発達に違いがある。港区全体で同一の支援策を展開するよりも、それぞれの地区ごと、地域ごとに、その特性に合わせた制度・サービスを展開する方がニーズにマッチしやすくなる。買い物ニーズを把握する際には、住民の具体的なニーズと併せて、地区ごとの特性を把握することが大切である。

このような特徴を踏まえ、今後、買い物困難を抱えている人に対して支援を展開する場合には、その問題状況に応じた柔軟な支援プログラムを検討、構築することが重要である。「買い物をする店がない」というニーズは、ハード面として店舗の誘致や移動販売などの方策を検討することもできるが、ソフト面の支援策として、買い物に付き添ったり、配達の利用方法をわかりやすく利用しやすいものにしていくことで解決できる可能性もある。また、そこでは、既存の制度と制度外サービスをどのように紡ぎ合わせるかという視点も重要である。

以下に示す事例では、買い物への付き添いのニーズがあるものの、介護保険制度の適用にならず、サービス利用ができない。頼るべき家族・親族等のネットワークもないために買い物が負担と

なり、食事の内容には偏りが生じている。介護保険制度の対象でなくても、加齢や健康状態により買い物ニーズを抱えている人がいる事実を踏まえ、このような層に対してどのように支援していくのが課題である。

事例 男性 70代

## 1 生活状況

築50年以上の賃貸アパートの2階に居住。風呂はなく、畳や壁、襖の傷みが激しい。階段が急で、これまでに転げ落ちたことがあるという。膝が悪く、杖歩行である。血圧等で内科に通院しているほかは、サービスなどの利用はない。生活全般について、買い物など誰かに付き添ってほしいと思うのだが、相談センターでは「介護度がつかないと難しい」と言われ、今は自分でするしかない状況である。生活リズムは規則的だが、食事については、朝食はあるものですませ、昼食はファストフードを食べたり、食事をとらないこともあるという。夕食は買って来たものを食べている。日中はやることがないので部屋で過ごすことが多い。1次調査では、自身の経済状況について「余裕はないが生活していくには困らない」と回答している。

## 2 本人の生活歴

出身は九州地方。20年以上前に離婚して以後、幾度かの転居を経て港区へ移り住む。当初は製造業に就いていたが、その後職を転々とし、都内では管理人の仕事などをしてきた。

## 3 家族や地域とのつながり

離婚後、家族とは会っていない。親戚などともつきあいはない。正月三が日は毎年ひとりで過ごしている。近所づきあいは、隣の人と話をする程度で、町会・自治会にも加入していない。緊急時に来てくれるような人はおらず、警備会社と契約しているのみである。

## 4 生活上の不安や困りごと

近所に店がないため、週に1回、バスで区外へ出かけているが、杖を使っており、膝も痛いため、重いものを持つのがつらい。買い物への付き添いが欲しいと思っている。経済状況については、年

金生活であり、不安はない。住宅について、都営住宅に何度も申し込んでいるが当たらないので、供給量を増やしたり、高齢者用の住宅を整備してほしいと思っている。

ほかにも、本調査の買い物に関する自由記述欄には、いまは元気で、自力で買い物に行くことができていても、いつまでそれができるのかという不安の声が多く寄せられた。課題の状況を把握し、地域ごとの特性を踏まえた支援策の検討が求められているのではないだろうか。

## (2) 緊急時の支援者がいない人へのアプローチ

本調査の結果からは、病気やけがなど手助けを必要とする場合にすぐに駆けつけてくれる相手がいる人は、調査対象者の8割を超えることが分かった。一方、1割半程度の人はそうした相手がいない。緊急時の支援者がいない人は、日常生活上の困りごとを手伝ってくれる人の存在もない傾向にあり、家族・親族のネットワークが弱い傾向にある。日常的に、家族や親族との行き来が希薄な傾向にある男性は、女性に比べて緊急時の支援者がいない人の割合が高い。

一方、子どもなど身近な支援者となりうる存在がいない人の場合には、友人・知人が緊急時支援のなり手となっていることも調査からわかっている。しかし、緊急時の支援者がいない人の中には、友人・知人とのつながりや、近所の人とすつきあいがいない人が一定数存在する。緊急時の支援者がいない人は、正月三が日もひとりで過ごしている人が多く、社会的なかわりが弱い状態にあることが指摘できる。

また、ディシジョンツリー分析(113ページ図5-1)からは、「将来の生活の安定」という意識には、「経済状況の感じ方」、「緊急時の支援者の有無」、「住宅の種類」との関連が強いことが分かっている。いざという時に頼れる相手がいるかいないかということは、将来の生活への安心感にかかわってることが分かる。

緊急時の支援者がいないことは、高齢期のひとり暮らしの生活を支えるネットワークの機能が弱いことを表してもいる。近隣とのつきあいや、友

人・知人の存在があることが、すぐに生活の安定につながるわけではない。しかし、そうした社会とのつながりは、緊急時支援や生活を支えるネットワークの素地となり、それが「将来の生活への安心感」につながるのではないだろうか。生活ニーズの把握に際しては、社会的なつながりにも注目する視点も重視したい。

以下に示す事例では、家族や親族、近隣ともほとんどつきあいがなく、ヘルパーだけが社会との接点になっている。持ち家に居住し、経済的には安定しているものの、緊急時の支援者はなく、社会的なつながりが弱い。それが将来への不安感をもたらしている。このような層に対し、社会的ネットワークを安定的に構築していくための方策を検討することが課題である。

事例 女性 80代

### 1 生活状況

築40年以上の集合住宅の中層階に居住。持ち家である。室内はリフォームされておりきれいだが、居室が狭く、収納が少ないのが悩み。マンション内の他の部屋は事務所として利用している人が多い様子。1次調査では、自身の経済状況について「やや余裕がある」と答えている。健康状態は持病があり、あまり良くない。要介護度1である。月に1回通院している。介護保険でホームヘルパーを週3回利用、掃除をしてもらっている。生活リズムは、朝の起床はゆっくりで、昼食は朝食と兼用でとっている。夕食は夕方、どちらも自炊である。日中はほとんど外出せず、テレビを見て過ごしている。

### 2 本人の生活歴

関西地方の出身。父親は会社を経営、兄弟の一番上だった。戦時中は会社の経営状況も良かったが、終戦後は景気が落ち込み、同業の会社が次々に倒産。父親の会社も倒産してしまった。専門学校で資格取得後、関西地方の会社に数年間勤務。20代のころ関東へ転居し、会社員として勤務を続け、貯蓄をしてマンションを購入した。マンションの購入が港区への転入のきっかけである。結婚はしたことがない。

### 3 家族や地域とのつながり

兄弟のうち1人は居場所が分かっているものの、音信不通である。そのほかの兄弟は20年以上連絡をとったことがないので生きていられるかどうかも分からない。緊急時に来てくれる人はいない。正月三が日はいつもひとりで過している。近所の人とは挨拶程度のつきあいである。マンションの自治会に加入はしているが、活動はしていない。

### 4 生活上の不安や困りごと

買い物は週に1回スーパーへ行くか、ヘルパーに依頼する。お店が少なくなり、あっても日用品を扱わなくなったりして不便に感じている。また、ひとりで行くのが大変である。経済的には、年金と預貯金で贅沢をしなれば不安はないが、ひとりの生活でさびしく不安で死にたくなる。「どうやったら楽に死ぬるか」と考える。周りが相手にしてくれず、3、4日誰とも話をしないこともある。ヘルパーしか話し相手がいない。兄弟とも関係を断ち、友人を作ってこなかった自分が悪いと思っている。

また、調査結果からは、東日本大震災の際には、ほとんどの人が家族や親戚、友人などと連絡をとりあっていたことが分かっている。しかし、緊急時の支援者がいない人の場合には、2割弱の人が誰とも連絡をとりあっていない。今回のように大きな災害が首都を襲ったとき、ひとり暮らし高齢者の安全と安心をどのように確保するのか。ひとりひとりの社会的ネットワークの視点からも、考えていくことが求められる。

### (3) 社会との接点を開くー社会参加の促進

本調査の結果から、社会活動に参加している人は、参加していない人に比べて、より生活に満足感を得ていることが分かった。社会参加活動をしている人は半数を超えている。80代、90代と高齢になっても、大学の公開講座や区内外のカルチャー教室等に出かける人、国内外の旅行を楽しむ人、ボランティア活動に励む人など、社会活動へ積極的に参加している人々の様子がうかがえる。社会活動に参加すると、その先で仲間や友人を得、また外出の機会が増えたり、外出先で会話をする

ことが増えたりと、社会とのかかわりが広がっていく。外出は日常行動であり、社会とのかかわりの機会でもある。友人がいる人や、社会参加をしている人は、外出先でもよく会話をする傾向にある。「人間関係（コミュニケーション）」への満足感も高く、将来的にも社会活動への参加を継続したいとする人が多い。

一方で、社会活動への参加をしていない人の理由は様々である。体調面、経済面、時間的な余裕などの都合があることも確かである。しかし、中には「一緒に参加する仲間や友人がいない」、「それらの活動を知らない」といった活動のきっかけがつかめないことや、「自分の興味をひくものがない」といった活動メニューの工夫で参加につながる可能性を示すような理由も挙げられている。自由回答では、趣味に合う活動を求めて区外に出る人の声や、もっと区内で充実した講座や活動メニューを求める声も聞かれている。社会とのつながりを築く入り口となる社会参加をどのように支援していくのか。性別などによる違いも考慮に入れながら、新たなアプローチを検討できるのではないだろうか。

#### （４）地域性を視野に入れた支援策の検討

最後に、地域性についてである。本調査の分析にあたり、港区全体の傾向をつかむと同時に、地区ごとの特性の違いにも注目してきた。

麻布地区は、平均居住年数が最も長く、持ち家率が高い。生活への満足感が高く、ストレスや不安が少なく、生活が安定している人が多い傾向にある。

高輪地区は、民間賃貸住宅に住む人の割合が5地区中最も高いが、持ち家率も高い。地域の困りごとを感じていない人が多く、生活への満足感も麻布地区に次いで高い傾向にある。

買い物困難を抱える人が多い傾向にあるのが、芝地区、赤坂地区である。買い物に関する困りごとが「ある」人がともに5割で、両地区とも「近所にお店がない」と回答する人が5割半程度であった。さらに芝地区では品揃えの少なさにも困っていると回答が多かった。芝地区では、スーパーに買い物に行く人の割合が5地区中最も

低く、コンビニに行く人の割合が最も高かった。赤坂地区では、「近くの商店に買いに行く」人の割合が5地区中最も低い。また、地域の困りごととして「物価が高い」を挙げる人が多かった。

芝地区は、居住年数は麻布地区に次いで長い傾向にある。高層階に住む人の割合が比較的高いことも特徴である。

赤坂地区は、都営・区営住宅に住む人が3割程度いる。子どもとの行き来がない人の割合がやや高い傾向にあるが、「人間関係（コミュニケーション）」への満足感が高い。

芝浦港南地区は、都営・区営住宅に住む人が半数を占め、持ち家率が最も低い。持ち家についても、ほとんどがマンションであり、高層階に居住する人が多い。芝地区と並んで前期高齢者の割合がやや高く4割を占め、平均居住年数は5地区中最も短い。経済的に苦しい人の割合が高く、不安・ストレスや生活への満足感などは5地区中最も低い。地域の困りごととして、飲食店等のほかに、病院や診療所がないと回答している人が多いことも特徴である。

このような地区ごとの特性を踏まえることは、特に生活支援の方策を検討する場合には重要となる。店舗の分布や交通網はそれぞれの地区により状況が異なり、それにより個々人の生活ニーズや支援方策が変わってくるからである。本報告書においては、総合支所ごとに5つの地区に分類してその傾向を把握してきたが、各地区の中でも、更に細かい地域ごとに事情は異なっている。今後は、より詳細に地域の実情を把握していく必要もあるだろう。

ひとり暮らし高齢者の生活を支援するためには、的確なニーズ把握が重要である。その際、生活の実態や地域性の把握、経済状況など様々な角度からの分析が求められる。これまで、本調査の結果を、①買い物困難と生活課題、②緊急時支援と社会的ネットワーク、③外出行動と社会参加、④地区別の考察の4つの柱を中心に、経済階層、性別、生活意識などの視点から分析してきた。持ち家率の違いは住宅基盤の安定性とかかわり、経済状況の安定とも結びつく。家族や友人との交流は、生活を取り巻く社会的ネットワークとして機能して

いる。平成22年国勢調査によれば、65歳以上人口の総人口に占める割合は23.0%に達し、その割合は年々高まっている。また、65歳以上人口のうち、ひとりで暮らしている人の割合は16.4%で、平成7年以降継続して上昇していることが分かっている。このように我が国では今後も高齢化が進み、

ひとり暮らし高齢者の数もますます増えることが予想されている。それは港区も例外ではない。ひとりであっても安心・安全に暮らし続けるためにはどのような支援が必要なのか、生活上の諸課題を細分化するのではなく、生活を総合的に捉え、検討していくことが求められている。

## VI 資料

### 資料1 調査依頼文

港 太郎 様

ひとり暮らし高齢者社会調査ご協力をお願い

日頃から、港区政に対し、ご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

さて、このたび港区では、港区内に、おひとりで暮らしている65歳以上の方約5千7百人を対象に、アンケート調査を行うこととし、誠に勝手ながら、あなた様に同封の調査票を送らせていただきました。

この調査は、皆様の生活状況（住まい、家族、経済状況）のほか、今年の3月11日に発生した東日本大震災に関すること等をお伺いし、これからの保健福祉施策、災害対策に活かしていくことを目的として行うものです。

ご回答いただいた内容は、上記の目的以外には利用しません。

また、港区では、民生委員の訪問または郵送調査により、ひとり暮らし高齢者の方の緊急連絡先等を伺う「単身世帯（65歳以上）実態調査」を5月1日から実施しており、皆様には大変ご負担をお掛けします。

ご多忙の中、お手数をお掛けして申し訳ありませんが、本調査の趣旨をご理解の上、皆様のご協力をお願いいたします。

平成23年6月

港区長 武井雅昭



## 港区ひとり暮らし高齢者の生活に関する アンケート調査

平成23年6月

港区政策創造研究所  
(港区企画経営部)

※ぜひ、このアンケートにご協力のうえ、6月14日(火)までご投函くださいますよう、ご協力お願い申し上げます。

[平成23(2011)年6月1日現在でお答え下さい]

■あなたご自身のことについておうかがいします

問1 性別のあてはまる方に○をし、年齢をご記入ください。

1. 男性	2. 女性	満_____歳 (平成23年6月1日現在でお答え下さい)
-------	-------	------------------------------

問2 現住所を丁目までご記入下さい。(例：港区芝公園1丁目)

(町 名)
港区_____丁目 (「番」「号」等は記入不要です)

問3 港区にはおよそ何年間お住まいですか。

_____年くらい
-----------

問4 ひとりでお住まいの期間はおよそ何年間ですか。

_____年くらい
-----------

■お住まいについておうかがいします

問5 あなたがお住まいの住宅は次のどれですか (○は1つ)。

1. 持ち家 (一戸建て)	2. 持ち家 (分譲マンション)
3. 民間の賃貸住宅	4. 都営・区営住宅
5. 都市再生機構 (UR) 等の公的賃貸住宅	
6. 社宅・公務員住宅・管理人住宅	7. 高齢者用住宅・シルバーピア
8. その他 ( _____ )	

問6 お住まい (主に生活する部屋) は何階ですか。

_____階
--------

問7 今の住宅について困っていることは何ですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- |                |                    |
|----------------|--------------------|
| 1. 階段の昇り降りが大変  | 2. エレベーターが設置されていない |
| 3. 浴室・浴槽が使いにくい | 4. お風呂がない          |
| 5. トイレが使いにくい   | 6. 居室が狭い           |
| 7. 居室が広すぎる     | 8. 室内に段差がある        |
| 9. 冷房がない       | 10. 老朽化している        |
| 11. その他 ( )    | 12. とくに困っていることはない  |

### ■健康状態についてうかがいます

問8 ご自身の健康状態についてどのようにお考えですか（○は1つ）。

- |            |         |       |
|------------|---------|-------|
| 1. 良い      | 2. まあ良い | 3. 普通 |
| 4. あまり良くない | 5. 良くない |       |

問9 (1) あなたは日常生活を送るのになんらかの介助が必要ですか（○は1つ）。

- |                     |               |
|---------------------|---------------|
| 1. ほとんど自分でできる       | 2. 一部介助を必要とする |
| 3. ほとんどすべてに介助を必要とする |               |

(2) あなたの介護保険の要介護度は次のどれにあてはまりますか。

(○は1つ)

- |                       |           |          |
|-----------------------|-----------|----------|
| 1. 要介護認定の申請をしたが非該当だった |           |          |
| 2. 要支援 1              | 3. 要支援 2  |          |
| 4. 要介護 1              | 5. 要介護 2  | 6. 要介護 3 |
| 7. 要介護 4              | 8. 要介護 5  |          |
| 9. 要介護認定の申請をしていない     | 10. わからない |          |

(3) あなたは現在、介護保険サービスを利用していますか。

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1. 利用している | 2. 利用していない |
|-----------|------------|



## ■日常生活についてうかがいます

問14 食品や日用品の買い物はどのくらいの頻度でしますか（○は1つ）。

- |                |               |              |
|----------------|---------------|--------------|
| 1. 毎日          | 2. 2～3日に1度くらい | 3. 1週間に1度くらい |
| 4. 2～3週間に1度くらい | 5. 月に1度くらい    | 6. その他（ ）    |

問15 食品や日用品の買い物は主にどこでどのようにされていますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- |                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| 1. スーパーマーケットに買いに行く   | 2. コンビニに買いに行く         |
| 3. 近くの商店に買いに行く       | 4. デパートに買いに行く         |
| 5. 生協等の宅配を利用する       | 6. 商店に配達を依頼する         |
| 7. 車で売りに来るのを利用する     | 8. インターネット通販(ネットスーパー) |
| 9. ヘルパー等を買ってきてもらう    | 10. 家族を買ってきてもらう       |
| 11. 友人や近所の人を買ってきてもらう | 12. その他（ ）            |

問16 普段の買い物で困っていることはどのようなことですか（○はいくつでも）。

- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| 1. 近所にお店がない       | 2. お店の営業時間が短い      |
| 3. 品揃えが少ない        | 4. お米など重いものを運ぶのが大変 |
| 5. ひとりで買い物に行くのが困難 | 6. 買い物を頼める人がいない    |
| 7. 配達してくれる店がない    | 8. 宅配の利用方法がわからない   |
| 9. その他（ ）         | 10. とくに困っていることはない  |

問17 買い物について普段感じていることをご自由にお書きください。











問31 この震災に際して、困ったことや考えたことなどをご自由にお書きください。

### ■外出・社会参加活動についてうかがいます

問32 普段外出する際の主な手段は何ですか（○は1つ）。

1. 徒歩                      2. 自転車                      3. バイク                      4. 電車

5. バス（ちいばす含む）      6. 自家用車                      7. その他（                      ）

問33（1）普段の外出頻度は、1週間のうちに何回くらいですか（○は1つ）。

1. ほとんど毎日                      }                      → 問34へ

2. 1週間に4、5日くらい                      }                      → 問34へ

3. 1週間に2、3日くらい                      }                      → 問34へ

4. 1週間に1回くらい                      }                      ↓

5. ほとんど外出しない                      }                      ↓

（2）「4. 1週間に1回くらい」または「5. ほとんど外出しない」と答えた方にうかがいます。  
外出の機会が少ないのはどのような理由からですか（○はいくつでも）。

1. 家にいるのが好きだから                      2. 出かけるのがおっくうだから

3. 行く場所や用事がないから                      4. 坂や階段が多いから

5. 交通が不便だから                      6. 身体が不自由・健康上の心配が大きい

7. その他（                      ）

問34 普段の外出の際、誰かと話をする機会はどの程度ありますか（○は1つ）。

1. とてもよく話をする      2. よく話をする                      3. 普通

4. あまり話をしない                      5. ほとんど話をしない

問35 (1) あなたが地域で参加している団体や集まりは何ですか (〇はいくつでも)。

1. 趣味の会 (囲碁・将棋・俳句・カラオケ・お花・盆栽・お茶など)
2. 社会活動 (同窓会・PTAなどの子育ての頃の団体・生協活動など)
3. 健康づくりの活動 (スポーツ・体操教室など)
4. 介護予防事業 (健康トレーニング・筋力向上トレーニングなど)
5. 学習の会                      6. 老人クラブ              7. ボランティア活動
8. 町会・自治会              9. その他 (                      )
10. 参加していない

(2) 参加していない理由は何ですか (〇はいくつでも)。

1. 時間がない                      2. 自分の興味がひくものがない
3. 体の調子が悪い              4. 費用がかかる
5. 近くに活動がない              6. それらの活動を知らない
7. 一緒に参加する仲間や友人がいない      8. 参加したくないから
9. その他 (                      )

(3) 地域で団体や集まりに参加している方と参加していない方、すべての方にうかがいます。今後、地域で団体や集まりに参加したいと思いますか。

1. とてもそう思う              2. まあそう思う              3. どちらともいえない
4. あまりそう思わない              5. まったくそう思わない

問36 あなたは区の行政サービスに関する情報をどこから得ていますか。  
あてはまるものすべてに〇をつけてください。

1. 広報みなど              2. 区の刊行物(「いきいき」など)              3. 回覧板
4. テレビ(ケーブルテレビ)              5. ラジオ              6. 新聞・雑誌
7. インターネット              8. 区役所や支所などの窓口              9. 民生委員
10. 家族・親戚              11. 近所の人              12. 友人・知人
13. その他 (                      )

## ■生活の様子についてうかがいます

問37 次の項目のそれぞれについて「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階のうち、あなたの気持ちに近いものを選んでください。

	とても そう思う	まあ そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
(1) 今の暮らしには張り合いがある	1	2	3	4	5
(2) 今の暮らしにはストレスが多い	1	2	3	4	5
(3) 生活は充実している	1	2	3	4	5
(4) 生活していて不安や心配がある	1	2	3	4	5
(5) 趣味をしている時間は楽しい	1	2	3	4	5
(6) 友人との関係に満足している	1	2	3	4	5
(7) 近所づきあいに満足している	1	2	3	4	5
(8) 自分は頼りにされていると思う	1	2	3	4	5
(9) 周囲から取り残されたように感じる	1	2	3	4	5
(10) 将来の生活は安心できる	1	2	3	4	5
	とても そう思う	まあ そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない

## ■経済状況についてうかがいます

つぎに、立ち入ったことをお聞きしますが、どうぞお答え下さいますようお願いいたします。結果は統計として処理され、個人のデータが漏れることはありません。

問38 あなたの1年間の収入は大体いくらぐらいですか（○は1つ）。

- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 1. 50万円未満          | 2. 50万円以上100万円未満  |
| 3. 100万円以上150万円未満  | 4. 150万円以上200万円未満 |
| 5. 200万円以上400万円未満  | 6. 400万円以上700万円未満 |
| 7. 700万円以上1000万円未満 | 8. 1000万円以上       |

問39 あなたの預貯金（有価証券、株券は除く）はいくらぐらいですか（○は1つ）。

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 1. 100万円未満         | 2. 100万円以上200万円未満   |
| 3. 200万円以上300万円未満  | 4. 300万円以上400万円未満   |
| 5. 400万円以上500万円未満  | 6. 500万円以上750万円未満   |
| 7. 750万円以上1000万円未満 | 8. 1000万円以上5000万円未満 |
| 9. 5000万円以上        |                     |

問40（1）現在のあなたの収入は次のどれですか（○はいくつでも）。

- |                |                   |        |
|----------------|-------------------|--------|
| 1. 年金          | 2. 生活保護           | 3. 預貯金 |
| 4. 利子、配当、家賃、地代 | 5. 子どもなどからの仕送り、援助 |        |
| 6. 仕事による収入     |                   |        |
| 7. その他（ ）      |                   |        |

（2）そのうちの主なものを1つ選んで回答欄に番号を書いてください。

回答欄（ ）

**問41** 現在のご自身の経済状況についてどのように感じていらっしゃいますか。  
あてはまるもの1つに○をつけてください。

- |                       |            |
|-----------------------|------------|
| 1. かなり余裕がある           | 2. やや余裕がある |
| 3. 余裕はないが生活していくには困らない |            |
| 4. やや苦しい              | 5. かなり苦しい  |

**問42** 区に対するご意見や、あなたの生活でお困りのことがあれば、何でもご自由に記入して下さい。

## 面接調査ご協力のお願い

港区では、今年9月に二次調査としてご家庭を訪問し、生活の様子についてお聞きしたいと考えております。ご協力いただける方は、次の欄にお名前やご連絡先をご記入ください。個人の情報がほかに漏れることはございません。下記に連絡先をご記入いただいた方のなかから、数十名の方を対象に訪問させていただく予定です。あらかじめご了承ください。

面接調査には、港区から委託を受けた株式会社日本統計センターから調査員が伺います。面接調査の対象となった方へは、日時等につきまして、8月中旬ころから、株式会社日本統計センターよりご連絡申し上げます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

二次調査の訪問を受けたくない方は、以下の欄には何も記入しないでください。

※二次調査(ご家庭への訪問)にご協力いただける方のみご記入ください

氏 名： \_\_\_\_\_

住 所：〒 \_\_\_\_\_

東京都港区

電話番号： \_\_\_\_\_

アンケートは以上で終了です。

この調査票は 6 月 14 日 ( 火 ) までに、同封の回収用封筒に入れ、封をして投函してください。

ご協力ありがとうございました。

## 港区ひとり暮らし高齢者面接調査（二次調査）

調査時点：2011年9月1日現在

1次調査ID		類型番号		地区	
本人氏名				年齢	歳
住所			電話番号		

調査員氏名	
-------	--

## ■面接調査実施日

訪問日	時間	備考
月 日 ( )	: ~ :	

## ■住宅状況

住居形態	持家(一戸建て・集合住宅)	区営・都営	居住	階
	民間賃貸(一戸建て・集合住宅)	その他( )	階数	
間取り(2LDK等)			ELV	ある・ない
築年数(おおまかに)	年くらい	木造・鉄筋コンクリート・その他( )		

【住宅の状況】※風呂・トイレ・台所の有無、室内の様子、老朽化の状況等

【住宅について困っていること】※段差、設備など住宅に関する困りごとなど

## ■地域環境（観察）

住宅街・商店街・ビル群・マンション・その他
周辺の様子



## ■生活歴・職業歴

【出身地】※生まれ育った地域（〇〇県△△市など）

【成育家族の構成(兄弟数)・親の職業や暮らしぶり】※答えられる範囲内で

\* 質問例 「子ども時代／学生時代／若いころはどのように過ごされたのですか」

【学歴(学校名は不要)・職業歴(会社名は不要)】※答えられる範囲内で とくに職業歴を。

【生活歴】※転居歴(港区に来た経緯や暮らしぶり、結婚、家族とのかかわり、過去～現在の親族ネットワークなど

\* 質問例 「独立されてからはどのように過ごされたのですか」「港区にずっとお住まいなのですか」「ご親戚は」

■健康状態・通院の状況

【健康状態・介助の状況】※観察した様子を中心に(在宅酸素、杖歩行、動きが緩慢、など)

【健康管理について】※健康維持や管理について気にしていることや、行っていること(健康づくりの運動など)

【通院状況】※定期的な通院や大病した経験など

【サービスの利用状況】※介護保険や区の保健福祉サービス等の利用状況(何を利用しているか)

■現在の生活状況

【生活リズム(時間)】※生活リズムの把握 起床・就寝時刻、食事の時間など

【日中の過ごし方】

※食事・入浴・家事等の様子 ※主に何をして過ごしているか ※外出・社会参加・友人との交流の様子

**【日常的支援について】**

※日常的に誰かの手助けを得ているか・得ているとすれば誰か・手助けの内容など

**【地域環境について(主観)】**※道路が広くて渡りきれないなど本人が地域環境について感じていること

**■買い物状況について**

**【普通の買い物の状況について】**※頻度・買い物先または方法 ※1次データの補足

**【買い物について困っている・不安に思っていることや要望】**※現在困っていること、将来の不安、要望など

■緊急時対応（病気やけがなど支援を要する状態になったときに助けてくれる人の存在）

緊急時に来てくれる人	<u>いる</u> ・ いない
------------	-----------------

誰が来てくれるのか	
その居住地と所要時間	
その人との普段の関係	

■正月三が日の過ごし方

【正月三が日の過ごし方】※今年/いつもの年の正月三が日を誰と過ごしたか/昔と今で変化はあるか

■近隣関係について

【近所づきあいの程度と状況】※どんな風に付き合っているか、近所づきあいについて思うこと

【町会・自治会について】※加入状況（加入の有無）と町会活動の状況

回覧板が ある ・ ない

**【民生委員について】**

◎担当の民生委員を知っているか

◎民生委員が訪ねてくるか

**■今後の生活について**

**【経済状況について】**※いまどのように感じているか、将来についてはどう感じているか

**【将来の生活について】**※これからの生活で心配していること、考えていることなど

**■行政サービスへの期待**

**【行政への期待や要望】**※行政サービスへの期待や要望など

■その他（特記事項）

--

■調査員所見

調査員氏名：

--

調査員氏名：

--

## 資料4 港区政策創造研究所の概要

## 港区政策創造研究所の概要

## 1 設置目的

港区政策創造研究所は、各部門の個別情報の収集・分析等を踏まえ、横断的に課題を捉え総合的な政策研究を行い、各支援部・総合支所を支援することを目的とします。

## 2 設置日等

## (1) 設置日

平成23年2月1日(火)

## (2) 設置場所

本庁舎 4階

## (3) 所長

明治学院大学社会学部 河合 克義 教授

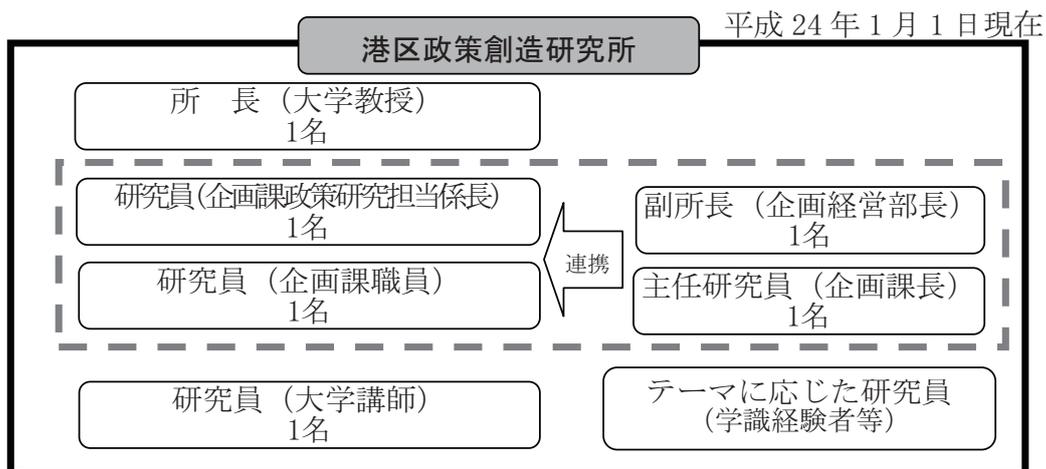
## 3 機能

研究所は、次の4つの機能を備えます。

機能	狙い
情報活用機能	区内で何が起きているのかを的確に把握
分析・予測機能	それが区民の生活に与える影響を予測
政策研究・形成機能	顕在化する課題を先取りし、迅速に対応
人材育成機能	流動的な時代に対応できる人材育成への貢献

## 4 体制

所長1名、副所長1名、研究員4名の合計6名で構成し、活動を行っています。



港区ひとり暮らし高齢者社会調査関係者会議名簿  
(平成24年1月1日現在)

河合 克義	港区政策創造研究所所長 (明治学院大学教授)
田中 秀司	港区政策創造研究所副所長 (港区企画経営部長)
新宮 弘章	港区政策創造研究所主任研究員 (港区企画経営部企画課長)
大浦 昇	港区政策創造研究所研究員 (港区企画経営部企画課政策研究担当係長)
田頭 達也	港区政策創造研究所研究員 (港区企画経営部企画課政策研究担当)
板倉 香子	港区政策創造研究所研究員 (明治学院大学非常勤講師)
長谷川 博康	港区政策創造研究所特任研究員 (株式会社スタテックス代表取締役社長)
菅野 道生	港区政策創造研究所特任研究員 (東日本国際大学准教授)
森 信二	港区保健福祉支援部高齢者支援課長
太田 貴二	港区保健福祉支援部高齢者施策推進担当課長
関本 哲郎	港区保健福祉支援部介護保険担当課長
田邊 幹雄	港区保健福祉支援部高齢者支援課高齢者福祉係長
真継 直	港区保健福祉支援部高齢者支援課在宅支援係長
茂呂 晃	港区保健福祉支援部高齢者支援課高齢者施策推進担当係長
柏 陽一	港区保健福祉支援部高齢者支援課介護給付係長
匝瑳 隆文	港区保健福祉支援部高齢者支援課在宅支援係主任主事



刊行物発行番号 23169-5811

港区における  
ひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査報告書

---

平成24年（2012年）1月発行  
発行 港区政策創造研究所（港区企画経営部）  
東京都港区芝公園 1-5-25  
電話 03-3578-2111（代表）

